

マンになっ何族た  
ラ上なて種れた  
トったでしいさ  
悪まに件笑召喚が  
らし爵た可に  
したて公っのち  
しっのしま頭  
生な獄しまかボツ  
転に地て故の

件  
た  
件  
人  
が  
す  
で  
の  
し  
生  
転

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どこぞの駄女神の手違いにより地獄に落とされた転生者がいた。

その転生者は地獄で悪魔になりしかも特典として悪のウルトラマンの力を持ち地獄の公爵にまで上り詰めた。

この悪魔の最終的な目的は駄女神への報復か、それとも別の何かか。

イメージop:ultra spiral

今後の展開を考えてダークザギのタグは消してその他の話もある程度変更しました。

活動報告にてアンケートを実施しています。

# 目次

この悪魔となった少年とポツチ少女に出会いを！	1	予想外の闇の○○	92
悪魔の少年に現世での戦闘を！	14	大変！ジャグジャグが来た！	125
俺、頭の可笑しい奴らに気に入られたの ですか？	24	情報共有と久々の再会、暗躍する闇	138
ウチの生徒の進路相談	40	番外編Ⅰ	160
ネコ兼使い魔の名前って意外と決まらな いのな	55	闇の冒険者登録	172
この世界の○○の処理を頼まれた件につ いて	69	紅の“絆” 前編	184
里からの旅立ち（俺だけ）	81	紅の“絆” 後編	211
自称勇者ほど面倒臭いものはない		状況確認と後始末とヒキニートと限界無 し	231
		遭遇する戦士達	265
		邪神って、邪な神だから邪神とよばれる	

野菜って美味しいよね	437	この感情は一体（間違っても恋の始まりではない）	454
424		クレーマーにはご注意ください	472
中二病魔法使いにパーティーを	312	ノック（爆裂魔法）は程々に	488
爆裂は一日一回まで	338	ルージュ	512
女騎士に夢を見ていた時期が私にもあり		最弱VSチート持ち	530
ました	365	蘇る魔王の獣	549
番外編2	380	さあ、ここからがバトルファイトだ	
犯罪、ダメ。絶対	393	567	
女神についていつも意味深な事言ってくるよ		戦闘開始	586
ね（エツちな意味じゃないよ）	413	ニュージェネレーションの力	613
キャベツって空飛ぶんですよ？知らなかったかい？（ミラーナイト風）		終戦	635
		—————	668



この悪魔となった少年とボッチ少女に出会いを！

「もう悪魔が友達でも良いかな・・・」

私、ゆんゆんは今悪魔を召喚します。

私は紅魔族という優秀な魔法使いの族長の娘なんですけどその種族は兎に角カッコつけたがる所謂“中二病”というものなんです。

そんな人達の中で私は里の人達とは違い外の人達と同じ紅魔族とは真逆な性格として生まれてしまった為里で浮いてしまつて友達も碌に出来ないんです・・・。

しかも何でかは分からないけど里の人達だけじゃなくて動物だけじゃなくて仕舞には植物にまで避けられる始末なんです・・・。

私もいままではボードゲームやカードゲームが有れば何時間だつて潰せましたし、一人で誕生日を祝つたりしても辛くはありませんでした。

でも・・・やっぱり友達は欲しいんです！

私はこんな性格だから里の中で友達が出来そうもありません。

だから、もう悪魔が相手でも良いって思つたんです。

悪魔なら対価さえ支払えばきつとお友達になつてくれるはずと思つたんです。

思い立ったが吉日、私は早速学校や家の本を漁って悪魔召喚の本（里の人達がカッコいいからという理由で仕入れたもの）を見つけそれに必要な材料を揃え手順も覚えまして。

「後は、悪魔を呼ぶだけ……」

私は里の人達があまり来ない森の中に居ました。

「ここなら、誰にも邪魔はされません。」

「………なんて、やっぱりやめよう。」

流石に悪魔に頼んでまで友達になるだなんてやっぱり良くないよね。

「さて、そうと決まれば早く魔法陣を消して……え？」

私は思いとどまり自分で書いた悪魔召喚用の魔法陣を消そうとしたんですけど、魔法陣が何やら怪しく光り始めました。

「えっ?! えっ?! 何で! 私まだ召喚の呪文唱えてないのに!」

どうしようっ、このままだと悪魔が召喚されちゃうよ!

「どっしりようどっしりよう、どっしりよう!」

「………あっ」

私がそんな風に慌てている間に魔法陣は黒く怪しい光を放ちその中心に人影が見えた。



3 この悪魔となった少年とポッチ少女に出会いを!

光が収まりその姿も見えてきた。

その悪魔らしき人影は全身が黒と青を主体とした体で胸にはX上の拘束具が着けられその下に青い光みたいなのが見えます。

そして一番目を引くのがその悪魔の顔に装着された黒い仮面だった。

}\  
???  
s  
i  
d  
e  
}\

どうも皆！俺は風間昭（かざま あきら）。

俺は交通事故に巻き込まれて死んでしまったのだが、俺の目の前に女神を名乗る青い髪的女性“アクア”に生まれ変わるか天国に行くか、或いは異世界に転生するかと言われ俺は異世界に転生することを選んだ。

しかしその時、何故か彼女は「お願い！この特典にして！」と言われた。

その特典というのが“悪のウルトラマン”というものだった。

アクア曰く“これ物凄い闇パワーが溢れてるの！だから早く解放されたいの！お願いだからこれを選んで！”と半場脅迫に近い感じで選ばされた。

まあ俺も個人的に悪のウルトラマンはビジュアル的にも好きな分類だったからそれは有難く受け取った。

だが問題が起こったのはその後だ。

「あつ、間違えて地獄行きの魔法陣展開しちゃった」

「はっ?」

それを聞いた時は頭が真っ白になったよ。

俺、前世じゃ特に問題を起こさずかといって特別賞賛される事もないまあ所謂普通の生活をしていただけなのにいきなり地獄行きですか。

「ちよちよつと！何とかしてくださいよ！」

「ごめん、これ一度展開したらもう止められないの……ま、まあ貴方に上げた特典つて地獄の方が需要ありそうだから良かったんじゃない？」

「何が良かったもんかよこのポンコツ女神！」

「誰がポンコツよ！謝って！この美しくも麗しい私に謝って！」

と目の前の女神の皮を被った何かが吠えていたが俺はそれに更に言葉を投げかけようとしたがその前に俺は地獄に送られてしまった。

「とまあそれで今の状況になってるわけなんだけど……」

「何をボソボソと呟いているのだアルマよ。汝から出される悪感情は美味ではあるので吾輩としてはそのままでも構わんが」

おつとどうやら昔の事でイラついてしまっていたらしい。

俺はあの後地獄に飛ばされそこに居た悪魔達に襲われた。

流石にいきなり死ぬのは勘弁だったので不本意だったがあのポンコツ女神から渡された特典を使ってみることにした。

その結果その悪魔達を退けた上に、その魔力と見た目から何故か悪魔達からは同族扱いされた上に実力主義の悪魔な為に地獄の公爵にまで上り詰めてしまった。

そこで俺は決まった領地を持っていかなかった為、バニルという見通す悪魔の領地に住まわせてもらうことになった。

「別に何でもないよバニル。ただ、やっぱり神特にアクシズ教を取り仕切る女神は碌でもないと思っただけだ」

「ふむん。吾輩の見通す力は其方には効かぬが故にどのような事があつたのかは知らぬが、其方もアクシズ教の女神には難儀しているようであるな・・・」

「ホントだよ」

ホント、エリスとかは兎も角アクアはダメだ。

なんだよアクシズ教徒って、ほぼ詐欺集団じゃねえか。

ちよつそ暇でこの世界の現世を覗いてみたのだがそれは酷かった。

道端で人に会えばどんな手段を使つても勧誘、勧誘、勧誘。

更にはあの女神と呼ぶのもおこがましいアイツの影響なのかそいつらの性格もいい加減で怠惰な感じな奴が多い。

最初見た時は軽くヒイタヨ……。

「そういえば汝、またサキュバスに夢を見せてもらったとか」

「な、何だよ。別にお前の邪魔はしていないだろ?」

そう、地獄とは悪魔の世界なだけあつてサキュバスも存在する。

特典やこの世界の影響かは分からないが不老不死となつた俺といえど、元が人間だっただけに溜まるものは溜まる。

それでよくサキュバス達にまあ、＼それ＼関係の夢を見せてもらつてます。はい。

「いやなに、そんな汝にオークの夢を見せる様にサキュバス共に命令すれば汝からどのような悪感情が得られるかと思つてな」

「おいそれ本当にやめろよ?」

オークとか男にとつては地獄もいいところじゃねえか。まあ俺は今地獄にいるんですけどね。

「まあそれは冗談である」

「全く、お前の冗談は信用できないからタチが悪いよこの性悪悪魔」

「悪魔であるので性格が悪いのは当然であるぞ、力が強くて以前はそれ以外何も取り柄のなかった元人間よ」

「生憎とこちとらこの世界に来て色々やった所為でもう立派な悪魔ですよ…ん？」

俺がそんな風にいつもの会話をしていると俺の元に何やら魔力の波動が伝わってきた。

「これは…また現世で何者かが我ら悪魔を呼んだみたいだな。しかもこれは」

「ああ、これ多分俺が広めたやつだ」

そう、実は俺は以前配下の悪魔達に命じて俺を召喚する為の魔法陣が記された魔導書（トレギアの魔法陣みたいなものを俺が魔力を込めて書いたもの）を適当にばら撒かせた。

まあ悪魔が書いた本という事で殆どの者から禁書扱いされて殆どが燃やされたのが一部残っているものもあるのだ。

「してどうする？この様子では魔法陣は書き終えている様だが、確か汝を召喚するには魔法陣さえ書ければよかったのではないのか？」

「そうだな。まあ折角現世に出られるまたとない機会なんだ、行ってくるよ」

「そうか、まあ精々楽しんでくるが良い。しかし汝を召喚する魔導書を一応我輩も拝借

したが、なぜ召喚の呪文などという項目が？」

「そんなの決まってるだろ。雰囲気作りと後は」

「呪文唱える前に踏みとどまって安心した奴から得られる悪感情がどんなものか気になったから」

俺は元は人間だが今となっては悪魔だ。

悪魔とは悪感情を喰らう者。

俺は元が人間だからか別にその必要は無いのだが、それでも思考が悪魔に近くなったのは事実。

だからせめて悪魔らしくと思いいこの様な地味ながらも悪感情を得られる方法を思いついたのだ。

「フッ、フハハハハッ！相変らず汝は元人間とは思えぬ程に我々悪魔が混じった存在のようだな！」

「誉め言葉として受け取っておくよ。それじゃ行って来るわ」

俺はバニルに一応別れを告げると俺の魔法陣を描いた召喚主の元に向かおうとして少し止まる。

「(そうだ、折角だから”コレ”で現れるか)」

俺は懐に手を入れてそこから一つのアイテムを取り出す。

それはXの拘束具を思わせるアイテムで俺はそれの上のボタンを押しその形をオペラ座の怪人を思わせる仮面”トレギアアイ”に変形させた。

そして俺はそれを目元に翳し仮面の下のボタンを押し。

すると独特な音楽と共に俺の体を闇が包んだ。

そして俺の体は、黒と青の色をし、まるで拘束具の様な見た目に胸元のカラータイマーはXをイメージした拘束具に隠されていた。

そして顔はトレギアアイと同じ仮面が装着され、仮面から覗く目は赤く鋭かった。

俺の体はかつて光の国のウルトラマンにして彼の英雄”ウルトラマンタロウ”の親友だった存在。

ウルトラマントレギアになっていた。

「さて、行くとしようか」



というわけで俺は現世に呼び出された（正しくは自分用の魔法陣からほぼ自分から出てきた）訳だが、いったいどういう悪徳な貴族やらが待ち構えているかと思っただけなのは赤い目に黒い髪の少女だった。

「まさか紅魔族に呼ばれるとは。まあ奴らなら、悪魔召喚とかカッコいい」とかの理由で悪魔召喚の魔導書を集めていても不思議じゃないな。

まあこの子の驚きの悪感情が味わえただけでも良しとするか。まあそれより今は「おや？私を呼び出したのは君かな？紅魔族のお嬢さん」

「…えっ？」

俺は取り合えず今この場で考えた言葉を口にしてみる。

因みに俺の口調だがそこは気にしないでくれ。だって変身するとその姿の元の変身者だか魂だかに引つ張られるのか口調や物言いがそっちに引つ張られるんだからさ。

「(私、悪魔を呼んじゃった!?!どどどどうしよう…で、でも呼んじゃったのは仕方ないしそれに折角来てもらったんだから)」

「(ん?なんだ?この戸惑いと期待が混じった妙な感情は)」

俺は目の前の少女が放つ妙な感情に戸惑いを隠せずにはいた。

いくら相手が紅魔族でも見た所まだ年端も行かない少女だろう。だとしたら悪魔に真つ先に思い浮かぶ感情は恐怖やら警戒やらの感情な筈だ。

それに目に見て分かるくらいに何故か目を輝かせていた。

「あ、あのー!」

「ん?」

「あ、悪魔つて代価次第で願いを叶えてくれるつて聞いたんですけどそれつて本当ですか!?!」

「えっ?あ、ああその認識で間違いないよ(何なんだこの子は…さつきまで戸惑っていたかと思つたらいきなりまるで何かが張つちやけた様にグイグイ来るな…)」

「じゃ、じゃあ」

俺が目の前の少女の押しの強さに少し引いていると少女は何やら決心したようにこ

ちらを見た。

「私とお、お友達になってください!」

「.....は?」

目の前の少女が何やら意味不明な事を言いやがった。

俺は今の姿に似合わない間抜けな声を上げてしまうが、それは俺は悪くないと思う。

## 悪魔の少年に現世での戦闘を！

どうもアルマです。

突然ですが皆さんはどの様な友達が居ますか？

友達、うん。友達とは素晴らしいものですよね。それが例え少し変わった性格だったり見た目や人種が違っても誰と友達になろうともその友達になりたいという意志は尊重されるべきものです。

だがしかし

「私と、お友達になってください！」

いきなり現れた悪魔に友達になってくれと申し込む子がいるとか誰が予測できました？

「あーえーつと、ごめんどうやら現界したばかりで色々混乱しているみたいだ。すまないがもう一度言っていただけかな？」

「お友達になってくださいと言いました！」

聞き間違いじゃなかったよちくしょう！

いや待て、まだ慌てる時間じゃ無い。常に優雅に冷静にが俺の座右の銘だろう。↑そ

んな座右の銘など持っていない

「あ、あのね君。悪魔に願う事をする事の恐ろしさが分かって…というのは今言ったから分かってるんだらうけど、それでもお願いをするにしてももう少し慎重に願いを選んだ方が」

「はい！慎重に決めてお友達になってください！」

「即決!?!」

この子、いくら紅魔族とはいえ胆力ありすぎじゃないかな!?

仕方ない、こんな手をこんな年端も行かない子に使うのは気が引けるけど仕方ない。

「おっほん…君、悪魔に願いをするといいってもそんなに単純なものではないんだ。

知っているとは思いますが悪魔にも上下関係があり上位の悪魔になる程に願いをした対価も高つくんだ」

実際は俺に対価とかはいらないんだけど、この子このまま放っておいたら何だかいけない気がした。

「私は地獄の公爵とも呼ばれる高い地位に居てね、その分対価も通常の悪魔の比じゃない。

それでも、君は私にその様な願いを望むのかな?」

「はい勿論です！」

それに対価なら色々準備はしていますよ。もしそれで足りなかったら腕の一本や二本、もしそれでもダメだったら○○○<sup>ビ</sup>や○○○<sup>ビ</sup>でも」

何この子覚悟決まりすぎてて怖い……。

地獄で色んな悪魔を見て来たけど此処までイカれた奴を……いたかも知れないけど少なくとも尋常じゃない位狂ってますよ！

「ごめん！少し冗談が過ぎた！別に対価とかは要らないから！」

「要らない……私は……いらない子？」

「だあもう！めんどくさいな君！」

俺の知ってる紅魔族でも此処までイカれた奴見たことないぞ！

〈30分後〉

あれから目の前の紅魔族の少女を落ち着けるのに苦労した。

この女の子の名前は“ゆんゆん”といつて紅魔族の族長の娘らしい。

彼女は中二病集団の紅魔族としては珍しく普通な感性の人物で、その性格が災いして同族で友達が出来ないどころか変わり者扱いされたらしい。

しかもこの子はただのボツチではなく、同族だけでなく動物や植物などからも避けられたり逃げられたりしたらしい。

というか、名前の方は予想通り可笑しな名前だが彼女の境遇が思った以上に不遇過ぎる。

会話からボツチなのは何となくだが予想はしていたけどそれにしたってこじらせすぎだろ……。

「はあ、つまり君はわざわざ友達になってもらう為だけに悪魔を召喚した訳か」

「はい……どうしても友達が欲しくて……」

「君ね：今回呼び出したのが私だったから良かったよなものを、そうでなければタダじゃすまなかったかもしれないんだ。次からは気を付ける様にといいかやるな」

「はい・・・」

俺、悪魔なのに何で悪魔召喚をやるなどか召喚した奴に説教してお節介したりしてらんだろう。

カサカサ

「?」

俺たちがそんな会話をしていると森の茂みに何やら動く気配がした。

「何だ?・・・アレは」

俺は茂みに隠れている奴に目を向けその気配が茂みから姿を現すことで正体を知る。

それは人より一回りは大きく鋭い爪や牙を持ち、茶色の体毛に覆われた大型のモンスターだった。

そのモンスターの名は一撃熊。

文字通り強力な一撃を放つ熊で、並のモンスターや冒険者など一撃で葬り去る凶悪なモンスターだ。

「いつ、一撃熊!?!」

「どうやら急に私が現れたから逃げるより排除しようとしてこちらに来たようだね」





「えっ?えっ?!私どうして」

「その様子なら大丈夫みたいだね。取り合えず、あのモンスターは私が倒すから終わるまで大人しくしておいて」

「ええっ?!いい、一撃熊と一対一でやりあうつもりなんですか!?!」

「君、自分が呼び出した悪魔がどんなものか忘れてない?」

「あつ」

その様子じゃ忘れてたなこりや。

まあ俺現世に出て来る時は悪魔の気配は完全に抑えてほぼ人間な気配しか放ってないから無理も無いか。

「で、でも私も見習いといつても一応授業で体術とか習ってますから何かお手伝いを」

「ダメ、厳しい言い方をするけど見習いが戦闘に加わったところでまともな連携が取れないで足手まといになるだけだ」

「ツ!」

ゆんゆんは俺の厳しい指摘に何も言えなくなった。

まあまだ子供彼女には厳しかったかもしれないがこうでも言わないと下がってくれそうになかったからそこは我慢してもらおう。

はあ、悪感情を得て此処まで複雑な気持ちになったのは悪魔になって初めてかも。

まあでも言い過ぎたのは事実だし取り合えずフォローはしておくか。

「けど、その気持ちは有難く受け取っておく」

「……はいー」

よし、ゆんゆんのフォローも終わったし戦いに戻るか。

見せてやるよゆんゆん。君の呼び出した悪魔がどれほどの実力なのかを。

「来なよクマくん。遊んであげる」

俺は両手で一撃熊を挑発した。

奴はその挑発に反応したのかどうかは不明だが怒り狂ったように俺に突進してきてその凶悪な爪を持つ前足を振り下ろす。

怒りに任せた一撃なので俺はその攻撃を受け流し時折蹴りや持前の鋭い爪によるひっかきも忘れずに打ち込む。

「グウウウ……」

一撃熊は俺の攻撃によって深くは無いが確かにダメージが蓄積し体のあちこちに俺の爪により赤い切り傷が出来ていた。

「ほーらほーら、こっちはまだ傷一つ負ってないよ?もしかしてこれが限界なのかな?」

俺は挑発交じりに目の前の熊を馬鹿にしたような口で煽る。

熊から浴びせられる殺意と俺に対する本能的な恐怖、そして怒りの感情。

そのような悪感情は本来であれば心地いいものなんだが、矢張り物言わぬ獣。人間な  
どの感情豊かな生物とは違い向かって来る感情が単調過ぎて“味”も良くない。

いや、さっきのゆんゆんの感情が濃ゆ過ぎたのか？

まあ良いや、それより久々の現世なんだからもう少し遊ぶか。

「来ないなら、此方から行くよ」

俺は両手を後ろに組んだ状態で一撃熊の顎に足のつま先で蹴りを入れる。

「グギゅあああつ」

熊は与えられた痛みと衝撃で一瞬視界がぐらついたのか体制がよろけた。

俺はその隙を逃さずに奴の頭を掴み腹に膝蹴りを喰らわせ一撃熊の体制が後ろに下がった時に回し蹴りを今度は顔の横から食らわせ一撃熊はそこにあつた木を折りながら倒れた。

「グウウウ……」

「おやおや、もう終わりなのかい?」

思わずトレギア口調でこのように煽つてしまいが俺自身物足りなさがあつた。

矢張り戦つて一番楽しめるのはバニル以外だと魔王軍の幹部とか位かな。

まあゆんゆんをあのままにしておくのもアレだし、さつさと片付ける。

俺は目の前に魔法陣を展開し赤い雷を纏わせた。

そして未だにダメージから回復しない一撃熊に向けて、両手を突き出した。

「トレラアルティガイザー」

トレギアの技の一つである雷撃は、真っ直ぐにその射線上にいた一撃熊に直撃した。

「gyaaaaaaaaa!」

一撃熊は断末魔を上げながらトレラアルティガイザーの電撃を喰らい体中に雷撃を走らせた。

「ガ…ア…」

ドカーン

そして攻撃を終えると一撃熊は体が黒焦げになり煙を上げそのまま倒れ、ウルトラマンの怪獣よろしく爆発四散した。

俺、頭の可笑しい奴らに気に入られたのですが？

どうも皆さん、アルマです。

いやあ前回はちよつと面倒な事がありました（主にゆんゆんによる精神的疲労による）。

それで、俺と言うと今現在

「それではアルマ君、私が合図をしたら入ってきてくれ！カッコいい名乗りを期待しているよ！

それと、悪魔への変身も忘れずにね！」

「は、はい……」

紅魔の里にある魔導学校で教師をやる事になりました。

事の始まりは俺が一撃熊を倒した時に遡る。

「大丈夫かい？」

「は、はい。ありがとうございます！」

「どうやら無事怪我一つないようだ。」

「まあ一つ問題も解決したし、今後の事を考えるか。」

「それで？これからどうする？」

「え？」

「私は君に呼び出されたから君が召喚主という事になるけど、確か紅魔族は魔力に敏感なんだろう？ だったらもし君が私を紅魔の里とやらに連れて行けば私が悪魔だとバレルのではないか？」

「あつ」

その様子だと忘れてたみたいだな。

まあ俺の場合、悪魔の力を完全に抑えて人間に近い存在になるのは可能だがアレ疲れるんだよなあ…どうしよう。

「先程の戦い、見せてもらったぞ」

「ん？」

俺がそんな考えを巡らせていると茂みから複数の人影が出てきた。

さつきまで魔力を感じなかった事からよほど気配を消すのが上手いのか或いはテレポートで来たのかだろう。

普通ならどちらかの可能性で迷う所だが、彼らの少し特徴的な服装や魔力の質、そして赤い瞳を見て俺は一つの結論に至った。

俺は直ぐにそれを指摘したかったがなんだか相手がノリノリなので取り敢えず合わせて様子を見ることにした。

「何者だ？」

「フツ、我らに名を問うか。悪魔よ

しかしそれを聞くからには覚悟して聞く事だな、貴様がその名を聞くとときこの世の全ての厄災の扉が開かれるということをし！」

……うん、やっぱり確定だわコイツら。

独特なポーズ取るわ瞳が赤く光ってるわ厨二的な物言いだわもうヤダア。

「ぶっころりーさん達、何やってるんですか？」

「……誰だソイツは、我らは漆黒より生まれし闇の軍勢なり」

「いえだからぶっころりーさんですよね？」



「…」

おつとゆんゆんさん、そこは後少しだけやらせてあげようよ。

見てごらんなさい、何やらキメポーズをとったまま固まっちゃってるじゃない。

「全く何をやってるのですか。紅魔族特有のカッコいいノリを邪魔するとは、そんなだからボツチのままなんですよ」

「め、めめ、めぐみん、！今それは関係ないじゃない！というかそれよりどうして皆んなが、ここに？？」

ぶだころりーと呼ばれた男性を押し退ける様に、ゆんゆんと同じ恐らく制服を身につけたゆんゆんより小柄で体型が少し抑えめな少女が出てきた。

ゆんゆんの言葉を聞くにめぐみんと言う名前らしいけど、それ本名じゃなくてニツクネームとかだろ。

ホントに紅魔族の名付けのセンスはコチラには理解が及ばないものが多いらしい。「何やら大きな物音がしたのと、悪魔の気配がしたから来たのです。」

それで？」

そこまで話すと、めぐみんと呼ばれた少女は瞳を赤く光らせながらこちらを見た。

なんか嫌な予感が…。

「あなたのその姿、悪魔とお見受けしますが何ですかそのカッコいい姿は！その黒い仮

面に仮面から覗く我らと同じ赤い瞳！そしてその身に封じられし厄災を閉じ込めるが如く拘束具！

我ら紅魔族の琴線にビンビン響きますよ！」  
やっぱりこうなったかあー。

紅魔族つて例外なくカッコいいものが大好きでしかもトレギアつて本編でもかなりミステリアスなキャラで俺もキャラ的には好きな分類だったから分からなくもない。

だけどこつちをみて瞳を光らせながら見るの止めましょうよ、いくら悪魔になったとはいえ怖いものは怖いよ？

「・・・私はアルマ。この姿の時は、トレギアと言う」

「ほほう、悪魔でありしかも2つの名を持つているとはますます紅魔族の琴線に激しく響きますよ！」

めぐみんは俺の名前とトレギアの名を教えると更に興奮気味に詰め寄って来た。

「2つの名を持つ悪魔・・・カッコいい！」

「ええ、大抵悪魔というのは羽が生えたり敵つい見た目とかが殆どだけどそれとは一味違う姿というのがポイントが高い！」

「それにさっきの必殺技、魔法陣から雷を発射して技名を言うのも良い！」

どうやら、俺もといトレギアは紅魔族には大好評らしい。

「み、皆！アルマさんが困ってるからあ！」

あの後ゆんゆんが何とか治めてくれて一応開放された。

しかし

「さて、アルマという悪魔よ。君はウチの娘とはどういう関係だ？」

今度はゆんゆんのお父さんという男性に絶賛睨まれております。

あの後俺の話が紅魔の里全体に瞬く間に広がり、一度俺を見ようっていう連中が集まりその中にゆんゆんのお父さんもいた。

それでなんだかんだでゆんゆんの家に連れてこられ現在の状況に至る。

ていうか何が驚いたかって会って直ぐにこの話に入る前に

『我が名はひろぼん！紅魔族族長にしてアークウィザードを生業とし上級魔法を操り娘をたぶらかす悪魔を滅する者！』

とかって物凄い決めポーズをキメながらバリバリの殺害予告をぶちかましてきたじゃないですかやだー。

というか紅魔族の自己紹介は一応どんなものか知ってはいたつもりだが、実際に見ると恐ろしい迫力だった。

因みに俺はまだトレギアの姿のままだ。何故かって？変身解くタイミングを見失ってしまったからですよ。

「どういう関係といても、ついさつき召喚してされた関係ですけど」

「つまり娘とは遊びだったと!？」

「どこをどうしたらそういう翻訳になるんだ!」

紅魔族っていうのはめんどくさい性格の奴しかいないのか！

「お父さん！私の新しい友達に失礼な事言わないで!」

この子もこの子でさっきのお願いもう承諾された気でいるよまあ友達になるのは構わないんですけど（決して先ほどのゆんゆんの過去の話が不憫だったからという理由で

はない・・・と思う。」

「友達？つまり恋人ではないと？」

「どうしていきなりそんな結論になるのよ！」

うん。それはゆんゆんの言う通りだと思う。

いきなり現れた悪魔と少女がいきなり恋に落ちるとかどんなフィクションだよ。

「だから言つたじゃないですかお父さん、考え過ぎだつて」

「よかつた、ようやくまともに話を通じる人が」

「ところでアルマさん？それともトレギアさん？ウチの娘のどんなどころに惹かれたのですか？」

「どつちにしろ家族かよ！」

俺はトレギアの口調に引つ張られるはずなのについ素で叫んでしまう。

「あらあらごめんなさい。まあでもゆんゆん、この人が良い悪魔だったから良かったけど一歩間違えたら大変な事になってたかもしれないのよ？」

「それは私も同意見だ。悪魔召喚とかカツコいいが、せめて私や母さんのような大人を同行させなきゃダメじゃないか」

「・・・はい、ごめんなさい」

うん、お母さんの言葉には一理ある。

けどお父さん？悪魔召喚をすることを止めさせましょうよ。誰か同行させれば良  
いって訳じゃないからね？

そしてなんやかんやあって、俺は紅魔の里にある学校に悪魔として持ち合わせている  
魔法の知識を教えてもらう為の教師になることになった。

ん？そこに至るまでの過程を説明しろって？

そんなのないよ、あるにしても悪魔で教師ってなんかカツコいっていう適当な理由  
でしかも何故かあつまり採用されたんだから。

そんなこんなでまあ今日から教師としてゆんゆんの通うクラスの副担任という立場  
で働くことになった。

「それにしてもどんな事を教えるんだ？特にどの授業を担当しろとは言われなかったけど」

『それでは今日からこのクラスの副担任となった先生を紹介しよう！』

「おっ、いよいよか」

にしても新任の副担任ともなれば自己紹介をするよな。

どうしよう、特に何も考えては…。

『聞いて驚くな？その先生は悪魔であり、その恐ろしい魔力の英知を我々に授けに来た使徒でありこの世全ての闇を司る暗黒の使者』

「つて長げえよ！」

どんだけ長つたらしく説明するんだよ！

あ、紅魔族の人達から反対が無かったのかと気になる人もいるのだろうが結構すんなり受け入れられた。

どうやら悪魔の居る魔法使いの里とかカッコいいという案の定な理由だった。

因みに今の俺の状態は人間の時の姿に戻り白のYシャツに黒のスラックス、そして魔法使いっぽい黒のローブだ。

ローブは正直いらないと言ったのだが、これだけは譲れないと押し切られてしまった。

別にこの世界だから良いけど、これ元の世界だと完璧にコスプレ教師だよな？

にしても最初聞いた時は冗談かと思ったぞ、クラスの生徒が女子だけとか……。

『では入ってきてきてくれ！』

おっようやくか。

さて、俺の担当するクラスはどんな生徒がそろってるのかな。

俺は前世で新しいクラスになった時の様なドキドキを胸に教室に足を運ぶ。

教室に入ると、ゆんゆんを含めたクラスの女子が目に入り少し緊張したが直ぐに冷静になり教卓の前に立ち自己紹介を始めた。『はいこんにちわ、今日からこのクラス「ちっがう！」……っえ？』

自己紹介をしようとしたらいきなりダメ出し喰らったんだけど。

「何をやってるんですか貴方は！」

「え？だから自己紹介を」

「そんなのは自己紹介ではありませんよ！」

……あ、もしかして

「紅魔族風の自己紹介をしろと？」

「……」コク



マジかよ。

俺にあのイカレタ自己紹介をしろと？

「[[[[「・・・」]]]]」

「うっ」

俺が戸惑っていると教室のゆんゆんを除いた所為とから赤く光った瞳による圧力をかけられた。

その中には森にいた時に見ためぐみんと言う子もいた。

「・・・はあ。変身も込みですよね？」

「うむっ！」

ハアー、ホントにこの世界にはまともな人間は居ないのか？この人良い大人な筈なのに周りの生徒と同じく目をキラキラさせているし。

俺は内心うんざりしながら教師の服の懐からトレギアアイを展開し取り合えず自己紹介の体制にはいった。

「コホン、あー……………我が名はアルマ！地獄の公爵にして数多の闇の戦士の力を扱う者！そして」

俺はタイミングを見計らってトレギアアイを目元に翳してスイッチを押す。

そして体が闇に包まれ生徒達から驚きの声が聞こえてくる。

そしてウルトラマントレギアに変身を完了し芝居がかったお辞儀をする。

「この姿は我が姿の1つトレギアである。狂おしい好奇心と言う意味で、トレギアだ。

これからよろしく頼む」

さて？生徒の反応は？

「「「「「きゃああああアアアアアアアッ！」「」「」」」」

「うおっと!？」

「カッコいい！本当に悪魔が私たちの副担任なんだ！」

「2つの名を持つ悪魔・・・凄く良い！」

「狂おしい好奇心・・・中々良い設定じゃないか！」

「そうです！そうですよアルマ君！その自己紹介が聞きたかったんですよ！」

どうやら自己紹介は大成功の様だ。

ゆんゆんには受けなかったのかなにやら顔を下に向けているが。

ただ、自己紹介を終えて一つだけ言わせてください。

めっっちゃハズイ!!!

少し勢いに任せてやった紹介だけど実際にやってみるとすごく恥ずかしい！

え？紅魔族っていつもこんな恥ずかしい自己紹介やってたの？

ゆんゆんはこんな自己紹介に耐えていたの!?

「あの黒い仮面に赤い瞳が紅魔族の琴線に触れまくってるわ！」

「あの悪魔に更なる名を与えましょうよ！」

「だったら、暗闇の赤き瞳を持つ者」はどう？」

「良いわね！暗闇の赤き瞳を持つ者！」

「あの仮面欲しいです！どこで手に入れたのでしょうか？」

「あの黒い仮面に体に着けられた拘束具。：うん、きつと大いなる厄災を封じ込める為の封印に違いない！」

「自らの体に厄災を封じ込めるだなんて。なんて美味しい設定なの！」

「新し小説のネタが向こうから大量に入って来たね」

やだ！恥ずかしい！

止めてよその恥ずかしい2つ名!?

とかゆかゆんゆんも俯いてないで少しはフォローして!?

自分でやった自己紹介だけど、こんな思えるくらいなら普通の自己紹介をやっとけば良かったよ！

こうして、俺の突如として始まった教師生活（中二病集団の）は、物凄い羞恥心から始まったのである……。

俺、悪感情を喰らう悪魔になったはずなのにどうして自分から悪感情放ってるんだ

39 俺、頭の可笑しい奴らに気に入られたのですが？

ろ  
・  
・  
・  
。

## ウチの生徒の進路相談

あの多大な羞恥心を生み出した最初の一日以来、俺はすっかりこの魔導学園に馴染んでいた。

あの自己紹介の後、学園が終わるとバニルが遠隔通信の様な魔法を使って俺に交信してきたのだが、その時に『紅魔族特有の自己紹介をしろと言われたとはいえあの恥ずかし自己紹介を自分で考え付いた恥ずかしい元人間の悪魔よ！ 汝の羞恥の悪感情、ゴチである！』

しかし汝よ、吾輩の見通す力で少しばかり覗いていたが、中々ノリノリだったではないか。もしや、以前よりあのような事をしたいと思っていたのではフハハハハハハっ！』と、態々魔法を使ってまで俺を煽り倒し俺から羞恥の悪感情を得やがっていた。

流石にイラつときたので一発光線をぶち込もうと思いい、一度地獄に戻ったのだが魔王軍の城にいるという事で二度手間になった。

そしてそこで俺は魔王城でバニルに向かってベリアルに変身してデスシウム光線を始めとした光線技をぶっぱしたのだがあの野郎自分がやられる未来を見通して俺の攻撃を躲しやがった。

その途中で魔王軍の幹部たちが止めに入ったので流石に止めた。

しかしその後紅魔の里に戻った後のゆんゆんが怖かった。

俺は一応彼女を召喚主としているのの上に彼女に言わずに出て行った為に何を誤解したのか『どうして急に居なくなっただんですか？もしかして、私が嫌になっただんですか？もし気に入らないところがあつたら直しますから、居なくならないで』とか言っただけも目のハイライトが仕事をしていなかった。

正直、モンスターや初めて悪魔を相手にした時より滅茶苦茶怖かった。

さて、そんな色んな意味で刺激的な日常がスタートしたわけだが俺は今

「ほらどうした！動きが単調になつてきてるぞ！」

「は、はい！セイヤツ！」

「ヤアツ！」

自分の担当するクラスの生徒に格闘術を叩き込んでいる。

俺がこの学園で任された授業というのは、魔法についての知識や体術の授業だ。

魔法の授業では主にどのような場面でのような魔法が必要になるかやそれらの魔法の特製を利用した応用を教えて、体術の授業では今の様に生徒達が撃ち込み俺が受け流し悪かったところを指摘するというものだった。

「ふにふら！ 攻撃の時に一々変な前置きは入れるな相手に隙を晒して死にたいのか！」  
「で、でもこうした方がカッコいいし…」

「紅魔族がそういうものなのは理解しているが生憎と外の世界ではそんなのは誰も待つてくれない、死にたいのか！」

「は、はい！ 先生の言う通りにします！」

「それからどどんこ！ お前はまだマシだがやっぱり動きに無駄が目立つ！ もう少し意識しろ！」

「ご、ごめんなさい！ でもやっぱり動きにカッコよさが…」

「その無駄な動きが相手にとつては十分な隙になる場合もある、カッコよさに拘るのは勝手だがそれは戦闘以外にしろ！」

「さ、サー・イエツサー！」

少し厳しいかもしれないが、将来生徒達が冒険者として里の外に行くにしてもこの里で働くにしてもやっぱり最後には自分の身体能力によってその生存率が違ったりする。

それにこの里には生まれながらにして優秀な魔法使いが多く、殆どの者がアークウィザードという上級職になるのだが、もしアークウィザード以外の職業になりたい者が出て来たらその子達の為に将来の可能性を広げておくのも悪くはないだろう。

「やあっ！」



「ソイヤッ!」

「ふっ」

ふにふらというツインテールの女子が俺に向かって裏拳を打ち込むが俺はそれを手の甲で防ぎ、どどんこという髪を後ろで束ねた女子が逆方向から攻撃してくるがそれも相手の手を掴む事で防ぎ、2人を投げ倒す事で地に倒す。

「痛っっ」

「痛い・・・」

「悪いな。けど2人共、さつき指摘した所を直せばもつと動きは良くなる。これからも励めよ」

「はい!」

紅魔族は少しカッコつけたがりな所や少し融通が利かないところはあるが、こうやって教えは素直に聞くとところもあるのでそこは好感が持てる。

「よし!次!」

俺は自分の授業を終えて、休み時間となりこの学園にある図書室に来ていた。

目的としては暇つぶしである。

「ん？」

そんな時、俺は見知った顔を見つけた。めぐみんである。

彼女とはゆんゆん経由で知り合い、時々彼女の家の家計事情があまりにも悲惨なため可食部が多いモンスターを狩っては料理して献上していた。（おかげで料理スキルを取る羽目になった）

そんな彼女が一冊の本をとっても熱心に見ていた。

その本は確か『爆裂魔法』とかという威力はどんな魔法をも凌駕するがその代わり燃費が最悪という魔法についての本だった筈だ。

「…」

本来なら生徒が読んでいる本なので特に何も気にしないのだが、彼女のあの集中ぶりは並々ならぬ情熱に似たものを感じた。

「爆裂魔法、好きなのか？」

「!?あ、アルマ先生！」

おっと驚かせてしまったらしい。

「悪い悪い、ちょっと暇つぶしで来たんだけどそしたらその本を熱心に見ていたからさ」  
「……」

俺がほんの興味で聞くと、めぐみんは何やら俯いてしまった。

何か気に障る事でも言ったかな？

「アルマ先生は」

「ん？」

「先生はどう思ってるんですか？爆裂魔法の事を」

「どう思ってるって、威力は確かに絶大だけどその代わり燃費が最悪だから進んで使お

うとは思わない。って思ってるけど」

「そうですか…：そうですよね」

「…：何か爆裂魔法に思い入れでもあるのか？」

俺が率直な感想を言うのと急に暗い顔をして悪感情を放ってきた。

悪魔としてはそれはそれで良いのだが、教師という立場上相談には乗るべきだと判断し話を切り出した。

「…：昔、モンスターに襲われている時助けてくれたお姉さんが居たんです。

そのお姉さんはそのモンスターを爆裂魔法で倒したんです。

その時そのお姉さんが見せてくれた爆裂魔法が、私は忘れられなかった。

爆裂魔法が世間からはネタ魔法と言われているのは理解しています。けど私は命の恩人であるあのお姉さんへの恩返ししの思いも含めて爆裂魔法を覚えて、それ一つで最強の大魔法使いを目指すと決めました」

「…：」

どうやら俺が思っている以上にとんでもない思い入れがあったようだ。

それにしても爆裂魔法を扱えるだけの魔法使いか、だとしたらかなりの実力者だな。

「周りの人達は爆裂魔法の素晴らしさを理解してくれませんが、私はそれでも爆裂魔法で最強の魔法使いになります！…：けど、時折思うのです。本当に私にそんな事が可

能なのかと」

「・・・」

「私だって、爆裂魔法のデメリツトの大きさは分かっているんです。けど、理解しているからこそどうしても不安になってしまっているんです」

「先生。私の夢は、やはり実現不可能なのでしょうか・・・」

「・・・厳しい言い方になるが、お前が爆裂魔法を習得したとしてもお前の目指す大魔法使いになるのは無理だ」

「・・・そうですか。やっぱり無理ですよね・・・」

「話は最後まで聞け。誰もお前の夢を否定するとは言っていないだろう」

「え?」

「確かに爆裂魔法一つで大魔法使いになるのは厳しいし無理かもしれない。けどそこで諦めるのか?」

紅魔族であるお前なら「そんな常識、ぶっ壊してやりますよ!」位の気迫が無いと叶えたい夢も叶えられないぞ。

世の中には、夢を追いかけ続けてその夢に辿り着いた人もいる位だ」

その人は慈愛の勇者と共に、怪獣との共存という夢を達成させた英雄の一人だ。

「だからさ、困難な夢でも簡単に諦めるな。ジーツとしてても、ドーにもならないぞ」

「ジーツとしてても、ドーにもならない…」

めぐみんは俺の言ったとある陛下の息子の言葉を復唱する。

これはあともう一押しだな。

「それとも、お前は自分の決めた夢すら簡単に諦める臆病者なのかな？」

「何をーーーうっ!!」

めぐみんは俺の挑発的な言葉に途轍もなく怒った顔をしてそのばで勢いよく立ち上がった。

「我が名はめぐみん！いずれ爆裂魔法をマスターし、世界最強の魔法使いとなる者！

たとえどの様な壁があろうとも！その壁すら爆裂して破壊してやろうではないか！」

「よーしその意気だ」

「それはそうと先生。今の言葉についてどこまでが本気なのか聞こうじゃないか」

「おっとお？ここは綺麗さっぱり流してくれるところなんじゃないの？」

「知らないのですか？紅魔族は売られた喧嘩は買う種族である」と

俺はどうやら紅魔族というものを甘く見ていたらしいな。

ん？その後どうなったかって？掴みかかられそうになったので取り合えず逃げましたよ。

「ん？この気配は」

俺は今日の自分の担当する授業が終わると取り合えず今日は帰っていいと言われたので（今回はゆんゆんにちゃんと前もって言つて）学校からでて適当に里をフラフラしている、どこからか今の俺と同族の気配がした。

「どうして紅魔の里近くに？」

兎も角、どういった目的かは知らないが同族のよしみだ。紅魔族と遭遇して撃退されないように一応の警告はしておくか。

「つて、来たのにこれはどういう事だ」

俺がその悪魔の気配のする方向に向かうと、そちら側から一撃熊やら兎に一本の角が生えた一撃兎というモンスターまでもわんさかと向かってきた。

しかしそのモンスター達からは敵意というより怯えの感情が伺える。もしや先ほどの悪魔の気配から逃げて来たのか？

「兎に角、里の連中なら大丈夫だろうがまだ魔法を覚えていない生徒達の方にも向かったらヤバイな。仕方ない」

俺は懐からトレギアアイとは別の黒く赤いラインが入ったメガネ型のアイテム《ゼロダークネスアイ NEO》を取り出した。

「こんな大量のモンスターを殲滅するにはこれに限る。

セアッ！」

俺はそれを目元に翳し持ち手にあるボタンを押した。

そして俺のからだは黒い体に赤のラインが走り顔も黒く黄い目、そして額の赤いカ



ラータイマーと胸のプロテクターと紫のカラータイマー。

姿を変え終えると頭には二本のブルーメランの様な刃《ダークゼロスラッガー》が装着された。

これにより、悪のウルトラマン“ベリアル”に体に乗っ取られ闇に堕ちたウルトラマンゼロ

“ゼロダークネス”に変身した。

「さて、始めるか」

「数分後」

「詰まらなさすぎる」

俺は戦闘を終え物凄い欲求不満に襲われていた。

あの後俺はゼロダークネスの使う光線技とスラッガーを駆使してモンスター達を殲滅した。

だけど、やっぱりバニル達と戦い慣れてしまった為か途轍もなくつまらなかった。

「まあ良いか」

「おっ、なんだもう終わったのかって誰!?!」

「?」

俺は変身を解こうとするとテレポートで転移してきた紅魔族の人達が来た。

「ああそういえばこの姿は見せた事無かったですね」

「その声つてもしかしてアルマさん!?!」

「何ですかそのカッコいい姿!」

俺の声でゼロダークネスが俺だと気づいた人達は困惑の表情からまるで少年の様に

キラキラした目を向けていた。

もうこのノリには慣れたからビックリはしない。

俺は右手で左頬をかきながら答えた。

「この姿は、そうですね。ゼロダークネスとでも名乗りましょうか」

「ゼロ：ダークネス」

「ダークネス：つまりは闇…なんて」

「…「なんてカツコいいんだ！」「…」

「兎に角いきなきこんなにモンスターが興奮しているなんて明らかに異常です。ここは俺が警備しておきますから、皆さんは他の場所に陣取って残った皆さんは里の人達に警戒するように呼び掛けてください」

「ああ分かった。頼むよ」

「それからこれが終わったらその姿もつとよく見せて！」

「はいはい早く行ってください」

紅魔族の人達はテレポートでこの場から転移して移動した。

あのノリにも動じなくなるとは俺も成長したのかね？

しかし

「(あの悪魔の気配、里の人達に見つからない様に力を抑えてはいたが明らかに上位悪魔

だよな？

「いったい何が目的で・・・」

俺は名も姿も知らない悪魔について考察するが結局結論が出る事は無かった。

## ネコ兼使い魔の名前って意外と決まらないのな

「それで？そのモンスター達は退けたんですよね？」

「ああ、けどこのまま終わりとは限らないから帰りは複数人で帰る事になると思うよ」

俺は昨日の里の警備の翌日、ゆんゆんと学園に向けて登校しているところだった。

飛んで行けば早く着くのだろうが、こうやって歩いて学校に行くのも久しぶりなのでこれもこれで悪くない。

「はい。それにしてもどうして急にモンスターが？」

「さあな。まあ少なくとも明確な殺意や敵意がないから時期に落ち着くと思うぞ」

流石に昨日感じた悪魔の事はこれ以上混乱を広げる訳にもいかないので黙っておいた。

「ただ、万が一という事もあるから俺はしばらくは授業を他の先生に任せて基本的に教室と学校の警護に当たることになった」

「そうですか。でも残念ですね、アルマさんの授業皆から好評なのに」

「へ？俺はてつきり厳しすぎるだとか紅魔族特有のカッコよさそっちのけだから不評だと思っただけだよ」

実際授業では本格的とまではいかないがカッコよさを抜き戦闘で相手に隙を晒さない様にした実践形式なものだ。

それで容赦なく投げ倒したり裁いたりしてしているからてつきり嫌われたりしているのかと思っただけ。

「いえ実際皆さん最初は厳しすぎるって思っていたみたいですけど、実際に里で絡まれたりやナンパされた時にそれで容赦なく相手を撃退できたりして、今となっては皆アルマさんの授業を受けるのを楽しみにしてるんですよ。」

それにめぐみんも、魔法の授業でちゃんとした魔法の知識が評価されて嬉しがってましたよ」

「そうか、それはよか・・・おいちよつと待て今なんて言った？」

かなり物騒なワードが聞こえたんだけど？

「おはようございます」

「おう、おはよ……うっ！」

俺とゆんゆんは学校に着き、授業も無くやるのが無いので暇だからクラスの生徒たちと雑談しているとめぐみんが登校してきたようだ。

・・・その手に黒いネコを抱えて。

「どうかしましたか？」

「いや、どうしたかじゃなくてだな」

「め、めぐみん。その子はどうしたの？」

流石に急に学校にネコを連れ込まれたらゆんゆんを含めた他の生徒も気になったようだ。

「使い魔です」

うん。どう見てもネコですよね？

けどなんだ？このネコから少し変わった気配が。どっかで感じた事のある魔力だけど……。

「使い魔!? 使い魔を使役する魔法使いなんておとぎ話の中だけの話だと思つたわ!」  
「見て、あの愛くるしくもふてぶてしい顔を! 恐ろしいわ、ああして無垢な子猫のフリをして主人のめぐみんのために私たちの御飯を狙つてるのよ!」

「悔しい! でも、御飯あげちゃう!」

「どうやらクラスの生徒達からは人気のようなだ。」

「まあいくらカッコいいものが好きな紅魔族とはいえ年頃の女の子だ、可愛いものも好きなんだろう。」

「う、うわあ。ふ、ふわっふわだあ。ねえめぐみんこの子、名前はなんていうの?」  
「ゆんゆんはその子猫に触れようと手を伸ばすが。」

「フシヤアアアッ!」

「ひいっ!」

「子猫はゆんゆんに触れられそうになると前足を上げて彼女を威嚇してきた。」

「う、ううう…!」

「よーしよし、元氣出せ!」

「ネコにまで嫌われたゆんゆんの頭を俺は撫でる。」

「この子はなんでこんなに不憫な事ばかり起こるんだよ…。」

「でも学校にネコ持ってきて大丈夫なのか? ぶっちゃん先生が何ていうか!」



「あっ」

「不許可」

「やっぱりですか」

俺とゆんゆんとめぐみんは子猫を連れて担任であるぶっちん先生に許可を貰いに  
行っていた。

本来ならネコを連れて来るのは俺も反対なのだが、めぐみんの家には年中空腹な野獣  
の彼女の妹こめっこがいる。

そんな彼女の家に放置しておくのは子猫の命に係わるので俺もお願いにいったのだ

があつさり拒否されてしまった。

「先生、この子は私の使い魔なんです。この子とは片時も離れられないのです」

「不許可。まったくまだ魔法を使えない魔法使いが使い魔とは、学校は使い魔禁止お菓  
子禁止！さあ元居た場所に返してきなさい！」

この先生、普段はいい加減なのにこういうところでは無駄にしつかりしてるんだよ  
なあ……。

と、そんなぶつちん先生の返答にめぐみんはたじろいだが彼女の目はまだ諦めてはい  
なかつた。

「先生、実はこの子はもう一人の私なのです。殆どの魔力は私がつけてるとはいえ、この  
子とは絶対に離れられない関係なのです」

どうやら今度はもう一人の僕作戦に移行したらしい。

しかし流石にそれは無理があるだろう・

「もう一人のお前がもがいて離れようとしているのだが？」

「私、最近反抗期なもので」

確かに何やら離れようとしてるな。

めぐみんはネコを離すとネコは職員室の壁に爪を立てて爪とぎを始めた。

「……もう一人のお前が本能のままに爪とぎをしているのだが？」

「紅魔族とはいっ戦いになっても良いように常に自らの爪を研ぎ澄ましておくものです」

「どこの戦闘民族だよ」

と、このままでは平行線なので流石に助け舟位は出してやるか。

「あのぷっちゃん先生、一応教師の俺が言うのもアレですけど今回は彼女の家庭の事情もありますし特別に許可してあげては？」

「良いぞ」

「ダメなのは分かって・・・今なんと？」

急にどうしたこの先生は。

ひよっとして、やっぱり生徒に情が？

「面白そうだから良いぞ」

俺の感動を返せやこのすつとこどっこい。

ゆんゆんとめぐみんも顔から表情が消えて微妙な表情になってるじゃん。

あの後、ぷつち先生から許可を貰った後教室に戻ったのだが。

「ちよつとめぐみん！ トイレはちゃんと決められた場所でしなさい！ ほら、ここよここ！……ここでシーするの！……そう、よく出来ました！ 偉いわねめぐみんは！」

「めぐみんの食べ残し、ここに置いたら臭わない？ もつと日陰の方がいいよ」

「あーっ！ もうっ、めぐみん！ あちこち爪を研いだりしないでよね？ そんな可愛い顔して首を傾げてもダメよ！ ダメ……ああもう、可愛いなあ本物のめぐみんは！」

「ああああああああーッ！」

「きゃーっ!? ニセめぐみんが急に凶暴に！ 愛らしさだけじゃなく、とうとう知性と理性も片割れに盗られちゃったの!?!」

「誰がニセですか!?! こつちが本物ですよ！ あちこちでめぐみんめぐみん言うのは止めてくださいー！」

「ど、どうしたのよめぐみん!? めぐみんがあつちのめぐみんを片割れだって言ったの

よ？ 知恵と理性のめぐみんと、力と野生のめぐみんなんでしょ？」

「めぐみんめぐみんめぐみんめぐみん、あちこちで私の名前を呼ばれるのは我慢の限界なのですよ！ そいつに名前を付けてください！」

いきり立つめぐみに、黒猫を抱いたゆんゆんは何故か悲しそうな顔になる。

というか、今のやり取りを見たら流石にめぐみんが可愛そうになつてくるな。

「そ、そんな事言つたつて、今日一日で既にこつちがめぐみんつて事で定着しちゃつたし……ほら見て、私にもようやく懐いてくれて、めぐみんを抱ける様になつたの！ ……」

もういつそこの子じゃなくて、めぐみんの方が名前を変えた方が痛い痛い！」

ゆんゆん、流石に怒られるぞそれは。

「裏切り者！ ライバルの名前が変わつてもいいんですか!? と言うか今日一日だけで私が学校に入学してから今日までよりも、よほどめぐみんという名前が呼ばれますよ！」

めぐみんの言葉にクラスメイトが渋々といった表情で、

「せつかくめぐみんつて名前がなんだか可愛く思えてきたのに……」

「ああ……私の可愛いめぐみんが、あんまり可愛くないめぐみに」

「おい、その喧嘩買おうじゃないか」

「お前らその辺にしておけ。別に良いじゃないか、可愛い奴が更に可愛く、頭の可笑しい

奴が元に戻るだけなんだから」

「一番の無礼者はあなたですよこのクソ悪魔アアアアアアアア!!!」

「おいやめろ！掴みかかるとはなつ、離せええええええつ!!!」

めぐみんが掴みかかかってきて俺がそれに応戦していると

「…のりすけ」

あるえがポツリと呟いた。どうやらこの猫の名前候補らしい。

「…ぺれきち」

更に他のクラスメイトが呟いた。

「ちよいさー」

「まるも」

「かずま」

次々と名前の候補が上がっている。

というか紅魔族のネーミングセンスって相変わらず理解出来ないな……。

「先生は何か良い名前は無いのですか？」

「えっ？えつと……ちび助とか？」

「先生はネーミングセンス0ですね」

「悪かったな！お前らの感性は未だに理解できないのが多いから仕方ないだろうが！」

というか自分から聞いて来ておいて失礼な奴だな！

「この子。メスなんだけど」

「じゃあもうめぐみん（真）で良いんじゃないか？こっちはめぐみん（偽）ってことでおい、どっちが真でどっちが偽なのかその話詳しく聞こうじゃないか！」

めぐみんが再び掴みかかろうとするのを彼女のデコ辺りに手を置いて止めているとゆんゆんが大声で話し出した。

「クロ！ クロちゃん……………とかど、どうかな。ほら、その、黒猫だから……………」

「……………」

それに辺りが静まり返る。うん、いつものゆんゆんだな。

「まあいいかもね。変わった名前じゃ覚えやすいし」

「えっ!? か、変わって……………!？」

うーむ…まあ、安直だが俺は良いと思うんだけどそれを言ったらまたメンドクサそうだから言わないでおいた。

「では取り敢えずはこの、クロという変な仮名《かな》って事で。もし本格的に私の使い魔になる際には、もつとちゃんとした素敵な名前を付けてあげましょう」

「変!?! あのアルマさん、やっぱ私変なの!?! この里の中で変なのは私の方なの!?!」

「ああうん。大丈夫だ、紅魔族限定ってだけでクロって名前は普通に有りだと思っぞ」

だからその泣きそうな目はやめろ、悪魔といえど元人間だから色々と来るものがあるんだから。



く光の国く

ここはウルトラマン達の故郷“光の国”。

現在その警備隊本部では青い体の巨人“ウルトラマンヒカリ”と赤と青のウルトラマン“ウルトラマンゼロ”。そして胸にスターマークを付けた銀色の巨人“ゾフィー”が立っていた。

「ヒカリ、それで？先ほどの話は本当か」

「はい。ここ最近観測レーダーに強力な闇の反応が観測されました。しかもそれは別の宇宙から探知されたものでした」

「別の宇宙か。俺を呼んだのもそれが関係ありそうだな」

「ああ。一応エックスもお前と同じく時空を超えられるが、生憎今はデビルスプリンターの対処に当たってもらっている上に、時空を超える事に関してはお前が一番適任だからな。

しかしその宇宙がどこかまでは残念ながら観測できていない。現在はその時の結果を元にその宇宙を特定しているところだ」

「そうか。ではゼロ、お前にはその時に備えて暫くは休息を取ってもらおうぞ」

「デビルスプリンターの対処があるんだが……まあこっちも重要な案件だしな。了解だ。しかし……」

「?どうしたゼロ」

「いや、どういうわけか少し妙な予感がしてな」

「妙な予感だと?」

「ああ。それも何度も感じた事のある。そんな妙な感じがな」

ゼロは何故だかこの感覚に既視感があった。

そう、それは彼の宿敵とも呼べる存在と幾度となく相對した時に感じた感覚だった。

「まさか、ベリアルが関係していると?」

「そればかりはまだ分からねえ。それにアイツはジードが成仏させたし、その時の感覚とは少し違うんだ」

「兎に角、そのエネルギーの出どころが発見され次第報告します。ゼロはそれまで英気を養ってくれ」

「ああ、そうする」

ゼロは胸内に妙な感覚を残しながらその場を後にした。

## この世界の〇〇の処理を頼まれた件について

「それじゃあアルマさん、私はそろそろ寝ますね」

「ああ、俺はいつも通り街の警備でもしに行くよ」

「そうなんですか、大変でしょうけど頑張ってくださいね！ではおやすみなさい！」

「おやすみ」

妙に気合の入ったおやすみなさいだけど、どうしたのだろうか？

まあ何にしても学園で新しいクラスメイト？となったクロというネコ（仮名）が加わった夜中、ゆんゆんもそろそろ就寝時間なので眠りに着こうとしていた。

俺は悪魔になった影響か睡眠は必要なくなつて彼女が寝静まった後は里の紅魔族の警備隊と一緒に里の警備に当たっている。

言い忘れていたが紅魔族は生まれながらにしての魔法使い集団、それ故か魔王軍にとつてはアクシズ教団の次に排除したい存在。

よく魔王城に行つてバニルとやりあっている俺がそんな里の警備をしているのはおかしい様に聞こえるかもしれないが俺は別に魔王軍という訳では無いのでそんなのは関係ない。

「さてと、今日はコイツで行くか」

俺は懐からウルトラマンコスモスの使うコスモプラックの持ちて部分が黒く花卉の部分がパープル色になっている変身アイテム「カオスコスモプラック」を取り出す。

本来であれば存在しないアイテムだが地獄に居た時その魔力と俺の特典の闇の力が相性がよくそれを利用してこれらのアイテムやそれ以外の諸々のアイテムを創り出した。

「さてと今日も行きませうかね。

カオス！」

俺はそれを天に向けて掲げて原点のオリジナルのコスモスとは違う掛け声でスイッチを押す。

すると花卉の様な部分が開きそこから七色の光が溢れ出す。

そして光が収まると、そこに居たのは黒、青、銀の色が入り交ざり赤い目にまるで涙の様に目元に描かれる青の色、そして胸に金の色のカラータイマーを光らせている。

これはウルトラマンコスモスの能力をコピーしカオスヘッダーが作り出した存在

「カオスウルトラマン」だ。

「さて、早速…っ!?!」

そういつて取り合えず飛行を開始しようとするといきなり目の前が真っ白になった。

「くっ、何なんだいったい！」  
光が収まると、そこは俺の目の前に椅子が置いてあるどこかで見たような空間だった。

って此処は！

「あのポンコツ女神が居た場所じゃねえか。って事はここには奴が」

「ようこそ風間昭さん」

「!?!」

俺があゝの悪質教徒の元締の女神に対する怒りを露わにしていると突然声を掛けられ俺は慌ててあそちらに目を向ける。

そこにはまるでシスターの様な服に身を包み白い長い髪をした女性が立っていた。

俺たち悪魔にとっては忌々しい神聖な気配を帯びながら。

「誰だお前は、俺の本名を知っていて此処に居るって事は」

「はい、私はエリス。この世界の担当を任せられました女神です」

「エリス…」

エリスっていると確かあのポンコツ女神の後輩の女神にしてはまともな頭を持つているって言うこの世界の通貨の名前にもなったって言う女神か。

だが、いくらまともな相手でも女神は女神。だったら

「今回は貴方にお願いが「シッ!」ってひゃあッ!」

俺は奴が何か話している隙に右腕から光弾「ダークブレット」を放った。

が奴は間一髪のところまで目の前に障壁の様な物が展開されて光弾から守られた。

「ちつ仕留め損なつたか」

「い、いきなり何を!? い、いえ貴方の受けた扱いを考えれば無理も無い事は分かっていますけど、今は取り合えず話を聞いてはくれませんか!？」

「生憎と女神と話す口は持ち合わせていなくてな。」

それにな俺の自分の中の辞書には「アクシズ教団滅ぶべし女神アクアしばくべし」の他に「女神しばくべし」っていう言葉が乗ってんだよ!」

「何ですかその先輩の教団と似たような言葉は!」

「目には目を歯には歯を、悪しき教えには悪しき風習で返すのが俺の流儀じゃあ!」

「ごめんなさい! 先輩のやらかしについては本当に申し訳ありませんでしたから! お願いですから話をきいてください!」

く数分後く

「ふう、で？急に呼び出して何の用だ？」

「は、はい…」

あの後、数十発の光弾をぶっぱしそれを防がれるというのを繰り返した末にこのままじゃ話が進まないのはいい加減理解できたため取り合えず落ち着いて話をすることにした。

因みに今俺はエリスが天界の力を使つて特例として俺を死者じゃない状態で天界に連れて来るといふ裏技を使つた為居るらしい。

「じ、実は貴方にこれいってお願いがあるんです。あつ勿論タダでは言いません！それらを引き受けてくれるのならこちらも出来る限りのサポートは致しますし請け負つてくれた際の報酬もありますし、勿論無理には言いません！嫌であれば断つて下さつて構いませんから！」

「前置きは良いから早く話せ、こちとら里の警備に行こうとしたら急に呼ばれたんだからな」

「はい…。では本題に入ります。

実は先程まで貴方が居た世界で魔王軍とは別の脅威が誕生しているんです」

「は？魔王軍以外の？」



この世界では魔王軍に人々が脅かされているから転生者が送り込まれているはずだが、そういったでも対処出来ない事態なのか？

「はい。少なくとも魔王軍に協力しているのは確かなようです。」

今まで多くの転生者が彼らに戦いを挑んだようですが、その強大な戦力量と強力な敵の戦士相手に成すすべなく倒された方もいるようです。しかもその勢力によってあの世界の人達も少なからず被害に合っているようです」

「それはまた。で？何で俺にそんな事を頼む？そういったら目障りならもつと強力な特典を与えて転生者を送り込めば良いのでは？」

「それがそうもいかないんです」

そういうとエリスは指を鳴らし、俺に何かの映像を見せて来た。

そこに映っている姿を見て俺は自分の肩がピクリと動くのを感じた。

「ダークロプスに、レギオノイドだと？」

「はい。奴らは突如としてあの世界に現れその物量で多くの冒険者や転生者の方々を葬り去りました。」

しかも、葬られた方々の中にこの様な存在を見た方々もいます」

そういうとダークロプス達とは別の存在が移った映像が映し出された。

それは、金色のまるで装甲のような肉体に悪魔の様な顔をした怪物だった。

「おいおい、何でエタルガーまで居やがるんだよ」

「それまでは分かりませんが、少なくとも奴らに対抗出来る存在が闇の存在とはいえずルトラ戦士の力を持っている貴方なんです」

「ほーう？つまりは俺にこいつ等の始末をしろつて事か？」

「始末…まあ言い方は少しアレですけどそういう事になります。ですが先ほども言った様に無理には「良いよ」え？」

丁度バニル達以外のモンスターなどが全然歯ごたえが無かったから丁度いい。

俺はこの世界に来て物足りなさを感じていた。

今の生活に不満があるわけでは無い、しかし種族が変わった影響なのかは知らないが俺はやたらと好戦的になった。

だから強敵と戦えるかもしれないという今の情報は俺にとつては最高の情報だった。

「ちようど強い奴と戦いたかったからな、その依頼受けるよ。それから別に報酬は要らない」

「え?!で、ですが依頼を受けてくれるのは嬉しいんですけどいくら何でも無報酬で頼む訳には。それに貴方は私の先輩の不始末で地獄にまで送られて悪魔になってしまった訳ですし、もし貴方が望むなら貴方を人間に戻すことも」

「嫌別に今の種族気に入ってるし、この生活も慣れれば楽しいからな」



書書かされてんの？なんじゃそりやアハハハハハッ！」

「あ、あの、何だか……ごめんささい」

やっべえ、アイツが泣きながら始末書書かされてるのも勿論だけどアイツの信者達が自分たちの元締め的女神が始末書、しかも自分の不手際で悪魔になった奴の物だと知つたらどうなるのかがちよつと見てみたいかもしれない！

「あー笑つた笑つた。なあアイツ今から呼べないか？今から煽るだけ煽り倒して悪感情取りまくって逃げるから」

「そ、それは無理ですね。そもそもアクア先輩の担当している世界と私の担当する世界は違うので」

「成程、まあ良いや。取り合えず俺はもう戻らせてもらうぞ、里の警備もあるしな」

「は、はい。あの、本当にすみませんでした」

「一々謝るな。あのポンコツが少なくとも始末書だの書かされてるのしつてすつきりしたし」

「は、はあ。それでは今から現世への門を開きますね」

「ああ」

エリスはこちらに手を翳すと頭上に魔法陣が開いた。

恐らくアレが門なのだろう。すると俺の体は浮かび上がり門に向かっていった。

「それでは風間昭さん。貴方の幸運を祈ってますよ」

「止める、女神に幸運祈られると悪魔として色々と複雑なんだよ」

「つと、戻って来たな」

それにしてもエリスか。アイツはあのポンコツとは違いまだまともだから女神芝くべしの言葉にアイツは外しても良いかもしれないな。

「しかしエタルガーまでとはいかなくてもダークロプスなども殲滅するためには少なくとも里に留まるのは少し効率が悪いか」

ゆんゆんや生徒達には途中で投げだす形で少し申し訳ないけど、もうほとんど教える事は教えたし大丈夫だろう。

まあそういう問題じゃないんだろうけど。

それにゆんゆんの場合は他の子より少し精神面で脆いところがあるからなあ・・・。

あつ

「そうだ」

俺はとある事を思いついた。

「そうと決まれば警備が終わり次第、作業に取り掛かるか」

## 里からの旅立ち（俺だけ）

エリスからこの世界に突如として現れた脅威の排除という依頼を受けて数日。

今俺は……

「シャアッ！」

「！」

「！」

件のダークロプスとレギオノイドに襲われていた。

今の俺の姿はあの伝説の初代ウルトラマンの銀色の体が黒く、目とカラータイマーの色が赤く染まった闇の存在「ウルトラマンダーク」に変身していた。

「シッ！」

頭の側面に手を添えてそうして生成された「ウルトラスラッシュ」を一体の両腕がドリルになっていているレギオノイドに放った。

光輪が直撃したその胴体は真つ二つとなり爆発した。

「ほらこれも喰らいな。シャアッ！」

1体倒しても俺は止まらず今度は両手が砲身になっていているレギオノイドに両手を十

字に交差させて放つ「スペシウム光線」を放った。

『!?!』

2体目は両手を交差して防ごうとするが光線の威力に耐え切れず爆発した。

しかし2体倒したところで周りには複数のレギオノイドやダークロプスが残っていた。

「へっ、良いねえ。強敵とまではいかないけど野良のモンスターを相手にするよりは楽しめるぜ！」

俺は光線を撃った後構えなおし、そいつ等に向けて攻撃を再開した。

さて、以前まで紅魔の里に居た筈の俺が明らかに里ではない場所でこうしてダークロプス達の相手をしているかというところ、それは約数週間前に遡る



（数週間前）

「あ、あの。もう一度言ってくれませんか？」

「俺は里を出る。悪いけど、明日からは授業もしないしこの家にも帰って来るかは分からない」

俺は天界でエリスに言われた役目を行う為にゆんゆんに今後の方針について話していた。

彼女との契約自体は切れないが俺は人間から悪魔になった例外的存在な為、別に契約者が近くに居ようが居まいが消滅することも地獄に戻る事もない。

だが、流石に何も言わないで居なくなるのは無いと思ひ彼女に話す事にした。

「ちよつとやる事が出来た。しかも結構厄介な案件だな」

「そ、その案件って？」

「多分だけどゆんゆんも聞いたことはあるんじゃないか？里の外で今までに見た事のないモンスターが現れるようになった事を」

「!」

この反応だどうやら一応は知っていたみたいだな。

しかし理由を話してもゆんゆんは慌てて俺を引き留めて来た。

「だ、ダメ!そのモンスター達って確か里の外にいる勇者候補って言われている凄腕の冒険者たちも敵わない位に沢山いて、中には魔王軍の幹部クラスかそれ以上の怪物が居るって!」

アルマさんが強いのは知ってますけど、いくら何でも無茶ですよ!」

「それが生憎そいつ等を相手にするのは俺の力の方が寧ろ最適なんだ。

安心しろ、相手の殆どが数が多いだけの奴が殆どだ。それに俺は悪魔、しかも地獄の公爵だ。そう簡単にはくたばらないし仮に死んだとしても残機が1つ減るだけだから」

「そういう問題じゃないです!」

おっとどうやら更に怒らせてしまったらしい。

まあ普通知り合いが死ぬっていうのは落ち着かないか。

けど

「悪いけどゆんゆん。俺はもう決めたんだよ、君にこの話をしたのは黙って居なくなるのは流石に無いと思ったからだよ。」

君が止めても俺はそれを振り払ってでも行くし、止めるつもりもない」

「でもー」

「契約の心配をしているなら安心しろ。別に契約はそのままでしそつちから一歩的に解除しても良い。それに契約解除したところで、魂を持っていかれたりとかの対価を要求されることも無いんだ」

「だ、だから…」

ゆんゆんは俺の言葉になおも反論しようとしてきた。

彼女の心配しているのがそのことじゃないというのは俺も分かっている。

けど、相手が相手だ。ゆんゆんには納得してもらわなければならなかった。

「安心しろ。俺は地獄の公爵だぞ？そんな簡単にくたばってたまるかよ。」

それともゆんゆんは自分の悪魔、いや友達の言葉が信じられないか？」

「えっ!? い、いえそういう訳では…」

「まあお前が不安がるのも無理はない。だからコレを持たせておこうと思ってな」

俺は懐に手を入れて彼女にある物を渡した。

それは、ウルトラマンゼロの持つウルティメイトブレスレットの前の型、ウルトラゼロブレスレットを黒くして紫の三つの光がともったブレスレットだ。

コレに名前は無い。

「ほい。コレがあれば離れていても会話が出来るし、もし何かあった時はそれを使って読んでくれればそのエネルギーを探知して直ぐにテレポートで飛んでくるからさ」

このブレスレットにはウルトラゼロブレスレットの様にウルトラランスを取り出したりなどの能力はないが、その代わりに俺の膨大な魔力の一部を流して彼女への補佐につながる様になっている。

コレがあれば魔法を覚えてドカドカ打つても大丈夫だろう。

「……………本当に、大丈夫なんですね？」

「ああ、悪魔にとって契約とは絶対だ。必ず守るよ」

「……………わかりました。でも！本当に、絶対に死なないでください！私だけじゃなくて、お父さんもお母さんもめぐみんも、里の皆さんだって、アルマさんの事大切に思ってるんですから！」

「ハハッ、これは尚更守らなくちゃいけない約束になったな。

分かったよ、地獄の公爵として必ずその契約を守ると誓おう」

こうして俺は彼女との新しい契約を結び、その翌日に学校や里の人達に別れを済ませて紅魔の里を去った。

「うらっ！」

俺は向かってくるレギオノイドの一体に「ウルトラアタック光線」を打って動きを止めた。

『！』

「おっと」

すると周りの砲身のレギオノイドが砲撃を、ダークロプスが「ダークロプスメイザー」を放ってきたので咄嗟に「リバウンド光線」を張って飛行しながら回避する。

にしてもレギオノイドは兎も角スラッガー持ちのダークロプスは少々厄介だな。

「じゃあ次はこれで行くか」

《ダークライブ セブンダーク》

俺は両腕を顔の前で交差させる。

するとウルトラマンダークだった体に変化していき黒い体に赤のライン、ガンメタの胸のプロテクターに赤い目の闇のウルトラマン「ウルトラセブンダーク」に変わった。

「よし、切り裂くぜ」

頭部に備え付けられたアイスラッガーを右手で逆手に持ちダークロプスに切り掛かった。

『！』

ダークロプスの内の2体がダークロプスゼロスラッガー二本を頭から手に持ち同じく切り掛かってきた。

「せやつー！」

『！！！！』

俺は切り付ける前に額にあるビームランプから「エメリウム光線」を放ってダークロプス達の目に命中させて視界を塞ぐ。

そして視界が見えなくなつて戸惑っているダークロプス2体の胴体や首をアイスラッガーで切り付けた。

ダークロプス2体は切り裂かれた部分から火花を飛び散らしながら後退し爆発した。

「グエエアッ！」

そして間髪入れず両腕をL字に交差して光線技「ワイドショット」を放つ。

スペシウム光線よりも強力なその技はダークロプスとレギオノイドを焼き払い周囲を爆発の波で覆った。

だが、これだけ葬ってもなまじ数だけが多いのでまだまだいるのだが俺には関係ない。

「良いじゃねえか、体が鈍ってないか試したいと思ってたんだ。だからよ、お前ら全員殺し殺されるつもりでかかってきやがれ！」

俺は両手を握りしめてファイティングポーズをとり目の前の軍団に向かっていった。

く数十分後く

俺は全てのレギオノイドとダークロプスを葬り周りにはそれらの残骸が散らばっていた。

「ふう流石に数が多かったが何とかなるもんだな」

まあ俺も久しぶりの光線連続使用だったから少しばかり疲れはあるんだけど。

まあその場合は魔法空間に入って休息するから問題ないけど。

そんな事を考えていると突如更に文字が現れた。

「ん？アレは」

それはゆんゆんに渡したブレスレットに彼女がメッセージと魔力を込めると俺の元  
に送られる様になっているまあいわゆるウルトラサインだ。

そこには『アルマさん、里にアルマさんにどうしても会いたいって言っている「魔剣  
の勇者」って呼ばれている人が来ていますんですけど居ないって言っても中々諦めてくれ  
なくて。出来れば里に戻ってきてくれませんか？』と書いてあった。

しかし魔剣の勇者っていうと最近噂になっているみ、みつ、み、ミサルギ？だよな？

そんな奴が俺に何の様だ？

「まあ行ってみれば分かるだろ、ちようど戦闘も終わったし」

それにしても里を出て皆んなに別れは済ませた筈なのに意外と直ぐに戻る事になっ  
たな。

俺はそれに奇妙な感覚を覚えながらもゆんゆんの持つブレスレットの魔力を辿って  
テレポートを発動し紅魔の里に向かって飛んだ。



テレポートしたアルマが先程までいた地点にまるでアルマがテレポートするのを待っていたかの様に一人の男がやってきた。

その男は腰に刀を帯刀していてそんな獲物を持っているにしては黒いスーツを着こなし耳まであんのではないか位の黒髪を左右に非対称に分けていた。

「全く知らない未知の宇宙にある未知の星。

そこに面白半分で来てみればダークリングと同じ力を感じ、それを追ってみればレギオノイドに『ギャラクトロン』がわんさかいやがる。

オマケにさっきのウルトラセブン擬きからダークリング以外にベリアルの力を感じたのも気になる」

男はレギオノイドとダークロプスの残骸を見てその内の一つをつまみ上げると上に放り上げて落ちてきたところを素早く刀を引き抜き切り裂く。

「まあ何にしてもこの宇宙にはガイの野郎やリク、ハルキ達ウルトラマンは居ないんだ。しばらくは楽しめそうだな♪」

男は楽しくて堪らないとでも言わんばかりの笑みを浮かべながらその場を後にした。

# 自称勇者ほど面倒臭いものはない

僕の名前は御剣みつるぎ響夜きょうや。

前の世界で死んでしまいこの世界に転生した転生者だ。

僕をこの世界に送るにあたって特典として“魔剣グラム”という剣を下さった女神“アクア”様の頼みでこの世界をの平和を脅かす魔王討伐を目指して日々励んでいる。

そんな旅の途中に僕の仲間になった戦士という職業のクレメア、盗賊職のフィオという女の子と一緒にパーティーを組み僕も上級職の“ソードマスター”で彼女達と共に頑張っている。

そんな僕たちが紅魔族という魔法使いのエリート集団が住んでいる紅魔の里と言う場所で光栄で魔法を使える人材を探してその里を目指していた時だ。

あの悪夢に遭遇したのは。

「よっしや捕まえたわ！」

「ねえねえ早く○○○ビィして楽しませようよ！」

「子供はどれくらい作れるかしら？希望としては雄は60匹に雌は40匹は絶対条件ね

「！」

「ひいひいひいひいひいひい！」

「響夜——————ッ！」

僕はその時、雌のオーク達に押し倒されていて男としてのあらゆる初めてを奪われようとしていた。

この世界のオークは基本的にメスしかおらず、強い雄（種族を問わない）を見つけてはそれはもうすごい事をしてかすという男性冒険者にとつては正しく悪魔以上に警戒すべき存在だ。

しかしその時の僕は何を血迷ったのか向かって来るオークは全て切り伏せてしまえば良いと考えていた。

だが、雌のオークとは強い雄を求めているという情報を完璧に忘れていた僕はままと墓穴を掘ってしまった。

僕は襲いかかってくるオークを薙ぎ払うと後から後からめちやくちや沢山のオークが襲いかかってくる。ファイオ達は無事ではあったが僕は今、魔剣を取り上げられて鎧も脱がされいよいよ最後の砦にまで手をかけられようとしていた。

「キョウヤ！今助けるから！」

「け、けど……までオークが密集していると上手く撃退できない……」

「2人とも……！……！無理はするな……！……！それと僕はもうダメかもしれ  
ないから今は逃げるんだ……！……！」

こうは言っているが実際はかなり怖い！

ああ、女神様………僕はここまでのようです。

このままオーク達に初めてを奪われて死ぬまで………。

そんな時だった。

あの人が現れたのは。

「レッキングダークネスバースト！」

その声が聞こえた瞬間に、僕を取り囲んでいるオーク達は一筋の光によって焼き払わ  
れた。

その光から逃げようとするオークもいたがそれらも同じ光によって薙ぎ払われて  
いった。

そして僕はそんな光の発生源を見るとあの人はいた。

黒い体に赤いライン。そして所々に見える紫の模様には赤い目と赤い胸の宝石。

その姿は鋭い目つきで悪魔とも取れる見た目の禍々しい姿だったがその姿に僕は見  
覚えがあつた。

それは僕がまだ小学生くらいの頃にいつもテレビの前で楽しみにしながら見ていた

男なら一度はなれることを夢見るヒーロー。

「ウルトラマン……」

僕は無意識にそう呟いていた。

そしてそのウルトラマン「ウルトラマンジードダークネス」は周りのオークを殲滅し  
終えたのを確認すると何処かへ飛び去っていった。

その後僕たちは流石に一度戻り体と心を休めた。

そして風の噂で紅魔の里に禍々しい姿をした謎の戦士が現れ現在もそこにいるとの  
情報があつた。

僕はいてもたつてもいられず、今度はオークに遭遇しない様にテレポートが使える人  
のいる場所まで探して紅魔の里を目指した。

「アルマさん！お帰りなさい！」

「随分と早い一時帰還になったけどな」

俺はテレポートで紅魔の里に着くと真つ先にゆんゆんに出迎えられた。

「それで？連絡にもあったけどその魔剣の勇者つてのは何処に？」

「その人はこの先にある『トレギア像』の所にいます、ついてきて下さい」

「ああ」

ゆんゆんに導かれるままに俺はその場所へと向かった。

ちなみにトレギア像というのは紅魔の里にいる石造職人が俺の姿を像にしたいからあらゆる姿を見せてくれというリクエストにお応えした結果、元からあったグリフォン像の他にベリアル像やらカオスウルトラマン像やらが里のあちこちにセットされ、今となつては観光名所ともなっている。

そしてそんな像の1つであるトレギア像の前に里の人たちの注目を集める形でソイ

ツ等はいた。

男が1人で女が2人、男の方はthe勇者な格好にやたらと強力な力を秘めている剣。恐らくあれが魔剣グラムであろうものを所持している男。

女2人の方は緑と桃色っぽい髪に盗賊職とか何かなのか随分と軽装な服装の2人だった。

「あの3人が？」

「はいアルマさんに会いたいわって言う魔剣の勇者とそのパーティーメンバーです」

それにしてもあの3人、何処かで見覚えが。

俺がそう考えているとゆんゆんはあの3人に向かって歩き出していた。

「あ、あのアルマさんが帰ってきました」

「！本当かい!?」

ゆんゆんが話しかけると男の方は目に見て分かり易いくらいに表情を明るくした。

そしてゆんゆんの後ろから来た俺に視線を移す。

「あの、貴方が」

「ああ、アルマだ。この里では元教師をやっているね、今はとある理由で旅をしていたんだ」

流石に悪魔ですだなんて馬鹿正直に答えるわけにはいかないからな。

「そうなんですか。と、ところで僕の事覚えてませんか?!?」

男はこちらに向かつて何やら期待する目で俺を見る。

え? 俺こんな野郎に期待されるような目をするような事したっけか? どうせ向けられるなら美少女か美女が良かったよ。

「あーごめん、あまり記憶に無いんだが何処かで会ったかな?」

「覚えていらつしやらないんですか?!? 僕です! 以前紅魔の里に来ようとしていた時、途中でオークに襲われていた所を助けてもらった者です!」

オーク?

そういえば随分前にそんな事があつたような……………。

オーク、目の前の優男、助けた、……………あつ

「ひよつとして前にオークに馬乗りにされてレイ」それ以上はダメです!」つと。とんでもない事になりそうになつてた人?」

「思い出してくれたんですね! そうです、以前貴方に助けていただいた魔劍の勇者、御劍響夜です!」

あーはいはい思い出したよ。確か余りにも酷い事になりそうだったから助けた人ね。てか自分で勇者つて言っちゃつてるよ。

にしてもミサルギじゃなくてミツルギだったか。



「で？そんな魔剣の勇者様が態々何の様？」

「はい、単刀直入に言います。」

僕のパーティーに入ってもらえませんか！」

「断る」

俺は一つ返事で断った。

「なっ!? どうしてですか!? もしかしてレベルの事を気にしてるんですか? それなら安心してください、例え僕たちのレベルが低くても追いつける様にコツコツ頑張りますし貴方のレベルが万が一低くても気にしませんよ」

「いやそうじゃない」

ミツルギには悪いが、生憎とパーティーには入る気はしない。

何故なら

「君とは今日初めて会うけど、君は多分魔王軍討伐及び魔王討伐を目指しているって所かな?」

「は、はい!僕はこの魔剣グラムを与えてくださった女神様の期待に応えて世界を救うと決めたんです!」

その為には、どうしても貴方の様な方が必要なんです!」

「まあ話は最後まで聞け、俺が君のパーティーに入りたくない理由は、ありきたりすぎる

から」

「ありきたりすぎる?」

ミツルギが困惑顔でこちらを見てくるが俺はそれに構わずに続けた。

「魔王討伐のために仲間と力を合わせて突き進む勇者とその仲間達。本当にありきたりな展開すぎてつまらなさすぎる。それに、私としては別に魔王軍討伐でなくても今の生活には満足している、だから別に現状維持でも構わない」

この世界の住民からすればふざけるなど言わんばかりの自分勝手な言葉だ。

だがそれがどうした?今の俺は悪魔だ。悪魔は悪魔らしく自分の欲に忠実じゃなくては。

「な!?どうしてそんな事が言えるんですか!貴方のあの姿「ウルトラマン」も、貴方が女神様から魔王討伐を期待して与えてくださったものではないのですか!?」

「別にあの力はほぼ押し付けられた形なんだがな。」

ところで、君の言う女神様だけど名前は?」

「え?女神アクア様ですけど」

よーし決まった。何が何でもコイツがパーティーには入らない。

「だったら尚更君たちのパーティーには入りたくはないな。」

俺は君の言うアクアとかいう邪神の為だけには動きたくはないからね」

俺が悪魔になりその前にアイツの不手際によつて地獄に落とされたのは今の生活に満足しているから気にしていないにしても、奴の為に魔王討伐をする？ふざけるな、誰が死んでも奴の為に動いてやるもんか。

「女神様を邪神だと!?撤回してください!」

「誰がするか。とにかく、君たちのパーティーにはどうしても入りたくなくなった。

この話はここで終わりだ」

俺はもうコイツ等には用はないのでゆんゆん達に改めて里から出る事を伝えようとする。すると急に後ろから声がかかってきた。

「ちよつとアンタ、さつきから聞いていれば何様な訳!?折角キョウヤがアンタみたいなのを誘つてるのよ!」

「そ、そうよ!キョウヤと同じパーティーになれるっていうのにどうして断るだなんて馬鹿な事するの!?」

どうやらミツルギの取り巻きが突つかかって来たようだ。

「何故と言われてもな、理由は先程話した筈だが?」

「その理由つてのがふざけてるのよ!大体、キョウヤの恩人だからつてこつちが下手に出ていれば調子に乗つて、アンタなんかキョウヤにかかれれば直ぐにボコボコなんだから!」

「態々こんな田舎な里にまで来たのに、アンタ頭おかしんじゃないの!?？」

「ほうう? どうやら目の前のコイツ等にとっては俺がミツルギの誘いを断ったのが異常に見えたらしいな。」

しかし、少し聞き捨てならない事が聞こえたなあ。

「おい、その赤髪。お前今このことをど田舎と言ったか?」

「い、言ったわ。それがどうしたのよ」

「それじゃあ聞いてやる。ここは何という種族が住んでいてソイツ等の殆どが冒険者で言うところのなんて言う職業だ?」

「は? そんなの、紅魔族っていう種族で殆どが……あ」

「どうやら気づいた様だな。」

「そう、この里にいる殆どの者がアークウイザード或いはアークウイザードになる素質を持っている。」

それを何も知らずにど田舎とはよくほぎけたものだ。それとも自称勇者のパイティーは頭が弱いのかな?」

「何ですって!?？」

「私たちを馬鹿にしてるわけ!?？」

「おや違ったのか? ひよつとして自覚がなかった?」

「ツ、キョウウヤの恩人だから我慢してたけどもう限界！」

「ええ、アンタなんかけちよんけちよんにして今の言葉謝らせてやる！」

おやおやいきなり実力行使に走るとは沸点が低いな。まあ煽ったのは俺だけだ。

しかしやはり人間から得られる悪感情というのは心地良いな。

「待つんだフィオ！クレメア！」

「ツキョウヤ……」

と、俺がこの2人を迎え撃つ気満々でいるとミツルギが2人を止めた。

「ウチのパーティーメンバーが失礼しました。」

ですが、矢張り貴方のあの言葉は無視できません。どうしても撤回する気がないので

あれば、僕と決闘で勝負しましょう」

「決闘?」

「はい、僕が勝ったら先ほどの言葉を撤回して僕のパーティーに入ってください。」

貴方が勝てば貴方の命令を何でも一つ聞きます」

「へえ」

つまりこの男は、従わせたくば力ですって言いたいのか。

「勿論貴方も全力で貴方の特典を使つてきて構いません。そのかわり僕もこの魔剣と共に全力で行きます」

「良いねえ、そっちの方が分かりやすくて良い。じゃあ俺は」

俺は右手を横に構えるとそこに魔法陣が現れてそこからある物が出てきた。

それは長い棍棒の様なもので棍棒の両端にはそれぞれ50ずつ液晶の様なものが埋め込まれていた。

「これを使わせてもらおうかな」

「ギガバトルナイザー…」

ミツルギは流石にこれの事もご存じだった様で表情を強ばらせる。

俺は力を使うなら変身する必要があるが、ギガバトルナイザーなどの武器などを出すだけの場合や威力は落ちるが光線を打つ事はできる。

「もし別の獲物で戦えと言うのなら変えるが？」

「…いいえそのまま大丈夫です」

「それで？ 決闘のルールとしては俺とお前は持てる武器を使つてのなんでもありの勝負で勝敗は相手の意識を奪うか相手に降参させた方の勝利にしようと思うが、何か意見はあるか？」

「ありません。さあ、始めましょう」

ミツルギも承諾して鞘に収めていた大剣、恐らくアレが魔剣グラムであろうものを抜刀して構えた。

俺たちの突然決まった決闘に周りの一部を除いたさと言うか殆どの紅魔族が目を赤く光らせながら見ていた。

まあ俺の正体を知っている里の人たちからすれば勇者vs悪魔なんてシチュエーションだから盛り上がり上がってるんだらうけど。

「ちよちよつと待つてください！アルマさん呼んだらどうして急に決闘だなんて事になるんですか!?」

「ゆんゆん静かにしてください、折角良いところなんですから。あ、先生そのスカしたエリート面の奴に目にももの見せてやってください」

「ナー」

「私!?ひよつとして私が可笑しいの!?」

俺たちの雰囲気ゆんゆんが思わず声を上げ恐らく後から来たのであろうめぐみんと黒猫のクロ（仮名）がコチラに一応応援の一言をくれた。

まあめぐみに言われなくても目の前のコイツはボコボコにしたいからな。

コイツがああ邪神の為に俺に戦えだなんて言うのも勿論だがこいつの取り巻きはこの里の人達を馬鹿にしやがった。

確かに紅魔族じゃない奴からしたら変わり者かもしれないがな、それでもこんな得 thểもしれない俺を紅魔族的なノリもあつたにしろ受け入れてくれたんだ。

だから潰す。

「さあ来なよ勇者くん」

「ええ、この魔剣の力を思い知らせてあげます！」

こうして俺とミツルギによる決闘が開始された。

「ハアッ！」

「フッ」

ミツルギはグラムを上段から振り下ろしてきて俺はそれを避ける。

その後も横や下段から絶え間なく振るわれる魔剣だが、いかんせん大剣なだけに振るう際には大振りになってしまう。

「ほいつ」

「!?」

俺はギガバトルナイザーの先端を隙ができた奴の顔に突き出した。

しかし俺はそれをわざとギリギリで止めた。



「ツ舐めるな！」

それを挑発だと受け取ったミツルギはそれを手で払い除けて再び剣を振るった。

「ふいつ」

「なっ!?」

しかしそれは思いつきり上段から繰り出されてきて避けるのは簡単だったので、今度は動きが一瞬止まったところで剣の上に足を乗せて一瞬だが動きを止めて左腕を指から突き出す。

「ツ!?」

しかし今度もわざとギリギリで止めてミツルギも流石に腹が立ってきたのか剣を引き戻し今度は横に振るってきた。

俺は片足を剣から離して振るわれてきた剣をイナバウアーの要領で避ける。

「おやおやどうした？勇者の剣は全てを切り裂くんじゃなかったのかな？」

「くっ、黙れ！」

ミツルギは今度は剣の先で突きを行ってきた俺はそれを避ける。

そして流石に学習はしたのかその体勢から俺の避けたところに向かって横に剣を振ってきた。

俺はそれをギガバトルナイザーで受け止めそれを両手で上に押し上げる様に押し退

けて無防備になった奴の腹に鎧越しに蹴りを入れた。

「グハッ！」

ミツルギは蹴られた衝撃により数歩後ろに後退し片膝をついた。  
にしても

「おい、お前ふざけてるのか？」

「…なんだと？」

「お前も転生させられたのなら、少なくとももつと戦える筈だろ？ 出し惜しみなんかせずに本気で来いよ」

実際、地獄の悪魔達は上位悪魔にもなると並の冒険者では歯が立たない位の強敵ばかりだ。

コイツはグラムという特典を与えられた転生者であればそんな奴らさえ相手にできる強者の筈だ。それもバニルや俺みたいな地獄の公爵さえ屠れるほどの。

「お前の全力はそんなものなのか？ それとも演技なのか、その不甲斐なさは。」

「だったらもう演技の必要はない。全力で、殺すつもりで、お前の実力を見せてみろ！」  
「な、何を言ってる…」

そもそもコイツは先程から教科書通りの攻撃しかしてこない。まるで両手剣スキルに頼りっぱなしな動きだ。

そんな事あつてたまるか。初めて戦う勇者候補がそんな雑魚な訳がない。必ず底がある筈だ。

「ほら、お前の全力を見せてみる！」

俺は奴の本当の実力が知りたくて今度はこちらからギガバトルナイザーを構えて奴に襲い掛かった。

## 予想外の闇の○○

私は目の前の光景に唾然とするしかなかった。

一体どうしてこうなってしまったんだろう。

「ぐっ…ガハッ…」

「おいどうした魔剣の勇者！良い加減に全力を出せ！」

目の前では何故か決闘をする事となったアルマさんとミツルギさんという魔剣の勇者の人が戦っていた。

最初はミツルギさんが攻撃してアルマさんが攻撃を躲して反撃していました。

けど途中からアルマさんの雰囲気は怖くなって今度はミツルギさんを一方的に攻撃し始めました。その様子に最初は盛り上がりながら見ていた里の人達やめぐみん、そしてミツルギさんのパーティーメンバーの人達もただ茫然として見ている事しか出来な  
いでいました。

あんなアルマさん、今まで見たことない…。

「あのゆんゆん、先生は一体どうしてしまったのです？突然あぁなってしまうだけ  
ど…」

「わ、分からないわ、私だってあんなアルマさん初めて見る」

私たちがそんな話をしていると、アルマさんの持つている棍棒みたいな武器がミツルギさんを殴り飛ばしました。

「グワーツ！」

「おい、いい加減にしろ。こちとらダーククロプス達倒し終えて体が滾ってるんだよ、お前チート持ちの転生者なんだろ？選ばれた勇者なんだろ？だったらいい加減に本気を出して俺を楽しませろ！」

やつ、ヤバイ！

！  
どういう訳か分からないけどアルマさんが更に不機嫌になってる!?と、止めなくちゃ

「あ、アルマさん！それ以上は流石にダメです！止めてください！」

「あ？ゆんゆんどいてろ、まだ勝負が終わっていないだろ」

こ怖い！で、でもここで引いたらダメよ私！

「も、もう勝負はつきました！この人はもう戦えないようですし、決着方法の中には相手が戦闘不能の場合も含まれてます！ですからもう」

私はアルマさんの睨みつける様な目に怯えながらも彼を止める為になんとか言葉を発して落ち着くように話し合いました。

「・・・はあ、悪いなちよつと頭に血が上っていた」

「ほっ・・・」

アルマさんは魔法陣を開いて武器を仕舞ってくれました。

こ、怖かった・・・

と私が安心したのもつかの間、アルマさんが手から何やら光を出してミツルギさんに放っていた。

って！

「何やってるんですかアルマさん！」

「安心しろ、傷を治しただけだ。見てみるよ」

アルマさんに言われた通りにそちらを見ると確かにさっきまでボロボロだったその人の体は傷が完璧に治っていた。

「お、驚かせないでください！」

「悪かった悪かったって」

全くこの人は、いつもは常識的でまともなのにどうしてこうなるの!?

私のそんな葛藤を他所にアルマさんはミツルギさんのパーティーメンバーに話しかけていた。

「おいそこの取り巻き2人、この勝負は俺の勝ちって事で良いんだよね？」

「え!？」

「一応勝負に勝った訳だがお前らとしてはどうだと聞いているんだ。まさか俺が不正でもしたと言つてこの勝負を無かつた事にするか？」

「い、いえ。そつちの勝ちで良いわよ……」

「で、でもキョウヤをあそこまで痛めつける必要は無かつたんじゃないの!?!アンタの所為でキョウヤにもしもの事があつたらどうしてくれるのよ!」

「だから悪いと思つて傷は治してやつたし勝負の景品も無しで良い。それとも、今度はお前らも含めて徹底的に潰してやつた方が良いか？」

「ひっ!」

アルマさんがそういうとその人達はミツルギさんを抱えてこの場から去つていった。

「アルマさん!怖がらせてどうするんですか!」

「あの手の輩はこつちが下手に出ると調子に乗つてボロクソ言いまくるんだ、これくらいの方が変に舐められないで良い」

「そ、それはそうかもしれないけど……」

「まあ良いではないですかゆんゆん、私もやり過ぎかとは思いますが私も無性にムカツとしていたのが少し晴れましたから」

「めぐみんまで……」

「それより、アルマ先生も折角帰つて来たのですからゆんゆんの家に久しぶりに行つてあげてください。このボツチ娘、先生が居なくなつてからまるでアンデッドみたいに生きる屍でしたからね」

「ちよ、ちよちよめぐみん!?何を言つて…」

「とうかアンデッドみたいにして、私そこまで暗かつたわけ!?!」

「まあそうだな、俺も少し頭を冷やしたいしゆんゆん。悪いけど久しぶりに行つても良いか?」

「え!は、はい!それは勿論!」

「あ、アルマさんが久しぶりにお家に来てくれる!」

「そつか。それじゃあ行くぞ」

「はい!」



「おおアルマさん！帰ってきてきていたのか！」

「お帰りなさいアルマさん」

「ただいまです、お二人とも」

俺は久しぶりに帰ってきたゆんゆんの家に着くと、そこで彼女の両親に出迎えられていた。

しかし里を出てそんなに離れてなかったのに何故だか安心感があつた。

紅魔族みたいな厨二病になつては無いが、俺も何だかんだでこの人達の事を悪くは思つてないらしい。

「いやーこんなに早く帰ってきてくれるとは」

「ほんの少しだけですよ、しばらく休んだらまた里を出ますから」

俺は今日休んだら直ぐにこの里をまた出るつもりだった。

本来なら今すぐに行きたいところだが、先程めぐみんから聞いたゆんゆんの状態を聞

いたら流石にどうにかしなくちゃだしな。

「さあさあ、アルマさんも久しぶりに帰ってきて娘と積もる話もあるだろう。君の部屋はちゃんと掃除して元のままだから行くといい」

「わざわざありがとうございます」

俺はひろほんさんに促され、ゆんゆんと二人でこの家に設けてもらった俺の部屋に向かった。

「さて、アルマさん。どうしてあそこまでしたんですか？」

「…」

俺の部屋に着くと、そこにあつた椅子とベッドに俺とゆんゆんは向かい合うように座り先程のことについて話し合っていた。

彼女が怒った顔でこちらを見ている理由について察しがつかない程俺は鈍感ではな  
い。

彼女が言いたいのは先程、ミツルギとの決闘で少々やり過ぎてしまった事だろう。

「向こうから仕掛けて来た決闘ですから、私もとやかくは言いませんけどあそこまでは無かったんじゃないですか？」

「・・・」

「今回のアルマさんどうしちゃったんですか？いつもの貴方はああやって相手をいたぶる事はしなかった筈ですよね」

「別に、ただあの自称勇者のアイツがムカついたただけだ。自分を勇者だのなんだのとはざいておきながら実際に戦えばスキルに頼り切った攻撃ばかり。最初は演技か様子見で手を抜いているのかとも考えたが、一向に変化が無い。

こっちは滅多に会えない強敵と戦えると思った矢先にとんでもない失望感に襲われたよ」

「でも、あそこまではする必要は・・・」

「ゆんゆん、忘れているかもしれないが俺は悪魔だ。悪魔というのは自分の欲に忠実でね、俺の場合は自分で言うのもアレだが戦闘が大好きでね特に強敵との闘いは俺にとつては大好物でね。

しかもあのミツルギとかいう奴には悪いがその前に色々と戦闘を終えた後でその時の高ぶりがまだ残っていてね、その分奴と戦った時の喪失感は無かった。勝手だと思われるだろうがその時の俺はそれにムカついたんだ。こんな感情、悪魔になつてか

ら久しぶりに感じたよ」

「・・・悪魔になつてから？」

「あつ」

しまった、ついイライラして思わず俺の事について口が滑つてしまった。

俺が元は人間だということを話していないのは、聞かれなかつたというのも一つの理由だが、一番の理由としては余計な混乱を避けるためだ。

この世界について色々と見てきたが悪魔と契約したという話は五万と聞くが、悪魔になつたなんて話は聞かない。そんな中、あの邪神の所為とはいえ悪魔になつた奴がいるだなんて聞いたら余計な混乱を招く。

それだからなるべく言わないようにしてきたんだが…。

「アルマさん…悪魔になつたつて、どういうことですか？」

「・・・」

俺としたことがとんだドジを踏んだな。

いつもならこんなアホみたいなヘマはしない筈なんだが…。

・・・まあ彼女と契約を結び続ける事になるならいつかは言おうと思つていた事だし特別秘密にしていた事でもないからな。

「アルマさん…」

「ゆんゆん、今から話す事は他言無用だ。それが守れるな？」

「え？」

「それさえ守れば、俺の秘密について話そう」

「・・・分かりました。このことは誰にも話しません、約束します」

「よし」

本当はそれほど重要な約束でも無いのだが一応こう言っておく。

「それでは話そう、俺が本当はどんな存在だったのかを」

俺はゆんゆんに、この世界にきて人間から悪魔になったことについて話した。

まあ流石に女神だの転生だのについてははぐらかして、とある悪魔よりおぞましい女の手によって悪魔にされたという事にして彼女に話した。

「そんな…アルマさんは元は人間だったのに、その人の所為で悪魔になっただなんて…」

「ホント、あの女にまた会ったらもれなく光線をぶっ放してやる」

ま、そんな奴もその不祥事の所為で始末書書かされてるんですけどね。

今度どつかの街で『アクシズ教の女神は悪魔製造女郎でアクシズ教徒はその手助けをしている』って張り紙でもしよつと。

「酷い…アルマさんは普通の人間だったのに」

「まあ今となっては地獄の悪魔達にも気の合う友人も出来たし、今の俺の性格的に地獄程馴染む場所はない」

「で、でも…」

「俺の事を心配してくれるのは有難いけど、俺なら大丈夫だからさ」

俺はベッドに腰かけていた彼女の頭を撫でた。

「これはこの世界に来てつい身についてしまった彼女を落ち着けるお決まりの行動となっていた。」

「これをする、何故かは知らないが彼女は落ち着いてくれる。」

「はうあゝ」

「落ち着いたか？」

「は、はい」

うん。彼女の顔が赤くなっているが気のせいだな。

あ、そうだ。

「ゆんゆん、君には1つ頼みがある。」

俺は最初にこの里を出た時の理由でほぼ戦闘が繰り返されると思う。君には、俺を呼ぶ際は君の命や君の知り合いの命が危なくなりどうしても対処できない事態になった

場合に限定しようと思う」

「え？」

「君の為にと思つて渡したブレスレットだが、よく考えてみると君はいずれはアークウィザードとして優秀な魔法使いになり紅魔族の族長の後を継ぐ将来がある。

それなのに俺が過保護になり過ぎてそんな成長の機会を奪う訳にはいかないからな」  
「そ、そんな……」

「あー直ぐに不安そうな顔にならないの。別に会えなくなる訳じゃないんだから」  
「……はい」

少し間が開いたけどどうやら一応納得はしてくれたようだ。

これで、心置きなくダークロプス達の殲滅に当たれる。

「で、でも！私からもお願いがあります！」

「おっおう。なんだ？」

急に勢いが増した彼女に少しばかり動揺したが、まあ契約している立場だから召喚主の願いを叶えるのも良いか。

まあ本来であれば対価を要求するところなんだけどね。

「今日は一緒に眠ってください！拒否したらお父さんや他の人にアルマさんに襲われ  
たつて言います！」

「分かった契約成立だな！だからそれは勘弁して！」

この子ノータイムで恐ろしい事言い出すな!?

これじゃ「お、おい。そんな事、出来る訳ないだろ」とかお約束みたいな言葉もいう暇がねえな！

しかも脅しの内容が内容だけに、ゆんゆんの様な美少女と一緒に寝られるイベントが発生しても全くいい意味での胸のドキドキが発生しないんですけど！

そして、俺はその日の夜ひろぼんさん達に怪しまれない様に彼女の部屋で一緒のベッドに入った。



「数日後」

あのゆんゆんの半場脅迫のお願いを聞いた後、俺は再び里を出て今日も殲滅を行っていた。

しかも今回はギャラクトロンが初めて出現していた。

「ダークネススプリウムカリバー！」

俺は変身した「オーブダークネス」の武器“ダークネスカリバー”でソイツの様々な部位を破壊してから必殺の光線でソイツを破壊した。

そして俺は破壊したギャラクトロンの残骸を眺めていた。

「レギオノイドにダークロプス。更にはギャラクトロンか。」

この分だと、インペライザーやらキングジョーやらのロボット怪獣も来るか？」

まあそれ以外にも、ゼットンやらレッドキングやらも来ないとは言い切れないんだけどな。

しかもエタルガーが居る位だから、この分だとそれなりの大物が来る可能性も浮上してくるだけだね。

「まっ、今考えても仕方ないか。取り合えず今日は魔法空間で休んで…ッ!」

俺は魔法空間を開こうとすると背後から突然殺気を感じて反射的にダークネスカリバーで防いだ。

防いだ物を見ると、ダークネスカリバーと鏢迫り合いになる形で刀が添えられていた。

「ウルトラマン擬きやセブン擬きだけじゃなくてオーブ擬きにもなるとは、傍観しているつもりだったがここはーっ手合わせ願おうか」

「!?おいおい、何でアンタがこの世界にいるんだよ」

聞こえて来た声を聴いて、俺は思わず驚愕に目を見開く。

その声に恐ろしく聞き覚えがあったからだ。

俺は頭を後ろに向けてみると、そこには人型の魔人が立っていた。

その手には今現在、俺の持っているダークネスカリバーと鏢迫り合いをしている刀「蛇心剣」が握られていた。

ソイツは、俺の変身しているオーブダークネスの元となった存在「ウルトラマンオーブ」の宿敵にしてライバル。そして数々の宇宙で時に他のウルトラマンと協力したり、時にとある防衛隊の隊長をしていた光になれず闇になりきれない存在。

「ジャグラス、ジャグラー…」

## 大変!ジャグジャグが来た!

「何でアンタがこの世界に居るんだよ、ジャグラスジャグラー」

俺はギヤラクトロンを倒して魔法空間で一休みしようとしたところに急に後ろから斬りかかられてそれを防いだ。

そして背後の存在を確認すると、そこには魔人体になったジャグラーが立っていた。

「今言つたら、手合わせ願うと。それとも俺が相手では不満か?オーブ擬き。それとも、地獄の公爵、暗黒の悪魔アルマ」と呼んだ方が良いか?」

「つ!…へえ、俺の事を知ってくれているとは光栄だね」

「俺もこの星に来て色々と情報収集は欠かしてないからな。…おい、手合わせの前に1つ聞きたい事がある」

「?何だ、恐らくアンタもダークロプス達に遭遇したんだろうが生憎と俺も奴らの正体が何かまでは知らないぞ?」

「いや、そんな事じゃない」

ジャグラーは一旦蛇心剣を下ろし、それを確認して一旦敵意が無い事を確認した俺も一応の警戒はしながらダークネスカリバーを下ろす。

「俺が聞きたいのはな……この世界は一体どうなっている？初めてこの星に来たかと思えば地球で見たキャベツだのトマトだのが“キャベキャベ”だのと鳴き声を上げながら空を飛んでるわ、魚は何故か土に植えられているか山に住んでるわ。お前に会う前に立ち寄った街で道を歩くなりアクシズ教だか悪質教だか訳の分からん奴らに絡まれるわ！」

「この世界は一体どうなってるんだ！」

「え？えつと、その……お疲れ様です」

この人？は多分この世界特有の生きている野菜を見た後に、あの邪神を奉る頭の可笑しい集団と噂のアクシズ教の総本山がある“アルカンレティア”に行ったのだろう。

急にキャラ崩壊しながら叫ぶから少し驚いたが、その話を聞いていきなり切りかかられたとはいえ何だかいたたまれなく成っていた。

「謝れとは言っていない説明しろと言ったんだ！何だあの頭の可笑しい宗教団体は！顔を合わせる度にやれ“この石鹸と洗剤飲めるの”だの“この入信紙にサインを”だの“私と結婚してくれれば本日限定でアクシズ教に入信出来る特典が付いてきます”だのと！奴ら、下手したら魔王獣やギルバリスより恐ろしい奴だぞ!!」

「それには激しく同意しますよ」

あの闇の仕草やストレイジの隊長で有名なあのジャグジャグを此処まで精神的疲労

にまで追い込むとは・・・恐るべしアクシズ教徒!

「取り合えずこのまま立ち話もアレなので、この近くにアクセルっていう街があるんでそこで話しませんか? コーヒーでも飲みながら」

「・・・ああそうする」

何だろう、本来なら滅多に会えないであろう強敵との戦闘が無くなって苛立つところなんだが何故か今回に至ってはそれが全く怒らない。

「見つけたぞ、ウルトラ戦士よ! それにジャグラスジャグラーまでいるとは俺は運がいい」

「?」

俺たちがそんな風になった時、突然聞き覚えのない男の声が聞こえて来た。

俺とジャグラーはそちらを振り向くと、金髪青目に全身黒づくめに銀色の鉄パンに右手にサーベルの様な物を装備した奴がいた。

「あのお方の命によりお前を始末せよと命令されたが、まさか近頃ウルトラ戦士に協力しているジャグラスまで居るとは、今日は俺の幸運が最高値の日だな!」

「・・・」

俺とジャグラーは突然現れて訳の分からない事をしゃべり始める目の前の存在に思わずポカんとする。

「あー、エキストラの方ですか？」

「違うわ！何処に右手にサーベル装備したエキストラが居るってんだ！」

「そうですよ、ジャグラーさん」

「おお、流石は我々宇宙人と長年に渡り戦い続けているウルトラ戦士、ちゃんと分かって」

「○面○イダーですよ？顔が銀色の仮面っぽいし」

「お前もかよ！というか違いよ！」

考えてみるよ、令和のこの時代どころか昭和に至るにしても何処に全身黒ずくめに銀色鉄パン履いてサーベル装備している仮○イダーに喜ぶお子様が居るんだよ！それにベルト付いてないだろうが！」

「いやー銃で変身する奴もいる位だからサーベルで変身する奴が居るかもしれないと思っ」

「お前謝れ！俺と全世界のラ○ダーファンの子供たちと大人の方々に謝れ！」

目の前の男性は急に騒ぎ始めた。

何か嫌な事でもあったのかな？

「ゼー…ゼー…いい、良いか。俺はな、あのお方の軍団の星人の一人！サーベル暴君とも呼ばれたマグマ星人だ！」

「……」

あー、はいはいマグマ星人ね。

マグマ星人といえよ。

「あの女の敵で有名な」

「暴君と呼ばれながら、最近では味方キャラだったり癒しキャラだったり色々迷走しているので有名な」

「不名誉過ぎる呼び名で呼ぶな!というかジャググラスに関しては人の事言えないだろうが!」

確かにジャググラスさんに関しては防衛チームの隊長を務めたりと最近では正義の味方 side に居がちだよな。

それにしても

「いや女の敵は事実でしょうが。好きになったしかも怪獣だったとはいえ、誘いを断つた女性に無理矢理迫ったり自分の者にならなかつたら殺そうとするわとんでもない奴いるじゃん」

「ぐっ…た、確かに…し、紳士の、か、風上にも置けない…や、奴が居るには居るが。な、何も全てのマグマ星人が、そ、そういう奴という訳では…って違うッ!」

お前ら! いい加減にしろ! というかな、お前みたいなのは闇のウルトラ戦士やジャグラー

みたいな最近出て来たくせにキャラ人気が高い奴がのし上がれているのはな、俺みたいなマグマ星人やメフィラス星人。更にはザラブ星人などの宇宙人やゴモラやレツドキングみたいな怪獣さん達が、コツコツ歴史をつないでくれたお陰なんだぞ！

読者の皆様も、そう思いますよね!」

「何か…どつかでやった覚えのあるやり取りだな」

「どうか読者ってなんだよ」

しかも何か少しメタっぽく思えるのは何故だ。

「だあーもう良い！」

さっさとお前らを倒して、あのお方へ俺の強さを証明し！最終的にはこの小説のタイトルを“この素晴らしいマグマ星人の異世界生活に祝福を！”に改名させてやる！」

何やらマグマ星人が訳の分からない事をほざいているが、まあ折角滅多に戦えない星人との戦闘な上に無効から並々ならないやる気を感じるから。少し本気でやるか。

そう思い俺はオーブダークネスの変身を解き、素早く懐から赤い握力測定機の様な見た目の変身アイテム「ジードライザー」を取り出して2本のカプセルを取り出した。

すると、隣ではジャグラーが魔人体を解き身に着けていた黒スーツのジャケットの懐から赤と黒の機械を取り出した。って

「ダークZライザー？」



「あ?何でお前が知ってるんだ?」

「あーそれについては後で話します。というか俺の知っている限りでは壊れた筈ですけど?」

「いやな、この星に来た時何やらモンスターとやらに襲われている馬車を助けたらなその馬車の責任者から”かつて勇者候補が持っていた謎の神器”だと言われてその例に渡されたんだよ。

どうやら使える奴が居なかったらしくてな、処分に困っていたのを金と一緒に渡されたんだよ」

「成程」

「おい!俺が居るつてのに余所見してんじゃねえよ!」

「あつ、すまん一瞬忘れてた」

「お前ら本当にしばき倒すぞ!」

と、マグマ星人がそろそろストレスで色々爆発しそうなので俺は懐から”ゼットンカプセル”と”キングジョー”のカプセルを取り出した。

すると、隣でジャグラーがライザーのトリガーを押して扉の中に入ったので俺もその後引き続き入る。

「おい!？」

「へー此処って意外と広いな」

「何当たり前の様な顔してこの空間に入って来てんだよ!」

「いやこの空間に一度入ってみたかったのもありますけど、この空間で変身すると明らかにタイミングが合わないじゃないですかそれだとテンポが悪いです」

もし他の人と同時に変身する時は、必ずタイミングとテンポを合わせる。

紅魔の里で教えてもらった事がこんな所で活きるとはな。

「おまつ…ハア、まあ良い。さっさと変身するぞ」

「はー」

俺たちはそれぞれの変身アイテムを構えてそれぞれの変身シークエンスに入る。

ジャグラーは目の前に現れたカードをライザーにセットした。

《ヘビクラ・アクセスグランテッド》

その音声の後に俺はライザーのグリップを引き起動する。

そして俺はウルトラカプセルを、ジャグラーは3枚の怪獣メダルを取り出してセットした。

「キングジョー、ゼットン」

「ゼットンさん、パンドンさん、マガオロチ♪」

俺は2本のカプセルを読み込ませジャグラーもメダルを読み込ませる。

《ゼットン パンドン マガオロチ》

「交われ、強敵!」

俺はそんな掛け声と共にライザーの引き金を引いた。

《フュージョンライズ》

《キングジョー ゼットン》

《ウルトラマンベリアル ペダニウムゼットン》

ウルトラマンベリアルの幻影にゼットンとキングジョーが飲み込まれ、ベリアルの姿がゼットンとキングジョーが合体したベリアル融合獣“ペダニウムゼットン”へと姿を変えた。



「そうじゃねえよ!まだ、さっきのウルトラマンや魔人の姿ならまだ分かるよ!?けどさ、俺が現れるなりそんな敵つい怪獣になるとか、お前らヒーローとして恥ずかしくないのか!」

「俺、悪魔。だから恥ずかしくも何ともない」

「そもそも俺ヒーローじゃないしな」

それに、サーベル暴君だのと呼ばれてその上ウルトラマンレオでは兄弟怪獣嚇けて漁夫の利狙った種族に言われてもな……。

「で?わざわざ来てくれたんだ。覚悟は出来てるよな?」

「……」

マグマ星人は固まってしまった。

だがしかし、直ぐに復帰しそして何やら頭に手を当てて何かを考える仕草を見ると突然後ろを向きこちらにキザったらしく手を振って来た。

「ふっ、お前達の本気は伝わったぜ。」

教のところは引いてやる、だがな。次に会った時には、正々堂々と勝負を」

「ペダニウム・メテオ!」

「ハッ!」

「ギャアアアアアアアッ!」

俺が胸から光弾を、ジャグラーが口からブレスをマグマ星人に容赦なく浴びせる。

そして、あまりの熱量と威力を持った2つの攻撃にマグマ星人は成すすべなく攻撃が直撃しそのまま爆発四散したのであった。

「マグマ星人・・・面白い奴を亡くした」

「消したの俺らだけだな。ところで今にして思えば、奴を生け捕りにして尋問でもすれば敵の正体が少しは分かったんじゃないのか？」

「あっ」

そういえば、あまりのジャググラーさんの変貌ぶりや突然のマグマ星人の登場に色々情報量が多すぎてうっかり聞き出そうとするのを忘れてた。

そうすればエタルガーとかその他の強敵の事も聞き出せたかもしれないのに……。

「……アクセルの街に行きますか」

「そうだな、俺も色々とあり過ぎて疲れた。街に着いたらブラックのコーヒーが飲みたい」

こうして俺とジャググラーさんは、なんやかんや有りながらも一応目的の地にした街に向けて移動を開始した。

## 情報共有と久々の再会、暗躍する闇

俺とジャグラーさんはあの後途中で会うモンスターを適当にあしらいながら、始まりの街アクセルにたどり着いていた。

「ん？何だ兄ちゃん達、旅の人かい？にしては服装が立派だが」

街に入る前にその衛兵の人に止められた。

まあ旅の者で倒すには俺みたいな前身黒尽くめの服に黒いフード付きのローブとジャグラーさんみたいにワインレッドのワイシャツに黒のスボン、そして黒のジャケットにネクタイなんて流石に無理があるだろう。

「いやー実俺、紅魔の里からこの街で冒険者をやろうと来たんですけどちよつとテレポートの座標がズレちゃったみたいで。

その途中でこの人に会ったんですよ」

「俺は適当に旅をしようと思ったんだが生憎その為の服がどういったものなのかを知らなくてな、服がジャケツトとかなのはその所為だ」

一応ここに辿り着く前にジャグラーさんと事前に話し合って決めた設定を衛兵の人



に話した。

こういった街の入り口では検問の様に街に入る者達の身元を確認すると里を出る前にゆんゆんに教えてもらった。

「成程な、兄ちゃん達中々難儀な目に遭ってたんだな。ようこそアクセルへ」

「え？」

あれ？もう少し詳しい身元とか聞かれると思ったんだけど。

「あの、こんなにするなり通しても良いんですか？」

「ああ良いって、この街は特別怪しい奴でもない限りはこんなもんだよ。」

それより兄ちゃん達、この街には何しに来たんだ？」

「冒険者登録とやらをしに来た。冒険者カードっていうのは身分証代わりになると聞いてな。旅をするなら丁度いいと思ったんだよ」

「そうかい。それなら冒険者ギルドはこの先を道なりに行ったら目立つ建物があるからそこが冒険者ギルドだ。」

お前さん達見た感じ腕は立つ方だと思うからよ、きつと直ぐにベテラン冒険者になれると思うぜ。まあ衛兵やつてる俺に言われても説得力ないかも知れねえけどよ」

「いえいえ、ありがとうございます」

「それじゃあ俺たちはギルドに向かわせてもらおう」

「おう頑張れよ兄ちゃん達」

こうして俺たちはここに来るまでに考えていた適当な設定を特に披露する事なく、すんなりと街に入ることが出来た。

「リクの時の地球もそうだが、この街も大概セキュリティが甘いな」

「まあこの街は前線から一番遠い比較的平和な街ですしこんなもんでしょ」

俺たちはアツサリと街に入れた事に拍子抜けしながらギルドに着くまでファンタジー風の街の感じを楽しみながら歩いていった。

「あつ、ジャグラーさん。ギルドには先行つといてください」

「あ？何かあんのか」

「はい、この街に知り合いが居るんです。だから先に挨拶に行っておこうと思ひまして。それに俺、前いた紅魔の里って場所でもう冒険者登録は済ませてるんですよ。ほら」

俺は懐に手を入れてそこから一枚のカードを取り出してジャグラーさんに見せた。

それは俺の冒険者カードで元が人間な為か種族も人間として登録されて、幸運以外の全てのステータスが低い数値を叩き出している。

そして魔力も高かったので里の人たちに習ってアークウイザードという上級職の魔法使いになっている。

(ちなみに名前は本名のアキラで登録しておりその際に里の人達に疑問を持たれたが、二つの名前を使い分ける悪魔、カッコいいという理由で納得してくれた)

「ほう、まあ良い。では俺はそのギルドとやらに行つて登録しておくか」

「俺も後から向かいますから、また後で会いましょう」

「ああ」

こうして俺は俺の用事を済ませる為にジャグラーさんと一旦別れた。

にしても、里ではゆんゆんやめぐみんやあるえとかの女子と関わる事が何かと多かったからこうして男性とこうやって話すのって何気に久しぶりなんだよな。

なんというか…

「良いな、ここのうの」

「此処か」

俺はジャグラーさんと別行動に移った後とある路地裏に設けられていた店の前に来ていた。

そこは以前地獄にいた時にサキュバスの一人から「アクセルという街に店を開いている」と聞いていたサキュバスの夢サービスを行なっている店だ。

サキュバスとは男を魅了する事で有名な悪魔だが戦闘力は最弱と言っても良い。

そんな彼女達なりにそんな実力主義の悪魔社会で生き抜く為考えたのがそのサキュバスサービスなのだ。

聞いた話ではこの店のことは男性にしか明かされておらず、その店に来て要望を出してきた男性の思い通りの夢を見させて自分達は相手のほんの少しの精気と適当なお金を貰うという正しく男性側にとってもサキュバス側にとってもwin-winの関係を保っていた。

俺も地獄では彼女達に世話になったし、まず先にコチラに挨拶するのが筋というものだろう。

決して彼女達のエロい姿を見たいからではない。

と、そんな葛藤を胸に俺は「閉店」と書かれた紙を無視して店のドアを開けた。

そして店に入った俺の目の前に飛び込んできた光景は男にとつての理想郷だった。

「あつすみませんお客様、残念ですがまだ営業はしております…ん…」  
「よ、地獄であつて以来だな」

俺の目の前にはそれはもうドが付くほどにエロい下着をした豊満な体のサキュバスがいた。

周りのサキュバス達も体つきなど違いはあれど皆似たような下着を着ていた。

そして俺と目が合うと、そのサキュバスは持っていた帳簿などを床に落とし周りのサキュバスもこちらを見て固まっていた。

「あ、あの…もしかして、アルマ様…ですか？」

「ああ、地獄の公爵アルマで間違い無いぞ。元気にしていたかお前ら」

俺は取り敢えず軽い感じで挨拶をした。

だがサキュバス達は俺を見たまま固まっていた。

俺そんなに変な格好か？

『キヤアアアアアアッ!!』

「うおっ!?」

そんな俺の耳を突然悲鳴というか歓声の聲が襲った。というか前にもこんな事があつたな。

「アルマ様よ！生アルマ様だわ！」

「ハワワワツわ、私今自分で夢でも見ているの?」

「お願い夢なら覚めないで!」

「わ、私アルマ様グズのお気に入り取ってくる!そしてサインしてもらおうの!」

「あの黒いローブ、アルマ様の魅力を引き立ててるわ」

「あつ!私目合っちゃった!」

どうやらサキュバス達は突然の俺の登場に感極まった様だな。

この現象はバニルにも起きる事でサキュバス達にとって俺やバニルなどの悪魔はアイドリックな存在らしい。

「あーコホン。濟まないが話を進めても良いか?」

「あつ!も、申し訳ありません!アルマ様のお話を遮ってしまうだなんて!」

「いやそこまで深刻に捉えなくて良いから」

ホント、サキュバスって嫌に腰が低いんだよなあ…。

まあ地獄で俺が元人間であると分かっているにもかかわらず接してくれている事に嬉しくもあり少し複雑な気分だけだ。

「実はこの街に滞在する事になってな、以前この街で店を開くと聞いてまず同じ悪魔として挨拶をしておこうと思ってきたんだ」

「まあ!そうだったんですね、態々私共の為にありがとうございます!」

『ありがとうございます！』

「良いつて、ただ済まないけど君達に頼みたい事が2つあるんだ」

「はい、アルマ様の為であれば我々サキユバス一同。謹んでご協力させていただきます」

よしこれで後は彼女達の承諾を得るだけになったな。

「恐らくこの店に來ているであろう男性客とかから情報は入っているとは思うけど、近頃出現する謎のモンスターについてだ」

「はい、この店をご利用してくださる方々から近頃魔王軍に突然として新たな兵力が誕生して新たに幹部クラスかそれ以上の化け物が現れたと」

「そうだ。俺はとある理由でせいづらの殲滅をする事になってな、お前達はこうやって人間社会に溶け込んだ分情報も入ってくると思う。だからそのモンスターについての情報ならどんな些細なことでも良いから俺に報告してくれ」

「あ、アルマ様がそのモンスターをですか？」

「疑問に思うのも無理はないが、そこは飲み込んでくれ。それに俺が地獄でなんて呼ばれてたか忘れたか？」

「…:そうでしたね」

俺が地獄で他の悪魔達から呼ばれていた二つ名は「戦鬪狂のアルマ」。

俺は力を使って生き延び悪魔になった時、ただ生きる事に退屈していた。

そんな時バニルなどの強敵と戦う度に俺の中に高揚感が生まれていつしか俺は戦いを求めるようになっていた。

「まあとにかく、頼んだぞ」

「はいお任せください。ところで、後もう一つのお願いというのは？」

「ああそれはだな」

実を言うとこれもある意味一番重要な案件だ。

これは、彼女達サキユバスでないと出来ない案件だ。

その案件とは。

「……この店って俺も利用できます？」

「はい勿論。なんでしたらVIP待遇で最上級のコースをご用意いたします。

ですが、差し出がましいのは理解しているのですが」

「分かってる、ちゃんと金は払うし俺の精気だけじゃなくて魔力もやるからさ」

「ありがとうございます！」

よし交渉成立だな。

この店に来た理由、それは地獄でも味わったあのサキユバスの見せるアレな夢をコチラでも問題なく見せてもらえるか確認も含めたものだった。どうやら問題なく通えるようだな。



ちなみに彼女達は俺には精気だけでなく少量の魔力を要求してくるんだが、それをして夢を見終わって起きた時それはもう「すごい事」になって倒れていたんですけど。

それで流石に魔力を渡すのは辞めておくかと彼女達に聞いたら寧ろ逆にくださいとか言い出して結局彼女達に少量ずつ魔力を与えてたりします。

恐らく彼女達にとつて元々人間だった俺が地獄の魔力を力越しにとはいえ受け取りその純粋な地獄の魔力を彼女達が受け取るとまあ身体的刺激及び精神的刺激によつて「あんな状態」になったんだと思う。

「それじゃあ俺はもう一つ顔を出しておく場所があるから、商売頑張れよ」

「お心遣い感謝します、アルマ様」

『また来てくださいいね！』

そんなサキュバス達の声を背に俺は店を出た。

「さてと」

サキュバスの店を出た俺は途中の食い物屋に立ち寄つてそこで適当な唐揚げやらを買って揃えてとある店の前に来ていた。

何故食い物を持つてると言うかとバニルがこの世界に来る前に言っていた。

「良いかアルマよ。もしアクセルの街にいるというポンコツ店主に店を訪ねる際には何やら食べ物を持っていくが良い。」

あのガラクタだけを集める才能のある奴のことだ、どうせガラクタが売れず店は赤字、食い物などどうせ食ってないに違いない。

今あの店主に餓死して昇天でもされては我輩の夢が遠のく恐れがある。それを阻止する為にも食い物を持っていき、奴の口に無理矢理ねじ込んででもこの世に止めよ」と言われてきたのだ。

まあアイツ「リッチー」とかいいう最上位のアンデットだし空腹程度で簡単にくたばらないとは思うけど、流石に空腹のままってのも可哀想だしな。

そんな感想を胸に俺は目の前の店「ウイズ魔導具店」と書かれた看板のドアを開けて中に入った。

「ウイズー久しぶりー、食い物買ってきたけどよかった食う…か…」

少し軽い感じの挨拶をして食い物を差し出そうとした俺の目の前には

1人の女性がうつ伏せで転がっていた。

「…」

そんな普通の人が見たらサスペンスドラマよろしく「キヤー」と絶叫するところなのだろうが生憎そんな余裕は俺にはなかった。

だって久しぶりに訪ねた友人が目の前で転がってたらそりや言葉に困るわ。

…それにしても魔法使い風な紫のローブという露出の少ない格好なのに、彼女の見事な胸部装甲が床に押し付けられてムニユとしてそりや凄いわなんのつて。…ウイズさん、相変わらず素晴らしいものをお持ちですね…。

つてなんて言ってる場合か。取り敢えず起こさないと。

「おーい、ウイズー」 ユサユサ

「…いた」

「ん?」

何だ?

俺はあまりにも小さい声を懸命に聞き取ろうと耳を近づけた。

「お腹…空いた…」

バナルの睨んだ通りかよ。

「ウイズ、唐揚げとか大量に買ってきてやったからとにかく食べ」

（数分後）

「ありがとうございます！アルマさん！」

私、タンパク質摂取するの久しぶりで」

「うん。取り敢えず腹が満たされて良かったね」

「はいー」

あの後ウイズは何とか意識を覚醒させると俺が持ってきた唐揚げや野菜にガブリつきついでに買っておいた飲み物でそれを喉に流し込んだ。

そういえば彼女について説明がまだだったな。

彼女はウイズ。昔は凄腕アークウイザードとして名を馳せた冒険者だったのだが、とある理由でリッチーとなり今は冒険者を引退したらしい。

現在はこの魔導具店で商売をしているのだが、此処は駆け出しの街なのに彼女は最高純度のマナタイトだのの最高級品を取り寄せたとしてもそんな物を変えるだけの金を持つてる冒険者がこの街にいるわけもなかった。

結果、彼女は貧乏なのだ。

「それにしてもお久しぶりですねアルマさん」

「ああ。確か最後に会ったのは俺がバニル捌きに魔王城に来た時か」

ウイズは此処だけの話だがこう見えて魔王軍の幹部である。

しかし魔王に結界の維持を頼まれただけのなんちゃって幹部な為、人を襲ったことはないし賞金もかけられてない。

そんな彼女とは俺はバニル経由で知り合ったこの世界で2人目の友人と言っても良い。

「そういえばアレからどうだ？ベルディア君が頭を投げってくる頻度は下がったか？」

「はい、アルマさんが教えてくれた「頭がきたらシユートと叫んで蹴飛ばしてやれ」という事を実行したらベルディアさんもまるで猫を借りてきたかのように大人しくなりました」

「それは良かった」

「ところでアルマさんはどうしてこの街に？」

「実は色々あってさつき知り合った人と来たんだ。で、折角だからこの街拠点にでもして色々と情報を集めようと思ってな」

そういうえばエタルガー達は魔王軍と組んでたんだよな？

「なあウイズ、最近魔王軍に謎のモンスター達が加わったって聞いたんだけど何か知らないか？」

「え？…あつ、ひよつとしてレイバトスさん達の事ですか？」

「…ああそいつらで合ってる」

「おいおいレイバトスって、怪獣だろうが宇宙人だろうが問答無用で復活させるヤバいやつまでいんのかよ。」

「実は少し前に魔王様のお城で会議をしていた時突然現れたんです。」

「彼等は魔王様の城の兵達を葬り去って自分たちの力を示して魔王様もそれを買って魔王軍に入る事を許可したんです。」

「それで、その時に代表だと言って城に来ていたのが「亡霊魔導士レイバトス」さんといって自分達で葬り去った兵達を直ぐに復活させたんです」

「成程。それで？来ていたのはソイツだけか？他にこう、悪魔みたいな見た目で体がゴツイ奴なんて居なかったか？エタルガーとかって言うんだけど」

「えたるがーさんですか？いえ、少なくともお城では見たことありませんね。」

「あつでも凄く怖い顔の人は居ましたよ！」

「怖い顔の奴？」

「はい！その人というより鎧見たいな方なんですけど、とても怖くて頭には角みみたいな

のが3本あって。そういえば三叉の槍も持っていました」

「!?」

おい、鎧みたいな奴な上に3本の角。更に三叉の槍って…。

俺はウイズが言っているであろう人物が描かれていた怪獣カプセルを取り出して見せる。

「なあ、ソイツってこんな見た目のやつか?」

「?…:はい、そうですよこの人ですよ!」

「…:そうか」

だとしたら、光の戦士ではないにしても苦戦は免れないだろうな。

「アルマさんはこの人の事を知ってるんですか?」

「ああ、一応知ってる。というか見た事がある」

コイツは、下手したら魔王軍以上の化け物が出てきやがったな。

いや、問題なのは鎧そのものじゃなくて中身の方だ。

「なあウイズ。お前ソイツの素顔は見たのか?素顔とまではいかななくてもどんな声だったかとか」

「ん…:ごめんなさい、名前はその人は名乗らなかつたので分からないですし声もなんだか濁った様な声で男性か女性かも分かりません」

「そうか」

「すみませんアルマさん、折角頼ってくれたのに」

「ああ嫌、ウィズが悪いわけではないんだ」

それに、その鎧野郎に至っては中身関係なく鎧そのものが規格外な強さだから中身が誰にしる油断するわけにはいかない。

しかし、強い奴と戦いたいが為にエリスから引き受けた以来だったが予想以上に面倒臭い事になりそうだ。

く  
???  
く

そこは闇に包まれた空間だった。

窓も何も無い正しく闇しか存在しない場所だった。



そんな場所に、とある3人の人物が立って向かい合っていた。

「それで？現在の進行状況はどうなっている？」

「王都の方は矢張り勇者候補が多く滞在している為レギオノイド達程度は直ぐに殲滅させられます。他にも怪獣などを送りつけては居ますが、それらも時間はかかれど殲滅されていきます」

「だが、それも私の能力で直ぐに復活させられる。何なら今直ぐにでも大群で攻めるのも簡単だ」

「やめておけ」

そんな3人が話している時、彼等の背後から濁った様な声が聞こえてきた。

彼等が振り返ると、そこには黒い影が佇んでいた。

「そうやって数で攻めてやれば確かに普通はアツサリと肩がつくだろう。」

だが、お前達は知っているはずだ。追い詰めれば追い詰める程新たな力を覚醒させ自らを倒した存在の事を」

「…ウルトラ一族ですか」

「ですが、奴らはただの人間。そこまで警戒することはないでしょう」

「ほう、そうやって人間を侮ってかつての同胞と外見だけ一緒の奴に負けたのは何処の誰だったか？」

「ツ……！」

黒い影と1人が話しているともう1人の蝙蝠の様な見た目の人型が白と青の人型を煽ってきた。

「流石は俊敏策士、俊敏に自分の首を絞めるとはww」

「ふんっ！ゼットンにばかり戦わせて自分は大した戦闘力のない人には言われたくありませんね」

「何？」

2人の異形は互いに罵り合い今にも戦闘が始まりそうな雰囲気だった。

「止めろ、我々の敵はウルトラ一族だ。奴らを仕留める為には少なくとも我々が争い悪戯に戦力を削るのは最大の悪手だ」

「レイバトスの言う通りだ、矛を納めろ」

「…チツ、命拾いしましたね」

「コチラのセリフだ」

黒い影と青い何処か不気味さを感じさせる姿の異形の言葉により、何とかこの場での戦闘は回避されたらしい。

「それにしても分かりませぬね。」

我々の目的がああウルトラン共を始末するのは良いです、ですが何故態々ダークロ

プス達を大量に放ったのですか？アレでは膨大な量の闇エネルギーで直ぐに我々のいるこの星がバレてしまいますよ」

「それが狙いだ」

「は？」

黒い影の言葉に蝙蝠の異形を含めた全員が啞然とした様子で固まっていた。

しかし黒い影はそれを気にすることなく話を進める。

「我々の居場所が光の国に伝われば、必然的に次元を超える力を持つウルトラマンゼロが来ることになるだろう」

「ウルトラマンゼロ：忌々しいサーガになる為の1人ですか」

「ああ。そしてジードも必ず来る、だって俺とイツはいずれ出会う運命なのだからな」  
「しかし解せん。何故ウルトラマンゼロが来ると言い切れる？確かウルトラ戦士の中にはもう1人次元を超える者がいた筈だが？」

「レイバトスが言っているのはウルトラマンXだろうが、奴は所詮ゼロに比べればヒヨっ子、次元を超える事に關してはゼロが熟していると光の国の戦士も考えるだろうと思っただけだ」

「成程、次元を超えられる彼を仕留めれば少なくとも光の国の奴らは対応が遅れます。そうすれば鍛え上げた我々の軍団が宇宙を手に入れるのは時間の問題ということですよ」

ね」

「そういうことだ」

3人の異形は黒い影の言葉に納得して怪しげな笑みを浮かべた。

そんな様子を黒い影は特に表情を動かすことなく3人に言葉を伝える。

「さて無駄話は終わりだ。今後の動きは変わらさばら撒いたダークロプス達が遭遇した冒険者及び勇者候補を始末。王都への攻撃はそのまま続行。

そして、アルマとか呼ばれている悪魔のウルトラ戦士の力を使う奴を見つけ次第始末するか勧誘するかは見つけた者に一任する。

では行け」

黒い影がそう命じると3人はその場から立ち去り黒い闇に姿を消していった。

3人が立ち去った闇の空間で黒い影は1人佇んでいた。

「早く来いウルトラマンゼロ、ウルトラマンジード。早く来て俺と戦え。

そしてお前達を倒した時、俺はようやくあの人に認めてもらえる。俺こそが最高傑作だと証明できる」

黒い影は、何処か怒りと子供の様に期待する感情が見え隠れしていた。

「ゼロ、幾度となく、あの人の」と渡り合った宿敵。そしてジード、あの人の子でありながらその親を手にかけてた愚か者」

影は段々と怒りを滲ませ、闇の空間がその影に塗りつぶされていった。

「お前達を倒して全宇宙を我が物にすれば、あの人達を超えて今度こそ俺の事を認めさせる事ができる！」

だが、その前に」

影は手元に何処からともなく取り出した水晶玉を持ちそこに映った物を見た。

そこにはアルマことアキラと彼の変身する悪と闇のウルトラマンの姿があった。

「アルマ、闇の戦士達の力を使う紛い物。それにあの人の力まで使うとは。」

待っている、お前は俺が直々に殺してやる」

影は力任せに水晶玉を砕き、その破片には目もくれずにその場を後にした。

## 番外編 1

「怪獣を知った小説家志望」

俺はとある日、あるえという“紅魔族随一の発育にして、やがて作家を目指す”が自己紹介のゆんゆんやめぐみんと並ぶ好成绩の女子生徒に呼び出されていた。

ちなみに彼女は何時も眼帯をしているが単なるおしゃれなので気にしてはいけない（ついでに年齢に似合わぬ巨乳です）。

「あるえ、急に呼び出してどうした？こんな校舎裏まで連れてきて、もしや小説のネタにしたいからって校舎裏での告白のシチュエーション作りに付き合えとかとも言う気が？」

「先生は本当に告白されるとは微塵も感じないのですか？」

「生憎と生徒に手を出す程性格は悪くないんでね」

それに、今ではサキユバス達からはモテモテな俺だが前世では完璧な童貞ボーイでしたから告白なんてされる機会なんてありませんでしたよ。それが何か？

「まあ告白ではないのは合ってるよ。実は先生には怪獣とやらを見せてほしいんだ」

「怪獣を？」

「前にゆんゆんが見せてもらったと聞いてね、小説のネタに使えると思ったんだ」

そういえば、この前ゆんゆんに俺が居ない間の遊び相手に小型化したエレキングを相手にさせたんだっけ。

「あーごめん、流石にこの場で出すと色々騒ぎになるから無理かな」

「どうしてもなのかい？」

「ああ、下手をしたらモンスターと同じく里の人達の経験値にされかねない」

実際、ゆんゆんにはエレキングを外に連れ出さないという条件で出したからな。

「そうか…残念だ」

「・・・」

あーマズイ、仕方がないとはいえ生徒が落ち込むのは悪魔的には悪感情が得られて得だけど教師としてはいけないな。

「そう残念がるなあるえ」

俺は懐から彼女含めた紅魔族が好きそんな人型に近いラスボス級の奴や幾つかの怪獣が描かれた怪獣カプセルを見せた。

「これはっ！」

「怪獣カプセル、俺がこれらの怪獣や宇宙人…つまり人型の異形について説明するから

それを小説のネタにしてくれ」

少なくともこうすれば発想豊かな彼女の事だこれらを元にした小説を書きあげてくれる事だろう。

「ありがとう先生！」

「どういたしまして。ただ、完成した小説は真つ先に俺に見せてくれ」

「ああ！ 勿論だ！」

こうして俺とあるえは校舎裏で怪獣カプセルを見せながら俺がそれらに描かれている怪獣や宇宙人について話、彼女はそれを聞きながら小説に使えそうなネタを書き上げていた。

こうやって生徒が自分のやりたい事に向っていてくれて教師として嬉しい限りだ。

ただ、その時の俺は知らなかった。

この軽率な行動が、未来でややこしい事態を引き起こしてしまう事を……。



「光の国の警備事情」

「よう地球の皆様！俺はウルトラマンゼロ！」

光の国のウルトラマンであるウルトラセブンの息子だ！

「最近はずつというまあ弟子？が出来てソイツに偶に稽古をつけてやって少し忙しい日々を送っていた。」

「そんなある日、俺はとある用事で警備隊本部に居るヒカリを訪ねていた。」

「ヒカリっていうのはその優秀な頭脳でこの光の国に貢献してきたスゲエ奴なんだぜ。」

「ようヒカリ」

「ゼロか。どうしたんだ？」

ヒカリは以前観測されたという闇エネルギーの探知を行っているが、今は休憩に入っているようだ。

なら丁度いい。

「実はヒカリ、前から思っていたんだが

この星って警備がガバガバ過ぎないか？」

「・・・」

「いやさ、よくよく考えてみたらよウルトラカプセルやらメダルやらの発明品何時も盗まれてるし聞いた話によるとベリアル警備も2人しかつけなかつたって聞いたからよ。」

他の星の警備も大切だけどよ、もつとこう…うちの警備も強化するとかよ」

「…ないだろ」

「ん？」

どうしたんだ？ヒカリの様子が少しおかし…

「そんな余裕！有るわけないだろおおおおおおおおおおおおッ！」

「ウエツ！」

ヒカリが何時もの落ち着いた様子からは感じられない位豹変して雄たけびの声を上げた。

その様子に、本部に居た他のウルトラマン達も驚いてこちらを見ていた。

「良いか！ゼロ！」

「は、はい！」

「私だって、私だってな！」

いつもいつも発明品を盗まれて、いい加減警備の1つや2つは強化したいさ！だが、警備を強化しようにも

毎回毎回、しょっちゅう宇宙規模の大事件が起こりまくってるんだよ！」

「・・・あつ」

そういえばベリアル関連の事件だけじゃなくて、ゲネガールとか光の国だけじゃなくて他の宇宙がピンチな事が多かったな。

フューチャー・アースでも何気にやばかったし。

「そうやって頻繁に大事件ばかり起きるわベリアルの所為で光の国はアチコチ壊されてそちらの修理に人員を割かなければいけない！」

そんな状態で、こちらの警備だけを強化する余裕など有るわけないだろ！

しかも他の宇宙でも事件が頻繁に起きるから、ウルトラ兄弟や他のウルトラ戦士などの警備隊員を動員しなければならんから毎回毎回人手不足なんだよ！」

「は、はい・・・ごめんささい・・・」

「良いか！私は今回は謎の闇エネルギーの観測で忙しい！」

お前も暇なら、メビウス達とでも特訓している良いな分かったな分かったと言え！」

「わ、分かりました…」

「ふんっ！」

怖い…今日のヒカリ怖い…。

ヒカリは怒鳴り終わるとそのまま作業に戻った。

こうして俺は警備隊本部を後にして、訓練場でメビウス達と訓練を行った。

その時に、メビウスやタイガ、そしてゼットの慰めの言葉が妙にカラータイマーに染みた…。

## くジャグジャグの受難く

俺は、恐らく長い事生きてきて最大級のピンチにぶち当たっていた。

「ようこそアルカンレティアへ！」

「この地では何を？」

「入信ですか？ 観光ですか？ 改宗ですか？ 洗礼ですか？」

「今ならアクシズ教の良さを広めるだけでお金が貰える仕事があります！」

アルカンレティアとかいう温泉が有名という街でとりあえず疲れを癒そうと立ち寄っていたのだが、街に入るなりいきなりこんな言葉を投げかけられ続けていた。

これは後になって知った事だが、アクシズ教徒というのは迷惑集団として有名らしく道行く奴らを捕まえてはしつこく勧誘を迫っているらしい。

オマケに自分達の邪魔になりそうな奴らにはとことん嫌がらせをし自分達こそが絶対だと信じて疑わないクソヤバイ奴らだった。

俺は以前、自分達の力の大きさがどれだけ危ういかを知らしめる為に行動した事が

あったが、これを見ると奴らの危うさが可愛く見えてくるものだった。

「そのイケメンなお兄さん！アクシズ教徒になって私と結婚すれば幸せ間違いなしよ！」

時には道中で出会った鬱陶しい女が結婚詐欺紛いな事をしてきたり。

「あれー？久しぶりー！覚えてる？私私！小学校の同期級生だったでしょう？？」

私アクシズ教徒になって大分変わったから分かんないかもねー」

時には存在するはずない学生の記憶を押し付けて入信書にサインさせようとするヤバい女。

「そこのお兄さんこの洗剤持って行って！これアクア様の加護何ついているからこれで洗濯物を洗えば幸運が訪れる事間違いなしよ！

しかもこれ、NO??ME??RU??NO」

時には奇妙なご婦人が飲める洗剤だの石鹼だのを売りつけようとしてきた。

とかアクアとかこの教団が祀っているという神は。

名前は覚えたからな……………。

「お待たせしましたコーヒーマシンのブラックです。こちらはサービスの入信書になりまー

す」

俺は疲労が溜まりに溜まり途中にあつた喫茶店らしき場所でコーヒーでも飲んで落ち着こうと思つた。

何やら余計なものまで出されたがそれは無視だ。

「こんなイカレタ街だつたとはな。これならまだセレブロの方が遥かにマシだぞ…」

とにかくコーヒー飲んでこんな街からはさつきとオサラバするか。

俺はコーヒーの入つたカップを手に取り中身を一口飲んだ。

「ほう、味は中々だな…ん？」

俺はコーヒーを啜つた際に少しだけ水位の下がつたカップを見て何やら見えた。

気になり残りを一気に飲み干すと

「ッ!?」

そこには「悪魔滅ぶべし魔王捌くべし」などのアクシズ教徒の教義だと記憶している文字が所狭しと書いてあつた。

しかもコーヒーでカモフラージュしてあるから飲み終わるまで全容が分からないタチの悪い詐欺の様な手口だつた。

「…」

つまり、俺はこれをさつきまで平気な顔をして飲んでたつて事か。





## 闇の冒険者登録

俺はこの世界に来て随分と奇妙な目に遭ってきた。

空飛ぶ野菜はいるわ、アクシズ教徒とかいう人の話は聞かないイカレタ連中はいるわと散々だった。

そんなある日俺はアルマとかいう見たところ闇のウルトラマンの力を使う奴と色々あってアクセルという街に来ていた。

奴は既に冒険者登録を済ませておりこの街にいる知り合いと会うらしいので一旦別れた。

幸い街にいる人間達にギルドとやらの場所は確認してあったので俺は迷う事なくそこについた。

見た目はとある星にあった西洋の雰囲気建物の扉を俺は開いた。

「いらっしやーい！ お食事は空いているお席にどうぞー！ お仕事の案内は奥のカウンターへー！」

そこに入るとやたらと元気のいいウェイトレスが俺にそう言うてきた。

周りを見渡すと先程のウェイトレスと同じ制服の女が数人おり、テーブルにはいかに

もという格好のゴロツキや冒険者といった服装の奴らがいた。

「騒がしいな」

「こんだけ騒がしいと、ストレイジでよく騒いでいた奴らを思い出す。

「そういうバコさんのマグロ、食い損ねたな結局…。」

「と俺とした事が。さっさと登録とやらを済ませるか」

「俺はギルドにあつたカウンターへと足を運んだ。

「そしてカウンターの偶々目についた金髪に女のところに近づいた。

「あのよろしいでしょうか？」

「はい、どうかありませんか？」

「この街で冒険者登録とやらをしに来たのですが。大丈夫でしょうか？」

「は、はい…って冒険者登録とやら？」

「おっとそういうえば冒険者とやらはこの世界では当たり前前の職業の一つだったな。

「すみません、実は私少しばかり世間に疎いところがありまして。冒険者というものが

「いまいち理解出来ていなくてですね」

「ああ成程、そういうご事情でしたか。」

「ですが、冒険者で良いのですか？失礼ですが貴方のその格好は…」

「これなら気にしないでください、必要な服はこの後揃える予定ですから」

ここに来る前にアルマに服を買うだけの金は調達したから服一式揃えるのには困らんだらう。

「そうですか。それでは冒険者について簡単にですが説明いたしますね。

まず、冒険者とは町の外に生息するモンスター。人に害を与えるものの討伐を請け負う人のことです。とはいえ、基本はなんでも屋みたいなものです。冒険者とはそれらの仕事を生業とにしている人たちの総称。そして、冒険者には各職業というものがござい  
ます」

成程な、冒険者と一言に言ってもそれぞれだ役職が違うのか。

俺がそんな考察をしていると受付の女は地球で見たことがある確か「免許証」とやらと同じ大きさ位のカードを見せてきて説明を続けた。

「こちらに、レベルという項目がありますね？御存知の通り、この世のあらゆるモノは、魂を体のうちに秘めています。どのような存在も、生き物を食べたり、もしくは殺したり。他の生命活動に止めを指すことで、その存在の魂の記憶の一部を吸収できます。通称、経験値、と呼ばれるものですね。それらは普通で見ることにはできません。しかし……」  
女はそこで一旦言葉を区切るとカードのとある項目を指差した。

「このカードを持っていると、冒険者が吸収した経験値が表示されます。それに応じて、レベルというものが同じく表示されます。これが冒険者の強さの目安になり、どれだけ

の討伐を行ったかもここに記録されます。経験値をためていくと、あらゆるモノはある日、突然急に成長します。俗に、レベルアップだの壁を超えるだのと呼ばれています。まあ要約すると、このレベルが上がると新スキルを覚えるためのポイントなど、様々な特典が与えられるので、是非頑張つてレベル上げをしてくださいな」

要するにモンスターとやらを倒せば倒すほどに力が増すという事か。  
わかりやすくして良い。

俺は取り敢えずここに辿り着く前にアルマに渡された金の中から登録に必要なだといふ2000エリスを渡して手続きに入った。

「まずはこちらの書類に身長に体重、年齢、身体的特徴の記入をお願いします」  
女が書類を渡してきたので言われた通りの項目にペンを走らせる。

名前は：地球で使っていた名前を使うか。

悪いがもう一度使わせてもらうぜ。ヘビクラ ショウタ。身長や年齢は…。

「はい、結構です。ではこちらの水晶に触れてください。それであなた方のステータスがこのカードに記載されてわかりますので、その数値に応じてなりたい職業を選んでくださいな。経験値を積むことにより、選んだ職業によって様々な専用スキルを習得できるようにありますので、そのあたりも踏まえて職業を選んでください」

そう言われ俺はカードが置かれた水晶に手を翳す。

すると水晶は光だし、レーザーの様に細い光によってカードに次々と文字が刻み込まれる。

今まで数々の宇宙を渡り歩いてきたが、この世界では魔法だの何だのが発展して技術が発展していた星とは違う感じがして少し面白みがあるな。

そしてカードに俺の情報の記載が終わると女がそのカードを確認した。

「はいありがとうございます、ヘビクラシヨウタさんですね。」

ええーッ!? 何ですかこのステータスは!

魔力が平均より少し高くて幸運値が少し低い以外は筋力や生命力、知力が平均以上ですよ。特に筋力や生命力は群を抜いて高いですよ!

ってあれ?」

「ん? どうかしましたか?」

何か不備でもあったのか?

「あ、あの一応確認なのですが、貴方本当に今日初めて冒険者になるんですか? もしカードを無くされたのであれば別の手続きで再発行出来ませうけど」

「? いえ、私は確かに今日冒険者になりますけどどうしてでしょうか」

「はい実は、冒険者カードにはその人が今までにどの様なモンスターを倒されたのかが

記載されるのですが貴方のたった今作成したカードの討伐欄に」

「そう言い女は俺にカードのとある欄を見せてきた。

確かにそこには「ダークロプス」や「レジオノイド」など俺がこの世界に来て倒しまくった奴らが記載されていた。

しかし俺はこんなに奴らを狩っていたのか。

「貴方がこんなにモンスターを討伐しているのも驚きですがここに記載されているダークロプスなどのモンスターは、最近になって現れた勇者候補の冒険者を葬ってきたモンスター達です。

そんな奴らの名前がこんなに載ってるなんて、貴方は何者ですか!?!」

女が大声を上げながらそう言うから周りの冒険者達が俺の方を見てくる。

目立つのは避けたかったがここはさっさと話を終わらせて立ち去るのが最善か。

「ああ実はこの街に来る前にそこに書かれているモンスターに襲われましてね、腕には自信があつたので何とか倒せました。

レベルが高いのも恐らくその所為でしょう」

まあ俺にとってはウルトラ戦士達を相手にするよりは楽な戦いだつたがな。

「そうだつたんですね!まさか貴方の様な方がいらつしやるとは!我々ギルド一同、貴方の今後の活躍にご期待しています!」

女はそういうところらに敬礼をしてきていたの間にそこにいたのか他のギルド職員らしき者も同じく敬礼をしてきた。

周りからは俺のステータスとやらが相当高かったのかまだ何かをやった訳でもないのに期待や賞賛の声が掛かってきた。

「ありがとうございます。それでは私はこれで美しいお嬢さん♪」

「あっ」

俺は女に礼を告げてギルドを後にする。

女性を相手にするには今みたいに言葉を投げ掛ければ大体の話は肩がついたが今回も上手くいったようだ。

「さてと、流石にこの格好じゃ目立つし服買うか」



「光の国」

俺は光の国の訓練場でメビウス達と訓練の日々を送っていると突然ヒカリからの招集がかかった。

呼び出された中には何故かメビウスや80の姿もあった。

「3人ともよく来てくれた」

「おう」

「けどヒカリ、急に僕達を呼び出すなんて何かあったのかい？」

「ゼロ1人でないとすると、この前言っていた謎の闇のエネルギー関係では無いらしいが」

「80の言う通り例の闇のエネルギー関連だとすると呼び出すのは俺だけで良いはずだ。」

「ああ、実は光の国で管理していたとある物を侵入してきたバロッサ星人に盗まれてしまったのだ」

「えっ!?？」

「何?!!?」

またかよ!!?なんて言葉は口には出さない。

出したら最後、ヒカリがこの前みたいな暴走をしてしまうのは目に見えているからだ。

「このメンバーを呼んだのは一度そのアイテムをその身に受けたことのある者達だからと言う理由が大きい」

「その身にうけた?」

ん? ちょっと待て、ヒカリの今の言葉そしてこの呼び出されたメンバー。

…なんだ、何か嫌な予感がする。

「ああ、そのアイテムの名は

キヤラチエンステツキだ」

「!?」

キャラチエン…ステツキだと…。

「おいヒカリ冗談だろ? あんな恐ろしい物がまた盗まれたつてのかわ?」

確か前は怪盗ヒマナに盗まれたんだつたな。

そういえばアイツ仲間と元気にしてつかないか…って今はそれを気にしてる場合じゃねえ!

「残念ながらそうだ。」

キャラチエンステツキは一見すると大した事ないかも知れないが、アレの恐ろしさは実際に喰らった3人が理解していると思う」

「…ああ、アレは恐ろしい体験だった」

「あの事件の後、しばらくユリアンに慰められたのが何気に効いたな…」

「俺なんてウルティメイトフォースの奴らにしばらくそれで揶揄われたんだよ。地獄みたいなアイテムだよアレ」

正直あんなのは二度と見たくないと思つた程だ。

やつてくれたなバロツサ星人。

「バロツサ星人はどうやらZを狙つてたみたいでな、彼にはそのバロツサ星人を追つてもらつてゐる。だがあのステツキの恐ろしさを恐らくZは3人ほど理解してゐない」と

思う。

だからいざステッキの効力にかかっても対処できる様に3人にこれを頼みたい。ゼ口には悪いが早々に戦線に復帰してもらいたい」

成程前にZからバロツサ星人と何度も戦った話は聞いたことはあるが今回も恐らくそれだろう。

しかし確かにあの暑苦しい奴やハルキ、そして無いとは思うがベリアロクとか言う奴らがステッキでキャラが豹変するところなんて見たく無いぞ…。

「頼めるか、3人とも」

ヒカリが深刻そうな顔で俺たちを見ている。

恐らく例えアレの恐ろしさを知っていると云っても一度被害にあつた俺たちを駆り出すのは気がひけるのだろう。

だが。

「おうよ、やってやるぜ」

「あのステッキをこのまま野放しにはしておかないからね」

「安心してれヒカリ、我々が必ずあのステッキを回収してみせる」

「ッ！感謝する、3人とも」

よしそうと決まれば。

「早速乙の奴の元に向かおうぜ2人とも！」

「ああ！」

そして俺たちは警備隊本部から助走をつけて飛行を開始した。

「セヤツ！」

「セエアツ！」

「ショアツ！」

待つてろよ乙、ハルキ、ベリアロク。

お前らをあんな黒歴史に残る様な事にはさせねえからな！

紅の“絆”  
（前編）

「ドオワアアアアアアッ！」

アルマとジャグラーのいる星の上で一つのワールホールが開かれそこから絶叫を上げながらウルトラマンゼロは出てきた。

「つと、はあ……何とか出て来れた。」

ちくしようバロツサ星人の野郎、今度はブルトンを逃走手段として使うとはな

そう、実はウルトラマンゼロとウルトラマンメビウスそしてウルトラマン80はあの後無事ウルトラマンZと戦っているバロツサ星人を見つけてステッキを取り返そうと戦闘を行っていたのだ。

「数分前」

「セヤアツ！」

「バロツ！」

とある小惑星にまでバロツサ星人を追い詰め4人のウルトラマンは戦闘を行なっていた。

「シヨワツ！」

80はバロツサ星人に向けてサクシウム光線を放つが間一髪のところまで避けられてしまう。

「セエアツ！」

「バロツ!!？」

避けた先にメビウスがおり彼のメビウスブレスから伸びる光の剣、メビュームブレードでバロツサ星人に斬りかかる。

だがそれも紙一重で避けられバロツサ星人は手に持っていた光の国から盗み出したキャラチエンステツキでそれを抑える。

「キャラチエンステツキを返せ！バロツサ星人！」

「バクバロバロツサ〜！」

『返せと言われて返す奴がいるか』だと」

「はっ！上等だ、ならこっちも手加減は無しだ！」

ゼロ達は各々の戦法でバロツサ星人へと攻撃を仕掛ける。

さて、恐らく皆様は覚えているかもしれませんが。このバロツサ星人を追っている筈のウルトラマンZですが現在は。

『あ、あのZさん。そろそろ戦いに参戦しないと』

「いつまでメソメソしてる気だ」

「グスツ…だつて、だつて…」

Zが最強の姿「デルタライズクロー」の姿で片手に「幻界魔剣ベリアロク」と呼ばれるウルトラマンベリアル顔の顔が付いた剣を持って蹲つて泣いていた。

お察しの通りZはバロツサ星人によって「ネガティブな泣き虫」になってしまったのだ。

これがキャラチエンステッキの恐るべき能力である。

ステッキを振って「〜の性格になれ」みたいな一見ふざけている言葉を言つてステッキを振れば言った通りのキャラに文字通りキャラチエンしてしまうのだ。



とある全宇宙を巻き込む事件でゼロ、メビウス、80はその被害に合っている。

「くっ、俺たちが着いた頃にはこの有様か…すまねえZ!」

「早くステッキを取り返して彼を元に戻しましょう!」

「ハルキくん!ベリアロク!済まないが我々が戦っている間Zを頼んだぞ!」

Zが自身の最強の姿で泣いていたとしてもそれを嘲笑う者はこの場には1人も居なかった。

何故ならゼロ達3人はそのステッキの恐ろしさを身をもって体験しており、ハルキは突然様子が急変したZを心配してベリアロクは単純に面倒くさいからである。

「バロバロツサ!」

「今だ、エメリウムスラッシュユ!」

「バロツ!?!」

バロツサ星人がステッキを掲げて発動させようとしたタイミングでゼロは額のビームランプから細いエメラルド色の光線をバロツサ星人の腕に放ち命中させた。

そしてそれによりバロツサ星人の手から離れて宙に投げ出されたステッキはメビウスがキャッチして回収した。

「へっ、生憎とそれを使うのには一々ステッキを掲げる必要があるのは知ってたんだよ!」  
「追い詰めたぞ!バロツサ星人!」

「Zもう直ぐで終わるぞ！あともう少しの辛抱だ！」

「グスツ、ありがとうございます！ごさいます師匠達い〜」

『良かったですねZさん！』

「さつさとこんな茶番終わらせてこの泣き虫になりやがったコイツ元に戻せ」

もう色々滅茶苦茶である。

しかしゼロの働きによりバロツサ星人は最早追い詰められたも当然なのは確かである。

だがそれでもバロツサ星人は諦めてはいないようだ。

「バ〜ロツサ！」

「あん？『ここは一先ず撤退するしかない』だと？…ってまてお前それは！」

バロツサ星人がどこからともなく取り出した赤い石と青い石を取り出したのだ。

それはゼロにとつては二度と目にしたくない代物だった。

「80！メビウス！Z達守ってくれ早く！」

「!?!」

ゼロの警告の言葉に2人は驚くがそこは流石は歴戦の戦士、2人は未だに泣いているZの傍によっていつでも防御が行える体制を取る。

そしてその間にバロツサ星人は2つの石を合わせて一体の怪獣を出現させて放り投

げた。

「やっぱりブルトンかよ！」

ゼロは突然現れた嫌な思い出に驚愕したが何とかブルトンにより発生された吸引に吸い込まれないように何とか踏みとどまっている。

しかし……。

「バ～ロバロバロツサ～！」

「あつ！テメエ逃がすか！」

「ゼロ!？」

バロツサ星人がブルトンによって発生したワームホールに自ら飛び込みゼロは反射的にそれを追いかける為にワームホールに飛び込んだ。

メビウス達はバリアを張って持ちこたえたがそうやって踏ん張っていた為ゼロを引き留める事が出来なかった。

「あつ」

ここでゼロは突然出て来たトラウマとも呼ぶべき怪獣の出現とキャラチエンステッキによるトラウマが合わさって失っていた冷静を瞬時に取り戻しとある一つの言葉が脳裏を過った。

“これ、俺追いかける必要なかったんじゃね？”

がもはやワームホールによって吸い込まれた体を戻す事など如何にゼロといえど無理な話であった。

「やらかしたーーーーーッッ！」

「ゼロ（さん）ーッ！」

こうしてゼロはバロツサ星人と一緒にブルトンへと飲み込まれていったのであった。

そして現在の状況に戻る。

「ていうか最近ブルトン出すぎだろ。何なの？バロツサ星人の間では最近ブルトンの安売りでもしてんのか？」

ゼロは飛ばされた別の宇宙でひとり愚痴っていた。

「しかし飛ばされている途中でバロツサ星人は見失っちゃまうし、よくわかんない宇宙には飛ばされるしどうなってんだ

・・・ッ!？」

ゼロは腕についているブレスレットの力で元の宇宙に戻ろうとした時、突如自分の下にある星から物凄い闇エネルギーを感じた。

それはその星のアチコチで観測できるほどのものだった。

「何だこのとてつもない闇の気配はッ…それに」

ゼロはそんな闇の中からひと際強力な力を放つエネルギーを感知した。「このエネルギーの感じは、ベリアル!?けど、奴とは何か違う。」

ヒカリが言っていた反応の出どころはこの星なのか?・・・えッ?

そんな考察をしていると頭上からとんでもない力の反応が近づいて来てゼロは上を見上げる。

『いやっほーーーーう!』

『いーーーーやあーーーー!』

「えッ!?ちよちよまッ!」

突如をして頭上から降って来た光から2人の男女の声が聞こえて来たかと思うとゼロは特に避ける事も抵抗することも出来ずにその光に飲み込まれて、光はそのままその星へと落ちていった。

く更にゼロが光に飲まれる少し前く

どうも皆さん、私ゆんゆんです。

アルマさんが里を出てかれこれ1年近くの月日が経ちました。

私はアレからとある事情で中級魔法を覚えてクラスメイトのめぐみんはずつと夢

だった爆裂魔法を覚えて紅魔の里の学校を卒業して、今はアクセルという街にまで馬車で向かっているんです。

此処に来るまでに一論な事がありました・・・。

例えば爆裂魔法を覚えたためぐみんがよく里の近くで爆裂魔法を撃つてそれを知らんふりしたり、この前立ち寄ったアルカンレティアではアクシズ教の人達のお陰で大変な目に合ったりしたんです。

そんななんやかんやがあつて私とめぐみんは一緒の馬車そのアクセルの街に向かっているんです。

道中でメガバットなどのモンスターが何故か連続で襲つてきました。

けどそれでも順調に馬車は進んで色々大変でしたけど何とか頑張つてこられました。けど・・・。

「さあ！観念してさっさとウォルバク様を渡しな！」

目の前に女の悪魔が居て私たちを襲撃してきたんです。

とかああの悪魔、前に紅魔の里やアルカンレティアでちよむすけちゃんを連れ去ろうとしたのと同じ悪魔です！確かアーネスとかいう上位悪魔！

あ、因みにちよむすけというのは後からめぐみんが付けた新しい名前です。



「この子はウチのちよむすけです。その何とかというダサイ名前ではないと何度言ったら分かるのですか」

「だからそのちよむすけとかっていう名前じゃないのよ！

というか、金はもう既に払ってるんだ。悪魔の契約は絶対、こつちがちゃんと渡す物は渡したんだから筋は通してもらわないとね」

「ぎくっ…」

そういえば、めぐみんって紅魔の里であの悪魔からお金を貰っていたわね。

アルマさんが以前悪魔と契約する時は気を付けろって言われてたけど、今となつてはアルマさんが元人間とはいえ悪魔の中でも優しい方だったから良かったのよね。

「そそそ、その様な脅しには屈しませんよ！悪魔との契約は無理矢理踏み倒して無しにしても罰は当たらないとアクシズ教徒が教えてくれましたから！」

「めぐみん、アクシズ教徒の人達ならそうかも知れないけど幾ら相手が悪魔と言ってもあんまりだと思うの！ほら私も一緒に払ってあげるから此処はお金を返して、お引き取り願うって事で」

というかアクシズ教徒が言っていたって、めぐみんが恐ろしい程にあの人達に毒されちゃつてる件についてと、ととと友達としては色々複雑なんだけど!?

「これだから人間つてのは信用出来ないのさ！ 私たち悪魔の魂と引き換えに願いを叶えるサービス」が廃止になったのはお前らが願いを叶えて貰った後に何かと屁理屈を付けて代価の支払いに応じなかったり、無茶な願いが多かったのが原因なのさ！ お前ら人間はもうちよつと誠実に生きろ！」

どうしてだろう彼女の言葉に紅魔の里でのめぐみんやアルカンレティアのアクシズ教徒の人達が思い浮かぶ。

そういえばアルマさんが前に「良いか、ゆんゆんは絶対にアクシズ教徒みたいな不誠実な奴らみたいにだけはなつちやダメだよ？ これはフリじゃないからね」って言ってますよ。

「何にせよ、今更金を返してもらったところでウォルバク様は返してもらおうけどね！」

さあこの中で最大戦力であるその紅魔族のお嬢ちゃん！ 既にアンタが魔力を使い果たしてる事は分かってるんだよ！

つまり、お前らの中で私に対抗できる奴は居ないって事さ。他の冒険者も動くんじゃないよ！

アタシならこの場に居る冒険者を皆殺しにすることも出来るんだからね！ 無駄な時間を使わず、大人しくウォルバク様を引き渡しな！」

どうやら今まで襲ってきたモンスター達はアーネスが追い焚きをして私たちにけし

かけたモンスターのようです。

けどアーネスは少し見積もりを誤ったみたいです。

確かに私だけの魔力だった確かに魔力が底をつきかけていたでしょう。けどアルマさんから貰ったブレスレットのお陰かあの人の魔力を共有して使えるみたいなので中級魔法だったらまだ連発するだけの余裕はあります。

けどアルマさんの事もあるので無限に魔力を貰う訳にもいけないので油断は出来ませんけど。

そんな時、めぐみんが何か不服とでも言わんばかりの表情でアーネスに向かって言葉を放った。

「ちよつと待ってもらおうか？ 此処に紅魔族随一の魔法の使い手である私がまだ魔力が有り余っているのですが？」

「見栄を張るな未熟な紅魔族」

．．．。

あれ？めぐみんの周りの空気だけ何だか異様に重たくなっただけですけど。

「おい、未熟な紅魔族とは誰のことだか聞こうじゃないか」

「あんただよ。魔法が使えない『アークウイザード』なんだろ？アタシだって馬鹿じやないからね、ここに至るまでにアンタ達をモンスターに襲わせてずっとアンタ達を観察していたのさ」

アーネスの言葉にどうやらめぐみんも彼女が今まで私たちにモンスターを襲わせていた事に気が付いたようだ。

そんな事をしている間に突然アーネスの背後から現れた同じ行先の馬車の1つに乗っていた盗賊職の人が切りかかっていた。

恐らく盗賊職が使う「潜伏」スキルでアーネスの背後に回ったんだろう。

「鬱陶しいー」

アーネスはそんな彼に向って乱暴に腕を振り下ろした。

するとアーネスに殴られた盗賊職の人はそのまま殴り飛ばされてその先の地面に倒れた。彼の腕は有らぬ方向に曲がっていてその痛みやアーネスの打撃の所為か彼は意識を失っていました。

その様子に周りの冒険者の人達は恐怖で顔を引きつらせます。

無理ありません、こんな以上自体に落ち着いていられる人なんて早々居ませんか。

「この…っ！ おい、お前ら！ 取り囲め！」

それでも何とか立ち直った戦士の人が他の冒険者の人達を振るいだたせて一斉にアーネスへと向かっていきました。

私も中級魔法を撃つてそれに参戦します。

けど、そんな奮闘虚しく私たちはアーネスには勝てませんでした。

「な、なんだコイツは、デタラメに強いぞ……！ 何でこんなに強い大物の悪魔が、駆け出しの街近くにいるんだよっ！」

上位悪魔のアーネスにとって私たちみたいな低レベルの冒険者なんて相手にならなかった。

アーネスは魔法を使うことなく幾らレベルが低いといっても20人近くはいた冒険者の人達を蹂躪して殆どの人達が戦闘不能となり中には今すぐ措置を施さないと危ない人もいました。

馬車も走らせることはできず、乗客たちは怯えながらこの一方的に蹂躪される戦況を見ていることしかできない。

戦える者は、もう二人だけ…。

「アーネス、勝負です！ この私と勝負です！ 我こそは、天才と呼ばれし者にして、紅魔族随一の魔法の使い手！ あなたの目的はこのちよむすけでしょう！ 私に勝った暁には、もれなくこの毛玉があなたの物に……いい加減話を聞いてください！」

めぐみんがお目当てのちよむすけをエサにするも、アーネスは全く目を向けない。多分めぐみんの要求なんてこの場に居る全員を倒してしまえばどうとでもなると考えたのでしよう。

「煩いよ…この口だけ一人前な紅魔族が。ウォルバク様を盾にしておいて、勝負しろだつて？ ハッ、笑わせてくれる。お前の相手は最後だよ。」

でも、ちやあんと、全員仕留めたらお前も後で同じところへ送つてやる」

「ツ！めぐみんは馬車の人達を出来るだけ連れて逃げて！『ライトニング』！」

「あーもう鬱陶しいねえ。『ライトニング』！」

「グッ…うあつ…」

私はアーネスに向かって魔法を放ちますが、全く同じ魔法でも向こうの方が威力が上の一撃が衝突して私の放った魔法は撃ち負けて直撃は避けましたけど私は着弾した魔法によって吹き飛ばされてしまいます。

「キヤアアアアアッ…！」

「上位悪魔のアタシとアンタとじゃ魔法の威力が違うのよ……そうだ」

「くあつ……」

蓄積した疲労と今のダメージで動けない私を見て何を思ったのかアーネスは私の首を掴んでめぐみんに見せつける様に持ち上げる。

「その口だけ一貯前の紅魔族、アンタの言う取引応じてあげるよ。この小娘とウォルバク様をね、別にアンタが要求に応じるかは別だけどさ」

「グツ……」

「アンタが要求に応じなければ小娘やアンタもろともこの場に居る全員を始末してからウォバルク様を連れて帰る。どう返事するのが賢いのか、分かるわね？」

「ツ……」

不味い、アーネスは確実にめぐみんがちよむすけちゃんを殺せない事を察している。

めぐみんは散々あの子を囮にしたりして滅茶苦茶な事してきたけど本気であの子を見捨てようとはしなかった……多分！

「あー早くしなさいよ？私気が短いから本当にこの子殺すわよ」

アーネスはそういうと手に威力を抑えたのであろう電撃を腕を伝って私に浴びせて来た。

「グアアアアアアッ！」

「ゆんゆん！」

「ほら、早くしな！」

「わ、分かりました分かりましたから！ちよむす…ウォルバク様を渡しますから！だからゆんゆん達に酷い事しないでください！」

めぐみんは私の惨状を見てこれ以上は流石に不味いと判断してちよむすちゃんをアーネスに向かつてさしだしていました。

「だ…む…む…」

私は電撃によって麻痺し上手くしたが回らなかった。

魔法を撃とうにもこれじゃあ詠唱もまともに来ない上にアーネスによって妨害されるだろう。

「最初からそうしておけば良いのよ。けど、アンタには紅魔の里やアルカンレティアで散々コケにされた借りがああるからね。少しばかり痛い目に合ってもらおうよ」

「ツ…はい。けど、ゆんゆん達は…」

「心配しなくても悪魔は契約は守るわ、アンタもすこし痛い目に合ってもらった後は開放してあげる」

アーネスはめぐみんからちよむすちゃんを受け取ろうと私を持ち上げたままめぐ



みんなに近づく。

アルマさんが話していたから悪魔が契約を守るのは本当の事なんだろう。

けど、ちよむすけちゃんを渡したとしてめぐみんながアーネスにこれから酷い目に合わされるのは間違いない。

そんな事絶対にさせない！

けど、私には今この状況を打破出来る方法が・・・いや有った。

「・・・ッ」

私の腕に巻かれているアルマさんから貰ったブレスレットだ。

これにはアルマさんから魔力を供給してもらおう事以外にも少し魔力を流してメツセージを込めればアルマさんにそれが伝わる様になっている。

今からそれを行えば少なくともめぐみんながアーネスにやられる前にアルマさんが来てくれるはず…。

『君の為にと思つて渡したブレスレットだが、よく考えてみると君はいずれはアークウィザードとして優秀な魔法使いになり紅魔族の族長の後を継ぐ将来がある。』

それなのに俺が過保護になり過ぎてそんな成長の機会を奪う訳にはいかないからな』

「・・・ッ！」

そうだ、アルマさんは私が時期族長という立場から成長の機会を奪わない為にこれの使用を制限したんだ。

勿論私が呼べば来てくれるんだろうけど、それでもあの人も多くのモンスター達と戦っているはず・・・だったら、私が直ぐにあの人に頼る訳にはいかない！

けど…。

「さーて、どうしてくれようかね」

「…ッ」

めぐみんはちょむすけちゃんを受け取ろうと手を伸ばすアーネスを目の前に小さく肩を震わせていた。

本当は凄く怖いはずなのに、私たちの為にそれを我慢して…。

そして、私は目にした。

めぐみんが目尻に微かながら涙を浮かべていた事に。



そして私たちの居た場所に、光が降り立った。

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

「ギャアアアアアッ！」

「えッ!？」

光が降り立った時、その余りにも眩い光に悪魔であるアーネスは悲鳴を上げ煙を上げながらその場から退いた。

「・・・」

「ゆ、ゆんゆん?」

「ぐう…何だ、この光は!」

アーネスから解放されたゆんゆんはめぐみんの前に背中を向けながらこちらを庇う様に立っている。(その時ちよむすけは何故かグロッキーだったが何とか無事なようだ)

「・・・」

「貴様か!?!今の光は!」

アーネスは「瞳の色が金色」になっていたゆんゆんを睨みつけてそう叫んだ。

「ゆんゆん?」

「・・・」

めぐみんの呼びかけにゆんゆんは頭を少し横に向けて目線だけをめぐみんに向けた。

“ 済まないが、彼女の体を少し借りる ”

「え？」

目の前のゆんゆんから全く別の存在の聲が頭に響いて来てめぐみんは困惑するが目の前のゆんゆんの体を借りた” 何か” はそのままアーネスに向き直った。

「中級魔法しか使えない紅魔族じゃなかったのか？ 何なんだお前は！」

「・・・」

アーネスの問いかけにゆんゆんは答える事は無く、その変わりとも言わんばかりにゆんゆんは腰に差していた短剣が変化した更に小型の短剣型のアイテム” エボルトラスト” を一気に引き抜いた。

そして引き抜いたエボルトラストから光が溢れ出し周囲は光に包まれた。

「うっ…何が…」

「くっ…!?!」

めぐみんとアーネスは余りの眩さに目を覆った。

そして光が収まって視界が回復してきた2人の視界に映りこんだのは。

「・・・」

「ゆんゆん…?」

「貴様、その姿は奴と同じ…」

銀の体に黒のライン、両腕には鋭い刃の様な形状の“アームドネクサス”が備えられていた。

そして胸のカラータイマーに当たる位置にはY字型の“エナジーコア”があった。

それは人から人へと受け継がれながらその輝きを増していった神秘の光の巨人。

ネクサス



## 紅の 絆 ～後編～

「で？その「ウイズ魔道具店」という店を拠点にするど？」

「はい、どうやらウイズも構わないそうなので」

俺とジャグラーさんはあの後合流してジャグラーさんは元の服からいかにもファンタジー感溢れる黒い服に着替えていた。

そしてそれぞれ人前ではアキラとヘビクラと呼ぶという事で話が纏まった後、近くにあったカフェで今後の事を話していた。

「一応彼女の店、魔道具店らしいので偶に顔を出して接客してくれれば」

「おい、何で俺がそんな事をしなくちやなんねえ？」

「いやジャグ：ヘビクラさん顔が良いからそこらの女性あたりならコロっといけそうじゃないですか」

「ふざけんなよっ！」

とまあ、前の世界ではウルトラ会で知らない者はいないと言っても過言ではない存在と会話できるという確実に転生前では出来なかつた経験をしている俺である。

(因みに何故自分がジャグラーを知っているというかという理由はジャグラーは自分が元居た世界ではとても有名だからという説明で一応は納得してもらった)

「まあでもヘビクラさんのにも実質タダの拠点が手に入ったんだから良かったじゃないですか。

それに、聞いたところによるとストレイジっていう組織で隊長を務めていたらしいですし、職場的には違いますけど人と接するという点ではほぼ大差ないのでは？」

「確かに拠点が手に入るのは喜ばしい、だが言っておくぞ。ストレイジは例外としての仕事は参加するのは俺の気分次第だからな？」

「交渉成立です」

よし、これで少なくとも後は品揃えをどうにかすれば客足は前よりはマシになるだろう。

それに、ここで俺が何もしなかったらバニルの奴に「貴様を頼った吾輩が間違いで会ったわ！喰らえ！お仕置きの『バニル式殺人光線』！」とか言ってるウルトラセブンみたいな構えて目から光線ブツパされるかもしれないからな。

「さて、それじゃあコーヒーをさっさと飲んでウイズの店に改めて挨拶にでも……！」

「!?」

行こう、と言いかけたところで俺は途轍もないプレッシャーを街の外に感じた。どうやらジャグラーさんもそれに気づいた様で街の外に目を向けた。

周りの人達は気付いていないが俺たちには分かる。

それは俺たち悪魔にとっては天敵といっても良い恐ろしい光の気配がしていた。

しかもこの気配、今の俺にとっては馴染みがある。

「へビクラさん…今の恐ろしい光の気配は…」

「ああ、ウルトラマンの気配だな。だが、この質からしてただもんじゃねえ。しかもこの力、どこかで見た覚えがある」

「ええ、俺も似たような力持つてるので何となく分かります」

「この気配は、俺の持っているどのウルトラマンよりも強力な力だ。」

「!?」

「おいどうした!?」

「い、いえ」

俺がその考察で正体に辿り着くというところで俺のゆんゆんに供給うしていた魔力にとんでもない光を感じた。

今のエネルギー、今感じたエネルギーと全く一緒だった。

「おいおい、まさかお前があの特野郎になってるのかよ。

ゆんゆん  
「

く  
???  
く

「!?」

「お、おい!どうした!」

謎の闇空間で謎の影が急に驚きとある方向を見上げた。

その存在の突然の居へんにレイバトスは困惑した。

「何だ、この凄まじい光の気配は!?(こんな光、ゼロでもましてやジードでもない…何なんだ、このエネルギーは!)」

黒い影は突然発生した謎の光エネルギーに目を見開き忌々し気にその方向を睨みつけた。

「ゆ、ゆんゆん？」

「貴様、何故貴様が奴と同じ力を使える！」

“めぐみんとアーネスは目の前で突然として謎の銀色の戦士”  
ネクサス・アンフアンス  
に変身した姿に驚愕していた。

「……」

「ふん！まあ良い、あの成り上がりの元人間風情と同じ力と言うならまずは奴を倒す前準備だ、貴様から葬ってくれろ！『カースド・ライトニング』！」

アーネスはネクサスの姿に驚きはしたものの、直ぐに立て直し強力な上級魔法の雷を放った。

「ゆんゆん！避けt…」

めぐみんの警告も間に合わずアーネスが放った雷はネクサスに直撃した。

雷が直撃した場所は凄まじい土煙を上げていた。

「ふん、急に忌々しい光になった時には驚いたけどこの程度か。これならばあの成り上がりの人間も大したことは…!?!」

アーネスがネクサスを仕留めたと判断し次はめぐみんを始末しようとして体を翻そうとした時、背後に恐ろしい威圧感を感じ反射的にそちらを振り向いた。

そこには“無傷”のネクサスが佇んでいた。

「な!?!貴様、何故無傷なんだ！確かに私の魔法が直撃したはずだ！」

「…シエア！」

アーネスの問いかけに答えずネクサスは構えを取りアーネスへと攻撃を繰り出す。

ネクサスは最初に拳で殴り掛かりアーネスはそれを避けその後2、3撃ほど繰り出す。

「ちっ…！」

「シイツ！」

「ガアアアアッ！」

ネクサスはアーネスに数撃拳を打ち込んだところで腕の“アームドネクサス”でアーネスを切りつけた。

アーネスは切り裂かれた場所から血を流し少し深く切り裂かれた所為か相応の痛みを伴った。

「シツ！」

「くっ…！」

ネクサスは続け様に手から光の刃“パーティクル・フェザー”を放つがアーネスは痛みに耐えてそれを紙一重で躲す。

「舐めるな！『ライトニング・ストライク』！」

アーネスはそれを躲すと今度も上級魔法の光をネクサスへと向けて放った。



「フンッ！」

ネクサスは水の波紋が広がったかのようなシールド“サークルシールド”を展開した。

アーネスの放った魔法はそれに直撃はするが難なく塞がれてしまう。

そしてネクサスはその魔法が打ち終わったところでその場で跳躍しアーネスへ向けて蹴り技“スピニングクラッシュキック”を繰り出した。

「セヤアッ！」

「ッ!？」

急に繰り出された蹴りにアーネスはガードしようとするが光を纏った足から繰り出される蹴りに回転して炎を伴った攻撃は幾ら上位悪魔のアーネスであっても防御は出来なかった。

「グッ、ギヤアアアアアッ！」

そのエネルギーを纏った蹴りにアーネスはその防御ごと蹴り飛ばされた。

「凄い…」

その光景を見てめぐみんは赤い瞳を文字通り輝かせながら見ていた。

突如自分の知り合いが自分たちの恩師と同じ力を使い20人近い冒険者達が束になつても敵わなかつた悪魔を圧倒している姿に。

「~~~~」

「ちよむすけ?」

めぐみんの腕の中で何故かちよむすけが体を丸めて震えているが今は目の前の光景に集中しなければいけない。

アーネスはネクサスの蹴りを喰らつて、悪魔にとっては弱点とも呼べる光をモロに喰らつて体からは煙を上げていた。

「ギい…何だ、この光は…(この光、上位悪魔である私に此処までダメージを!?!何者なのよアイツは!)」

「・・・」

「ヒイツ!」

アーネスは倒れて動けない自分に無言で歩みを進めているネクサスに本能的な恐怖を覚えていた。

“こんな奴に、勝てる筈ない…”

そんな考えがアーネスの脳裏を過った。

上位悪魔ともなれば残基と呼ばれる例え現世で肉体が減びてもまた復活もので蘇れるが、目の前の存在であれば残基ごと自分を消し飛ばしてしまうであろう。

そんな事になれば、アーネスは確実に無と帰るだろう。

「ま、待て！いえ待ってください！分かった、ウォルバク様は諦める！アンタ達にももう危害は加えないしアンタ達の前にも現れない！

だ、だから…」

アーネスが選んだ道は命乞いだった。

最早彼女には上位悪魔としてのプライドなど消し飛んでいた。だが誰も彼女を馬鹿になど出来ないだろう、何故なら目の前の存在は同族である筈のウルトラマンでも理解の及ばない文字通りの超人であり伝説でもあるのだから。

しかしネクサスは両手を左腰の所で重ねて丸で刀を引き抜くのに似ている動作をしながら手と手の間に青白いエネルギーが纏われてきた。

「ヒツ…待ってお願い！」

「待ってくださいいゆんゆん」

必死に命乞いをするアーネスと今にも光線を放とうとしているネクサスの間にめぐみんが割り込んだ。

「・・・」

「ゆんゆん、いえゆんゆんの体を使っている誰かと言えはいいのでしょうか。この悪魔は私に預けてもらえませんか？」

「・・・」

「お願いします」

めぐみんはネクサスへ向けて普段の彼女では絶対にやらなかったであろう頭を下げる事をした。

「・・・」

「ありがとうございます」

そんな彼女の様子にネクサスは何を感じたのか光線を撃とうとしていた体制を解いた。

めぐみんはそんなネクサスに礼を言つて後ろで倒れているアーネスに向き直った。

「あ、ありがとうございます！貴方は命の恩人よ！」

「ええ、そうですね。では、そんな命の恩人からお願いがあるのですが」

「な、何？何でも言つて！」

アーネスはこれを機にネクスから自分を救つてくれためぐみんに媚びへつらつた。そんな変わりようにめぐみんは特に表情を変える事無く

いや表情に影を落としてアーネスを見ていた。

「我が魔法の贄になつてもらいましょう」

「・・・へっ？」

めぐみんが提出してきた願いにアーネスは困惑した。

まあ無理も無い、助かつたと思つたら結局は殺されるのだから。

「な、何を言つて…」

「貴方はこう言いましたね？」 未熟な紅魔族」と。私が魔法を使えないと思つていたよ

うですからいい機会です、我が奥義見せてやろうじゃないか」

めぐみんは杖を構えると杖に大量の魔力が流れ込んでいき周囲にはとんでもない魔力の流れが発生する。

そしてアーネスの頭上に巨大な魔法陣が発生する。

「え？ちよっ…待って」

「我が怒り、我が爆裂魔法に乗せた一撃を持って貴方を葬り去ってやろう。喰らうが良  
いー！」

魔力が溜まりそれを確認しためぐみんは杖を振り下ろす。

幸いこの地点で爆裂魔法を放つてもネクサスがアーネスを蹴り飛ばしたのが丁度馬車の冒険者と乗客から離れた場所だったのでめぐみんの魔法を撃つても特に被害は出ない。

「エクスポロージョン！」

その一言と共に魔法陣のあつた地点に轟音と共に恐ろしい威力の爆裂が発生した。こうして上位悪魔アーネスはこの世界から消えた。

「ふう、スッキリしました」

「・・・」

「貴方もありがとうございます」

めぐみんはネクサスに抱えられて爆発地点から離れた場所に移動していた。

めぐみんが居た場所からはどうしても爆発に巻き込まれてしまうが、ネクサスが両手を合わせて高速移動をしてめぐみんを抱えて間一髪のところまで移動したのだ。

「す、すげえ。あの悪魔を倒しちゃった」

「あの紅魔族の女の子、何だあの姿は」

「あっちの尖がり帽子の方の子も凄い威力の魔法だったな」

「お姉ちゃん達スゴイ！」

ネクサスとめぐみんにダメージから回復し意識を取り戻した冒険者達と馬車の乗客に賞賛の声が挙げられた。

「ふふつ、私の恐ろしさを理解したようですね。では誰かさん、そろそろゆんゆんを…つ



てあれ？」

めぐみんがネクサスにゆんゆんに戻る様に促そうとすると、何故かネクサスはめぐみんを下ろしてある一点を見据えた。

「あ、あの一体どこを見て…」

「お、おいアレ！」

「!？」

めぐみんが困惑していると、一人の冒険者がその方向を指さした。

そこからは2体のダークロプスが空から飛翔してきた。

「……」

「あ、アレって最近噂になってるモンスター!？」

めぐみんは突然現れたモンスター達の襲来に驚いた。

しかも彼女は今の爆裂魔法で魔力を使い果たし指一本動かせず、他の冒険者達もまともに戦闘が出来る状態ではない。

唯一まともに戦えるのはネクサスだけである。

そんな時。

『インフェルノ』！』

「セイツ！」

「!？」

突如ダークロプスの一体が炎に飲み込まれもう一体が黒い服の男に刀で切り裂かれて爆発四散した。

「ふう間一髪」

「たく急に飛ばされるわダークロプスは居るわ今日は忙しいな」

「あっ」

その2人は、アクセルの街から急行してきたアルマとジャグラーだった。

めぐみんはジャグラーは兎も角アルマという自分たちの恩師との再会に目を見開いた。

「アルマ、先生？」

「おっ、めぐみん久しぶりってネクサス!？」

アルマはめぐみんを視認すると同時に彼女の前に居たネクサスに驚愕して。ジャグラーもアルマよりはマシだが目を見開いて驚いていた。

「コイツがネクサスか…」

「・・・」

「あっ」

ネクサスはアルマとジャグラーを交互に見比べた後その体を光に包み、光が収まるとそこからゆんゆんが気を失った状態で倒れ込んだ。

「ツゆんゆん!」

アルマは突然現れたゆんゆんに困惑しながらも咄嗟に彼女に近づいて体を支える。

彼女の状態を確認すると寝息を立てていたのだからただ眠っているだけだと思えば安心する。

「ふう、どうやら2人とも無事…って訳じゃないようだな」

「まあ色々ありましたから」

「ナー」

「クロもも久ぶり」

「先生、今のその子の名前はちよむすけですよ」

アルマは出て来たちよむすけにも再会の挨拶を交わしながら片手で頭を撫でた。

「おい感動の再会は後にしろ、今はこの場に居る人間たちをどうにかするぞ」

ジャグラーに言われアルマは周りの状況を確認する。

周りには負傷した冒険者や馬車に隠れながらこちらを覗く乗客が目に入った。

「そうですね。ヘビクラさん、すみませんけど」

「皆まで言うなストレイジでこういった状況には対応できるようにはなった。お前は向

こうの馬車を確認しろ」

「はい。めぐみん今からゆんゆんと一緒に馬車に運んでやるから、後で此処で何があつたのか教えてくれ」

「はい」

アルマはゆんゆんとめぐみんを肩に担ぎそしてちよむすけを頭に乘せて馬車に足を運び、ジャグラーも他の馬車に向けて歩を進めた。

そしてアクセルの街の方からとんでもない光が降り注いだのはその直後だった。

## 状況確認と後始末とヒキニートと限界無し

『!?!』

俺とジャグラーさんが馬車の状況を確認しようとした時、今度はアクセルの街の方から空から光が落ちてきていた。

しかもさっきの恐らくネクサスが現れたのと同等とも言える光だった。

というかこの光の感じ身に覚えがあるんだけど。

「あ、あの先生。今のとんでもない魔力って…」

俺に抱えられているめぐみんがアクセルの街の方を見ながら俺にそう聞いてきた。

そういえば紅魔族って魔力に敏感だから今の光も察知出来るんだったな。

兎に角、今めぐみんに更に不安を与える必要はない。見た感じ街が消し飛ばされたとかそういう事態にはなっていないみたいだしな。

「さあな、けど今は問題ないだろ。ところで飛んでくる途中で見えたけどお前爆裂魔法覚えたんだな」

「ふっ、先生も目にしましたか。そう！私は先生が里を出た後私がついに念願の爆裂魔法

法を覚える事が出来たのです！」

「おーそれは良かったな。けどそうやって動けないって事は」

「・・・はい、一日一回しか撃てません」

「・・・」

やつぱりか。

爆裂魔法は攻撃魔法の中では文字通り最強に位置するだろう。

しかしその最悪とも言っていい程の燃費の悪さ故に好き好んで使おうとするやつは普通は居ない。

めぐみんは魔力が生まれつき高い紅魔族のアークウイザードだったとしても爆裂魔法を撃てば今の様に動けなくなってしまう。

それほどまでに諸刃の剣とも言っていい魔法なのだ。

「あの、先生。ゆんゆんは・・・」

「大丈夫、眠ってるだけだ。何と戦っていたかは知らないけど相当疲労しているな」

「そうですか・・・」

「めぐみん。お前が気に病むことはない、過程はどうあれお前があ魔法を使ったから結果的に皆助かった。もっと胸を張れ」

「・・・はい」

俺の言葉にめぐみんは少しは気を楽にしたのか表情が少し柔らかくなった。

そしてその後俺たちは馬車の人達の安否を確認しその後重症の人から処置を施しその後辿り着いたアクセルの街で事情を説明してめぐみんとゆんゆんは俺たちの元で引き取る形となった。

「どりやあああああつ！」

「めっ、めぐみん!?! 起きて早々抱き着いてきたと思ったら何で急変して襲い掛かってくるの!?!」

「コイツが起きて早々騒がしいな」

「いつもの事なんで気にしないでください」

「アワワワワ」

その後俺たちはウイズの店にゆんゆんを運び込んでそのベッドで彼女が目覚めるのを待った。

そして暫くするとゆんゆんは目を覚まし、真っ先にめぐみんが目尻に涙を浮かべて抱き着いた。

そこまでは良かったんだよ。

するとゆんゆんの言う様にめぐみんは突然急変し、起きたばかりの彼女の肩を掴んで激しく揺らしていた。

「先生たちから聞きましたよ！何ですかそのネクサスとかいうのは」ピンチの時に隠された力に覚醒する”という紅魔族の琴線にピンピンくる設定をここぞとばかりに發揮して私の爆裂魔法がまるでオマケの様に扱われたのですよ！」

どうやらめぐみんはゆんゆんの変身したネクサスに興味があるようだ。

いやこの場合興味というよりは嫉妬かな？

待ちに戻って来た時にゆんゆんとめぐみんに対するお礼が殺到した。

それは良かったのだが皆「その銀色の姿に変身した子凄かったよ！」とか「あの悪魔を圧倒しちまうとは凄いな！」とかと主にゆんゆんを賞賛する声が殆どでめぐみんの



場合は「ついでに」その尖がり帽子は爆裂魔法なんて使えるとはな、いやー助かったよ」とオマケ扱いされたのが気に食わなかったらしい。

しかもめぐみんが（ジャグラーが呟いた言葉を聞いてしまった）ネクサスに変身したゆんゆんに嫉妬or激怒して今に至る。

「許しません許しませんよ！腹いせにその贅肉もぎ取ってくれろ！」

「痛いッ！痛ッ！痛い！胸揉まないで！アルマさん助けて！」

めぐみんは怒りをぶつけているつもりなのか彼女の胸を∞を描いて揉みしだいた。

「というか結構痛いのか？アレ。」

「おい、いい加減止めてやれ。お前の身内だろ」

「えー？へビクラさんがやって下さいよ。多分ですけどこの中で一番年長者でしょ？」

「ああの！そろそろ止めてあげないと！」

とまあその後怒り狂うめぐみんを止めてゆんゆん達と感動的？な再会を果たしたのだった。

くしばらくして落ち着いた時く

「で？ゆんゆん、本当にあの姿」ネクサス」については何も心当たりが無いんだな？」

「はい、アーネスに襲われていた時に突然声が聞こえてきてそれ以降の記憶が無いんです」

「で、それが残されていた訳か」

俺たちはめぐみんの怒りを沈めた後ゆんゆんにネクサスについて聞いていた。

が彼女は何も覚えておらず変わった事と言えば彼女が持っていたという短剣が「エポルトラスター」に変化していたということだ。

俺からの魔力供給は今も問題なく行われてはいるから体には何も問題は無いらしい。彼女の怪我も手当てはしたしな。

「あの、アルマさん。そのネクサスって何なんですか？」

「そうですよ！どうして私ではなくゆんゆんが変身出来たんですか!？」

「うん、めぐみんは少し落ち着け。

ゆんゆん、ネクサスについては実際のところ俺たちにとっても未知数な所が多いんだ」

実際あのチートラマン、絆大好きだったり次元超えられたり、ゼットンパンチとかの

とんでも技ばかり持っている事や、ネクサスの状態でも相手を分子分解できる光線放つ事が出来るっていう文字通りの存在がチートな奴ってくらいしか分からないんだよな。

「まあ人に危害加えたりとかは絶対じゃないよ。それにネクサスから力を貸してくれたんだ、ゆんゆんも大丈夫だよ」

実際、不明なところは多く存在するが決して人に害を及ぼす事はしない事は断言できる。

「そ、そうなんです…アルマさんがそういうなら、信じてみます」

ゆんゆんはエポルトラスターを見つめてそう呟いた。

「ゆんゆん、それを私に貸してください。私もネクサスになりたいです！」

「ちよ?!?止めてよめぐみん！」

めぐみんはネクサスの姿が紅魔族の琴線とうやらかに触れたのか目を赤く光らせてゆんゆんからエポルトラスターを奪い取ろうとした。

まあアレって確かネクサスが選んだやつとか色んな条件があつた筈だから少なくとも今のめぐみんには使えない可能性が高いんだけど。

「おい、ちよつと来い」

「はい？」

するとジャグラーさんが俺の肩を闇の仕草などでお馴染みの距離感で掴みヒソヒソ

と話を始めた。

「さつきから当たり前のように話しているが、何だめぐみんだのゆんゆんって。何でキラキラネームで話してるんだ、本名で言え本名で」

ジャグラーさんはそんな疑問を口にしてきた。

まあよくよく考えてみれば当然の反応か。紅魔の里で長い事過ごしてきた影響でひろぼんだのちえけらだのの名前に疑問を覚えなくなった俺だが普通の感性の人であればその名前に疑問を覚えるのも無理も無い。

「本名です」

「…お前なんつった?」

「本名です」

俺はジャグラーさんに紅魔族という種族についてとその独特の感性について簡潔に話した。

「・・・ハッキリ言っついていいか?」

「どうぞ」

「馬鹿にしてんのか」

「馬鹿にではなく事実ですのぞ」

まあジャグラーさんの言いたいことも分かる。

俺だって最初はぶっころりーだのそけつとだのひょうぎぶろーだのと頭イカレてるんじゃないのかと思っただけである。

めぐみんとか辛うじてキラキラネームで通る名前がめずらしいくらいだ。

「空飛ぶ野菜といいアクシズ教団といい、この世界は頭がおかしくないと生きていけない法則か何かでも働いてんのか」

「気持ちには凄く分かりますけど、この世界で生きていくには精神的にも強く成るしかないんです……」

特にアクシズ教徒ならぬ悪質教徒に対抗するには、並大抵の精神力や対抗策ではどうにもならないのだ。

こうして、ゆんゆんとめぐみんはしばらくは傷を治す事も含めて回復の為にウイズの店で泊まる事になった。

く地獄く

「クソオツ！あの小娘共が！」

地獄ではめぐみんの爆裂魔法で現世で倒されたアーネスが魔力をまき散らしながら怒り狂っていた。

彼女はネクサスとの戦いで殆どの残基がすり減りそこにめぐみんの爆裂魔法によってその擦り減った残基ごと1つ消し飛ばされ辛うじて1つだけ残基が残り生き延びたのだ。

「何なんだあの光は！突然中級魔法の方の紅魔族の姿が変わったと思えば私の残基全てにダメージを与えるとは！」

アーネスはゆんゆんが変身したネクサスの姿を思い返しながら忌々し気に顔を歪める。

「あの小娘たちに倒された所為でウォルバク様との契約も切れてしまった」

アーネスの目的はちよむすけとどのような関係があるかは不明だがそのウォバルクという邪神が関係しているらしい。

そしてその契約とやらもゆんゆん達に倒された事により解除されてしまった様だ。

「今に見ている、力を付けて残基も復活した暁には奴らを必ず血祭りにあげてやる！」

アーネスはゆんゆんとめぐみんに対する復讐を決意しその瞳を憎悪に染める。

そんな彼女の目の前に現れたのだ。

“ヤツ”が。

「!？」

「よおアーネス、最後に会ったのは何時だったかな？」

アーネスの目の前にはアルマが何とも軽い感じで佇んでいた。

「アルマ!? 何故貴様がここに居る!」

「おいおい、ウチの教え子に手え出しといてこのまま無事で済むと思つてたのか?」

アルマはアーネスに向けて笑顔でありながらも怒りをにじませた表情をしていた。

彼は目の前の悪魔に対して怒つていたので。

アルマにとつて流れによるものだったとはいえ自分の教え子や召喚主が痛い目にあわされたのはどうしても許せないものがあつた。

「あの小娘ども、アルマと面識があつたのか!? マズイツ」

アーネスはアルマを元が人間だからと下に見ている節はあるが彼女自体は彼の實力の高さ事態は認めていた。

地獄の公爵とはただ力が強ければなれるほど甘い地位ではないという事だ。

「ま、待つて! 取引をしましょう!」

「取引?」

「そ、そうよ! 私を見逃して! そうすれば私はもうあの紅魔族の娘たちには危害を加えないし、何だつたら貴方の配下として働くわ!」

貴方は自分の手足を手に入れられて私は生きられる、悪い話ではない筈よ」



アーネスはアルマには勝てないと理解しているため戦わずに交渉でこの場をやり過ごす選択肢を取った。

悪魔にとつてたとえ口約束であれど契約は絶対であるため、信用するには十分ではあつたのだ。

「（これでいいわ、あの小娘共には手を出さないけど必ず力を付けてお前だけは何時か殺してやる！それまでは精々油断しているがいいわ）」

「・・・」

アーネスはどうかやらゆんゆん達には手を出す気はないらしいがアルマだけは別の様だ。

アルマは嘘を見抜くのは得意な方だが相手の契約自体には嘘は無いので肝心のこういった部分自体は具体的には読み取りにくい。

だが、アーネスは大事な事を見落としていた。

アルマが、自分の身内を害されたらその相手を徹底的に追い込むという事を。

「はあ、哀れだな」

「…へっ?」

「もし本気で言っているんだとしたら思わず抱きしめたくなくなっちゃう程に哀れだな。

確かにお前の言う通り俺やアイツ等にとっては良い条件の取引だ、それにお前の言葉に一応嘘は無かった。

けどよ、例えお前が俺の手足になるにしたって別に俺がお前を殺さない理由にはならないだろうがよお。アアッ!」

「ひっ……！」

アルマは先程までの落ち着いた様子から一変して怒りに顔を歪めて叫ぶように言葉を発しアーネスはその変貌ぶりに恐怖を抱く。

そしてアルマの体は見る見るうちに闇に包まれて行き、最終的にはその闇から光る鋭い瞳が現れるとそこから黒い体に赤の模様の異形が現れた。

それは遙か昔、ウルトラの父ことウルトラマンケンの友であり闇にその身を墮としたウルトラマン。

“ウルトラマンベリアル”だった。

「くっ、交渉は決裂って訳ね。けど、私がただおしやべりをしていただけとは思わない事ね！」

『カースド・ライトニング』！』

アーネスはベリアルから距離を置くと自身のありったけの魔力を込めた電撃をベリアルに向けて放った。

彼女は最初からベリアル基、アルマに勝てるとは思っていないがだからといって元人間のアルマに魔法で負ける事はないと思っていた。

しかもこの攻撃は自分の魔力をありったけ込めた文字通り最大出力の技。アルマは避ける素振りも見せないしこれが直撃すればタダでは済まないだろう。

「取った！ 幾らお前でも私のこの攻撃を喰らえばタダでは済まない！ この攻撃のダメージで動けない所をなぶり殺してやる！」

アーネスはこの瞬間、自分の勝利を信じて疑わなかっただろう。

彼女の中ではアルマは例え地獄の公爵とはいっても元人間。しかもこのタイミングでは自分が負ける要素など微塵もない。「勝った」。

確かにアーネスの認識は正しい。

確かにこのタイミングでは如何にアルマがベリアルに変身しているとはいえダメージは避けられないしそれを喰らってしまえば大幅に動きが鈍くなるだろう。

そして最終的に彼を待っているのは

“  
死  
“

勿論残基があるので本当の意味での死では無いが、アーネスからしたらアルマを葬り去ったという事実さえあれば良かったのだ。

そして電撃はアルマに向かって迷わず進んでいき、彼に直撃しようとしていた。

だが、それはアルマが普通の人間や悪魔だった場合の話だ。

「!?」

何とアーネスの放った魔法はアルマに直撃する前に突如”彼の周りから発生した闇”によって跡形もなく消し去られてしまった。

「おいおいアーネス、いきなり攻撃とは昔と違って沸点が低くなったみたいだな」

「な、何だ今の闇は！あんな闇、只の成り上がりで発せられる筈が…」

「それはお前が知る必要のない事だ」

アルマはそう無慈悲に告げると、右手を顔の横辺りまで上げてそこに黒い稲妻の様なエネルギーを纏わせる。

そのエネルギーはどんどん膨れ上がっていき充填が完了すると、そのまま振りかぶるように、左手も合わせて十字に組む。

「デスシウム光線！」

腕を交差させる事によって放たれた、ベリアル**の必殺光線はアーネスへと向けて無慈悲に躊躇なく放たれた。**

「ギャアアアアッ！」

アーネスは防御する事も出来ずに、その光線の直撃を受けてその場で爆発四散する。そして爆発した場所からはアーネスの源であった闇が粒子となって浮遊していた。

「つと、そうだ。折角だし」

アルマはアーネスが爆発した地点を見てふと何かを思い出したのか自分の胸に手を当てる。

すると、アルマの胸が闇色に輝きそこからある力が開放される。

《マガタノオロチ》



その音が鳴り響くとアーネスの闇がアルマの変身したベリアルスの口に吸い込まれていく。

「(ここで闇が手に入ったのは好都合。上位悪魔の闇なんて殆ど手に入らないからな)」  
そして闇が全てアルマに吸収されると、彼は次の工程を開始した。

「(高純度の闇を採取、そしてとライト系統の魔法の光を混合し更には俺の“記憶”からあの情報を読み取って合わせえる)」

アルマが心の中でそう呟くと、彼の目の前で闇と光が球体となつて徐々に合わさっていき彼の額から出て来た白い光が交じり合い一つの形を成してきた。

それは片手の平に収まる位の大きさの怪獣カプセルだった。

しかしそこに描かれているのは怪獣でも宇宙人でもない。黒い体のウルトラマンだった。

そのウルトラマンの姿は黒い体に赤と紫のライン。そして目やカラータイマーは赤

く両腕と額の辺りには赤いクリスタルの様なものがあつた。

それは本来であれば存在しない筈の存在のカプセルだつた。

「ギンガダークネス」。怪獣カプセルを生み出すのに少しアレンジを加えたけど何とか上手くいったな。

(これでこのまま順調にいけば、あのカプセルも創り出せて“アレ”になれる可能性があるな)

つと、用は済んだしさつさと現世に戻るか、あんまり遅くなるとゆんゆんがまためんどくさい事になるし」

アルマは先程のアーネスを消し飛ばした事がまるで無かつたかのように何とも思っていない表情で後ろに魔法陣を開きその場を後にした。

）  
???  
）

俺の名は佐藤和真。  
さとう かずま

俺は今、分け合って日本での人生が終わり現在は異世界とやらで魔王を討伐するため

に切磋琢磨しながら励んでいる。

俺は魔王によつて苦しめられている人々の為に、魔王討伐に向けて冒険者としての生活を始めていた。

と、胸を張って言いたかった。

いやね、俺がこの世界に来た理由で一応トラックに轢かれそうになった女の子を助けて自分がトラックに轢かれたからだと思っただけだよ。

けど実際には？俺が死んだあとに合ったアクアとかいう女神によると“本当はトラックではなくトラクター”で、しかも女の子は俺が介入しなくても自分で止まれて、しかも俺は女の子を突き飛ばしてトラクターに耕されたのかと思っただけで、ビビツての“シヨック死”で、女の子は俺が突き飛ばした所為で怪我をしたというし。オマケにその後病院に搬送されたけどそこで医者や看護師は俺の死因を笑ってその後駆けつけた俺の両親については詳しくは聞かなかったけどきつと彼らも最初は悲しんだけど後になって笑いやがったに違いない！

それで、アクアに言われた選択肢で生まれ変わるか天国に行くか異世界に転生するか

と選ばされた。

けど天国とは魂だけの存在で行く場所です。ここではえっちい事とかは何もできないただ時間が過ぎるのを感じるか世間話するしかない世界だというのだ。

そんなの実質地獄でしかなくかといって生まれ変わるつてのも今の俺が無くなるよ。うで却下。とすると必然的に異世界に転生という選択肢しかないわけだ。

そしてアクアはその世界に転生させる対価としてチートアイテムやら能力やらを1つだけ選ばせてくれたのだが、俺が悩んでる姿をスナック菓子食いながら「早くしろ」だの「何を選んでも一緒」だのと随分と好き勝手言ってきたので、俺は特典としてソイツを「異世界に持っていける者」として連れて行く。

こうして、俺の異世界生活が始まりはしたのだが…。

いざ街に着くと登録できる金は無いわいざ金が払えて登録できても受付のお姉さんからは冒険者ではなく商人をお勧めされる程に幸運や知力以外のステータスが普通か低いかのどちらかだった。

俺はそのステータスの低さから最弱職の「冒険者」に、アクアは元が一応女神だから

かステータスが高く上級職の“アークプリースト”という職業になった。

そして現在は、碌に装備を揃える金も無いのでアクアと一緒に土木作業のバイトを熟す日々を送っていた。

「ハア、異世界に来て冒険者っぽい事じゃなくて土木工事させられるとか…」

『何だ情けねえ、男ならもつとシャキツとしろシャキツと』

「いやとは言ってもな”ゼロ”」

俺は突然聞こえて来た声に向かって周りに誰も居ない事を確認して俺の“左手首に嵌っているプレスレット”に向けて話しかけた。

『バイト先の親方も厳しくはあるけどよ、アレはお前の働きを誉めているのも同義だぜ？何にも期待していない奴にあそこまで親身になって怒鳴ってはくれないぞ』

「それは分かっているんだけどさ…」

声の主は“ウルトラマンゼロ”。

彼は俺が前の世界で見ていた特撮作品に出て来る存在で、俺も子供の頃はウルトラマンになりたいとか思っていた程にハマっていて今でも見る位には好きなシリーズだ。特にウルトラマンゼロといえはその中でも特に好きな分類に入る存在でもある。

どうしてそんな存在が今俺の中に居るのかと言うと、実は俺がアクアを特典にしていざ異世界へと思いいこの世界に飛ばされ時ゼロ曰く“光に巻き込まれた”とのことだ。

理屈はよく分からないけどどうやら俺たちがこの世界に飛ばされた際に俺と同化しちゃったらしい。

因みにゼロの声は俺以外にもアクアにも聞こえているらしく、アクア曰く“カズマと完璧に同化しちやつてるから、自力で分離は無理。分離するにはそれこそ魔王を討伐するかカズマが死ぬか、或いは別の分離手段を探すかしかない”そうだ。

というか、ウルトラマンって本当に居たんだな…。

『そりゃあお前が大変な思いしてるのは俺にも何となくだけど分かる。だけどそこで諦めちゃったなら、お前が望んだ未来はつかめないぜ』

「…うん」

何というか、こうやって昔憧れた存在に自分を肯定してもらうのってその…結構



嬉しいし説得力あるな。

『そういえば、カズマは一度死んでこの世界に来たんだよね？』

「え？…まあそうだけど」

あれ？何だろう。そこはかたなく嫌な予感がするんですけど。

『いや不謹慎なのは承知の上だが、どういった理由なんだ？』

「えつと…言わなきゃダメか？」

『いや、どうしても言いたくなければ良いんだ。それに自分の死因をそう易々と口にする訳がねえよな、悪い』

正直、俺としては思い過去という訳では無いから本来なら話しても良い気がするのだが何せよ死因が死因だ。

・・・けど、変に引つ張って後でバレるとというのがお約束と言う奴だ。

だったら、今この時の恥を我慢さえすればと思えば俺はゼロに話す決意をした。

「・・・実は」

こうして俺は、どうして死んでしまったのかその全てをゼロに話した。

多少跳躍した部分はあつたかもしれないが、まあ大まかな内容は問題ないはずだ。

「と、いう訳だよ。あ、言っておくけどな笑うにしても声は抑えろよ？爆笑されたら流石に傷つくからな？」

アクアは兎も角、ゼロにまで笑われたらしばらくは立ち直れない自信があつたがそれでも後でバレて大恥かくよりはは何百倍もマシだと思つた。

そして俺は、聞こえて来るであろうゼロの笑い声から意識をそらそうとなるべくそれを聞かないようにした。

けど返つて来たのは意外な言葉だつた。

『…お前つて、結構スゲエ奴だつたんだな』

「へ？」

何言つてんだこの人？

「い、いやいやいや。スゴイつて何が？俺、勘違いで女の子に怪我させた上にトラックをトラックターと勘違いして死んだんですけど？」

今にして思い返してみれば、我ながら間拔けな死に様だと思えてくる。

『確かにお前の言う通り女の子に怪我をさせたのかもしれないし結果的に勘違いだったのかもしれない。』

けどよ、見ず知らずの他人を勘違いとはいえ自分が身代わりになってでも助けようとするのって普通は出来ねえよ。

それに今の話に出て来たお前の死因を笑った奴らだけじゃ俺はそんな奴らにお前を笑う資格は無いと断言出来る。

『誰かの為に動いて死んだお前を、一体誰が笑える?』

「・・・」

目には見えないけど少なくとも俺はゼロが嘘とか同情とかで話していかないのが伝わって来た。

これが肉体が融合した影響かは定かじゃないけど、俺はゼロが本気でそう思ってくれているのが分かった。

『お前は確かに、根性が無くて度胸も無い（おい）。オマケに小心者でひねくれ屋だ（俺泣いていい?）。』

だけど、それ以上に誰かの為に動ける男だ。そう俺は思っている』

「ゼロ……」

何だろう、何故か目尻が熱くなってきた……。

『だからよ、それを恥じる必要なんてない。寧ろ誰かの為に動けた自分を、お前は誇つても良いんだ。』

お前は、俺たちウルトラマンに負けないくらい強い心を持っている。まあ俺程じゃねえけどな』

「……」

俺は、今昔憧れたヒーローの言葉に思わず泣きそうになった。

いい歳した奴が何やってると思う奴も居るかもしれないけど、俺にとって目の前のヒーローの言葉がとても今の俺の心に染みたんだ。

「ありがとな、ゼロ」

『へへっ、気にすんな』

「ねえーカズマー。私お風呂入り終わったから早く晩御飯食べに行きましょよよ。私もうお腹ペコペコなんですけどー」

俺達が所属は違うが男の友情的な何かに浸っていると、土木工事のバイトでかいた汗を流してきたアクアが呼んできた。

「おーう、今行くよー」

俺はその場から立ち上がり、アクアの元に歩いて行つた。

王道ファンタジーな展開を期待して早速躓いた俺たちだが、何だろうな。

何だか悪くないって思えた瞬間だったな、さっきの時間は。

因みに余談だが、この後アクアがシユワシユワを飲みまくりゲ○吐いて俺がそれを運ぶ羽目になったのはこの世界に来て最早日課になっているのもう気にしていない。

・・・ホントダヨ？

## 遭遇する戦士達

どうも皆さん、サトウカズマです。

皆さまは今日如何お過ごしでしょうか？

今世の中はウィルスによつて大変ですがちゃんと感染対策はしましょうね？  
ん？俺ですか？俺は……。

「いーやあーいーつ!!!」

絶賛モンスターに襲われています。

「ブークスクスWWWカズマったら涙目で追いかけてるとかちよーウケルんですけどWWW」

『おいカズマ！逃げてんじゃねえ！ほら奴が地面に着いた瞬間に剣で切れ！』

あそこで笑っているアクアは後で埋めて帰ろう。

それからゼロ？無茶言うなよ。

今俺が陥っている状況を簡単に説明するぞ？

まずようやく金が溜まってクエストを受ける↓その中の“ジャイアントトード”とかいうデカいカエルの討伐を受ける↓いざそのカエルと対面すると思いのほかデカくて怖い↓必死に逃げ始める↓アクア大爆笑&ゼロ必死の応援？↑今ここ

因みに今知った事だが、どうやらこの世界だとウルトラマンと同化したからといって俺の身体能力が上がったりするわけではないらしい。

何でも俺とゼロはそれぞれ別のステータスで分けられてゼロの人格が俺と入れ替わった時にステータスが変動するらしい。

だからウルトラマンジードよろしくとんでもない身体能力は出せないらしい。ん？だったらこのモンスターをゼロに人格変わってもらって倒せばいいって？

いや俺も最初はそう思ったんだよ？けどゼロが『これはこの世界の一番難易度が低いクエストってやつなんだろ？だったら自分たちの手でやるべきだ。まあ安心しろ、もし食われそうになったらりして命が危なく成ったら変わってやる』って言ったんだよ。

それで今も介入してこないって事はウルトラマン基準でまだ大丈夫って事なんですよ。うね……。



「カズマー、助けて欲しかったらまず私を様付けする事から始めましょうか」

『カズマ、アイツ鬼だな』

「いや悪魔の間違いでしょ。つてそれより、アクア様——————！」

俺はゼロと互いにアクアに対しての率直の感想を言い合った後、兎に角命の危機なのでアクアに取り合えず助けを求める。

「ふんっ、良いわ助けてあげるわよヒキニート。そうねまず私に助けてもらったら…」

アクアは俺を助けるつもりが有るのか無いのかは分らんがその場で目を瞑ってその場で何か言い始めた。

「なあゼロ、俺本気でアイツ埋める事考えてんだけど」

『落ち着け、しかし流石に俺が変わろうか？』

「そうだな、流石にこのままじゃ…ん？」

『あ？』

俺たちがそんな会話をしているとジャイアントトードが動きを止めたと思うとアクアの方を向いていた。

それに俺たちは困惑していると、止まっているアクアが恰好の獲物に映ったのか俺からターゲットをアクアに変更して向かっていった。

『「あっ」』

「それで街に戻ったらずアクシズ教に入信する事、それから晩御飯のオカズを毎日一品ずつ献上するこくギユツ…」

アクアは何やら呟いていると、ジャイアントトードの大きく開いた口の中に上半身をパクリと収められたのでした。

「うう…グスツ、カズマあ…」

あの後俺はアクアを捕食しようとして動かないでいたジャイアントトードを持っていた剣を使ってソイツを倒した。

それで倒れたジャイアントトードの口の中からカエルの粘液まみれになったアクアが出て来た。

本来であれば女性がそんな粘液まみれの女の子の姿を見たら男としては喜ぶべきシチュエーションなのであるうが生憎こちら馬小屋での共同生活で一度もこいつに発情などしたことはない。

しかもコイツの性格を知っているからどうしてもコイツにはそういう目を向けられん。

そういうえばウルトラマンってその辺の基準ってどうなってんだろ？今度ゼロに聞いてみよ。

「ありがとお…ありがとねえ…」

「(生臭せえツ…)」

『カエルに喰われるところなるんだな…なんつうか昔ウルトラ兄弟が溶解液の餌食になったって聞いた事あるけど、結構大変だったんだな…』

何やらゼロが呟いているがまたカエルが地面から這い出てきているから早くこの場から離れないとな。

「な、なあ今日はもう帰ろうぜ。流石に碌な装備もないのに俺たちだけでカエル相手はキツイって」

ゼロは肝心な時にしか力を貸してくれないゼロは意味は違うけどギャ○ンポジみたいな感じになってるから特にだし。

「私はもう汚されてしまったわ…今の私のこの姿を見たら、この世界に居る敬虔なアクシズ教徒の信者達に顔向け出来ないわ！」

アクアはこう言っているが、正直その心配はないんじゃないか？

いやコイツの信者が気にしないとかそういう話ではなく、コイツこの世界に降りて一応女神であるのに土木工事のアルバイトして風呂入ってシユワシユワ飲んでゲ○吐いて馬小屋で寝て今の有様である。

それなのに汚されたとか今更…。

「オンドリヤアアアアアアアッ！」

『「っつておい！」』

俺がそんな考察をしているとアクアは這い出て来たカエルに向かって走り出した。

よく見ると拳を握り締めていた。

「神の力、思い知れ！」

私の前に立ちふさがった事！そして神に牙を剥いた事！地獄で後悔しながら懺悔な

さい！

ゴツd…つてわあああああつ！」

『!?!』

アクアが何やら右手にゴツド○イン○ーみたいな光を纏わせたところでカエルが爆発した。

いやより正確に言うなら“上空から放たれた光”に貫かれて爆発したのだ。

アクアは爆発によってこちらに戻って来たが今はそれを気にしている余裕は無い。俺はその光が落ちて来た上空を見た。

“そいつ等”は俺が空を見上げた時に太陽の逆光で影になっていたが直ぐに俺たちの前に降りて来た。

「もー何なのよ！つてアレ…」

「お、おいゼロ。アレって…」

『ああ、“ダークロプス”だ』

そいつ等はゼロをモチーフにして作られた機械の存在。

ダークロプスが合計10体以上は居た。

『エネルギー反応検知・・・完了。対象、ウルトラマンゼロ確認』

コイツ等ゼロを狙ってるのかよ！というか。

「おいアクア、どうしてこの世界にダークロプス達が居るんだよ！」

「知らないの？最近魔王軍にあいつ等の親玉的な奴が加わって転生者を含めて苦戦してるのよ」

「そういう情報は最初に伝えろや駄女神！」

「ぬぁんですってえっ!？」

『おい馬鹿！避ける！』

「!？」

俺たちが言い合っている間に、ダークロプス達がコッチに向かって光線撃つて来た、っつておい！

「あぶっ！」

「うわぶっ！」

俺とアクアは慌ててその場から飛びのいた。

すると光線はさっきまで俺たちが立っていた場所に着弾して爆発した。

その場所からは黒い煙が上がっていて少しだが炎まで上がっていた。

「おいおいおいおい冗談だろ!? あんなもん喰らったら即死だろ!」

『カズマ! これはもうクエストどころじゃねえ、俺に変われ!』

「おお待ちしました!」

ゼロの言葉に俺はそれを承諾した。

すると俺の意識が何とというか内側に仕舞われる感覚に襲われた。一応以前試しにゼロと試したけど自分の体が別の誰かに動かされてるって変な感じだな。

そして今表にはゼロが内側には俺の意識が入れ替わった状態になった。

「よーし、ようやく暴れられるぜ。カズマ、見とけよ俺の勇士!」

『おう!』

俺の体を使っているゼロは腕の“ウルティメイトブレスレット”を掲げそれが光るとそこからゼロの変身アイテム“ウルトラゼロアイNEO”を取り出した。

「いくぜ、セヤツ!」

ゼロはゼロアイNEOを目元に持ってきて掴んでる部分のボタンを押す。すると俺の体は周り、体が段々とゼロに変換されていく。

俺の体は、光の国のウルトラ戦士でありウルティメイトフォースゼロという警備隊を設立し数々の次元を渡ってはその星を救ってきたウルトラマン。

“ウルトラマンゼロ”になっていた。

「つてなんじゃこりゃ!?!何で人間の時と同じ様なサイズに!」

『おわマジだ!』

確かに人間の時とサイズが変わってない!?

目の前の相手と同じサイズだけどどうなってんだ!?

「つと、今はそんな事気にして居る場合じゃねえな」

ゼロは直ぐに持ち直し目の前の敵を見据える。

『ウルトラマンゼロ確認。これより戦闘を開始する』

ダークロプス達はその言葉を号令にしたかのように一斉に構えを取る。

「へっ、ダークロプスか。もう見飽きた顔だが、準備運動にはもってこいだな。おいアク

ア、一応下がってろ」

「分かったわ! やっちゃいなさい! 女神の私が許すわ!」

「はいはい、そんじゃカズマ。準備は良いな?」

『おう! というかウルトラマンに変身するところなるんだな』

俺は人生初のウルトラマンの変身を体感し、現在はTVで見る様な空間にいるんだけ



ど結構新鮮だな。

と、今はゼロが体動かしているといっても俺も気合入れなきやな。

「さーて、ブラックホールが吹き荒れるぜ！」

ゼロは腕をブンブン回してダークロプス達を指さし、そのまま駆け出した。

「セヤッ！」

『！』

ゼロは助走の勢いでダークロプスの1体に跳び蹴りを喰らわせた。

そのあと手刀を放つも防がれ今度は体を逆回転の容量で振り返り逆の腕で肘打ちをダークロプスに決める。

「おっとっ」

その後他のダークロプス達が光線を撃つて来たので前転の容量で避けた。

避けた先には他のダークロプスがその鋭い爪で攻撃してきたのでゼロは師匠譲りの宇宙拳法を駆使してそれを受け流し隙あらば腹に突きを食らわせ、さらに別の個体にはそいつの足を払い地面に転倒させた後握りこぶしを打ち付けた。

「セイっ！そおらっ！」

次に襲い掛かって来た個体には顔面と腹に順に裏拳を食らわせ回し蹴りで蹴り飛ばした。

『！』

ダークロプスの内の1体はゼロから少し距離を取り腕をL字に組んで光線を放ってきた。

「つと、ワイドゼロショット！」

それに気づいたゼロは負けじと腕をLに組んで光線技“ワイドゼロショット”を放った。

光線同士はぶつかり、鏝迫り合いをすることなくダークロプスの光線を押し戻しそのままダークロプスの1体が爆発四散して倒された。

『うおスゲー！』

「へっ、俺だつて光の国の訓練で光線技の威力は日々磨き続けてるんだよ」

俺の記憶では確かジードの居る地球で戦った時は少なくとも少しは拮抗していた筈だけど、今回のそれはそれすら許さない威力だったからな。

『~~~~！』

「つと！」

そんな会話の間にダークロプスの武器“ダークロプスゼロスラッガー”を両手に持った個体が切りかかって来た。

ゼロはそれをバックステップで紙一重の所で躲す。

「つたく危ねえな！そっちがその気ならコッチも少し本気出してやる！」

ゼロは頭から“ゼロスラッガー”を両手に逆手で持ち構える。

『！』

「そらっつー！」

スラッガーを構えて切りかかって来た個体に応戦する。

ゼロとダークロプスは互いの持っているスラッガーで互いに切りつけ火花を散らす。

『!?!』

「へっ、どうやらそっちのは刃の鍛えなおしが必要みてえだな」

何度か切りつけあった所でダークロプスは自分の持っているスラッガーを見て驚愕した。

何故ならさつきまで鋭く刃をぎらつかせていた自分の武器が刃こぼれしているのだから。

まあ親父さんのウルトラセブンがキングジョー相手に関節部を狙っていたとはいて切り裂いて倒した程だからな。

そしてゼロはソイツをゼロスラッガーで腹や首などを切り裂き切り裂かれたところからケールを覗かせ火花を飛び散らせながら爆発させた。

しかしたつた1, 2体倒したところでそいつ等は一向に減らなかつた。

「つたく、相変わらず数が多いな」

『どどどうすんだよゼロ!』

「慌てんなよカズマ、この程度今まで何度もあつたんだ。これくらいで俺は負けたりしねえよ」

ゼロはそんな頼もしい事を言ってくれているが実際ダークロプス達は10体程は居る。

ゼロなら問題は無いんだろうけどこの戦闘によってモンスターが近寄ってきた場合は更に厄介な事になる。

幸いジャイアントトードなどは居ないようだが万が一という事もある。

そんな時だ、ダークロプス達の内の2体が爆発したのは。

『!?!』

「え!?ちよつと急に爆発したんですけど!ゼロ、貴方何かしたの!」

「い、いや俺は何も」

「ダークロプス居たから光線撃ったけど、ゼロが居るって聞いてないんだけど。しかも邪神までいやがるとか…」

『「!?!」』

困惑している俺たちの耳に聞きなれない男の声が聞こえて来た。

そこには黒い体に、赤い模様。猫背な体制に鋭い爪。そして何より目を引くのがその悪魔の様に鋭い目つきだ。

アイツは・・・!

「ベリアルだと!?!」

「へっ? あー違う違う! 確かに見た目ベリアルだけど違うからな!」

「え?」

目の前のウルトラマンベリアルは自分は違うとか言い出した。

確かに見た目はベリアルだけど、よく聞いたら声も俺が知っているものとは違うしもしかして俺と同じ転生者?

にしてもアクアの方を見て邪神だのと言ってたけど、過去に何かあったのか?

「兎に角まずはこのダークロプス達を片付けるのが先決だ。言いたいことは色々あると思うが、ここは協力しないか？」

「・・・」

『なあゼロ、多分コイツは信じてても良いんじゃないか？』

「カズマ？」

ゼロとしては今まで戦ってきた宿敵とも言っていない存在と同じ見た目の奴が出て来た事に警戒するのは分かるけど、コイツが俺と同じ転生者でしかも今の口ぶりからしてこのダークロプス達についても知っているかもしれない。

俺は流石にどうしてベリアルについて知っているのかについて色々誤魔化しながらゼロに俺の考えを簡潔に伝えた。

『という訳だから、今はアイツと協力してダークロプス達を倒すのが得策だと思う』

「・・・分かった、お前の案に乗るぜ。じゃあ頼むぜベリ・・・ア・・・」

「あー俺の事はアキラで良い。そっちとしてもその名前で呼ぶの色々抵抗あるだろ？」

「ああ、悪い。ってベリアルと同じ姿の奴と共闘するって変な感じだな・・・兎に角行くぜ

！」

「ああー！」

こうして俺の体を使って変身したゼロとベリアルの力を使って変身しているアキ

ラっていう人との共闘が始まった。

「ダークロプス達は合計8体だから、1人4仕留めるで良いな？」

「喜んで」

ダークロプス達は突然現れた援軍に怯むことなく俺たちに襲い掛かって来た。

「ふっ！セイツ！ウオオラッ！」

ゼロは爪やスラツガーで襲い掛かって来る4体に対して負けじとゼロスラツガーで応戦する。

数の上では向こうが勝っているが流石は歴戦の戦士、ちゃんと裁いている上に的確に反撃を入れている。

「フンッ！オラッ！ウラアッ！」

別の場所でアキラと名乗った奴もベリアルを持つ鋭い爪でダークロプス達への攻撃と防衛を的確に行っていた。

ダークロプス達が目とビームランプから光線を放ってくるが、何と腕でそれを防ぎ今度はお返しとばかりに光弾を撃った。

すると、ダークロプスの内の1体がアキラの後ろから襲い掛かって来た。

「エメリウムスラッシュ！」

「!?」

ゼロはそれを防ぐために額のビームランプから光線を放ってそれを阻止する。

「これで貸しーつだな」

「そりやどうも、なら。へアツ！」

『!?』

アキラが手から光弾をこちらに向かって撃って来た。

『!?』

すると、俺たちの後ろからダークロプスが襲い掛かって来ていたがアキラの放った光弾によって火花を散らして後ろに吹き飛ばされた。

「これでチャラだな」

「ハッ、良い腕してんじゃねえか。オラッ！」

「ハッ！」

何だか良い感じのやり取りをしているとまたダークロプス達が背後を取ろうと襲い掛かって来たのでゼロは足に炎を纏って、アキラは爪にエネルギーを纏わせて後ろの奴らを蹴散らした。

そしてそこから距離を取り、互いに背中合わせでそいつ等を油断なく警戒し横目で後



ろの奴に向かつて話しかけた。

「そりや俺もこの世界でアンタら程じゃねえけど長い事戦ってきたからな。それより」

「ああ分かつてる。これ以上コイツ等に時間掛ける訳にはいかねえな、なら」

『光線で一気に片付ける！』

「『そういう事だ』」

そういうと、ゼロはゼロスラッガーを胸のカラータイマーの両サイドに取り付けて光のエネルギーをチャージする。

アキラも片腕を少し上げて赤黒い稲妻のエネルギーを纏い始めた。

「カズマ！一緒にいくぞ！」

『ああ！』

互いにエネルギーのチャージを完了すると、お互いの必殺光線を放つ。

『『ゼロツインシュート！』』

「『デスシウム光線！』」

俺たちは光線を放った勢いで互いの背中が押し付けられるのを支えの代わりにし、薙ぎ払う様に光線を放つ。

光線は俺たちから受けたダメージによってまともに動けずそのまま光線の光に飲み込まれた。

そして光線が直撃した奴から爆発していき、最終的に全てのダークロプス達を倒す事に成功した。

「ふう、何とか片付いたな」

『俺も久々に暴れられてスッキリしたぜ』

「お疲れさん」

俺たちは戦いが終わるとそれぞれ変身を解き俺はゼロから体の主導権を返してもらった。

にしてもアキラは変身を解くと全身黒づくめに黒髪黒目の見るからに日本人な見た

目だった。

・・・中々整った顔立ちで普段の俺だったらイケメンをドロップキックするところだが、アキラには助けてもらったから特にそういった感情は浮かんでこないな。

これもゼロと過ごしたおかげなのか？

まあ今は。

「いやー助かったよ、正直あの数は面倒だったんだよ」

『俺からも礼を言う。ところで、どうしてお前がベリアルを力』

「あーそれについては

“そこでそーつと逃げようとしている” 邪神に聞けば分かるぞ”  
『へっ?』

アキラがそういうと、ある場所を指さしそちらを見ると確かにアキラの言う通りアクアがそーつと立ち去ろうとしていた。

「ぎくつ…」

「…おいアクア、お前なんかやったな? 言え」

「ち、違うの。違うのよ!」

「い・え・よ」

「…はい」

アクアは俺の言葉で観念したのかアキラがどうしてベリアルになれるのかを説明し  
だした。

それで全て聞き終えた俺たちの感想はこうだ。

『何してくれてんだお前』

「待って！確かに私も悪かったし最高神様にも一杯怒られて反省してるけど、決してわざとじゃないの！」

コイツの話をまとめると、コイツは俺と同じく日本で死んだアキラに俺と同じような勧誘をして後はチート渡してこの世界に転生させるだけだったらしい。

だがそこで問題があり、その時にチートの中に「悪・闇のウルトラマンの力」っていう闇エネルギーがヤバイ特典があつてその闇パワーに耐え切れなくて丁度来たアキラにその特典を半場押し付ける形で渡したらしい。

で、いざ転生させようとしたら間違えて地獄送りの魔法陣を開いてしまつて地獄へ送ってしまったとの事だ。

「で？その特典を用意した理由は「魔王軍が自分達に近い闇の存在にやられるとかブクスクスな展開になるかもしれないから」ってな……」

『ホントに何してくれてんだ。というかアキラは地獄になんて落とされてよく無事だったな』

「ああ、実は地獄に落とされた後その特典使つてな。そこで悪魔達蹴散らした後なんやかんやあつて悪魔になつたからな」

『「え!?!」』

あ、悪魔!?

地獄に落とされて悪魔になるってこの世界に来てどんな人生歩んでたんだよ。

「あ、悪魔って貴方…貴方からは悪魔臭なんてちつともしないけど…」

「そりゃあ半分人間の影響か人間にも悪魔にもどっちにも気配とか寄せられるからな」

「おいおいベリアルの力だけでもとんでもないのに悪魔って…」

『大丈夫なのか?!』

「ああ、特典と相性が良いからか特に体に負担がかかるとかそういうのは無いな。つとそれより詳しい話は一旦街に戻ってからにしようぜ、ここだとモンスターも来て落ち着いて話も出来ないからな」

「そうだな」

『そうだアクア、お前には街に帰ったら話がある』

「ごめんなさい！私が悪かったから、お願いだからお説教は許して！よりによってノア様に力貰った貴方から怒られるとか女神として一番ツライの！」

アクアが何やら気になるワードを言っているが、俺たちはお互いの情報交換やその他もろもろも含めて片付ける為に街に戻る事にした。

邪神って、邪な神だから邪神とよばれるのです…この意味が分かるな？

「アクア、幾ら女神でもやっていい事と悪い事があるって事ぐらい分かるだろ？アキラの話聞く限りアイツは地獄に送られる様な事はしてないらしいじゃないか。そんな奴を地獄に送るだけじゃなく、ベリアルだけならまだ良い、いや良くは無いがトレギア達もだど？」

「ごめんなさい。本当に反省しております…」

あの後俺はサトウカズマと名乗るウルトラマンゼロと色々あつて同化したという俺と同じ日本人と、街に戻った時に聞いた話だが彼の特典としてこの世界に連れてこられた邪神、基アクア（あの後風呂に入った）と共にアクセルの冒険者ギルドに来ていた。

そこでそれぞれシユワシユワを頼み飲んでいたのだが、途中でカズマがゼロの人格と入れ替わりそれで有無を言わせぬ雰囲気ゼロに逆らえずアクアは正座させられていた。

周りの冒険者やウエイトレスの人からは遠目に見られているという非常に気まずい

状態です。

ん？俺ですか？

俺は

アクアが正座させられているという滑稽な光景を注文したシユワシユワを飲みながら眺めています。

だって、自分を地獄に叩き落としたしかも俺たち悪魔の天敵である女神しかも紅魔族以上に頭の可笑しいと有名なアクシズ教の元締の女神が目の前で正座させられてしかも説教されてんのよ？



これ以上に美味しい酒の話のネタは無いね！

「良いか、神様でも許されない事ってのはあるんだ。分かったな？」

「はい…反省しています」

と、どうやらゼロによる説教が終わってしまったらしい。

惜しい、あと少して唐揚げでも頼んでつまみも用意して楽しもうと思ったのに…。

俺が残念がっているかどうかどうやら人格が戻ったカズマが何か疑問に思った事があったのかアクアに何か聞いていた。

「そういえばアクア、お前ギルドに来る前に”ノア様”って言ってたけど。それってもしかしてウルトラマンノアの事か？」

「あ、そういえばそれは俺も気になった」

確かそんな事を泣きながら叫んでいたな。

大して気にして無かったが聞き逃せない単語であるのは確かだ。

「いやね、ウルトラマンってその力使って他の星の命を守ってたりして物凄く徳の高い存在なのよ。」

彼らのお陰で星の崩壊が防がれたり侵略や破滅から助かった人達も大勢いるのよ。

特に”ウルトラマンキング”、”ウルトラマンノア”、そして”ウルトラマンレジェンド”は別格でキングに至っては宇宙そのものの崩壊を防いじやつたりともうとんで

もない存在なのよ。

だからその3人は私たち神々からも尊敬されていて彼らに説教されたりしたりとか女神としては恥どころじゃなくて神としての位も地に落ちたも当然と言っても過言じゃないわ…」

『「成程」』

いやお前、俺に悪のウルトラマンの力を紛い物といつても持たせて地獄に送った時点でチートラマンじゃなくても説教されるべきじゃね？

・・・まあ今の生活には満足しているから問題ないけど。

しかし、今そのノアことネクサスがゆんゆんの中に居るわけだが・・・。

「そういえばさっきのダーククロスだけど、どうしてあんなのがこの世界に居るのかをまだ聞いてなかったな」

「言っておくけど私は知らないわよ？あいつ等突然現れて魔王軍に協力しだして女神としても迷惑してるんだから」

「お前、本当に使えねえな」

「何ですってえ！このヒキニート！」

「残念だったな！生憎こちとらバイトの親方に鍛えられてもう立派なバイト戦士じゃ！」

『あーお前ら、漫才すんのは勝手だが話が進まないから後にしてくれねえか？』

「漫才じゃねえよ！」

「そうよ、こんな完成度の低いものは漫才なんて呼ばないわ！良い？漫才って言うのはね」

「お前は取り合えず黙ってよっか」

「何でよー！2人して！」

『だあもう！話が進まないでしょうが！』

とまあそんな事があつたが何とか落ち着き俺たちはこの世界で起きている出来事について情報をまとめた。

『おいおい、エタルガーやレイバトスってなんだその頭の痛くなりそうなメンツは』

「オマケに”アーマードダークネス”って…」

ゼロやカズマは俺が提示した情報の中の、敵の幹部クラスの力を持つであろう奴らの名前を聞いて頭を抱えていた。

まあエタルガーやレイバトスは最悪超火力や再生が追い付かない程の攻撃でどうとでもなるが、アーマードダークネスは中身次第で状況が最悪な方向にいくからな。

「しかもそれだけじゃなくて、ダークロプスやレギオノイド。オマケにギヤラクトロンや他の宇宙人も確認されている。規模はゼロの言う通り頭の痛くなるメンツばかりだ」

「で、俺たちの戦える戦力はどうなってるんだ？まさか俺たちとアキラだけとか…」

「そこは安心しろ、俺たち以外にも居るよ。今は居ないけどいつかは紹介するよ」

本当はこの場で説明しても良いのだが何せこの世界に来た人物が人物で俺の召喚主が変身する奴がする奴な為に時間を置いて落ち着いた頃に話すべきだと思つた。

「どうやら一応女神のアクアにも存在が分かっているところを見るに変身していない時は感知されないみたいだからな。」

「そっか、分かった。じゃあその時な」

『・・・』

「?ゼロ、どうしたんだ」

カズマが一応納得してくれているとどうやらゼロが何か考えているのか分からないが何か感じ取った彼がゼロに話しかけていた。

「なあ、アキラって言ったか？」

「お前、前に俺と何処かで会ったことあるか？」

「「え?」」

突然何を言い出すんだこの人は。

「おいどうしたんだよゼロ」

「そうだぞ、それに俺はアンタを一方的に知っているだけでアンタと面と向かって話したり知り合ったりした事は無いはずだ。」

「アクア、俺をこの世界に転生させたお前ならわかると思うが俺はゼロとはあつてないよな?」

俺は一応の確認のためアクアにそう聞く。

「前世で死んだ死者についてはどうやらその死因だの前世での行いなどが記載されている筈だ。」

「コイツも俺の事を覚えていた位だからその程度の事はわかるだろう。」

「ええこの人の言う通り、ゼロがこの人と直接会った事は無いわ。」

「…あつ、でも」

「ん? どうしたんだ?」

「いえね、この人のファイル確認したらなんか前世や前前世のページがあつてその中に色がついたページがあつたけど興味なかったからそのまま流し読みしちゃったわ」

『「確実にそのページが関係してんじゃねえか」』

「コイツ、重要な情報は肝心な時に覚えていないアホだったのか…。」

「というか普通はそんな意味深なページ気になって見るだろ。」

「にしてもどうしたんだよゼロ」

『いや、前に何処かで会った気がするんだが。どうやら俺の勘違いだったみたいだ』

「まあ人間、世界には似ている人が3人いるって言うし多分そんな所だろ」

恐らく俺がベリアルルの力を使ったから長年の経験でそう感じるだけかもしれないしな。

「まあそれより、今日のところはこの辺にしておこう。」

「実はこの後急用が入ってな」

「そうなのか、分かった。」

「それじゃあな」

「おう」

「またねー」

俺はカズマ達に別れを告げた後、ギルドを後にした。

・・・それにしても、カズマ達には隠したけど実は少し奇妙な感覚があるんだ。

何故かこの世界でゼロを見た時、“何故か気に入らなかつた”。

可笑しいな、前の世界ではテレビでウルトラマンゼロを見てもこんな感情なんて微塵も起こらなかつた寧ろ好きなウルトラマンだったから好感が持てた。

それなのに、何故かさつきカズマが変身したゼロを見たら何故かそんな感情が浮かび上がって来た。

それだけじゃない最近、妙にモヤが掛かった言葉が聞こえて来る事もある…。

“力だ、力が欲しい”

“超えてやる、俺を見下したあいつ等を！”

「ツ…またか」

この世界に来て、ずっとこんな調子だ。

常に聞こえて来るといふわけでは無いが、それでも奇妙な違和感は消えない。

「まあ今はそんな事より、こっちの要件を片付けないとな」



くカズマ  
s i d e  
く

俺とアクアはアキラと話を終えた後寝泊まりしている馬小屋に帰ってきてアクアは

もう就寝しているようだった。

「が、俺は眠れずにいた。」

「なあゼロ、起きてるか？」

『何だよカズマ、眠れねえのか？』

俺はアクアが起きない程度に声を抑えてゼロに話しかけた。

俺がわざわざこんな時間まで起きていたのは勿論ただゼロと喋るのが目的ではない。

「なあ、俺たちってやっぱりアキラ達が言っていた奴らとも戦わなくちゃいけないんだよな……」

『……奴らの恐ろしさは俺たちウルトラ戦士もよく理解している、ついさつきまともに戦闘を経験したばかりのお前には酷だとは理解している。』

だが、俺との同化が解除出来ない限りお前も俺と一緒に戦う事になっちゃう」

「そっか……」

正直、今回受けたカエルのクエストでさえあのデカさにビビった。

なら、レイバトスやらエタルガーやらにまともに会ったら腰抜かす自信まである程だ。

……でも、このままビビっているだけじゃカッコ悪いだろ。

「なら、明日から暇見つけて俺に稽古つけてくれよ」

『……』

「俺さ、嬉しいんだ。憧れのウルトラマンと一緒に戦えて、ゼロになつて一緒に戦えたあの瞬間がとつても嬉しかったんだ。

……だからさ、せめてゼロの恥にならない位には…強くなりたんだ」

前世じゃ色々あつて引きこもつては折角受かった学校にも行かずに親にも迷惑ばかりかけてた。

そんな俺でも、生まれ変わつて来た異世界では、カッコ位付けたい。

「ゼロ、やっぱ無理か？」

『……』

ゼロは何も言わない。

俺の言葉に呆れたのかどうかは分からないけど、こういう時表情とか確認できないのは痛いな。

『…に…た』

「煮た？」

『気に入つたぜ、その心意気！』

「うをつ」

ビックリした！

というか、今の言葉から察するに。

「つけてくれるのか!?! 稽古!」

『ああ、お前の強くなりたいてって気持ち。俺のハートにもしつかりと届いたぜ！

けど、決心したからには泣き言は聞かねえ。言っておくけどよ、俺の修行は俺の親父

や師匠譲りで中々厳しいぞ?』

「ああ、勿論!」

『へへっ、どうやら俺はまた良いパートナーに巡り会えたみてえだな』

ゼロにそう言ってもらえるとは…。

こりやあ尚更強くないとな。

けど、ジープとか岩落したりとかよりかはマシなやつだよね? ねえ…。

くアルマ s i d e く

俺は一旦店に戻った後、今夜は遅くなる事をゆんゆん達に伝えた後急用を済ませる為にアクセルの街近くの森に来ていた。

「やっぱり悪魔の気配がするな」

しかもこの感じは上級悪魔。

それも俺の知っている奴だ。この感じからするとあつちはもう俺を視認しているらしいな。

「出て来いよ、どうせ見てるんだろ？」 ホースト」

俺の呼びかけに森の木々が揺れ動き葉っぱの音を響かせる。

そして、そんな風に揺らされた森の中から奴は出て来た。

「気付いてやがったのか、流石は元は人間といえど地獄の公爵にまでなった奴だな」

そこからは筋肉質な体に鋭い爪、更には鋭い目つきに角。

正しく悪魔と呼ぶに相応しい姿をした上級悪魔。ホーストが現れた。

「お前みたいな悪魔が駆け出し冒険者しか居ない街近くの森に居るとはな。

やっぱり、ウォルバクが関係してんのかね？」

「おいおい、俺が居る目的まで知ってんのかよ」

「最近アーネスの奴を消し飛ばしたばかりなんでね」

「…成程な、アイツが地獄にも居なくなつて魔力が完全に消えていたから妙だとは思っ

たんだよ」

どうやらアーネスが消えた事はもう伝わっているらしいな。

にしてもウォルバクか。

「確か怠惰と暴虐を司る邪神だったか？また随分な肩書なことだな」

「元人間の癖に地獄の公爵やってるアンタが言うか？」

「違うない。」

で？そのウォルバクの半身とやらを探しに来たんだろ？だが残念だが、奴の半身はお前らの方には行かないと思うぞ。

実際アーネスもそんな感じだったみたいだし」

「・・・マジか？」

「マジだよ」

めぐみんに聞くと、一度はアーネスにウォルバクの半身ことちよむすけを渡そうとしたらしいがめぐみんの元から離れなかつたらしい。

恐らくそれは復活の際に記憶を失ったのとちよむすけというネコ？の体になったのも関係しているのだろう。

というか今にして思えば、以前紅魔の里で感じた悪魔の気配はそのちよむすけだったんだな。

気配もウォルバクに似ていたし、ウォルバク程の力ならあの時モンスター達が何かに怯えた様に暴れだした説明もつく。

「それに、その半身を預かっているのは俺の生徒だね。もしウォルバクの半身とやらを取り戻そうとしてそいつ等に出そうものなら容赦しない。

それに、その内の一人はアーネスの残基全てを傷つけて最終的には全ての残基を使い切らせた奴だ。アーネスと同じ末路を辿りたくなかつたら諦めるのが賢明だ」

「おいおいおい、アーネスがあつさり消されたと思つたらこの街にそんな恐ろしい奴がいやがるのかよ。」

この前落ちて来た光といい、どうなつてやがんだこの街は」

まあネクサスやら一応女神のアクアが来たんじや悪魔にとつてはここは地獄以上のアルカンレティアに次ぐ魔境だと言える。

紅魔の里？アレは例外。

「で？どうする。お前達は恐らくウオルバクと契約している身だろう、なら悪魔としては奴の半身を何が何でも取り戻したいはずだ。」

ではどうする？このまま強行突破を狙つて俺と戦うか、それともこのまま半身は諦めるか」

「・・・」

ホーストは悩む。

まあ悪魔にとつては契約は絶対、それは俺たち悪魔が絶対を守る言わば掟の様なものだ。

ホーストはアーネスとは違ひまだ話の通じる方だが、それでも上級悪魔という肩書とプライドから引き下がりはしないだろう。

「なあ、俺たち悪魔は契約は守る。それはアンタの話聞いても変わんねえよ。」



けどよ、もし俺がアンタに妨害されて倒されたらそれは仕方ねえよな？」

「…ほう」

どうやら、ホーストは大分いやかなり物分かりが良いようだ。

にしても意外だな。

「お前がそんな提案してくるなんて、どういった心情の変化だ？」

お前ってアーネスよりは聞き分けが良かったけど、上級悪魔だから途中で自分から契約を放棄するような事はしれないと思っただのに」

「放棄じゃねえ仕方ねえだろこんな状況じゃ。俺の力じゃアンタには勝てねえし、もし万が一にも俺が勝ってもアンタのいうとんでもない奴が待つてんだろ？」

俺だつて消えたくはねえしよ。

それに…」

「ん？」

ホーストが語りだしていると突然言葉を止めて何やら思い出しているようだ。

何だ？この懐かしむ様な悪魔とは思えない様な感情は。

「実は将来俺を使役してやるつていう我儘なガキが居てな、ソイツかなりお転婆というかお調子者というかまあとんでもない奴なんだよ。

だからあんまり契約が長引いて何時までも使役出来ねえつてなつたら何しでかすか

分からねえからな」

「・・・」

こいつは驚いた。

コイツを使役したいっていう身の程知らずとか勇敢というか、とにかくそんな奴が居たのも驚きだがそんな奴の為に態々倒されようとするって・・・。

「お前、随分とその人間気に入ってるんだな」

「そんなんじゃないよ。こんな勝ち目のねえ戦いやる主義じゃねえってだけだ。」

「そら、一思いにやってくれ」

ホーストはそういうと完全に戦う体制ではなくなった。

コイツ、言葉ではそう言っているが声色やら口調やらで満更でもないっぽい事は一応黙っておいてやるか。

「それじゃお望み通り」

俺は体に闇を纏わせてベリアルに変身する。

そして片腕にエネルギーを纏わせてデスシウム光線の構えを取る。

「一撃で葬ってやる。お前から頼んだんだから恨むなよ？」

「恨まねえって」

「…お前みたいな悪魔、結構好感持てるよ」

「俺も、アンタみたいな実力のある奴は嫌いじゃねえよ」

俺はこの場に居るホーストとの会話を終えると、エネルギーの充填を完了した光線を放つ。

「ホーストは穩便に済んでよかった。ついでに“コレ”も作れたし」

俺はホーストに光線を浴びせて爆発した地点で佇んでいた。

そんな俺の手にはとある怪獣カプセルが握られていた。

それは、以前アーネスを倒した時と同じ方法でホーストを倒した時に出て来た闇の残穢から創り出したものだ。

今回描かれているのは頭と腕にVの赤いクリスタルが付いており、体がクロト赤のカラーリングで紫の模様が描かれている体の戦士。

コイツも本来なら存在しない筈の“ダークネス”ウルトラマンビクトリーダークネス“カプセルだ。”

「これで必要なカプセルは揃った。

後は前作ったギンガダークネスの力を使って体に馴染ませるだけだ。

まあこれが一番面倒な工程なんだけどな」

「しかし最初はカプセルを生み出せるとは思わなかったな。ジードが出来たからベリアルの力持っている俺も同じような事が出来るんじゃないかと思ってやったら出来たから最初は驚いたけど）あの邪神、いくら何でもチートに仕上げすぎだろ」

けど奴が降りて来た時の光を魔王軍側が感知していない筈がない、近々アクセルに幹部を寄こしてくるかもな。

まあ丁度いいや、アレになるための工程に必要な実験台になってもらおう。

「だったらベルディアくん辺りが良いな」

もし来たらアイツが魔王城でやらかした醜態を冒険者達に言いふらして恥かかせて悪感情喰らって、アイツの頭蹴飛ばしてその後で倒してやろう。

「やっべ、考えると面白くなってきた。

早く来ねえかなー」

俺はその後、中々見られない夜の森を探索した後アクセルの街に戻っていった。

## 中二病魔法使いにパーティーを

「ハア…ハア…ハア…」

『どうしたカズマ、ペースが落ちてきてるぞ！』

「む、無茶言うなって…」

俺はまだ日が昇っても居ない時間帯の街をランニングして走っていた。

昨晚ゼロへの特訓の申し出を出して俺がしばらく眠りについていると、ゼロに叩き起こされた。

それからまずは体力作りとして現在のランニングをやらされているのだが、俺の予想の倍以上の距離を走らされた。

いくらバイトである程度の体力は付いたとしてもこれは流石に限度があるぞ…。

『本来なら俺との組手とかをやらせるところだけど、それが出来ないからこれでも大甘で見てるんだぞ？』

「う、ウルトラマンの…と、特訓って、どんだけ…厳しいんだよ…」

まあ確かに特訓と称しての滅多打ちやジープなどよりは何百倍もマシなんだろうけ

ど、初日でやるペースじゃねえよ。

この後は腕立てやらスクワットやらもあるから尚更だよ。

『そんなに辛いならここで止めるか?』

「ツ!…冗談じゃねえ」

折角ゼロがこうやって俺に指導してくれてるんだ、それを早々に挫けて止めるとか前の世界の俺から何にも進歩してねえじゃねえか!

そんなのまっぴらごめん!

「やってやるよ!走り込みでもスクワットでも何でも来やがれ!」

『よーし、その意気だ!…!?!』

「どうしたんだ?」

ゼロとの稽古を再開しようとする、ゼロが何やら驚いていた。

『カズマ、悪いけど今から俺が言う場所に向かってくれ。そこまでは歩いてでもいい』

「え?」

『良いから早く』

「お、おう」

何やら訳が分からないが、ゼロが驚くという事は相当な事だな。

俺は少し理解できなくもゼロの言う通りの場所に向かった。

とまあゼロの言う通りの場所に辿り着いた訳なのだが。

「やあっ！」

「ふっ、ほいっ」

辿り着いたその場所は空き地でそこでは昨日会ったアキラとそんなアキラに攻撃を放っている女の子が居た。

というか、その女の子幼さは有るけどその…胸部が素晴らしくあの子が蹴りを放つ度



にスカートの下のスパッツが見え隠れして何とも……。

『カズマ、鼻の下伸びてんぞ』

「ベツ、べべ別に伸びてねえし!? つてそうじゃなくて。どうしてこんなところに来たん  
だ? アキラの力を感じ取ったとかか?」

『いやそうじゃねえ。勿論アイツの力も感じたが問題はアキラと恐らく稽古をしている  
あの子だ』

「ん? 見た感じ発育が良くて可愛いけど普通の女の子に見えるけど?」

けどアキラと一緒に居るって事は恋人? そうじゃなくても女友達とかか?

くつ、前世では引きこもりだった俺には今のアイツが滅ぼすべきリア充に見えて仕方  
ないっ…。

『お前、絶対に目の前でんな事言うなよ? セクハラで訴えられるぞ。』

そんな事じゃなくて、あの子から感じるんだよ。 “ノア” と同じ力を』

「……へ?」

ノア?

それってひよつとしてゼットンパンチや絆大好きな神様で有名なあのノア様ですか  
? ？」

そんなおっかなビックリなチートラマンの1人があの年端も行かなそうな女の子に

?

「マジですか？」

『マジだ』

「ウソーん……」

「だよなー、俺も最初そう思ってたもん」

「アキラもそう思うか……ん？」

「アキラ？ 確か今はあの女の子と稽古っぽい事してる筈じゃ……」

俺は背後に気配を感じながら背後を振り返ると。

「やあ♪」

「ホワアアアアアッ！」

「おいおい静かにしろよ、近所迷惑だろ？」

「誰の所為だよ誰の！」

急に背後に立って登場って忍者かよお前は！

「あ、あのあr…アキラさん、その人達は？」

「ああゆんゆん、丁度いいから紹介する。昨日話した知り合った冒険者の」

「サトウカズマです。お嬢さん、どうぞよろしく」

俺はオロオロしながら此方に目を向けたこの子に取り合えず紳士風に挨拶を交わす。

人間、何事も第一印象が大切だからな。

何故かゼロがジト目をしているのが伝わってくるがきつと気のせいだろう。

「よ、よろしくお願いします。私、ゆんゆんと言います」

「・・・か、可愛らしいニツクネームですね」

「カズマ、気持ちは分かるが本名だ」

「・・・はい？」

本名？

この如何にもキラキラネームとかそういう類なのに？

「あ、あの…一応、本名です…」

「・・・アキラ、ちよつと良いか？」

「ん？」

俺はゆんゆんと呼ばれる女の子に聞かれない様にアキラを手招きしてヒソヒソと会話を開始する。

「馬鹿にしてんのか」

「気持ちは分かるって言ったろ？それにあの子の種族が皆ああいう名前なんだから仕方ねえだろ」

『どんな種族なんだ？』

「紅魔族って呼ばれる一言で言えば生まれつき知力や魔力が高い魔法使いのエリート集団だ。彼らは皆アークウィザードっていう魔法使いの上級職の適正があつて実際かなり実力が高い人が多いんだが、ゆんゆんみたいな例外は別だが生まれながらの中二病な上に皆変わった名前を持つてるんだ」

『……』

何だその頭の可笑しい集団は、種族名自体は中々にカッコいいが全員が中二病つて変わった名前持つてるって…。

しかもゆんゆんつて子は例外つて事は俺たちみたいな普通の感性を持つてるつて事だよな？

「なあ、失礼な事聞くけどあの子友達は？」

「一応居るには居るがソイツが素直じゃなくてな、しかもゆんゆんは里の中ではその性格故に浮いてしまつてな。ボッチ拗らせてんだよ」

つまり、この子はその普通の性格故にそうなつてしまったのか…。

何故だろう、何故か胸が凄く辛いんだけど…。

「あ、あの！聞こえてますよ！だ、大丈夫ですから！最近ではアキラさんが居ますしこの街でお世話になつている人もお友達になつてくれて大丈夫ですから！」

「ああ、うん…なんかごめんさい」

『何というか、強く生きてほしいなこの子…』

「!?だ、誰ですか今の声ッ」

『「え?」』

ゆんゆんは俺の声ではなく、ゼロの声に反応して驚いていた。

これってもしかして。

「な、なあ。もしかしてゼロの声が聞こえてんの?」

「え?」

俺は腕に付けているウルティメイトブレスレットをゆんゆんに見せた。

『よう』

「ええっ!?ぶ、ブレスレットから声が!」

どうやらゼロの声が聞こえているのは間違いないみたいだな。

そういえばサーガの世界ではコスモスも聞こえてたつて言うし、多分ウルトラマンがウルトラマンと同化している奴には聞こえているつて事だろう。

「あーゆんゆん、説明するから取り合えず落ち着け」

「ただいま説明中」

「とまあこんな感じだ」

『おい、今なんか時間が飛んだぞ』

「ゼロ、そこは気にしちやダメだ」

ゼロが気になる事を言っているが、アキラはゆんゆんに諸々の説明を終えた。

しかしノアじゃなくてネクサスになれるのか。まあそれでもとんでもない事には変わりないんだけどな。

そのついでに彼女が付けている昔のゼロが付けていたブレスレットに似ている奴についても説明してもらった。

アキラから魔力を供給してもらおうとか令○のパスみたいな感じで少し便利だな。

「私やアキラさん以外にもウルトラマンが居たなんて…」

「困みに俺たちだけじゃなくて、他にも沢山いるんだけどね」

「なあ、そういうえばアキラ。さつきゆんゆんと稽古してたけど、アレって」

「ああ、ゆんゆんは一応ネクサスにはなれるけど最近なつたばかりで元がアークウィザードっていう魔法を使う職業だ。」

「だからどうしても近接戦闘という面で本職に劣る。だから少しでもマシになるように、こうして組み手をしているんだ」

成程、確かに俺みたいなウルトラマンが入れ替わって戦うタイプとは違ってウルトラマンに自分になるタイプの場合は戦闘力がその人に左右されるわけだから、アキラのいう事も納得だ。

「そういうえばカズマも、こんな時間に外に出てどうしたんだ？眠れなくてそのまま散歩でもしてたか？」

「ああいや、実は」

『カズマが来るべき奴らとの戦いに備えて鍛えたいって言いだしてな、今日から早速その訓練を始めてさつきまで走り込みをしていたんだ』

「へー」

「あの、奴らって？」

俺たちの会話の内容に着いていけないのかゆんゆんがそんな疑問を口にする。

「そういうえばゆんゆんには説明していなかったな。実は……」

アキラはゆんゆんに、最近出て来たらしいダークロプス達の親玉が魔王軍に現れた事。そしてそいつ等と近々戦う事になるという事について説明した。

「そ、そんな恐ろしいモンスター達のボスが魔王軍に!？」

「ああ、しかもソイツ等は俺たちウルトラマンを確実に狙ってくる」

「どうして!？」

「そいつ等にとつてウルトラマンというか、ウルトラ一族は長年にわたつて計画を邪魔されたり以前倒されたりして恨みの対象でもあるんだ。」

ゆんゆんも、ネクサスの力を持ったからには、悪いが無関係とはいかない可能性が非常に高い」

「ッ…」

ゆんゆんは少し怯えた表情になった。

まあ無理も無いか。俺やアキラみたいにウルトラマンを最初から知つてた訳じゃないし、アキラの話によるとほぼ成り行きでなつたみたいなものだから急に狙われるとか言われて簡単には受け入れられないよな。

「ゆんゆん、受け入れられない気持ちもあるかも知れないが力を持つちまつたからにはそれなりの責任が伴う。」



どういった経緯であれどういった心情であれ、奴らは俺たちに牙を剥いてくる。

お前もそして俺たちも、奴らと戦うからには死ぬ覚悟もしくちやならない」

「ッ！」

「お、おい。流石にそこまで言う事は」

『カズマ、ここはアキラに喋らせろ』

「ゼロ？」

俺がアキラを一旦止めようとすると、逆にゼロに止められた。

確かにアキラの言う通りだ、奴らは例え女だろうが子供だろうがウルトラマンなら間違いない抹殺しにかかって来る。

だからアキラも敢えて厳しい言葉を選んでいるのも理解している。

「でも」

「大丈夫ですよカズマさん、ネクサスさんが力を貸してくれた時から覚悟はしてましたから」

「ゆんゆん…」

「アキラさん、カズマさんにゼロさん。私も戦います。私じゃ足手まといになるかもしれませんが、それでも皆さんのお役に立てるように強くなります！」

彼女は確かな決意のこもった目でそう言った。

「・・・よし、そこまで覚悟が出来てるなら後は訓練や実戦で力を付けるだけだ。言っておくが、泣き言は一切聞かないからな？」

「はい！」

『カズマ、この子が覚悟決めたんだ。お前も男とか云々関係なく気合入れなおさねえとな』

「ゼロ…ああ！」

「こんな俺よりも年下そうな女の子までこんなに覚悟決めてるんだ。俺が訓練の時点までへこたれたら、男としてカツコ悪いだろ。」

「あー良い雰囲気のところ悪いが、アキラ、ゆんゆん。そろそろ店の開店準備をするから戻ってこい」

『!?!』

俺がそんな決心をしていると、突然聞きなれない声が聞こえて来た。

いや、正確には聞いた事はあるがこの世界に来てからは聞いたことが無かったというのが正しいか。

俺は驚いて振り向くと、そこには最早トレードマークというか正装と言っても良いスーツにジャケットの恰好ではなく、この世界で買ったのであろう黒い服装の受けに水色のエプロンを付けたジャグラスジャグラーが立っていた。

「へビクラさん、もうそんな時間ですか？」

「ああ、ただでさえあの店主の商品の見る目の無さで経営が上手くいってねえんだ。お前らだけ遊ばせておく訳にもいかねえしな」

「はいはい」

と、アキラは当たり前のように会話しゆんゆんの方も面識があるのか驚いてはいなかった。

「お、おいアキラ！その人って」

「ん？…ああ、そういえばカズマはまだ会った事無かったな」

アキラは俺に近づくとゆんゆんには聞こえない様に耳元で話し始めた。

「あの人はジャグラスジャグラー、今は訳有ってへビクラシヨウタを名乗っている。どうやら宇宙を適当にふらついていたらこの世界に辿り着いた様でな、今はとある魔道具店でバイトとして働いている」

「え？同じ店で働いてんの？あとで握手とかサインとか貰っていい？」

『おいカズマ、俺の時対応が違い過ぎないか？』

ゼロはこう言っているが仕方ないじゃないか。だってお前今俺の体に入っているから握手もサインも・・・いやサインは多分いけなくもないのだろうが無理だろ。

それにジャグラスジャグラーといえば、あのウルトラマンオーブのライバルにして最近見たウルトラマンZでは隊長を務めていたり、ファンの間ではジャグジャグの愛称で親しまれ人気が高いキャラじゃねえか！

俺も結構好きだったりする。

あ、勿論ゼロの事も負けない位に好きよ？

「まあゆんゆんやその他の人にはヘビクラさんで通してあるから、カズマもそこそこ頼むわ」

「ああ分かった」

「あ？おい、そこに居る奴は誰だ？それにソイツからする気配は」

ジャグラーさんは俺の方を見て何やら怪訝そうな顔をした。

「ヘビクラさん、こちら昨日知り合ったサトウカズマです。それから多分察してると思いますが、ウルトラマンゼロと同化している人間でもあります」

「ゼロだと？」

『久しぶりだなジャグラスジャグラー』

ゼロあブレスレットからジャグラーさんに向けて話しかけると、少し驚いた顔をしたが直ぐに落ち着いた。

「ウルトラマンゼロか。相変わらずあちこちの宇宙に現れるな」

『ジードの世界だけじゃなくてZがいた地球にも居たお前に言われたくねえよ。ハルキから聞いたがその防衛チームでは隊長をやったらしいじゃねえか』

そういえばZってハルキさんと同化してたんだっただけな。

にしてもウルトラマンと同化したらその人の寿命ってどうなるんだろ？

・・・そういえば次会ったらアキラに聞きたい事があったんだっただけ。

「なあアキラ、実は折り返して相談があるんだ」

「ん？」

「アキラの知り合いで魔法使いとか遠距離攻撃が出来る知り合いとか居ないか？実は昨日アキラと別れた後アキラと話してな、昨日受けたカエルのクエストがあるんだけど俺たち2人だけだと厳しくてさ。」

アキラって俺より前にこの世界に転生してきたんだろ？だったらそういう知り合いとか居たりするんじゃないかと思ってるな」

実際昨日は危なかったし、このままだとまともにクエストも熟せず停滞するのが目に見えるからな・・・。

「うーん、・・・あつ」

「おつ、その反応は誰かいるのか？」

「いや、居ると言っちゃいるんだけど。アークウィザードなんだけど、ソイツ何というかインパクトが強いというか一癖あるというか」

「アークウィザードって魔法使いの上級職じゃないか。そんな人だったら少しくらい欠点があっても問題ないって！寧ろそんな凄い人が入ってくれるなら願ってもない！」

「・・・分かった、じゃあ店の準備もあるから後でギルドで落ち合おうぜ」

「おう！」

こうして俺はアキラにそのアークウィザードを連れてきてもらうのを待つ為に一旦馬小屋に戻って残りの筋トレをやり終えてからアクアを起こして冒険者ギルドに向かう事にした。

「あの、アキラさん。あの子を紹介するんですか？」

「ああ。アイツも丁度入るパーティー探してたし、聞いた感じ魔法使い職は居ないらしいからアイツも問題ないだろう」

「ねえカズマ、ホントに新しいパーティーメンバーしかも上級職の新メンバーが増えるの？」

「ああ、あと少しで来るはずだ」

あの後俺はアクアを叩き起こして冒険者ギルドでアキラ達を待っていた。

一応パーティーメンバーの募集の張り紙はアクアがしているのだが、コイツの勧誘の内容は“上級職”に限るとか何やら詐欺の広告みたいな勧誘内容だった為一向に人が来ない。

第一、ここは駆け出しの街なんだからそうホイホイと上級職が見つかるかっての。

『なあカズマ、アキラ達待つてる間にまたアレ頼んでくれよ。あのカエルの唐揚げつてやつ』

「後でな」

ゼロはゼロで俺と意識を切り替えてから味わうギルドで出される食い物を気に入ったらしい。

というか、人間の体を借りて飲食を楽しむウルトラマンって・・・。

「お待たせー」

「あ、あのカズマさんお待たせしました！」

「おっ、来た来た」

そんな事をしていると後ろから声をかけられ振り向くとアキラとゆんゆんが此方に来ていた。

「ん?・・・!?ヒイツ!!!」

「うおっ!?な、何だよどうしたんだよ」



アキラ達が来ると突然アクアが目に見て震えだして席を立ち俺を盾にするように後ろに回って来た。

いや本当にどうしたコイツ。

「か、カズマさん。何なのよそこの女の子、私の曇りなき眼にはこの子からノア様と同じ力を感じるんですけど…」

「落ち着けて、この子はゆんゆんっていう紅魔族らしい。どうやら色々あつてこの子の中にウルトラマンノア基ネクススの力が入っているらしい」

「ハアツ!?ノア様から力授けてもらうって、この子どんなチートよ!」

「え?え、ええと…ごめんなさい?」

「ゆんゆん、謝る必要はねえよ。明らかにお前は悪くないから」

しかし本当にウルトラマンノアとかに頭上がらないんだな。

俺、ノア教とかこの世界にあつたら間違いなくその宗教に入るか応援とかするぞ。

「そういうえば今朝言っていたアークウイザードの人って何処に居るんだ?」

「ああソイツなら」

「ほほう、あなた方が私の力を欲しているというパーティーですか」

「?」

俺の疑問にアキラが答えようとすると、今度はまた別の声が聞こえて来た。

その声の主はアキラとゆんゆんの間をすり抜ける様に現れた。

ソイツは服装としては文字通りの魔女つ子な恰好なマントに尖がり帽子。更には片目には眼帯を付けて青い宝石の様な物が付けられた杖を持っていた。

「コレは世界が選択せし定め。私は、あなた方の様な者の存在を待ちわびていました」  
その子は片手の指3本を立てて顔の前で何やら添えてそんな事を言った。

あれ?この子のこの感じ、何だか嫌な予感が…。

その子はマントを翻し帽子のつばを掴み高らかに宣言した。

「我が名はめぐみん!アークウイザードを生業とし最強の攻撃魔法、

“爆・裂・魔・法”

を操りし者!」

『「……」』

その子の突然の自己紹介に、俺とアクア更にはゼロまで唾然としていた。しかもアキラは遠い目をしておりゆんゆんに至っては顔を赤くして俯いている。

そうと知らずか知ってかめぐみんと名乗ったその子はそのまま言葉が続けた。

「ふふふ、余りの強大さ故世界に疎まれし我が力を汝も欲するか？」

ならば、我と共に究極の深淵を覗く覚悟をせよ！人が深淵を除く時、深淵もまた人を覗いているのだ」

その子は何やら決め顔と決めポーズで満足げにそれを語った。

アキラから紅魔族は中二病の集団だとも変わった名前が多いというのも聞いていたがここまでインパクトがあるのは正直予想外だった。

これが所謂紅魔族の自己紹介というものなのだろうか、1つだけ言わせてほしい。

「冷やかしに来たのか？」

「ちっ、違うわい！」

「まあ初めての人はそうなるわな……」

「ごめんなさい、自己紹介したのは私じゃないけど何だかごめんなさい…」

く天界く

「はあ……ようやくひと段落ですか」

皆さまこんにちは、それともこんばんわ？

まあそれは良いとして私はエリス。この世界の管轄を任された女神です。

実は今私はアクア先輩という日本担当の女神がとある事情で下界に転生の特典として連れていかれた事で、あの人の分の仕事もこなしているのです。

前例がない女神を連れて行くという事態で少なからず天界は騒がしくなり、私は全てではありませんがあの人が担当する日本の仕事もこなさなくてはいけなくなりまし……。

先輩の仕事を押し付けられるのは日常茶飯事でしたけど、流星に此処までのものは初めてです……。

「そういえば日本といえば、確かアキラさんが居ましたね」

彼はアクア先輩の手違いで地獄に落とされて悪魔となり、更にはあの世界に突如として出現した新勢力の対応までしてもらっている方です。

以前会った時いきなり攻撃された時はビックリしましたが……。

「……少し、あの人の経歴が気になりますね」

これに深い意味はありませんでした。

ただ、私たちのお願いを聞いてもらっているのもその人が前世ではどういった人だったのかとちよつとした出来心でした。

そう思うと私は休憩時間を利用して、彼についてまとめられた資料を取り寄せてそれを読み始めました。

「これは、見れば見る程に普通の家庭の方ですね」

彼のファイルには特に変わった所はなく、少なくとも地獄に落とされるような方ではないという事が改めて分かり更に先輩の不手際とはいえ申し訳ない気持ちになります  
…。

「うう…：今度会ったら改めて謝罪しないと…：ん？」

そんな眩きをしていると、捲っていた彼のファイルの中に何やら赤く色分けされているページがあるのに気づきました。

確かこのページは前世のその前、言わば前々世なる項目が記載されたページの筈  
…。

私は気になってそのページを捲りました。

「…：！嘘、これって…」

私はそこに記載された項目に目を見開いていた事でしょう。

それだけ、そこに記載されていた事は衝撃以外の何ものでもありませんでした。

「もしこれが事実なら…いえでも、転生して元の人格は…」

けど、もし万が一という事があります。

彼の身に何か異変が起こっていないとも限りません。

「これは…近々下界に降りて確かめる必要がありますが、ありそうですね…」

私はそう決意すると、そのファイルを閉じました。

## 爆裂は一日1回まで

（闇空間）

そこには、謎の影とレイバトスが話し合っていた。

「先日倒されたダークロプス達の映像を確認して、ウルトラマンゼロがこの世界に来ていることが確認できた」

「…遂に来たか」

レイバトスの報告に影は表情こそ読めないが、その声色から上機嫌で嬉しそうなことが分かる。

しかしそれは純粋な喜びではなく、ある意味怒りとも取れる感情だった。

「ウルトラマンゼロ…待っていたぞ。ジードが居ないのが少し不満だが、まあ贅沢は言わん。奴はゼロを倒した後に俺がじっくりとなぶり殺してやる」

「しかしまさかこんなにも早くゼロが来るとはな」

「ああ、予定外ではあったが、コイツには礼を言わないとな」

影とレイバトスが話している横には1人の星人が居た。



それはゼロがこの星に来る時にブルトンを使って逃亡を図っていたバロツサ星人だった。

彼はこの星に来た時に運悪く魔王城に来てそこで影に捕らえられた。

今のバロツサ星人の命は影とレイバトスが握っているも当然だった。

「バロ…バロツサ！」

「あん？ああ、ゼロが来たのを確認したら開放してやるって話だったな」

影はバロツサ星人を捕らえた時、バロツサ星人からゼロもこの星に来たのを聞いた。

そこで影は、「もしゼロが来たのが本当だったら開放してやる」との約束を取り付けた。

影にとってはバロツサ星人は取るに足らない存在、要件が済めば直ちに「解放してやる」つもりでいた。

そして影はその約束の通り、バロツサ星人の拘束を解いた。

「バ…バロツ！」

「一々礼を言うな、さっさと消えうせろ」

影は鬱陶しそうに手を振った。

バロツサ星人はそれに感謝するような仕草でその場を去ろうとしレイバトスもそれ

を止めなかった。

「この世からな」

「!?」

バロツサ星人はこの空間から出ようとするあと一歩のところまで足を止めた。

その胸に刺さった“三又の槍”によって。

「バ…バロ…」

「あ…どうしてだつて？」

「決まってるだろ、お前達バロツサ星人は宇宙海賊。獲物の為ならどんな強奪も裏切りも平気でする。」

「そんな奴を生きて開放して、万が一後から乱入でもされたら折角の計画が台無しになっちゃう」

影は槍に刺し貫かれて動けないバロツサ星人に近づきその刺さっている槍を手に掴

んだ。

「そういえば、お前の兄弟たちはZとかいう奴と後は、あー…そうトリガーだ。ソイツ等にやられたんだってな、兄弟たちと同じ場所に送ってやるから」

影は槍を少し振り

「…家族によろしくな」

引き抜いた。

槍を引き抜かれたバロッサ星人はその刺された傷口から鮮血を飛び散らせ、断末魔を上げながら爆発した。

「良かったのか？バロッサ星人を生かして我らが戦力にすれば…」

「奴らは気まぐれだ、生かしておいても何をしでかすかは分からないからな。それに、配下の宇宙人どもはまだ沢山居るんだ。」

そんな事より、魔王からの伝言は聞いてるか？」

影とレイバトスはバロッサ星人の死などまるで最初から無かったかのように振る舞い話を始めた。

「アクセルという街に謎の光が落ちた。その光の調査へ首無し騎士デュラハンのベルディアを向かわせる。万が一の為に、此方からも戦力を1人出せ」との話だったな」

「ああ、俺はその戦力としてエタルガーを向かわせることにした。だが、それだけじゃ面白くないだろう？」

影はそう言うのと、どこからか黄色く輝くカードを取り出した。

「!?まさか、それを使う気か！」

「ああ、ウルトラマンゼロ相手には出し惜しみは無しだ。それに、アルマだけでなくどうやらネクサスまで居るようだからな。」

言っちゃ悪いがエタルガーとベルディアだけでは役不足だ」

影は以前アクセルの街近くに向かわせたダークロプスの映像から確認したネクサスの姿を思い返しながら方針を伝えた。

影の見立てでは最初はエタルガーを向かわせればゼロとアルマの現段階での実力は大体は把握できると判断していたが、ゆんゆんが変身したネクサスというイレギュラーから方針を変更した。

影が取り出したカードはその為に必要なピースだ。

「ネクサス…彼の伝説の超人ウルトラマンノアの不完全な姿か。しかし、何故この星に奴が居る？」

「さあな。けど、心当たりならある」

レイバトスの疑問に影は目の前に小規模の闇を発生させることで応える。

闇からは古びた一冊の書物を取り出してそれを開いた。

「それは？」

「この世界に俺たちが来る随分昔に書かれたと思わしき書物だ。この世界に散らばらせた兵たちが見つけたものでな

ここにこう記されている。

“この書物を読む者よ、これらの事は現実を起こつた事である。

恐らく其方たちの時代からは遙か昔になる事だろう、我らの時代。突如として恐ろしい闇が現れた。

闇は己が力を見せつけるかのように、或いは何かに怒る様に我らに牙を剥いてきた。我らが闇の恐るべき力に絶望した時、空から大いなる光が降りて来た。

光はこの地でアンデッドを始めとするモンスターたちを吸収した事で力を増した闇と激しい戦いを繰り広げた。

そして長き戦いの末に光は勝利し、闇は封印され地上には平和が戻った

この書物を読む者よ、闇は消滅した訳では無い。

闇はいずれ復活する。光は我らの前から姿を消し、彼の者が再び現れるのは闇が復活する時であろう」

大雑把な内容はこんな感じだな」

「そこに記されている光がノアだと？」

「多分な、けど重要なのはノアと思わしき光ではなく正体不明の闇の方だ」

影は闇に覆われていても分かる程に上機嫌な声で書物を撫でる。

「闇だと？」

「ああ、考えても見ろ。ノアと思わしき光でも封印するのがやっとな闇、しかもネクサスが現れたって事はソイツの復活が近いって事だろう？」

「ツ！まさか貴様……」

「察しが良いなレイバトス」

レイバトスは影が何を考えているのかを察した。

しかしそれは余りにもとんでもない考えだった。

「俺たちが観測できないって事はまだ眠ったままか、力を抑えているか、又はそれ以外の理由があるのか。」

どちらにせよ、その闇とやらをどうにか俺たちの力にさえ出来れば」

「貴様、その闇を取り込むつもりか!？」

「それは状況によるな、戦力になるならそれでよし。

まあなるようになるさ。それより、お前はこれをエタルガーに持っていていけ」

影は驚愕するレイバトスに構わずカードをレイバトスに投げ渡した。

「・・・了解した」

レイバトスはカードをキャッチすると、そのまま闇空間を後にする。

影は一人になった空間内で静かにたたずみ上を見上げた。

「ゼロは来たぞ、お前も早く来いジード。」

歓迎するぞ、なんたつて俺とお前は運命で結ばれているんだからなあ・・・クツクツク、クハハハハハハハハハッ!」

影は可笑しくてたまらないと言わんばかりに狂った笑い声を上げた。

その狂った笑いは空間に木霊し影の声を反響し、響かせる。

そんな彼の目には彼のウルトラマンベリアルの息子とそのベリアルの長年の宿敵しか映っていないかった。

カズマ side

俺たちはめぐみんという子の紅魔族伝統（らしい）の名乗りを聞き終えた後、それぞれ席に着いて諸々の説明を始めた。



「しかしこの子がゆんゆんと同じ紅魔族つてのは分かったけどさ、聞いた感じだとゆんゆんとは友達なんだろう？どうして態々アキラじゃなくて俺たちのパーティーに？」  
「友達ではなくライバルですよ。」

考えてもみてくださいよ、同じパーティーに魔法使いが2人とか私が目立てないじゃないですか！

しかし、ゆんゆんは先生と同じパーティーでないと悪魔やアンデッドも真つ青な状態になつてしまうので仕方なく私が別のパーティーを探す事になつたのです」

「成程」

『プライドが高いんだな』

ん？待てよ、今この子誰の事を先生つて言った？

「なあ、その先生つて誰の事だ？」

「ああ初対面ですから知らないんですけどね、アキラ先生の事ですよ」

ほうほう成程、アキラがね・・・

は？

「アキラ、お前教師とかやってんの？」

「そういえばカズマ達には話してなかったな。実は紅魔族の族長達が悪魔が教師とカツコいいとはつていう理由でゆんゆんやめぐみんが通う魔導学校の教師として働いてい

た時期があつたんだ。

俺一応魔法とか体術とかは出来たから、授業はそれらの実技や座学を少し担当する程度だったけどな」

つまりコイツはあれか？

ゆんゆんみたいな美少女と同じ学校で生徒や教師をやつて、学園ラブコメみたいな展開をしてたつてののか？↑誰も一言もそんな事は言つてません。

「アキラ、お前には後で話がある」

「どうした急に」

「兎に角！私は私の力を欲するあなた方の様な存在を待ちわびていたんです！

私が加わつた暁には、あなた方のパーティーを最強に導いてご覧にいきましょう！」

「おおっ」

なんとも頼もしい！

さつきの自己紹介とかは少しアレだったけど、この子のこの自信から実力は期待できそうだな。

アキラが言っていた一癖あるというのは多分性格のことだろうしそこまで深刻になる事もなかったな。

「まあめぐみんは見ての通り魔法使いの上級職であるアークウィザードで、使える魔法

は……」

「おっと先生、我が力を先にバラすのはやめてもらおうか。」

この人達には私から直接我が強大な力を見せてこそ意味があるのですから！」

「というわけだから、まあよろしくやってくれ。見ての通り悪い奴ではないから………多分」

「おい、どうしてそんなに間を置いて発言した上に多分と言った理由を聞こうじゃないか」

めぐみんはアキラの返事が気に食わなかったのか掴みかかるが、頭を押さえられて手をジタバタさせるに止まった。

何というか、見た目特徴は全然違うけど兄妹の喧嘩を見てる気分だな。

しかし………。

『なあカズマ、俺なんだか嫌な予感するんだけど』

「ゼロもか？実は俺も……」

というかさつき爆裂魔法だのなんだのって言ってなかったか？

「何をブツブツと話しているのですか？」

「ああいや……」

「カズマ、この子はゆんゆんの中にいるネクサスについても知ってるからゼロの事を話

しても大丈夫だと思うぞ」

そうなのか。

まあアキラがそう言うなら大丈夫だな。

そんなこんなで、俺はめぐみんにゼロの事を話した。

だがするとどうだろう…。

「貴方もですか?!?」というか、どうして私の知り合いばかり隠された力とかに覚醒したりおいしい展開が多いんですか!私だつて隠された力に目覚めてカツコよく活躍したいのに!

どうしてですか?!?」

『「どうしてと言われても…」』

めぐみんは杖を両手で握りしめてそんな言葉を大声を上げながらしかも荒ぶりながら口にした。

にしてもどうしてと言われてもな…ぶつちやけ俺がゼロになれたのは偶然が重なったからで、アキラに関してはアクアに半端押し付けられる形だしゆんゆんに至ってもハッキリした理由は分かかってないからな。

「とにかく、めぐみん。俺たちは言われた通りについては行かないが決して迷惑はかけない様にな?」

「そうよめぐみん、貴方はただでさえ短気なんだから気をつけてね？」

「2人は私の親ですか!??」というかどうして私が問題を起こす前提なのです! 2人は私をどう思ってるのですか!??」

「猫、或いは本能で動く獣だな」

「ハッ倒しますよ貴方!」

「あ、アキラさんもめぐみんも落ち着いてえええつ!!」

話が進まねー……。

「ね、ねえカズマさん? 新しいパーティーメンバーもきた事だし早く行きましょ?」

「どうしたんだよいきなり……お前まさか、アキラへの失態をネクスラスに悟られたくないから早くここから離れたいとかか?」

「…………アンタみたいな勘のいいガキは嫌いよ」

「……」

成程、そう言えば昨日ノアとかに怒られたら女神として地に落ちたもの当然。みたいな事言ってたっけ…。

「あの、ゆんゆんさん。実はですね」

「ねえ待って! お願いだからノア様に言わないで!

お願い、もう馬鹿にしたりとかしませんから!



めぐみんは持っている杖の先を俺たちに気付いていないのか上の空っぽいジャイアントトードが佇んでいたカエルに向ける。

「ですので、あのカエルの足止めをお願いします」

「成程な、よしアクアお前は支援魔法を使って「おりやあああああつ！」って待てや！」  
アクアは俺が支持を出す前に、何を思ったのか目に火でも焚いてそうな位に熱くなりそのままジャイアントトードに向かって走り出した。

「ここで会ったが2日目よこのクソカエル！昨日は色々あつてアヤフヤになったけど、今日こそは神の力を思い知りなさい！」

ゴツドブローー！

「おおっー！」

『何じゃアリア!?』

アクアは右手に光をまもって何だか凄そうな技を放った。

・・・けど待てよ？確かカエルって。

「ゴツドブローーとは、女神の怒りと哀しみを込めた必殺の拳！相手は死ぬぬ！」

“ブルンっ”

そんな効果音が聞こえてきそうな光景が俺の目の前で行われていた。

アクアの拳は見事にカエルに命中したが、カエルは微動だにしなかった。

確かギルドのお姉さんがジャイアントトードのお腹は打撃を吸収するので打撃系の攻撃は殆ど効かないから、打撃系統の攻撃はしないようにって注意受けてたんだっけ……。

アクアもそれは聞いていた筈だけど……。

そんな事を思っているとアクアはカエルをゆっくりと見上げた。

恐らく今のアイツの目にはカエルのデカイ顔がドアップで見えている事だろう。

「……か、カエルってよく見ると可愛いと思うの。くきゅっ!」

せめてもの助かる手段だったのかそんな事を呟くが、無情にもアイツの頭から胴体にかけての部分はカエルのデカイ口の中に納められた。

「…流石は女神、身を挺してカエルの足止めを果たすとは」

『いやいや思いつきりパツクリいかれてんじやねえか!』

「そうは言っても……ってゲッ!」

俺たちがそんな会話をしていると、別の場所からまたカエルが出て来た。

マズイアクア（脚）があんな状態じゃ、俺が奴を倒すしかないのか……。



『お、おいカズマ！アレを見ろ！』

「へっ？」

そんな緊急事態にゼロが慌てた様子で俺を呼ぶと俺が振り向いた先でめぐみんが杖にとんでもない量の魔力を集めていた。

「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたまう。

覚醒のとき来たれり。

無謬の境界に落ちし理。

無行の歪みとなりて現出せよ！

踊れ踊れ踊れ、

我が力の奔流に望むは崩壊なり。

並ぶ者なき崩壊なり。

万象等しく灰塵に帰し、

深淵より来たれ！

これが人類最大の威力の攻撃手段、

これこそが究極の攻撃魔法」

まるで渦のように集められた魔力を充填し終わったのか。めぐみんは杖を掲げ構えた。

「エクस्पロージョン！」

めぐみんの杖から解放されたその魔法は、新たに現れたジャイアントトードの頭上に巨大な魔法陣を展開した。

その魔法陣は更に上に幾つも展開されていき、展開し終わると光の柱がジャイアントトードを貫く様に叩き込まれた。

その光がジャイアントトードに直撃すると、とんでもない轟音と振動と共に大爆発を引き起こしジャイアントトードどころかそれが立っていた地面ごと巻き込んだ。

爆発が収まったその場所には、焼け焦げたデカイクレーターしか残っていなかった。

「すっげえ、これが魔法か」

『この威力、タロウ教官のウルトラダイナマイトに匹敵するな』

「マジかよ……」

タロウってのはウルトラマンタロウの事だよな？ そのタロウが使うウルトラダイナマイトに匹敵って。

とそんな事を思っていると、爆裂魔法の音と衝撃に起きたのか地中から別のジャイアントトードが出て来た。

「またカエルかよ……めぐみん！ 一度距離をとって……へ？」

俺はめぐみんに指示を出そうとすると、めぐみんは力なく地面にうつ伏せに倒れていた。

「我が爆裂魔法は最強魔法ゆえ、その代償も莫大なのです。

要約すると、限界を超える魔力を使い果たしたので一步も動けません。

近くにカエルが居ます、食われます。あの、出来れば助けていただけるとくぎゆっ…」

めぐみんはアクアと同じく、色は違うがジャイアントトードの口の中に胴体まで収められた。

2人は全く同じ格好でカエルに飲み込まれかけている。

「…ゼロ、多分同じこと考えてるよな？」

『ああ…』

「お前ら…」

俺は、市販の剣を構えて全速力でアクアとめぐみんを食っているジャイアントトードに走り出した。

『「食われてんじゃねえー…」』



「うう、グスツ…生臭いよお、生臭いよお…」

「カエルの口の中っていい感じに温かいんですね、知りたくもない知識が増えました」

俺たちは一応カエルを倒し終えると俺が動けなくなったためぐみんを背負って街に戻って来た。

しかし、ただでさえヌメヌメの女2人を連れてるのにアクアが泣いてそんな事を繰り返して咳いているから周りからの視線が痛い…。

ゼロも姿こそ見えないけど何だか疲れ切った様な顔しているのを感じる。

というかアキラの言っていた一癖あるってのはこの事だったのか？

「なあ、めぐみん。今後は、爆裂魔法は緊急時以外は禁止な。使用する魔力が大きいと魔力の代わりに命を削るらしいから。コレからは他の魔法で頑張ってくれ。」

「使えませんよ」

「……何が使えないって？」

思わず、オウム返しのように言葉を返した。

めぐみんが、きゅつと俺に掴まっていた手を強くした。

「…私は爆裂魔法しか使えません。他の魔法は一切使えません」

「……」

マジかよ。

それが事実だったら一癖どころの話じゃねえだろ・・・。

「爆裂魔法しか使えないってどういうこと？爆裂魔法を習得できるほどのスキルポイントあれば、他の魔法もスキルを習得出来るはずよ？」

俺が絶句していると、アクアがいつも通りに戻り話に参加してきた。

「えっ？ちよつと待って、アクア。スキルポイントって、何だ？」

『そーいや初耳だな』

「スキルポイントは、ジョブに就いた時に貰えるのよ。クラススキルを習得するポイントね。もちろん、最初が私みたいに優秀な人ほど、貰えるポイントが多いのよーだから、私は宴会芸スキルを全て習得してからアークプリーストのスキルを習得したわよ」

「なあ、アクア。宴会芸スキルっていつ使うんだ？」

アクアは俺の質問を無視して話を続けた。

「クラススキルの習得するのにも、注意点があつてね。水が苦手な人は、水魔法・氷結魔法を習得するのに普通の人よりもスキルポイントを使ったり、習得出来ない場合があるの。それでね、今回の爆裂魔法は複合魔法だから、様々な属性が絡みあつてできる魔法なのよ。」

「なるほど。だから、爆裂魔法が使えるぐらいなら、他の魔法を使えないわけではないのか」

確かにそれならアクアの言う通り他のスキルが習得出来てそんなもんだけどな。

「私は、爆裂魔法をこよなく愛しているアークウィザード！爆発系統の魔法が好きなんじゃなく！爆裂魔法が好きなんです！」

確かに、基本魔法とか習得していれば旅は楽になるでしょう！ですが、ダメなんです！私は、爆裂魔法しか愛せない！例え、1日1発しか撃った後に倒れようともいいんです！私は爆裂魔法を愛しているんですから！だから、私は爆裂魔法を使うためにアークウィザードの道を選んだんです！」

『……』

めぐみんの覚悟というか何とも言えない決意に満ち溢れた言葉と目を見て俺とゼロは今度こそ言葉を失う。

それってつまり、この子がまともに戦えるようになるのはとんでもない未来の話になるのでは？

「素晴らしい！素晴らしいわ！その非効率ながらもロマンを追い求めるその姿に、私は感動したわ！」

あ、これはダメな奴だ。

この魔法使い完全にアッチ側の人間だ。

よりによってアクアが同調しているのがその証拠だ。

アキラ達には悪いがウチにはこれ以上問題児を抱える余裕は無い、ここは丁重にお引き取り願おう。

「そ、そっか、茨の道だろうけど頑張れよ。今回の報酬は山分けしてまたいつかどこかで会おう!…!?!」

と俺が別れを切り出そうとすると、めぐみんがさっきまでのぐったりはどうしたのか強い力で掴んできた。

「我が望みは爆裂魔法を撃つ事のみ。食費とお風呂代さえあれば無報酬でも構わないと思っています。

アークウィザードの強大な力が、今なら食費とお風呂代だけで手に入るのでしょ?

これはもう、長期契約を結ぶしかないのではないだろうか」

このロリっ子、捨てられたくないが為に何としても諦めないつもりだな!?

いやここで諦めてはダメだサトウカズマ、お前の幸運と知力でこの場を切り抜けるのだ!

「いやいや、俺達みたいな弱小パーティには宝の持ち腐れだつて。特に俺とアクアなんて、まだレベル低いしゼロ居ないとほぼ戦力にならないから!」

「いえいえ、私だつてレベル低いですしゆんゆんや先生という例が居るので境遇てきにはほぼ同じです!レベルが上がれば魔法で倒れなくなります!だから、引き剥がそうと



しないで！」

くっそコイツ、魔法使いの癖に意外な握力してやがるっ……!

「いやいや一日1発しか魔法撃てない魔法使いとかないわー！」

コイツ遂に足まで使って拒んできやがった。

こうなったらとことん言ってやる!

「お前多分他のパーティーにも捨てられた口だろ。というかダンジョンにでも潜った暁には、爆裂魔法なんて狭いダンジョンじゃ使えないし、いよいよ役立たずだろ、お、おいこら離せ。てか、本当に握力つええなあ！」

「もうどのパーティーも拾ってくれないのです!荷物持ちでも何でもしますから捨てないでください!貴方たちに捨てられたら本気でゆんゆん達に泣きつかないといけないんです!私のプライドの為にも捨てないで！」

「そんなもん知るか!というかこんな街中であんまり捨てないでとかつて連呼すんな!」

このままだと……。

「やだ……。あの男、あの女の子を見捨てるつもりよ」

「ほら、見て。隣の女の人も粘液塗れにされてるわよ。いったいどんなにプレイしたのかしらあの変態!」

「しかも女の子は2人ともぬるぬるよ!」

ま、マズイ。名も知らぬ女性達が俺とめぐみんのやり取りを見てあらぬ誤解をしてしまっている!?

「・・・!ふっ」

「はっ!」

その瞬間、俺は気付いてしまった。

コイツの目と仕草を見て、気付いてしまったのだ。

本能的な恐怖などが入り混じった感情が俺の中を駆け巡り、額から嫌な汗が流れる。

「どんなプレイでも大丈夫ですから!」

先程のカエルを使ったヌルヌルプレイだって耐えて見せます!だから捨てないでください!」

「よし分かった!めぐみん、これからもよろしくな!?!だからそのセリフは止めてもらおうか!」

『カズマ・・・ドンマイ』

こうして、俺は異世界に来て新たなパーティーメンバーとしてまたもや問題児を抱える事となってしまったのである・・・。

## 女騎士に夢を見ていた時期が私にもありました

カズマ達がクエストに向かった後俺とゆんゆんは今日をどう過ごそうかと考えていた。

今日はジャグラーさんから特別に休暇を与えられ本格的にどう過ごそうかと悩んでいると、ゆんゆんがどこから取り出したのかトランプを取り出してきた。神経衰弱でもやろうという話になった。

最初は暇さえ潰せばよかったのだが……。

「えーつと、こっちなかなー。それともこっちー?」

「…なあゆんゆん」

「え? あ、ごめんなさいアキラさん! あと少しで決まりますから!」

「ああ、うん。大丈夫だ、ゆっくり考えなさい」

「良いんですか!?! じゃあえーつとー」

真剣衰弱を始めてからというものの、ゆんゆんは物凄い棒読みで裏返されたトランプのどれをひっくり返そうかと悩んでいた。

しかもいざトランプを選んでも外して、その次も何故かわざとらしく一度捲った筈のカードを間違えたりしている。しかもそれを何度も繰り返して、流石に俺も空気が読めるのでそれに乗っかって俺も外している。

彼女のこういう所は実は初めてではない。

紅魔の里でも初めて俺と出会って家に連れて来た時には今みたいに神経衰弱を相手にし、今みたいにわざと外している。

ゆんゆんは紅魔の里では前にも言ったかもしれないがポッチを拗らせており一人でチェスだのトランプタワーだのをやるのも珍しくなかった。

なので誰かとうとうして遊んだりするとそれを終わらせたくなくてなるべく引き延ばす様にわざとこうしているのだ。

最初はそれを指摘しようとはしたのだが、あまりにも楽しそうに目を輝かせ棒読みでゲームをしているのだ。

これは俺だけでなくめぐみやゆんゆんの親、そして現在彼女が泊っている魔道具店のジャグラーさんやウィズも知っている。(特にジャグラーさんに関してはいつものから考えられない位に親身になってゲームをしてくれていたりする)

それをかれこれ1日中やっているの、今はもう日も暮れてきていた。

「そっか、いざカズマ達大丈夫か？一応ゼロが居るとはいつてもめぐみんはまあ、アレだ

し…」

「そうですね、めぐみんったら爆裂魔法1つしか覚えていない上に撃ったら動けなくなりますから。」

「そういうえばアキラさんは知らないと思いますけど、めぐみんったら里でも爆裂魔法撃つて里の皆に迷惑かけてその罪を悪魔に擦り付けたんですよ。」

「しかもその動けなくなったためめぐみを私が運ぶ羽目に…」

「えつとお、なんか…ごめん」

「良いんです…」

「紅魔の里の魔導学校では成績トップの筈だったんだけど、喧嘩っ早くて我慢弱くて爆裂狂と言っても良い程の頭の良かれ具合だ。」

「全く誰の所為であんな性格に…．．．あはい、俺の所為でもあるんですけどね。」

「おーつす…何だ、神経衰弱か。俺もやっていいか?」

「あつ！カズマさん！どうぞどうぞ、ゲームはお友達と一緒にやった方が楽しいですから！人数が多いに越した事はありません！（わあ、今日はお友達が増えたー）」

「多分ゆんゆんの事だから友達が増えたと思って喜んでるんだろうな。」

「にしても。」

「おいカズマどうした、顔色が優れないけど」

「ああ、実はな」

『カズマ、ここは俺から言う。』

実はな』

何やらゲンナリした様子のカズマに変わってゼロが説明を始めた。

そしてゼロが今回受けたクエストの事とアクアが食われた事（この部分を聞いた俺が笑いそうになった事は秘密だ）やめぐみんが爆裂魔法を撃って動けなくなった事。そして帰る途中でめぐみんの強引な交渉というか脅しで強制的にパーティーに加える事になったのとその所為であらぬ噂を立てられそうという事について聞いた。

因みにアクアとめぐみんはカエルの粘液まみれになったので今は風呂に入っているらしい。

「何というか……うちの元生徒が、ご迷惑をおかけしています……」

「ごめんなさい……私のライバルが色々ごめんなさい……」

「うん、良いんだ。それより真剣衰弱か、楽しそうだな。早くやろうよ」

『なあカズマ……始めたばかりでアレだけどよ、特訓はしばらく休みにするか?』

「ううん、俺特訓頑張る。だってこのままだとマジで詰むから」

ダメだ、コイツあまりの現実に早くも打ちのめされ始めてる。

しかも話を聞くにアクアって高ステータスの割には幸運値が最低レベルでしかも知



るつきり詐欺の広告じゃねえか。流石は信者増やす為なら詐欺でも犯罪でもやると有名なアクシズ教の元締めめのお女神だ。

しかしこの女性の恰好を見るからに職業はナイトかクルセイダーってところか？

悪魔の俺としては聖騎士とかごめんだが決めるのはカズマだし、上級職だからカズマの負担も減るしそう連続でアクアたちみたいにな奴が来るとも思えないしな。

「あー……まだパーティーメンバーは募集してますよ。と言つても、あまりオススメはしないですけど……」

「そうか、よかった……あなたのような者を、私は待ち望んでいたのだ。ぜひ私を！ ぜひ、この私をパーティーに！」

カズマが断ろうとしたその手を彼女は食い気味に掴んだ。

あれ？この感じ、なーんか嫌な予感が……。

「い、いやいや、ちよつ、待つて待つて、色々と問題があるパーティーなんですよ、二人いる仲間はポンコツだし、俺なんて最弱職で、さつきだつて仲間二人が粘液まみれいだだだだっ!？」

粘液まみれと言つた瞬間に、カズマの手を握る彼女がその手に力を込めたのかカズマが異様に痛がった。



「やはり、先ほどの粘液まみれの二人はあなたの仲間だったのか！ 一体何があつたらあんな目に……！ わ、私も……！ 私もあんな風につ！」

「えっ!？」

あれれー？可笑しいぞー？

ほら見なさい、流石にゆんゆんもポカンとしているし多分ゼロも似たような感じだぞ。

「いや違うー！ あんな年端もいかない二人の少女、それがあんな目に遭うだなんて騎士として見過ごせない。どうだろう、この私はクルセイダーというナイトの上級職だ。募集要項にも当てはまると思うのだが」

今更取り繕ってるがカズマもこの女騎士がヤバイ人種だということ察したようだ。心なしか息も荒いし頬まで染めてやがる。

しかしカズマの中に居るゼロに青のアクア、赤のめぐみに金色の目の前の剣持ちの女性……。

「ッ……」

「あ、アキラさん!?!大丈夫ですか!」

「お、おいアキラ!?!」

『アキラ!』

そこまで思考したところで俺は謎の頭痛に襲われた。

別に特別酷い訳では無いが無視できないものであるのは確かだ。

「な、なあ大丈夫か？どこか具合でも」

「……あ、ああ大丈夫です。悪いなカズマ、俺今日はもう店に戻るわ」

「お、おう。気を付けて帰れよ」

「あ、アキラさん！私も行きます！それじゃあカズマさん、また会いましょう！」

俺は頭を押さえながらギルドを後にし、ゆんゆんもトランプを素早く回収して俺の後を追って来た。

「あのアルマさん、本当に大丈夫なんですか？」

「ああ大丈夫だ。痛みも大分治まって来た」

俺とゆんゆんはすっかり暗くなったアクセルの街の道を歩いていた。

ゆんゆんは俺の方に手を置きこちらを心配してくれているようだ。

「それにしても最近のアルマさんなんだか変ですよ。お店に居る時も朝起きて来たら上の空ですし」

「いや別に何でもないよ、しいて言うなら最近変な夢を見るくらいだ」

「え？アルマさんって、寝たりするんですか？・・・あ、そういえばアルマさんは元は人間だったんでしたっけ」

俺もいくら悪魔になったとはいっても人間だったときの習慣が抜けずに時々趣味として睡眠をとっている。

そしてそんな睡眠をしている時に思いつき靄が掛かって音もノイズが掛かっている物を見るとときがある。

しかもその夢では決まって“悪意”“悲しみ”“憎しみ”などの負の感情が殆どだ。だが中には“親しみ”などといった感情も見えてはいる。

「とにかく俺は大丈夫だから、ゆんゆんが気にする様な事じゃないから」

「そうなんですネ・・・分かりました。けど、何かあったら私たちを頼ってください。私はあ、アルマさんの契約者ですから！」

「ハハッ、頼もしいな俺の契約者様は」

彼女は普段は引つ込み思案で大人しい性格なのにこうやって思い切った発言をする時がある。

これは彼女がネクサスの力を持つ前から備わっていたことで、もしかしたら彼女のそんなところがネクサスが力を貸してくれた理由の一つかもしれないな。

「それじゃ、もしもの時は本当に頼むぞ。俺の契約者様」

「は、はい！で、でもあんまり期待しないでくださいね!!？」

「そこは嘘でも言い切って欲しかった感はあるな」

ホント、こんな締まらない終わり方でさえ彼女ならなんやかんやで彼女だからと納得しちまう自分がいる。

・  
・

「あーごめんゆんゆん、先に店に戻つていてくれ」

「え？」

「少し急用が出来た。ウイズやヘビクラさんには今夜少し遅くなるって言っといてくれ」バツ

「あ、アルマさん!?」

俺はゆんゆんの戸惑いの言葉を気にせずそのまま人気の無い裏路地を走り去っていった。

「・・・」

俺はあの後ゆんゆんと別行動をとり人気の無い空き地に来た。

確かここはこの位の時間帯になると全く人通りが無くなりこの周囲には人が住んで

いないという場所だった。

普通なら人なんて来ない時間帯のこの場所に来たのには訳がある。

「おい、さっさと出てきたらどうだ」

俺は誰もいない空き地の路地裏への道の一つに向かってそう声をかけた。

「いやはや、流石ですね」

そんな路地裏に続く道から一人の男の声が聞こえてきた。

その声の主は暗がりから出てくるとその姿は、黒いスーツに黒のネクタイという紳士風な服装をしており見た目年齢はぱつと見20〜30代後半といったところだろうか。

その男性は紳士風な立ち振る舞いと笑みを浮かべながら両手を後ろで組みながら姿を現した。

「何が流石だよ。わざと俺にしかわからない様に殺気を向けてきたくせに」

「その事についての無礼については謝罪します。」

ですが、どうしても貴方様のお耳に入れておきたい情報が有りますので」

「情報だと?」

なんだコイツ。

急に現れたら嫌に腰が低いしかと行ってそれが貼り付けた物だったり演技だったり

する様子はない。『本当に敬意を表して接して。』来ています。なら、益々わからない。

「一応聞いておきたい、俺とアンタは初対面な筈だよな？」

「ええ、その認識で相違ありませんよ」

「だったらどうしてそんなに親しげに話す？」

「その様なことは失礼ながら今は重要では無いかと」

「……………続けてくれ」

目の前の男の言動が気になるところだが、コイツの持っている情報とやらも気になる。

俺は疑問を抱きながらもソイツの情報を聞く事にした。

「では遠慮なく。」

近頃魔王軍に新勢力が現れたのはご存知かと思えます」

「ああ、最近ソイツと雑魚とはいえ戦ったからな」

「それはそれは素晴らしい、そのお力を是非今後ともお高めください」

「世辞はいい、早く続けろ」

「お世辞では無いのですが……………まあ、良いでしょう。」

実はその勢力で『魔王獣』なるものが存在している様でして」

「魔王獣だと!?？」

魔王獣。

ウルトラマンオーブを苦しめかつて地球にてオーブの前のウルトラマン達の力によつて封印されていた6の属性を司る正しく災害とも呼ぶべき魔王が如き怪獣の総称だ。

その一体一体が解き放たれば嵐を起こし大地を割るなどの災害を巻き起こす。

「ええ、私の独自の調査で実際の数は不明ですが存在する事は確かな様です」

「マジかよ……」

もしコイツの話信じるなら、この戦い。予想以上に厳しいものになりそうだな。

しかし解せんな。

「どうしてそんな情報を俺に話す? アンタは俺に何を要求する」

「要求などとはとんでもない。私、いえ我々はただ貴方様のお役に立ちたいだけなので  
すから」

「……………」

嘘は言っていないみたいだな。

しかしコイツの昔から俺を知っているみたいなき調がどうにも気になる。

コイツは、俺の見るあの光景について何か知ってる可能性があるな。



「おい、アンタは俺の何を知っている」

「申し訳ありませんが私の口からは今は明かせません。」

ですが、来たるべき時が来たら、全てをお話ししますよ」

男は一方的にそう告げると俺の方を向いたまま後ろ歩きで元の暗がりの中へと消えていった。

「お、おい待てっ!」

俺は慌ててそれを追いかけてしようとするが、その時にはもうその男の姿は完全に闇に溶け込み見えなくなってしまうていた。

「何だったんだ、アイツは…」

少なくとも俺の前いた日本であんな知り合いはいなかった筈だ。

だとしたらやっぱりアクアが覚えていないという俺の前前世とやらが記載されているという俺の転生者ファイルとかというものが頼りか。

「取り敢えず、店に戻ってジャグラーさんにもこの情報は伝えておくか」

俺は様々な疑問を抱きながらも頭を振るい魔道具店に向けて足を進めた。

## 番外編 2

「本物は誰だ？」

ここはアクセルの街の某所、めぐみんはウルトラマンについて色々考察していた。

「ウルトラマン…先生の様な闇の存在や我々紅魔族を象徴する赤い姿の者が存在している」

めぐみんはそんな言葉を発しながら、なぜか杖を野球のバットの様に振りかぶった。

「!?」

そんな彼女の目の前に赤と銀の体を持つ存在、初代ウルトラマンが通り過ぎた。

「初代ウルトラマン…」

めぐみんはそんなウルトラマンを見つけて紅魔族の血が違ったのかウルトラマンに話しかけようと後を追う。

「よつめぐみん、何してんだ？」

「先生ですか。初代ウルトラマンを見つけました」

「おっマジか、それじゃ俺も行くよ」

途中でアルマが出てきてめぐみんはそれに何か言うこともなくウルトラマンの跡を追った。

そして曲がり角に差し掛かりそこを曲がったところでそれはいた。

「!?」

彼らの目の前には赤と、銀の体に吊り上がった目と違った爪先のウルトラマンがいた。

「へアツ」

「見つけましたよウルトラマン!」

「いや待て待て待て待てめぐみん、これニセウルトラマンだから」

「ニセウルトラマン?何を言ってるのです、どこからどう見てもウルトラマンでしょ?」  
めぐみんは「何言ってるんだコイツ」みたいな目でアルマを見るがアルマはそれを気にせず教え子に間違いを指摘した。

「いや確かに、確かにぱつと見はウルトラマンだよ?けど」

アルマはニセウルトラマンに近づき顔を指差す。

「この顔みてみ?思いつきし目が吊り上がってんじゃない、それに足のつま先も尖ってるし」

「そりやウルトラマンだって生きてますから顔つきや体型だって変わりますよ」

「いやウルトラマンの顔って鉄仮面みたいに表情ほぼそのままだかな？それに足のつま先が変わるってどんな体型変化だよ。」

「いやそれだけじゃない。おいちよつと、スペシウム光線撃つてみ？」

「へア？」

アルマに言われてニセウルトラマンは両手を十字にして構えた。

「が、そこから光線は出なかった。」

「ほら光線出ないでしょ？」

「エネルギー切れなのでしょう」

「いやそうだったら胸のタイマー鳴るからな？」

「ん？」

めぐみんがアルマを開かれた目で見ていると今度は別の存在が出てきた。

「シヤアツ！」

今度は見た目はまんまウルトラマンが出てきた。

しかし体が黒と赤のカラーリングとなっていた。

「今度こそ現れましたね、ウルトラマン！」

「いやちよつと待てい！」

確かに、今回は見た目はウルトラマンだよ？けど、色合いが完全にウルトラマンダー

クなのですか?」

そう、今回出てきたのはウルトラマンダークである。

「フォームチェンジ的なものをしたのでしょうか」

「ウルトラ兄弟は現代に至るまでに強化フォームはありませんが?」

アルマ達がそんな話をしてしていると

「シャアツ!」

ウルトラマンダークは両手をクロスさせて上に向かって黒いスペシウム光線を放つた。

突然の事に2人は明け暮れるが直ぐに正気に戻る。

「ほら、今度はちやんと光線を撃てましたよ?」

「いやあんな邪悪なスペシウム光線本家は撃たないからな!?!?」

アルマはめぐみんに対してそんなツツコミをしまくる。

「ヘアツ!」

そしてそんな彼等の目の前に、今度は本物のウルトラマンが現れその両隣にニセとダークのウルトラマンが並び立つ。

「どれが、一体どれが本物だというのです!?!?」

「明らかに真ん中だろ……」

世の中には同じ顔をしている人間が3人いるというが、ウルトラマンにも同じ顔をしている者が3人もいるらしい。

く本物は誰だ？2く

めぐみんは再び街を出歩いてた。

「この前はウルトラマンを見つけてられて良かったです。しかし先生は何をそんなに煩かったのでしょうか？」

めぐみんはこの前のアルマの慌て具合がどうやら微塵も自分が関係しているとは思っていないらしい。

「ん？」

そんなめぐみんの目の前に、またもや現れた。

「デュワツ！」

「!？」

めぐみんの前に、今度は赤い体に頭にあるアイスラッガーと額のビームランプ。ウルトラセブンだった。

セブンはそのまま走り去っていった。

「アレは確か、ウルトラセブンでしたか。先生からはある程度は話は聞いていますが折角ですから話しかけてみましょう」

めぐみんは走り去ったセブンを追いかける為にその場から歩き出した。

「ん？めぐみんどうしたんだ？」

「ああ先生ですか」

そんな時、めぐみんに話しかける存在が居た。

アルマである。

「実は前に先生から聞いた事のあるセブンというウルトラマンを見つけまして、今から話しかけようかと」

「おい、今度は大丈夫なんだろうな？」



「デエヤー！」

「・・・」

アルマたちは前回同様に直ぐ追いついた。

だがそこにいたのは、赤と青のツートンカラーで頭には2本のスラッガーが備え付けられていた。

「ようやく見つけましたよ、ウルトラセブン！」

「いや待てや、コイツどう見てもウルトラマンゼロだろ」

そう、彼らの目の前にはウルトラマンゼロが此方を振り返り立っていた。

「確かに親子で似ているところは有るには有る、けどさよく見ろ。向こうはセブンよりは目つき悪いし、色も赤と青じゃねえか！」

「良いか？めぐみん。セブンはな、レッド族なんだよ」

「レッド族？」

「そうレッド族！一応ゼロもそうなのかもしれないけど、セブンは全身真っ赤なの！」

ゼロはな、赤と青両方あるの」

アルマは若干肩で息をしながらもめぐみんにセブンとゼロの違いについて説明を行った。

「……………デヤッ！」

するとゼロは左手首に付けているウルティメイトブレスレットに手を当てた。するとゼロの体は赤と銀の体であるストロングコロナゼロへと変わった。

「…赤じゃないですか」

「へ？……………!? どうしてよりによって今ストロングコロナになってんだよ！」

アルマはそんなキレたツツコミを行うとゼロは頭の2本のブーメランの刃、ゼロスラッガーを取って構える。

「アイスラッガー！」

「ゼロスラッガーだったの。良いか？セブンののは1本しか無いんだ。

ゼロは、2本なの。

それに、ストロングコロナはまだ銀色が結構残ってるからな!?？」

そう、ストロングコロナゼロは体の青かった部分が赤く、赤かった部分が銀色の戦士だ。

セブンは上下共にプロテクターやライン、顔などを除けば真っ赤なのだ。

「デヤッ……………ウオオオオオオオオオオオオッ!!」

するとゼロは突然赤いオーラを纏って叫び声を上げたかと思うと今度は全身真っ赤な姿、ワイルドバーストに変身した。

その様子をめぐみんは横目で見ており。

「真っ赤じゃないですか」

「……………だから何で今ワイルドバーストになっちゃうんですかね!?」

というかめぐみんもめぐみんだ! 紅魔族は知力が高い筈じゃなかったのか!?」

アルマは目の前の勝手にコロコロ赤色に近づけるゼロと色々迷走しまくるめぐみんに頭を抱えずにはいられなかった。

そしてそんな彼等の後ろにまた新たな気配がした。

「!?!?」

「ふんっ」

そこには全身が黄金に包まれた1人の剣士が立っており、彼の手には同じく黄金の剣が握られていた。

「今度こそ見つけましたよ、ウルトラセブン!」

「違うからな!?」

コイツ、アブソリユートテイターンって言ってもはやウルトラマンですらねえからな!?」

今回出てきたのはアブソリユートティターン。

ウルトラギャラクシーファイトの運命の衝突からその存在が確認された剣使いのアブソリユートティターンだ。

「しかも今のゼロと違って似てる要素一つもねえし金ピカだからなコイツ！赤くも何ともないからな!?？一体どこを基準に決めてんだお前は！」

「…」

アルマのその言葉にめぐみんは特に何か言葉を発することなくティターンのとある部分を目を細めながら指差した。

それはティターンの頭に装備されているアイスラッガーの様な刃だった。

「これか!?？この部分だけ見て判断したってのか!?？」

「というか体が金色なのはどうやって説明すんだよ！」

「グリッター状態になったんでしよう」

「お前グリッターを手頃になれる金ピカとかと勘違いしてんじやねえだろうな!?？」

アルマはウルトラマンティガから伝わる伝説の姿を複雑な捉え方をされて思わず声を荒げてしまう。

すると、不意にティターンが口を開く。

「偶には息子にカッコいいところを見せんな」

「テイターンそういうセリフ言わないからな!?? しかもそのセリフだってメジャーでも決め台詞でも無いし!」

「……………」ピカーン

「こ、怖いよお前…急に目の光灯してから睨みつけるなって……………」

テイターンは何が気に食わなかったのか普段は暗くなって黒一色の目元に二つの目の光を灯してアルマを睨みつける。

「ダーツ!」

「!??!」

そんな彼等の元に一つの勇ましい声が聞こえる。

アルマとめぐみんがそちらを振り向くとめぐみんが探していた件のウルトラセブンが居た。

そしてそんなセブンの両隣に元の形態に戻ったゼロと剣を構えるテイターンが並び立った。

(因みにアルマ達から見た並びはゼロ、セブン、テイターンの順である)

「誰ですか……………一体誰が本物だというのです!??!」

「もう俺は知らん……………」

世の中には同じ顔をした人が3人いると言うが………1番右は明らかに違うだろ。  
そんな事をアルマは目の前でチューチュートレインをし始めた3人をマジマジと見  
つめるめぐみに頭を痛くしながら見て感じていたのであった。

## 犯罪、ダメ。絶対

謎の男と遭遇した翌日、俺とゆんゆんはウイズの店の準備を手伝っていた。

「ウイズ、このポーシヨンの箱はこっちで良いんだよな」

「はい。あ、ゆんゆんさん。そちらの魔道具はこっちの棚に」

「はいー」

「おい、倉庫の清掃は終わったぞ」

「ありがとうございますへビクラさん、後は商品の整理をお願いします」

俺とゆんゆんはポーシヨンなどの商品を並べたりしてジャグラーさんは店の中をある程度掃除してもらうのと元々ある商品の整理、ウイズは店で取り扱っている商品の確認などをやっている。

前まではめぐみんも一緒に手伝いをしていたんだが、新しいパーティーを見つけたらこの店を出ると言って現在は別の宿に泊まって偶に手伝いに来てくれるようだ。

因みに俺は昨日謎の男から魔王獣について聞いた事をジャグラーさんに話した。ジャグラーさんの見解からすると。

『魔王獣は1体1体が強力な力を持つてはいるが奴らを探し出すには奴らの起こす災害を頼りにするしかない。奴らには有るかどうかは知らないが魔力で見つけられる可能性は低いからな。』

奴らの起こす災害と奴らの放つプレッシャーを頼りにするしかない』

との事だから実質、実際に奴らと遭遇するしか見つける方法が無いに等しいわけだ。

「おいアルマ、ゆんゆん。お前ら店の準備終わったらいつも通りクエスト受けに行け。」

お誂え向きに「アレ」があるかもしれないからそれを逃さず稼ぐ準備をしておけ」

「了解です」

「わ、分かりました!」

「あ、あのアルマさんゆんゆんさん? 幾ら」アレ」の時期とはいえ無理はしないで良いですからね?」

「そう思うならアンタはこの店を繁盛させるのに少しは力を注げ。ただでさえ売れない商品の所為で赤字続きなんだからよ!」

「う、売れないって何ですか! どの商品も品質も良く性能も良いとても素晴らしい物なんですよ!」

「良すぎるから問題なんだよ!」

何だ、高純度のマナタイトにレポート水晶だと!? こんな高額なものをこの駆け出し



の街で購入できる奴がいると本当に思ってたのか！

オマケに容器を開けたら爆発するポーションにパラライズの範囲を広げるだけじゃなくて自分にもパラライズが掛かる魔道具だとか!? どうして普通の商品を置こうと思わないんだアンタは！」

ウイズとジャグラーさんはこの店の商品について口論を行い始めた。

ウイズの店はジャグラーさんの言う通り極端に良質な商品とその真逆の商品が置かれていたのだ。

しかも物が物なだけに莫大な金額な為この街では購入できるのはそれこそ貴族クラスのみなのだ。

なのでこの店はウイズが食う物に困る程に貧乏な暮らしになるのだ。

だから俺とゆんゆんが店を請け負ってやっているジャグラーさんに変わってクエストを熟して稼ぐことでせめて食費だけでも繋ぎとめていられるのだ。しかもダークロプスやレギオノイド達を倒す事で貰える報酬もかなりの金額になるので暮らしには困らないのだが、油断するとウイズがまた変な商品を購入するのでこうして俺たちが居ない間はジャグラーさんがストッパーとなってくれているのだ。

「つとこんなもんだな。ゆんゆん、ギルド行くぞ」

「は、はい！あ、ウイズさんへビクラさん行ってきます！」

「はい、いつてらっしやい」  
「行つてこい」

俺とゆんゆんは魔道具店の準備を終えてウイズが店と赤字にしないかの心配を抱えながらギルドに向かった。

ギルドに着くといつもの騒がしい雰囲気広がっていた。

「さて、どんなクエストを受けるかね」

「今受けられるものといったら」ジャイアントトードの討伐」他にも」グリフォンとマンティコアの討伐」や」近頃街近くに現れるダークロプス達の討伐」とかがありま  
すね」

うーん、本来なら高難易度のクエスト受けるかして高い報酬を貰いたいがゆんゆんは

最近になってようやく上級魔法を覚えはしたがいきなり高難易度は流石にキツイと思う。

だから程々な難易度のクエストから受けた方が良いかとは思うが…。ん？

「あれって…」

俺の視線の先ではカズマとめぐみんがテーブルで朝食をとっているところだった。

昨日の女騎士の事で俺は途中で帰ったから結末までは知らないんだよな。

それに昨日途中で帰っちまったからそれについては謝らないとだし。

「アレはカズマさんとめぐみんですね。2人で朝食でしょうか？」

「見ての通りだろ。まあ折角だし挨拶しに行くか」

というかよくギルドを見回すと、アクアがカズマ達とは離れた場所で他の冒険者達に恐らく余ったスキルポイントを使って宴会芸スキルを取得して冒険者達に見せているのであろう現場を目撃した。

あれじゃ水の女神じゃなくて宴会芸の女神だな。

「よっカズマにゼロにめぐみん。カズマ昨日は悪いな途中で帰ったりして」

「アキラか、おはよう。それと昨日の事は気にすんな、お前ももう頭痛は良いのか？」

「ああ。1日休んだら見ての通りよ」

『そうか。それは良かった』

「め、めぐみんおはよう！ぐ、偶然ねこんな所で…めぐみん？」

「……この我が……ロリっ子」

めぐみんに挨拶を交わそうとしたゆんゆんが何やら暗い雰囲気めぐみんに困惑する。

「……いや本当にどうした？」

「おいカズマ、めぐみんはどうしてこんな雰囲気にな？」

「さあそれは俺にもさっぱり。それより丁度良かった、アキラって確かめぐみんと同じアークウイザードだったよな？」

実は俺スキルポイントつてのが溜まって、でもそんなに多くは無くて。だから手頃に覚えられそうなスキルは無いか？」

「そういえばカズマの職業って冒険者だったな」

この世界の冒険者というのは言わば最弱職と呼ばれているのだが特製として教えてもらえさえすれば他の職業のスキルも使えるというメリットがある。

ただし、本職より多くスキルポイントを食う上に本職程の出来前ではない為本当に他のクラスのスキルを覚えられるだけなのだ。

だが、この特性はかなり重宝されても良いくらいだとは思っている。

「俺の持っているスキルでか…因みにポイントつてどのくらいだ？」

「えーつと…3ポイントだな」

「とすると上級魔法は無理だな。かといって中級も厳しいだろうし…」

この分だと初級魔法くらいしか教えられないな。

しかも前カズマから聞いた話によるとカズマとゼロはそれぞれで別のステータスになってるらしい。

ゼロの人格に変わればこの前ダークロプス達を倒したからそれなりにポイントが入ってるがそれはゼロの人格での話。

カズマはカードにレベル4の3ポイントと書かれているので、それは多分前のジャイアントトードの分だろう。

「そういえばカズマ、お前ゼロの技を使えたりするか？冒険者って一応スキルならどれでも覚えられるらしいし、ゼロの光線技とかを覚えられれば」

「それについてはもう試したんだけど」

『どうやら、カズマの冒険者カードには俺の技などは記載されてなかった。』

恐らく俺たちの持っている技とこの世界のスキルは魔法かエネルギーかなどの違いがあるため、スキルとして覚える事が出来ないんだろう』

「成程」

俺が俺の特典の光線を一応使えはするからカズマでも同じ事が出来るんじゃないか

と期待したんだが、世の中そう上手くはいかないらしい。

「何々？皆んなで何の話してんの？」

おつとどうやら宴会芸を終えたアクアが戻ってきた様だ。

「ああアクア、実はカズマに新しいスキルで何か無いかつて聞かれてな。

そういうえばお前アークプリーストだったよな？使えそうなスキルって何か覚えてるか？」

「なんだそんな事？ふふん、任せなさいよ。このアクア様はね、アークプリーストの全てのスキルを習得しても余ってたから宴会芸スキルを覚えられる程の逸材なのよ！」

あ、ゆんゆん様おはようございます」

「お、おはようございます。そ、それから様はやめてください！」

コイツ相変わらずゆんゆんの中にいるネクサスに対して腰が低いな。

まあともかく。

「よかつたなカズマ、スキルの当てがあつて」

「ホント、コイツ無駄にステータスは高いからな」

「アンタ、ノア様の前じゃなかつたら張つ倒すところよ？」

まあ良いわ、とにかく見てなさい」

アクアはそう言う一つのコップを取り出した。

その中に水を入れた後何かの種を入れたかと思うと頭の上に乗せ、更にそれも何処から取り出したのか2つの扇子を開いて掛け声を上げる。

するとコップの水が無くなり種が育ち直ぐに花が咲いた。

「どうよ？」 ドヤア

「誰が宴会芸教えろつつつたこの駄女神！」

「何でよお〜ツ!!」

うん、使えるスキルを教えてもらいたかったのに宴会芸なんて教えられたら誰だつてキレル。俺だつてそうする。

しかしこれは困った事になった。

カズマはゼロに頼りからならず自分で強くなる必要がある、その為にはスキルが必要不可欠だ。

しかし今のポイントだと、使えそうなものといえれば…。

「あつはつは！ 面白いねキミ！ ねえ、キミがダクネスが入りたがってるパーティーの人？ 有用なスキルが欲しいんだつたら、盗賊スキルなんてどうかかな？」

「？」

俺がそんな悩みを抱えていると俺たちに向かって、いやより正確に言うならカズマに向かつて女性の声が聞こえてきた。

声のした方を向くとそこにはヘソまで出ている程に軽装な格好をした銀髪でシヨトヘアの頬に刀傷の様な傷がある女性が立っていた。

しかも彼女の隣には昨日会ったクルセイダーの女性までいた。

「えーつと、どちら様で？」

「あ、自己紹介が先だったね。

あたしはクリス、クラスは盗賊だよ」

「それでえつと、盗賊スキル？　どんなのがあるんでしょう？」

カズマの質問に、盗賊風の女の子クリスは上機嫌で話を進める。

「よくぞ聞いてくれました。盗賊スキルは使えるよー。罠の解除に敵感知、潜伏に窃盗。持つてるだけでお得なスキルが盛りだくさんだよ。キミ、冒険者なんでしょ？　盗賊のスキルは習得にかかるポイントも少ないしお得だよ？　どうだい？　今ならクリムゾンビア一杯でいいよ？」

そういえば俺盗賊職じゃないから忘れてたけど確か盗賊のスキルが今のカズマのポイントでも習得可能だったな。

にしてもより取り見取りなスキルをキンキンに冷えたクリムゾンビア一杯で教えてくれるとは太っ腹な事だ。

「マジですか？　すみませーん！　この人にキンキンに冷えたクリムゾンビアーっ！」



クリスに酒を奢った後カズマと俺さクリスとダクネスに連れられ人気のない広間に来ていた。

俺は盗賊のスキルがどんなものか気になるので付いてきました。

ゆんゆんは落ち込んだアクアとめぐみんと一緒に置いてきました。

「では、まずは敵感知と潜伏をいってみようか。《罨解除》とかは、こんな街中に罨なんてないからまた今度ね。じゃあ、そうだね。」

「アキラくんだっけ？ちよつと後ろ向いててくれない？」

「ん？」

質問の意味が分からなかったが、スキルの取得に必要な事だと分かり俺は直様後ろを向いた。

すると、後ろから何かを俺に向かって投げた気配がしてきた。

「!?？」 スッ

俺は直ぐに振り返るとこちらに向かつて投げられてきた小石を素早くキャッチすると体に回転をかけてそのまま投げ返した。

「ひっ」

俺が投げ返した先にはクリスがおり彼女は俺が投げ返した小石を咄嗟に躲した。

すると小石は後ろの樽の1つに直撃すると俺が少しばかり本気で投げた影響か木製の樽は音を立てて壊れた。

「な、何するの!?？」

「それはコッチのセリフだ。いきなり石なんて投げてきやがって」

そりゃ、最近まで戦闘バツカやってそれで反射的に投げ返した俺も悪かったが石投げてくる方も悪いと思う。

「い、今のは潜伏スキルを使う為に必要な段取りだったの！それでさっきの樽に隠れて発動すればあたしの気配が消えるようになる筈だったんだよ！」

「それは悪うござんした」

ちよんちよん

「ん?」

そんなやり取りをしていると、金髪の女性ダクネスが背中を突いてきた。

何かと思い振り向くと彼女の片手にはどこから拾ったのか先程より大きい小石が握られていた。

「わ、私にも先程の見事な投球を」

「やらないよ?」

いきなり何をトチ狂った事を言いやがるんだこの人は。

とまあそんなこんなあつてカズマは無事? 潜伏スキルを取得できた。

「……さ、さて。それじゃ気を取り直してあたしのイチ押しスキル、窃盗をやってみようか。これは対象の持ち物を何でも一つ奪い取るスキルだよ。相手がしつかり握っている武器だろうが、鞆の奥にしまい込んだサイフだろうが、何でも一つランダムで奪い取る。スキルの成功確率はステータスの幸運に依存するよ。強敵と相対した時に相手の武器を奪ったり、大事に隠しているお宝だけかつさらって逃げたり、色々使い勝手のいいスキルだよ」

成程、つまりは幸運値が高いカズマにうってつけのスキルって訳か。

こうやって色々なスキルを覚えられるとなると冒険者も良いかもしれないな。

「因みに言っておくが、俺にそれをやるなよ?」

「うっ……分かってるよ。」

それじゃあ気を取り直して早速いくよ! 『ステイール』!」

『!?』

俺との話が終わるとクリスはカズマに向けて片手を突き出す。

するとその突き出された手が光り俺たちの視界は一瞬で光に覆われる。

そして光が収まるとクリスの手には1つの袋が握られていた。

「あつ、俺のサイフ!」

「おっ! 当たり前だね! まあこんな感じで使うわけさ。それじゃ、サイフを返……」

クリスはカズマにサイフを返そうとすると何か思いついたのか返す事なく不敵な笑みを浮かべた。

「……ねえ、あたしと勝負してみない? 早速窃盗スキルを覚えて、それであたしから何か一つステールで奪っていいよ。奪ったものがあたしのサイフでもあたしの武器でも文句は言わない。この軽いサイフの中身だと、間違いなくあたしのサイフの中身や武器の方が価値があるよ。どんな物を奪ったとしても、キミはこの自分のサイフと引き換え……どう? 勝負してみない?」

どうやらクリスのカズマに大人しくサイフを返すつもりは無いみたいだ。

まあ弱肉強食のこの世界でこういった事は珍しくない。

それにカズマもやっと来た冒険者っぽい事に感動でもしてるのかサツとスキルを覚えてワクワクした顔で片手を握りしめていた。

「早速覚えたぞ。そして、その勝負乗った！ 何盗られても泣くんじゃねーぞ？」

そう言つて右手を突き出すカズマに、クリスが不敵に笑つて見せた。

「いいねキミ！ そういうノリの良い人つて好きだよ！ さあ、何が盗れるかな？ 当たりはそうだね、魔法が掛けられたこのダガーだよ。こいつは40万エリスは下らない一品だからね。……そして、残念賞は潜伏スキルの説明の際にぶつける為に多めに拾つといたこの石だよ！」

「あつーズリイ！」

クリスのダガーを見せた後それを鞘に収めると懐からこれまたどこから持つてきたのか小石を幾つも両手に持つていた。

今日はよく小石を見るな。

「これは授業料だよ。どんなスキルも万能じゃない。こういった感じで対抗策はあるもんなんだよ。一つ勉強になったね！ さあ、いつてみよう！」

わーお性格悪い。

しかもあれだけ自信満々なところを見るにカズマと同じくアイツもかなり高い幸運を持つている可能性が高い。

ステイールの際に幸運の差が結果に左右するかは分からないが、少なくともカズマはアイツの小石を引き当てる可能性が高い。

『へッ、面白えじゃねえか。なあカズマ!』

「ああ、ゼロ!」

よし、やってやる! 俺は昔から運だけは良いんだ! 『ステイール』っ!」

ゼロに勇気付けられカズマは自信ありげにクリスと同じステイールを発動した。

光が収まるとカズマは何か掴んだのか握り拳のままその手に握られた物を確認する。

しかしクリスが自分のズボンを見て顔を赤くしてるが……まさか。

「なんだコレ……!!」

カズマは手に持ったものを太陽に掲げて何なのかを確認する。

アイツが持っていた物は、白い三角の布だった。

つまり、パンツである。

「ヒヤッハー! 当たりも当たり、大当たりだあああああああ!」

「イヤアアアアアア!? ぱ、ぱんつ返してええええええつ!」

カズマは手に持ったそれをブンブンと振り回しクリスはズボンを押さえながら懇願する。

しかし、パンツ片手に笑顔で喜ぶ男と股を押さええてパンツ返してと頼む女とは……完全にアウトな絵面だよな。

「な……なんとという鬼畜の所業……! や、やはり……やはり私の目に狂いは無かった

！ それでこそ私の入るパーティーに相応しい！」

「アンタもアンタで十分イカれてるな」

『…ツ〜』

ゼロもゼロでなんだか沈黙してるし。

多分、今のカズマを注意しようと考えたけど自分もそれを煽ったようなものだから下手に何かを言い出さないのだろう。

とまあ、1人の冒険者によつてこんなカオスな様子が繰り広げられる事となったのでした。

「うう…」

「も、もう泣きやめって。悪かったよ。」

ちゃんとパンツも返したんだからこれ以上泣かれるといよいよヤバいんだけど」

あの後俺たちはギルドに戻ろうとしたのだが、クリスが俺とカズマに話があるとしてダクネスだけを先にかえしたのだ。

「しかしどうしたんだ？俺とアキラをここに残すなんて。」

まさか、パンツ取られた腹いせに俺たちの身包みを剥ごうってわけじゃ…」

「無いよ！君はあたしをなんだと思ってるのかな？！」

「そうじゃなくて！」

「このままじゃ話が進まないな。」

まあ態々カズマと俺を残したって事は言っても問題ないだろう。

「……………そろそろ本題に入ったらどうだ？クリス。」

いやそれともこう読んだ方がいいか？

女神エリス」

「へ？」

コイツに会った時から嫌にチラつく鬱陶しい光でなんとなくだが分かっていた。



「……………気づいていたんですね、私の正体に」

「まあな。そもそも髪を短くして頬に傷を作ったくらいで誤魔化せるとでも？」  
「流石の洞察力です」

「な、なあエリスって？この子の名前はクリスなんじゃないのか？」

「というか俺だけ展開について行けないんだけど」

「そういえばカズマはエリスには会ったことが無かったな。」

「まあ力を抑えられているせいなのか俺もパツと見は同一人物とは確定出来なかった訳だし。」

「俺やバニルなどの悪魔が現世で力を抑えられているみたいなものか。」

「それより今から大切な話があります。」

「ここでは少々話じづらいので、場所を変えましょう」

「クリスもといエリスはそう言う周囲に俺たち以外人がいない事を確認すると目の前に光のゲートを開いた。」

「それではコチラに入ってください。カザマアキラさん。」

「サトウカズマさん。そしてウルトラマンゼロ」

「ゼロの事を知ってるのか!?」

『「どうやらそうらしいな。カズマ、今はコイツについて行った方が良さそうだ」』

「よし、行くぞ」

俺たちは目の前に現れたゲートやエリスの出現に驚き困惑しながらも彼女が開いた光の扉に向けて足を踏み入れた。

女神っていつも意味深な事言ってくるよね（エッチな意味じゃないよ）

「つと、またここに来る事になるとはな」

「ここつて、俺とアクアが会った場所じゃねえか」

『この空間…かなりのエネルギーで溢れているな』

俺たちはクリスが開いた光の門を通つて、またあの空間に来ていた。

俺にとつては3度目でカズマにとつては恐らく2度目の空間だろう。

しかし悪魔になったからかこの空間への嫌悪感が凄い。

「突然のお呼び出しに応じてくれてありがとうございます」

「え？」

『!?』

俺たちがこの空間に入ってくるのを確認して元に戻ったのか、そこにはクリス……

ではなく俺と会った時の姿のエリスが立っていた。

「だ、誰？」

「クリスだよ。今はエリスっていう女神だけど。

因みにアクアとは違ってまともな方の」

しかし女神としての姿を表してから鬱陶しい光が余計にチラついてやがる。

俺この光嫌いなんだよな…。

俺がそんな事を思っているとカズマは何やら一人葛藤し始めた。

そして何やら考えをまとめたのかエリスに向き直った。そして。

「改めて初めまして。サトウカズマです。

エリス様でしたね、とてもお美しいですね」

「えっ？は、はい…：：：ありがとうございます？」

『カズマ、鼻の下伸びきってんぞ』

「ハツハツハツ、何を言うんだいゼロ。俺はいつもこんな話し方じゃあないか」

コイツ、目の前に美人出てきたら直ぐにキザになるタイプか。

まあエリスは女神でさえなければ速攻で告るくらいには美人だから何となく気持ちは分かる。

と、今はそんな事はどうでも良い。

「で？俺達をここに呼んだ理由って、まさか魔王獣とやらが関係してるんじゃないだろうな？」

「知ってたんですか!?!?」

『「……………はっ!?!?魔王獣!?!?」』

俺の口から出てきた思わぬビッグワードにエリスとカズマとゼロは息びったりな声を上げる。

「実は昨日の夜黒スーツの男に声をかけられてな。

その時に魔王獣が居るって事を知ったんだよ」

「ちよ、ちよつと待てよアキラ!魔王獣が居るつてのも驚きだけどさ、黒スーツの男つてジャグラーさんじゃないよな!?!?明らかに怪しい人だよな!」

「アキラだけにつてか?」

「今はそんな上手いこと言つたみたいなの雰囲気は要らないんだよ!」

そんな怪しい男の存在をなんで今になって話した訳!?!?」

「聞かれなかったから」

『「もつと報連相を大事にしろ!報連相を!」』

カズマとゼロの奴日に日に息びったり度合いがあがつて行ってやがる。

しかし報告しなかった俺も悪かったが、そこまで怒ることなくないか?

「アキラさん、そういう考えだから怒られるんですよ」

「何でさ…:というかナチュラルになんで心読めてんだよ」

「女神ですからね」ニコツ

うざってええ。

これだから女神とか神とか嫌いなんだよ。

特に北欧のゼウスとかメソポタミアのイシユタルとか神ってアクア含めて碌なやつ居ないじゃん。

「オホント、それより本題に入りましょうか」

「そ、そうだった。魔王獣ってどういう事ですか!?」

「落ち着いてくださいサトウさん」「カズマとお呼びください」…カズマさん。

まず順を追って説明します。

この世界に謎の勢力が魔王軍に加わったのはご存じだと思います。そんな勢力がある日突然、魔王獣と呼ばれる災厄の獣を使役したのです。

どうやって呼び出したのかは不明ですが、不幸中の幸いな事にまだこの世界には影響は出ていないみたいです」

『マジか…まあまだ被害が出てないだけマシか』

「ホントだよな。水臭くなったり地面が沈んだりとかしたらシャレになんないからな」

ホント、次から次へと厄介な奴が現れるな。

（言い忘れていたがゼロ はカズマが前世で自分達ウルトラマンについて知っている理

由を既にカズマから聞いていたので特に驚いていない。

ちなみジャグラーさんにも一応説明し直したがあの時はぶった斬られるんじゃないかと正直ビビった」

「それで、魔王獣達がどこに居るかはわかってるのか？」

「申し訳ありません、それについてはまだ何も。」

ただ、ウルトラマンゼロ。貴方は何か知りませんか？魔王獣の一体を一度は封印した貴方なら何か分かると思っただけですが」

『悪い、確かに俺は一度はソイツを封印しはしたが。生憎場所までは分からない』

「そっういえばゼロも魔王獣を封印したんだったな」

確かゼロが封印したのは火の魔王獣だったか。

しかしアレを最初に見た時はセブンじゃねえのかよってツッコんだのを今でも覚えてる。

「とにかく、魔王獣が居るんだったらこれまで以上に状況が悪くなるのは間違いない」

「はい、私たちも可能な限り探しては居るのですがどこに居るのか尻尾すら掴めず」

「つまり、結局は自力で探すか向こうからやってくるのを待つしか手はないか」

「申し訳ありません」

しかし女神であるコイツの目を欺くって相当隠すのが上手いやつなんだな。

『が、魔王獣が居ると分かったただけでもまだ良かった。カズマ、そいつらとの戦いにも向けて更に特訓は厳しくなるが、ついて来れるか?』

「ゼロ…」

カズマはゼロの言葉に直ぐに答えることができなかつたり。

まあ前までただの高校生だった奴にこんな事を聞くのは酷というものだろう。

けど予想に反してカズマは意外と早く答えを出した。

「程々なら頑張ります」

『いやそこはもつとカツコ良く決めろよ』

「俺は王道系主人公でもなんでも無いからな、けど俺頑張るよ。ゼロ」

『全くお前は…』

カズマの萎え切らない返事にゼロはそんな事を言うがなんだか嬉しそうにそう呟く。

こういう時はこう言うべきだろう。

「ツンデレ乙」

『誰がツンデレだ誰が!』

「そ、それより私が言いたいのは魔王獣が出現したら可能な限り処理をお願いしたいのです」

「エリス様の頼みで有れば、喜んで」



カズマはまだエリスに鼻の下を伸ばしてる。

まあコイツは一見するとただの最弱職だが、俺の見立てではコイツはゼロの力関係なく必ず大物になる。

しかも、今までこの世界に送られてきたであろう転生者やミツルギなど目じゃ無いくらいに。

女にだらしく少しお調子者な様子も見られるが、それはそれで今まで見た事ない人柄なので見ていて飽きないからホントにコイツに会えて良かったよ。

「それより、そろそろ戻らないと。ダクネス達を待たせてますし」

そう言うところエリスは床に一つの魔法陣を展開した。

恐らく以前俺と会った時に開いたのと同じ物だろう。

「そんじゃ戻るか」

「あつ、分かっているとしますけど戻ったら私の正体は秘密に！態度も先程クリスとして接した様にしてくださいね！」

「分かっていますよエリス様」

エリスが慌ててカズマにそう言いカズマはそのまま魔法陣の上に立ち、エリスに何やらキメ顔で手を振った。

いやどうせ向こうで一緒にギルドに向かうんだから手を振る必要はない筈なんだが。

まあ今はそんな事はどうでも良いか。取り敢えず魔王獣達には要注意つと。

俺もカズマに続き魔法陣の上に立とうとすると

「あつ、アキラさんちよつと待ってください！」

「？」

エリスに慌てて呼び止められた。

どうしたんだコイツ？

「なんだ？もしかしてまた悪魔から人間に戻れって言うつもりか？」

だったら前にも言ったがこの生活には満足しているから必要ないって言った筈だが」

「そうではありません！」

……まあ今はそれは置いておいて、私が聞きたいのは最近体に異常は無いかと言う事です」

「体に異常？」

「はい、貴方は人間から悪魔になった前例のない存在です。

ですから体や精神に何かしらの影響が出ているのでは無いかと上の神々も心配しているのです」

成程。そういえば確かに地獄でも俺と同じ奴は見た事ないし聞いたこともないな。

………まあ本来ならあの邪神がヘマをしなければ地獄に落とされる奴なんてまず居

ないんだけど。

「まあ大丈夫だ。最近変な夢見たりはするけどそれ以外は何も問題ないからさ」

「夢？あの、それがどういった内容かは覚えていますか？」

「いや、残念ながら夢と分かってはいるけどその全てに霧が掛かって内容が分からないし出てくる奴の声もノイズがかかって何にも聞こえやしない。まっ、日常生活とかに影響は無いから問題ないだろ」

実際、気になりはするけど困る事は無いし大丈夫だろう。

「そうですか…それなら私からは何も言いません」

「そうしてくれ。さっ、カズマも待つてるし戻るぞ」

「はい」

俺とエリスは話を終えると一緒に魔法陣に立った。

女神が隣に立つとか悪魔的には色々複雑だが、まあこれくらいなら問題無いだろ。

「そういうえばアキラさん。さつき石を投げた時異様に威力がありましたけど、アレは反射的にやってしまった事なんですよね？」

「……………」

「何か言ってくれませんか？！？無言がある意味一番辛いんです！

思わず何ですよね？石が飛んできたから反射的に何ですよね？！？私が女神だからと

か関係ありませんよね!!?

お願いだから思わず石が飛んできたからと言ってください！アキラさん!!?」

何やら隣でギヤーギヤー騒ぎ始めたエリスを無視して俺たちの体は魔法陣の光に包まれた。

く魔王城く

「ふむ、アクセルの街にはベルディアが行くか。まあ、我が友人が居るあの街に行くとあつては奴の命運もそこまでであろう」

問題なのは最近魔王軍に入ってきた我輩でも見通すことの出来ない奴らの動向か。

「しかし……くくくく」

アルマか。

突然地獄に落ちてきた哀れなただの人間かと思いきや以前奴の過去を見通した時は  
思わず我輩といえど困惑したものだ。

何故なら、あの様な過去を持つ者を我輩は見たことが何のだからな！

「フハハハハハハッ！愉快！実に愉快である！

しかもその時の力をあの時は失っていたというのに今となってはそれ以上の力を付  
けるとは、我輩も予想しておらんかったぞ我が友よ！」

そう焚きつけたのは我輩であるがな。

「長い時を生きて退屈していたが、まだまだ存外に楽しめるではないか」

さて、我が友の成長も気にはなるが今はとにかく暇である。

魔王のところに行き奴の悪感情でも食らってくるか。

キヤベツつて空飛ぶんですよ？知らなかつたかい？（ミラーナイト風）

「お願いです！お願いだから思わず、せめてわざとでは無いと言ってくださいって！」  
「つたく煩いな。それより、もう現世だぞ」

あの後、俺たちはエリスが開いた魔法陣で無事先ほどの場所へと戻って来た。  
しかし、クリスに戻ったエリスが何故か先ほどから煩い。

向こうとこつちじゃ時間の流れる概念が違うけど、いい加減に戻らないとゆんゆん達に不審がられる。

「まあ今はどうでもいいか。それよりカズマ、ゼロ、クリス。

俺たちは一応カズマがクリスのパンツを盗んでクリスは涙目だとダクネスは覚えて  
いるから、ギルドに着くまではその体制を崩すな。

そして俺はそれを不幸にも目撃してしまった一般人を装うから」

「いやいやいやいや！君も思いつきり当事者だよね!?!」

「というか！俺も好きでパンツ盗った訳じゃないから！不可抗力だから！」

「犯罪者は皆そういうんだ」

「たまたま取れちまったもんで犯罪歴付けられてたまるか!」

『おい、いい加減ギルドに戻らないと本当に怪しまれるぞ』

「ほら、ゼロもこう言ってるんだからいつまでもごちやごちや言うんじゃないよ」

「誰の所為だよ(なの)誰の!」

今日は随分と賑やかだな。

「第一ダクネスって多分君たちも感づいてると思うけど結構なアレだからね!もしアキラくんがもたもたしているとダクネスは嬉しそうな顔でそれを広め回ってどんな噂を広めるやら・・・」

「何やってる2人とも!早くギルドに行くぞ着いてこいパンツ脱がせ魔に痴女!」

「切り替え早いな!というか、誰がパンツ脱がせ魔じゃっ!」

「私も、不可抗力でステイールされただけで痴女でも無いしちゃんとパンツは履きなおしたから!」

『俺、ここまでユニークな奴ら初めて見たかもしれない・・・』

で、俺たちがギルドに戻ると既にめぐみん達は立ち直ってゆんゆんも含めて雑談していた。

しかもゆんゆんに至っては初めてのこういう場での会話なので結構テンション上がっているらしい。

「おうお前ら戻ったぞ…ってどうした？」

俺たちが戻ってくると何故だかめぐみんやアクアたちが此方にゴミを見る様な…正確にはカズマの方を見ていた。

「ねえカズマ、さっきその人から聞いたんだけど、女の子のパンツを？ぎ取ったんですって？」

「しかもそれを歓喜の声を上げながら振り回したとか。本当なのですか？」



「ちよつと待て!?それいったい誰が話してた!」

「私だ」

アクアとめぐみんがそう言った後でダクネス自ら名乗り出た。

というか既に手遅れな上に、何故かダクネス本人が嬉しそうな顔なのが。

「因みに聞くけど、なんて言ったわけ?」

「大した事は言っていない。ただ”クリスがパンツを剥ぎ取られてそれを返す条件として有り金全部むしり取られた”と言っただけだ」

うん、充分大した事だよ。

すると、クリスが他に見えないように目薬を差して涙を流しやがった。

「財布返すだけじゃ……ひつく、駄目だ……じゃあいくらでも払うからパンツ返してって頼んだら……うう……自分のパンツの値段ぐらい自分で決めるって……」

「待って!何一つ間違っていないし事実だけどホント待って!アクアやめぐみんだけじゃなくて他の女冒険者の目が冷たいものになってるし、特にまともな紅魔族のゆんゆんにその目されるのが一番キツイ!」

「おい、まともじゃない紅魔族が誰なのか聞こうじゃないか」

『カズマ……強く生きろ』

「一応ゼロもだからな」

皆んな見ろよ、あのウルトラマンゼロが自分のお腹を抑えてる姿を想像出来るくらいにカオスな光景が目の前に広がってんだぜ？

「それにアキラと言ったか、彼も素晴らしかった。スキルを教えるクリス目掛けて「ダクネスさん、カズマが貴方をパーティーに加えてくれるらしいから黙ろうか」何？？」

「おおいアキラ？！何勝手に決めてんの？！」

悪いなカズマ。彼女の異常性は理解したが彼女の口からあの事（クリス目掛けて〃故意の全力投球〃）した事が話されると何かやばい気がする。

大義の為の犠牲となってくれ！↑大層な事を言ってるように見えるが、要するに体のいい生贄である。

「何々？もしかしてこの人が昨日カズマの言ってた人？」

「この人、見たところクルセイダーじゃないですか！どうしてそんなに悩むのですか？私はこの人をパーティーに入れても構いませんよ。前衛がいれば爆発魔法も撃ちやすくなりますし」

「本当か？ありがとう。このダクネス、クルセイダーとして必ずやあなた方のパーティーの役に立つと誓おう」

「ちよおつと待って？！俺の意見は？俺の発言とかは何にも考慮されないの？！」

どうやらカズマパーティーに新しい仲間が増えたようだ。いやー良かった良かった

たー(棒)。

って、ん?なんかカズマが何やら考えついたのか口を開く。

「……実はなダクネス。俺とアクアはこう見えて、ガチで魔王を倒したいと考えている。ちようど良い機会だからめぐめんも聞いてくれ。俺とアクアは、どうあつても魔王を倒したい。しかし魔王打倒を目指すからには、俺たちの冒険は過酷な物になることに違いない!ダクネス、女騎士のお前なんて魔王に捕まったりなんかしたら、それはもうとんでもなく酷い目に遭わされるぞ!」

「あつ」

カズマは多分問題児2人を抱えたく無いから怖がらせてパーティーを抜けてもらおうと考えたのだろう。

だがしかし、そんなのをこの爆裂娘とたつた今判明したドMクルセイダーに通用するわけもない。寧ろ逆効果であろう。

その証拠に見てごらんなさい。

「ああ、全くその通りだ! 昔から、魔王にエロい目に遭わされるのは女騎士の仕事と相場は決まっているからな! それだけでも行く価値がある!」

「え?……………あれっ!?」

『な、何で喜んでんの?この人…』

「はあ、このバカズマ」

「なんか、あたしの友人がごめんね…」

多分いろんな事があつて精神的に余裕も無かつたんだろがそれが悪手というのはダクネスの様子を見て分かるでしょうに。

しかしどうやらカズマは諦めては無かつたらしい。今度はめぐめんの方を見る。

「めぐみんも聞いてくれ。相手は魔王……この世で最強の存在に喧嘩を売ろうつてんだよ、俺達は。そんなパーティーに無理して残る必は……」

『あつおいカズマ！』

どうやら流石にゼロは察して止めようとするがもう遅い。

「我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者！ 我を差し置き勝手に最強を名乗る魔王など、我が爆裂魔法で消し飛ばしてやりましょう！」

めぐみんはマントをバサツと翻し杖を掲げながらそう宣言する。

ほーらこうなる。

紅魔族のコイツにそんな話なんてしても持ち前の中二病でノリノリで残るに決まつてるだろ。

すると、アクアが何やら不安げな顔でカズマに話しかける。

「ねえ、カズマさん……私、カズマの話聞いてたら何だか腰が引けてきたんですけど。何

かこう、もつと楽しんで魔王討伐できる方法とか無い?」

は?

「おいアクア、テメエ今なんつた?」

「へ?だから楽しんで魔王の討伐が出来ないかって」

「テメエだけ楽しようとしてんじやねえぞこの邪神がああああつ!」

「へ?つて痛い痛い痛い!ごめんなさい!ごめんなさい!よく分かんないけどごめんなさいしたから髪の毛引つ張らないでえ!」

「あ、アキラさん落ち着いてえ!」

俺たち転生者が苦労してるのにコイツだけ楽しんでグータラしてる絵面想像したらなんか腹が立ってきた。↑理不尽な言い分である。

「ふう、悪いな悪魔的ジョークという奴だ。許せ」

「謝って!女神の髪の毛を引き抜こうとした事を謝って!」

「はっ!生憎邪神なんぞに下げる頭なんて持つてないんでな!」

「ぬあんですつてええええええええつ!?!」

「お、女の命とも呼べる髪の毛を容赦なく引つ張るとはっ。アキラ!やはり貴方のパーティーに「ダクネス、カズマがそれ以上にすごい事をしてくれるらしいぞ!」何?!」

「おおいこらあ?!?俺を巻き込んでんじやねえぞ?!?」

『カオスだ…今までで一番カオスだ…』

「あ、アハハ…ず、随分賑やかだね…」

「あわわわ…」

邪神が掴みかかろうとするがこっちだつて抵抗する。

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ 街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！ 繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！』

街中に大音量のアナウンスが響く。拡声器なんてこの世界にあるとは思えないし、魔法的な何かで声を大きくしてるのだろう。実際少し魔力的なものを感じるので。

「な、何だ？？まさかモンスターでも攻めてきたのか！」

『カズマ！直ぐに向かうぞ！』

「あーカズマにゼロ落ち着け。これは多分キャベツだ」

『「……は？」』

俺の言葉に2人は思わず固まる。

まあ気持ちは分かる。

「キャベツ?……え?ひよつとしてキャベツって名前のモンスター?」

『まさか、キャベツという名の俺たちウルトラマンも知らない街の異星人か?』

「違う違う。野菜のキャベツ。あの野菜炒めやらロールキャベツにしたらとても美味しい野菜のことだよ」

「そんな事は知ってるわ!　じゃあ何か?　緊急クエストだの騒いで、冒険者に農家の手伝いさせようってのか、このギルドの連中は?」

カズマは進む。

まあ俺だって最初は馬鹿にしてんのかとは思ってたけどもう慣れてしまった…。なんならこの前野良トマト食ったくらいだし。

「あー……。カズマは知らないんでしょうけどね?　ええつと、この世界のキャベツは……」

アクアが何だか申し訳無さそうにカズマに言いかけ、それを遮る様にギルドの職員が施設内に居る冒険者に向かって大声で説明を始めた。

「皆さん、突然のお呼び出ししません!　もうすでに気付いている方もいるとは思いますが……キャベツです!　今年もキャベツの収穫時期がやってまいりました!　今年のキャベツは出来が良く、1玉につき1万エリスです!　すでに街中の住民は家に避難して頂いております。では皆さん、できるだけ多くのキャベツを捕まえ、ここに収め

てください！　くれぐれもキャベツに逆襲されて怪我をしない様お願いします！  
なお人数が人数、額が額なので、報酬の支払いは後日まとめとなります！」

『……………ハアツ？！』

職員の言葉にカズマとゼロを除いた全員から歓喜の声上がる。

そして冒険者達が街の外に出るとそいつらは居た。

そいつらは緑の玉の形をしており空を縦横無尽に飛び回っていた。

「この世界のキャベツは飛ぶわ。味が濃縮してきて収穫の時期が近づくと、簡単に食われてたまるかとばかりに。街や草原を疾走する彼らは大陸を渡り海を越え、最後には人知れぬ秘境の奥で誰にも食べられず、ひっそりと息を引き取ると言われているわ。それならば、私達は彼らを一玉でも多く捕まえておいしく食べてあげようって事よ」

「……………俺、もう馬小屋に帰って寝ててもいいかな。或いは筋トレしてたい」  
「気持ちには分からんでもないが諦めろ」

にしても今回は数が多そうだな。なら、めぐみんとこの家族にある程度は送るか。あの家族俺が居なくなつてまともな食事にありつけてるからどうか……………。

あ、ゆんゆんの両親にも一応送るか。

俺は手を横に翳しギガバトルナイザーを顕現させる。



『ギガバトルナイザーだと!??』

「おいアクア!お前いくらなんでもアレを特典にするってやり過ぎだわ!」

「待って!私アレ一緒に入れた覚えなんて無いんですけど!」

「ああそれならこの世界に来た時、地獄の闇とか俺の記憶とか利用して作ったんだよ。

俺がオリジナルなんて持つてるわけ無いだろ?だから攻撃は出来ても100体の怪物を操るなんて出来ねえよ」

本当は100体モンスロードやりたかったけど流石に無理だった。

「まあ今はそんな事より、今は目の前の稼ぎ時を逃さないように」

俺はギガバトルナイザーを回しながらそう呟き最終的には止めて構える。

「暴れるか」

そしてそれを合図にしたかは不明だが俺を含めた冒険者達が一斉にキャベツ目掛けて駆け出した。

そんな中、カズマは状況に全くついていけずにいた。

「なあゼロ。目の前で派手にギガバトルナイザー振るいながらキャベツ捕獲してる奴居るんだけどどう思いますか?」

『……………シユール過ぎる』

「だよなあ…」

「ほら何やってんのよカズマ！早く行くわよ！あ、言っておくけど報酬は個人個人の物だからね！カズマの取り分少なくとも絶対に分けてあげないから！」

「はあ？ふざけんじゃねえぞ！」

良いぜ上等だ。キャベツなんぞに遅れを取ってたまるか！」

『俺、もう光の国に帰りたいたい…』

ここにこうして、キャベツに向かって全力で向かっていく冒険者の少年の中にいて早くもホームシックに駆られているウルトラマンが居た。

というかゼロである。

## 野菜って美味しいよね

「なんでキャベツの野菜炒めがこんなに美味いんだよ。なんか納得いかねえ……」

おっす、オラカズマ!

なんて茶番は置いておいて、俺たちはあの後キャベツの討伐やら捕獲やらを行いそこでは街の冒険者達やアキラや俺も参戦してキャベツ達に立ち向かった。

結果としてはこの街に飛来した殆どのキャベツを捕まえる事は出来たのだ。

しかし、その過程で問題があった。

「にしても凄かったわねアキラ!ギガバトルナイザー出した時は驚いたけど、見事キャベツを捕獲しまくるし、ゆんゆんは魔法使いとしての腕は見事なものよ!」

まずはアキラとゆんゆん。

この2人はまあ別に問題無かった。あつたとすればゆんゆんが逃げるキャベツに対して涙目になって魔法も使わずに追いかけて回した事でアキラがそれを羽交締めにして止めたことくらいだろうがそれを差し引いても2人の働きは見事の一言に尽きる。

特にアキラはギガバトルナイザーの電撃をメビウスに使ったみたいなの捕縛などの使

い方や殴りつけるなどしてまさに怒涛の勢いでキャベツを捕獲したのだ。

これに関しては良い。

問題は残りのメンツだ。

アクアはキャベツを捕まえようと追いかけては転びギャン泣きするわ、めぐみんに至っては他の冒険者がいるにも関わらず爆裂魔法撃つわで被害が拡大するわでもう滅茶苦茶だ……。

「そしてダクネスも凄かったわね！あのキャベツ達の猛攻を怯みもせずを受け止めて、その剣でバツバツバツと切り払う。＼んだから！」

そう、実を言うと結構不安に見えたダクネスがかなり働いたのだ。

コイツは見たまんまの騎士で剣を使う。

途中で自分からキャベツの前に出て顔を赤くし息を荒げながら攻撃を喰らうなど頭の痛くなる行動をしていたのだが、それを帳消しにするくらい。＼剣が当たるのだ。＼。

「いや私なんて硬くて不器用な女だ。

さつきも見てもらった通り、キャベツの様な小さな小さいモンスターにはギリギリ当たるか当たらないかだし両手剣スキルを身につけてもあの有様だしな」

いや、確かにキャベツは的が小さいから当てにくいだろうけど当たりはするから当た

るものは当たるとのだろう。

しかも見た感じかなりの攻撃力だったからこれが大型のモンスターだったらかなり重宝されるぞ。

「にしてもダクネスって結構変わったよね、昔は掠るところか動いてないモンスターにも当たらなかったんだから」

『「」「へ？」「」「』』

「く、クリス！その話は今はいいでは無いか！」

攻撃が当たらない？ 擦りもしない？

ドユコト？

俺が困惑していると、やっぱり気になるのかアキラがクリスに聞いてきた。

「クリス、それどう言う意味だ？ 攻撃が擦りもしないって」

「いや実はね……………この子どうやらモンスターにアレな目に遭わされるのを夢見てたからクルセイダーになったんだけど、生まれつき不器用だから攻撃が当たらなかったんだよね……………」

は？

マジ？

俺は気になりダクネス本人に確認を取る。どうか間違いであってくれ。

「ダクネス、これどゆこと？」

「うう……じ、実は私はクリスの言う通り生まれつき不器用で、攻撃が当たらんのだ。だが、ノアの神の伝説を聞いてからは、かの神の様に民を守り敵を倒す聖騎士になろうと『「いやいや待て待てちよつと待て！」』な、なんだ？ 私の話に何かおかしなところがあるだろうか？」

「いや今俺達にとって聞き逃せないワードが出てきたんだが！」

「ノアの神!? ノアの神って言ったのか今！」

ノアってウルトラマンノアの事か? というかあのチートラマンこの世界に前来てたの!?

「3人とも知らないのですか？」

「ノアの神とは、はるか昔に存在したと言われている神の名前です。」

その銀の身体は全てを照らすほど美しいとも言われていて、邪悪な闇から人々を守つたと有名ですよ？」

「いやいや初めて聞いたわその話! 何で教えてくれなかったんだゆんゆん!」

「え?! 私の所為ですか!?! え、ええつと。あ、アキラさんが初めてできた異性のお友達だったとで………浮かれちゃって」

「ごめん! 俺が悪かった! だからそこまで落ち込むな! これから思い出一杯作ろうね

！」

なんだろう、俺が言われたわけじゃないのにとても心が……………。

今度アキラと一緒にボードゲームとかやってやるか。

「3人？カズマ達は2人ではないか」

「あ、それについては今度話すからお気になさらず」

「そうか？では話の続きだが、私はその神の神話を聞いてその神の様に強くなりたいと思っただのだ。」

……………だが、それで私は満足出来なかった！」

『「え？」』

あれ？…なんだか雲行きが怪しくなってきたぞ？

「確かに、私はノアの神の様に強い戦士になりたい！」

だが、それでは私の望む「モンスターに力及ばず蹂躪される女騎士」というシチュエーションが楽しめなくなってしまう！」

「何言ってるのお前？」

ヤバイ、やっとまともに戦力になってくれそうだったのにどんどん雲行きが怪しく……………。

「そこで私は考えた！」

“ だったら、自分よりはるかに強いモンスターに立ち向かうも攻撃が効かずに！そのまま凌辱される女騎士”としてなら、私の誓いにも反しないし一石二鳥だと考えたのだ  
！」

「ホントに何言ってるの？」

ダメだ。以前に会ってから変態っぽい言動はあつたけどコイツはただの変態じゃねえ。

THE・HENTAI GIRL・DAKUNESUだ！

『カズマ、この世界はユニークな人が多いですね』

「何で最後敬語なんだよ。」

というか、アキラ。どうにかしてくれ！

「ごめん。これはもう手遅れだ」

「そんなく……」

悪夢だ。悪夢なら覚めてくれ。

俺は、これからゼロや仲間たちと一緒に王道主人公みたいに汗水流して苦難の道をたどりながらも成長しあいながら魔王を討伐するのではないのか…。

俺の夢見た異世界生活が、どんどん夢へと消えてく……。



「なんでよ〜!」

「?」

と、俺がそんな悲壯感に浸っていると突然受付の方からアクアの声がした。

というか、俺たちが話している間にいつの間にも移動しやがったアイツ。

「じ、実は。アクアさんが捕まえたキャベツは殆どがレタスでして」

「何でレタスが混じってるのよ〜!」

「そ、そんなこと言ったって…って止めてください!み、見えちゃッ」

どうやらアクアが捕まえたのはレタスばかりだったらしい。

というかどうしてレタスがキャベツより安いんだ?

『多分、季節とかの関係か何かでキャベツの方が高いんだろう。』

俺がジードのいた地球でレイトから聞いた話じゃ、季節によって食べられる野菜も果物も違うんだろ?

恐らくはアレと似たようなもんだろ』

「そういうもんか?」

にしても、アクアが受付のお姉さんの胸倉を掴んで揺らしている所為でお姉さんの上胸から下が見えそうになる。

良いぞアクア！もう少し！もう少しだけ服が下にズレる様に頑張るんだ！

「カズマ、視線が受付のお姉さんの胸元で停止してるぞ」

「なんだよアキラ、お前だつてこういうの好きだろ？」

「は？んなもん」

「好きに決まってるんだろ」

ふっ、やっぱ男は本能で生きなきゃな！

『おいカズマ、あんまり女の胸をガン見するもんじゃねえぞ』

「んだよゼロ別に良いじゃねえか。ウルトラマンタロウだつて女の裸体見たさに人形つていう立場利用してあわよくばを狙つてたんだからさ」

『え？タロウ教官そんな事したの？』

ホント、ウルトラマンとは言つてもそういう事には男だつたら興味あるよな。

つと、アクアが戻って来たみたいだ。

「……」

「お。おいアクア? どうしたんだ?」

いつものコイツの能天気な雰囲気は何処に置いて来たんだと言わんばかりに暗い雰囲気をつつたアクアが戻ってきて流石のダクネスでさえ真面目な表情に戻る。

「私が捕まえたの、レタスばかりで…それで、キャベツより安いからって、報酬も安くして……はっ!」

予想外の報酬の少なさにアクアは絶望していたのだが、何故だか急に何か思いついたのか貼り付けた様な笑みを浮かべながら俺に近づいてくる。

まさか…。

「あのーカズマさん? 今回の報酬は、おいくら万円?」

「120万」

『「「ひゃっ!?!」」』

俺は報酬の入った袋を見せながらそう言うのとアクアを含めアキラを除いた全員が驚いていた。

というか、ゼロは俺と体共有してたんだからそんな驚くなよ。

「今回は窃盗スキルでキャベツ捕まえるだけにしようと思っただけだよ、折角ゼロに鍛えてもらったから丸太の代わりにキャベツ蹴ったり殴ったりして捕まえたらなんと20万エリス分は稼げたのよ」

『その時にキャベツ殴って痛がつて、アクアに回復魔法何度もかけてもらってたけどな』  
おいゼロ、余計な事言わない。

だって仕方ないじゃん。冒険者になって一般人よりは強いといっても素手でキャベツ殴ったら存外に居たいんだよ。

…まあ素手で殴りこむ俺も大概だけだよ。

「あ、あのーカズマさん。貴方つてその……そこはかたくなく良い感じよねー」

「誉めると事が無いんだつたら無理に褒めるんじゃねえよ。」

「というか、金なら貸さないぞ。この金で家買っていい加減馬小屋生活から脱出するんだよー」

「お願いよー！このギルドのお酒ツケで10万くらい溜まつてるの！このままだと如何わしいお店で働かされるのよー！」

「知らんわ！それにお前をそんな店で雇う物好きな店は無いから安心しろー」

「どういう意味よー！」

もう良いわー！カズマには頼らない！ねえアキラ！貴方は幾ら稼いだの!？」

「ん？800万」

『「「「はっぴゃ!」「」』』

「いやー俺さ、カズマよりは幸運は低いんだけどさ。

俺たちだって店の経営がかかっているから死に物狂いでナイザー振り回して目に映るキャベツどもをなるべく無傷で捕らえたらここまで稼げたわ」

マジか。俺は幸運で100万なのに。まあアクア程不運じゃなければアレだけ暴れたからそれくらいは稼げるわな。

「お願いアキラ「金は貸さん」お願いよー！せめて10万で良いから！」

「生憎と邪神に貸す金なんて1エリスも無い！」

「大体お前、今回の報酬はそれぞれの取り分をそのままって言っただろうが」

「だって！私だけ大儲けできると思ったんですもの！」

「お前最低だな」

　　とかコイツ、一応とはいえネクサスが中に居るゆんゆん目の前にしても平気でこんな事言い出したぞ…。

「お願いカズマさんお金貸して！ツケ払う分だけで良いから！回復魔法もかけてあげたでしょ!？」

そりゃあカズマさんだって男の子だし、夜となりでゴソゴソやってるのは知ってるけ

ど！」

「よし分かった！貸してやるから！黙ろうかー！」

コイツ、人が男としてやってるアレコレをこんな公衆の面前で暴露しようとしやがって！

結局俺は、俺の尊厳の為にアクアに10万エリス渡す事になった。

くアキラ side)

あの後カズマはアクアに10万貸してアクアはホクホク顔で嬉しそうにしていた。クソツ。あの邪神が泣きわめいているところを見ながらシユワシユワ飲むのが楽しみだったのに！

そしてカズマとアクアはちゃんとした装備を買ってからクエストを受ける事にしたようだ。

「それにしても良かったですねアルマさん！これでウイズさんのお店の経営が少しは楽になります！」

「そうだな。俺の稼いだのとゆんゆんが稼いだ40万を合わせればまあ大丈夫・・・とはいいがたいんだよなあ・・・」

ウイズってバニル曰くガラクタをまるで川の流れのごとく買いそろえる才能だけはピカイチらしいから、油断が出来ないんだよ。

いくらジャグラーさんがストッパーになってくれているとしても安心ができないのがたちが悪い。

「だ、大丈夫ですよ！ウイズさん良い人ですから！」

「良い人！大丈夫な人って理論は残念ながら現実では成立しないからな？」

俺はウイズという例を見て学んだんだ。

「と、兎に角！早くお店に戻ってウイズさんとヘビクラさんを喜ばせてあげましょうよ！」

「それもそうだな」

俺とゆんゆんは速足にウイズ魔道具店に向かって歩き出した。

そんなアルマとゆんゆんを物陰で見ている存在が居た。

「ああ、様。まさかこの世界で将来の伴侶候補をお見つけになるとは！私は…私…」

それは以前アルマに話しかけていた黒スーツの男だったのだが、以前の雰囲気はどこへやらハンカチで目の涙を拭いていた。



「ねえお母さん、あのおじさん何してるの？」  
「しっ！見ちゃいけません！」

俺たちは魔道具店に着くと、なにやらウイズとジャグラーさんがなにやら店じまいの準備をしていた。

「あれ？お店もう閉めちゃうんですか？」

確かに、まだ昼を過ぎたくらいだよな？

……あ。もしかして。

「まさか、またあの墓地に行くのか？」

「はい、実はいつもの墓地でまた霊の方々が出てき始めているので今回も私が出向いて除霊することにしたんです」

「だから今回はもう店じまいだ。それよりお前ら、キャベツの方はどうなった？」

「合計で840くらいですね」

実はゆんゆんとめぐみんはウイズの正体を知っていて、俺たちは定期的にウイズが今から行く墓地で彼女の一応の護衛を兼ねて彼女の除霊を手伝っている。

本来ならこういうのは冒険者の仕事で現在は引退した彼女がするような仕事じゃないのだが、この街の冒険者は金にならない除霊などしない者が多かったりするのだ。

因みに作業の内容としてはウイズが魔法陣を置いて霊を除霊している間に何かあっても対応できるように俺たち全員で武装して彼女を守るといった感じだ。

「成程、それならしばらくは持つな」

「そんなに稼いだんですか!? 凄いですね2人共！」

「まあウイズが仕入れて来るガラクタの所為で恐らく時期にプライゼロになりそうだね」

「ひ、酷い！酷いですよアルマさん！私だってお店を繁盛させるために頑張ってるんですよー！」

「え？」

「その反応が一番酷いです！それにヘビクラさんまで!？」

いやだっっていうのも変な商品ばかり仕入れるからもう現実逃避でもしてると思うじゃん。

ウィズは、美人だけどこれがあるから今に至るまで独り身だったんだろうな……。

「兎に角、今夜は墓地で除霊だ。お前らも準備はしておけ」

「了解です」

まあウィズはこれでもアンデッドの王であるリッチーだ。

よっぽどの事が無い限りは今回も問題なく除霊は進むだろう。

そう、どこぞの邪神が変な邪魔さえしなれば。

この感情は一体（間違っても恋の始まりではない）

俺たちはあの後、除霊の準備を済ませた後ウイズがいつも行っている墓地に来ていた。

そこには案の定というかやっぱりというか、ほったらかしにされた霊達が出没しており、現在はウイズが作った魔法陣で順番に除霊を行っていた。

「しかし、いつ見ても中々の光景だな」

「まあアンデッドが浄化されて天に昇ってますからね」

「それにしてもウイズさんは相変わらず凄いですね」

ゆんゆんの言う様に俺たちの目の前ではウイズがローブのフードを被って魔法陣に立って霊を浄化している。

これは俺たちにとっては見慣れた光景ではあるが、本来ならアークプリーストがすべき浄化をアークウイザードの腕前で行うのだから、流星はアンデッドの王であるリッチーと言うべきだろう。

「そういえば、めぐみん達はあの後どうなったんでしよう。何かクエストを受けるみた

いな話をしていましたけど」

「さあな、けどめぐみん達がよっぽどのしでかしてもしない限りは失敗することは無い  
だろ」

そう、向こうには幸運が高いカズマとゼロが居る。

一番の不安要素としてアクアという最悪のケースがあるが、ゼロが居れば万が一は起  
こらない・・・筈だ！

「まあ今はそれより除霊の方だ」

「だが、この分だったら前回同じく問題なく終わるだろ」

「それもそうですね」

なんだか少しフラグ臭い会話になってしまったが、まさかこの場面で不測の事態なん  
てあるわけが・・・

「アアアアアアアアアアっ!!!」

「「「「「「」」」」」」」

と、思っていた矢先に。悪魔は現れた（悪魔は俺だけけど）。

「リッチーがこんなところに現れるなんて不届きな！今すぐ浄化してやるわ！」

そこまで言い突然現れたアクアが猛スピードで真っ直ぐウイズに向かって突っ込んできた。

そういえば女神とやらって悪魔やアンデッドの存在を許さないとかふざけた使命感持ってるんだっけ。

つまりコイツはウイズを浄化しようとしてるわけか。

……………なら正当防衛成立だな。

俺は素早くウイズに突っ込もうとしているアクアの前に立つ。

アクアが突然の俺の登場によって動きを止めた瞬間、俺は奴に向かってカウンターの

回し蹴りを放つ。

「ぶべらっ!」

俺の蹴りは見事に邪神の左頬に直撃して邪神は撃沈された。

そして俺は奴を背に某店の道を行き全てを司る男の様に天に人差し指を上げた。

「悪は（アクア）滅びた……………」

「今のは、悪党や悪魔の悪とアクアをかけたとても面白いギャグです」

「はい！アキラじやーナイト！

って何やらせんだ！」

というかこれ、担当の会社とか色々違うでしょうが！

って…。

「なんだカズマか」

「なんだとはご挨拶だなお前…まあ良いけどさ」

俺がツツコみを入れて振り向いた先には、冒険者風な恰好に緑のマントを羽織ったカズマとめぐみん、そしてダクネスがいた。

「お、カズマお前ようやく服新調したのか」

「ああ、流石にずっとジャージな訳にはいかないしな。魔法剣士のスタイルで行こうと思ってるな」

「へえ、良いんじゃないか」

確かに変に武器で攻撃するだけの冒険者よりもカズマに合ったスタイルと言えるだろう。

「ちよつと! どうして2人共そうやってスルーするわけ!? 下手したら私と言う尊い存在の頭が吹き飛ぶところだったんですけど!

ねえ謝って! 私の頭蹴ったこと謝って!

なーんか邪神がほざいているが気のせいだろう。

そんなアクアの後ろからめぐみんとダクネスが続いてやって来る。というか、ダクネスが鎧着てなくて薄着だから結構エロい。

「全く何を騒いでいるのですか。」

それと先生、今のは紅魔族的にとても良いですよ! 後で私にも教えてください、今の天を指さすポーズ!

「まさか、相手が女であろうと容赦なく顔を蹴るとは・・・アキラはカズマに劣らぬ鬼神だな!」

「ねえ何で!?! どうして2人までそんな平然としていられるの!?

って、今はそれどころじゃないんだった!」



アクアは起き上がりウィズを指さす。

「リッチーがこんなところに出るとは不届きな！待ってなさい、直ぐに浄化してやるわ！

「どうか何よこの魔法陣！どうせこの魔法陣を使ってよからぬ事をしでかそうとしましたでしょ！このっ！見てなさい！今からこんな魔法陣消し去って」

「や、止めてえ！急になんなの!?どうして私の張った魔法陣消そうとするの！」

「煩いわよリッチー！どうせこの魔法陣でこの墓地に居るゾンビたちを操って良からぬ事をしでかそうとしてたんでしょ！」

「そんな事、この私がさせるものかっつてのよ！」

「違うんです！この魔法陣は、この墓地にいる魂たちを浄化するための魔法陣なんです！」

「誰がそんな嘘信じるつてのよ！というかりッチーがそんな清い行いなんてしてんじやないわよ！」

「ここは清く正しい私みたいなアークプリーストが（がんっ！）っ痛い！」

「アクアがウィズの魔法陣を消そうとしていたので俺はコイツがこれ以上余計な事をしでかす前に一発殴っておく。」

「しかも、俺と同時にカズマも一緒に殴ってくれた。」

「何すんのおよ2人共！」

「うん、これ以上騒ぐと話が全く見えないから。お前は取り合えず大人しくしておけ」

「大丈夫か？ ウィズ」

「は、はい。なんとか」

「というか、どうしてこのリッチーとアキラ達と一緒にいるのよ！」

まさか、アキラ達を操って傀儡にでもしたつていうの!?なんて非道な……！」

コイツの頭の中ではどうやらアンデッドや悪魔などは絶対に許せないカテゴリーに分類されるらしいな。

これだから女神って奴は……。

「あ、あの！ ウィズさん大丈夫ですか!？」

「つたく、面倒な展開になったな……」

ゆんゆんとジャグラーさんも遅れて参戦してくる。

まあ参戦というより1人はウィズが心配だからで、もう1人は嫌そうな顔をしながらだけど。

「あ、ヘビクラさん。どうも」

「めぐみんか。元気でやってるか？」

「はい、おかげさまで」

「ねえめぐみん!? どうして私には何も言ってくれないの! 私たちライバルなんじゃないの!？」

「あーゆんゆん、今は少し我慢しておいて。カズマの言う通り話が進まないから」

ホント、この世界に来て何かと疲れる事が多いんだよなあ・・・。

「まさかゆんゆんだけじゃなくて、あのジャグラス・ジャグラーまで傀儡にしてるなんて・・・もう許しておけないわ! カズマ、このリッチーをさっさと討伐してしまいましょ」「なあアクア」もう何? アクア。

私はいま、そのリッチーを・・・って、どうして私の頭の上に拳を置くの? ねえ、どうして今まで向けてくれたことのないくらいの笑顔を向けて来るの? ねえってば!」

「ふふふっヒッサーツ」

この世界で過ごした地獄での数百年、そして現世での数年で俺は特典や冒険者としてのスキル以外に身に着けた技が1つある。

何故かめぐみが顔を青くして震えているが気のせいだろう。

この、俺の対問題児宝〇は問題児の頭に対してだけ効力を発揮する（恐らくその他にも普通に効くが）。

その名は。

「グリパーンチ！」

「アダダダダダダダダダダダダダダッ！」

俺はアクアの頭に置いた拳を連続で左右に捻る。それはもう凄い勢いで。

アクアは断末魔にたた何かを叫びながら俺が少しずつ下げる拳によって地面に頭を下げて体制が低くなる。

「ひいっ！」

「?どうしたのだめぐみん。そんなに怯えて」

「あ、実はめぐみん。前にアキラさんに突っかかりすぎてお仕置きとしてあの技を食らった事があるみたいです」

「アレは私の頭史上最最大の地獄でした…」

「と、年端も行かぬ女子供相手にあの技を使ったというのか!?羨ましいぞめぐみん！」

「羨ましいがる要素はどこに!?!というかダクネス、今私の事をどう評したのか聞こうじゃないか！」

「だあ!もう、お前ら少しは落ち着け！」

外野がなにやら騒がしいが俺は気にせずにアクアを地面に伏せさせる。

俺の必殺グリパンチを食らったアクアは頭から煙を上げながら倒れていた。

「うわー、スゲー痛そう…」

『痛そうじゃなくて、痛いんだろ。俺も昔、親父や師匠に怒られたりしたな…』

「さーて、状況を説明しよっか」

「わ…私は…放置ですか」

「只今状況説明中」

とまあ俺はカズマ達にウイズがリッチーである事、彼女はこの墓地で霊たちを天に帰す為の魔法陣をしていた事、そしてそれをアクアが勘違いしたのであろう事を話した。

「成程、つまりは完全にアクアの早とちりって事か」

「早とちりつて何よ！良い？リッチーつていうのはね、ジメジメした場所が好きなナメクジの親戚みたいなものなのよ！」

そんな腐ったミカンみたいな存在はこの私が「またグリパンチ喰らいたいか？」ひつひつ……」

「しかし、ゾンビが出ていた理由がこの街のプリーストが拝金主義なのが原因だったとは……」

「ああ、それは何というか……その……」

「金の亡者だな」

「ちよつ！へビクラさん！」

しかしカズマ達が此処に來た理由はゾンビメーカーという所謂ザコ討伐に來たからか。

確かアンデッドの王であるリッチーなのが原因なのかウイズの魔力に反応して勝手にゾンビが出て來るんだよな。

その点に関しては完全にこつちの落ち度だった。

『しかし、あまり他所の事に口出しするのはアレなのかもしれないが……これは流石に……』  
「遠慮せずに言っつていいと思うぞゼロ。こりゃあこの街のプリーストにも責任の一旦があるんだから」



ぞで？

俺は嫌だぞ、ゼロなら兎も角」

『いや俺だってネクサス相手にするのは嫌だからな!』

「・・・あーもう!分かったわよ!やればいいんでしょやれば!」

どうやら、向こうの方針は決まったみたいだな。

「さ、騒ぎも丸く収まった事だし。ウイズ、墓地の浄化進めるぞ」

「あ、はい!」

ウイズが浄化を進めようとすると、突然ゼロから待ったがかかった。

『なあちよつと待ってくれ、元々コッチがややこしくしたんだ。俺がその浄化やってやるよ。』

カズマ、ここは俺に変わってくれ』

「ゼロ?ああ分かった」

ゼロにそう促されると自分の着ていたマントを脱ぐと霧囲気、というか気配がゼロに変わった。

というか、お前の場合は眼鏡じゃなくてマントを外すのか…。

「あーウイズって言ったか。ここは俺に任せてくれ」

「え?」



「お、おいカズマどうしたのだ？ それになんとか雰囲気か」

「もしかして、ゼロという人格に変わったのですか!? 何ですかそのカッコいい設定は！」

「あーはいはい、落ち着け」

『何かこういう時って入れ替われるのって便利だよな』

「カズマお前な・・・まあ良いや」

「デエヤ！」

カズマ、いやカズマと人格を入れ替えたゼロはゼロアイNEOを取り出して目に翳し変身する。

するとカズマの姿はたちまちゼロに変化していった。

「よっし」

「おおおおお！これがウルトラマンゼロですか！カッコいいです！」

「これは、カズマのスキルみたいなものなのか!？」

「これが、ウルトラマンゼロ・・・」

カズマがゼロに変身した事でめぐみんは目を輝かせて興奮し、ダクネスは驚愕。そし

てゆんゆんはネクサスと同化している事もあるのかとても神妙な顔をしていた。

「それじゃ始めるぜ。ハッ！」

ゼロは左手のウルティメイトブレスレットに手を当てるとブレスレットから光が溢れ出し、ゼロの体は青く変化していた。

それは、ウルトラマンダイナのミラクルタイプとコスモスのルナモードの力を合わせた姿。

「ルナミラクルゼロ」

「今度は変わりましたよ！」

「やっぱりルナミラクルは良いわね！なんたってアクシズ教を現す青なんだから！」

各々が様々な反応を示す中、ルナミラクルになったゼロは上空に飛び上がる。

そして右手に光を集めて回転し始める。

「フルムーンウェーブ」

その光を回転しながら墓地にいるゾンビや霊に向かって放つ。

それはコスモスのフルムーンレクトのゼロ版といってもいい技で怪獣を浄化するな

どの効果がある。

その光を浴びたゾンビや霊たちは光に包まれて段々と浄化されていく。

そして数分後には、現在この墓地にいたゾンビや霊は全て浄化されていてゼロも通常形態に戻り地上に降りて来る。

「よし、浄化完了」

「おお、墓地にいたゾンビたちも浄化されたぞ！」

「凄い……」

「この今の光、とても暖かかったです」

『これが本物のルナミラクルの力か。実際に見ると凄いな』

本当に凄いなのは、あの数の霊たちを難なく浄化してしまうとは。

流星はベリアルという強敵たちと渡り合った猛者だな。

……まあ悪魔の俺からすると、残念ながら忌々しい光なんだが。

しかし、やっぱりゼロの姿を見ると……。

ゼロ！ウルトラマンゼロ！セブンの息子だ！

「ッ…」

またか、しかも前よりは聞き取れるようになってやがる…。

けどまだ全容は理解出来ていない。やっぱりゼロが関係してるのか？

「アキラさん？」

と俺が考えているとウイズが心配してか俺の顔を覗き込んでいた。

「え？」

「どうしたんですか？どこか具合が悪いんですか？」

「ああ、いや。何でもないよ。」

それより、カズマ達ってゾンビメーカーの討伐に来たんだろ？ならクエストの結果としてはどうなるんだ？」

『『『『『あつ』』』』』

あつ、これはダメっぽい奴だ。

## クレーマーにはご注意を

墓地での騒ぎから数日、結局カズマ達はゾンビメーカーのクエストは失敗という扱いになったらしい。

まあ、墓地の浄化はウイズの代わりにアクアがやることになったので結果としてはまずまずだ。

まああの邪神が真面目に浄化作業に慎むかは怪しいが、そこは不本意だが信じるしかない。

とまあ色々あったが、あの後カズマからウイズにスキルを教わりたいから今日あたりにこの店に来るらしい。

本人曰くりッチーが味方キャラに居るなんて早々ないだろうから折角なので教わりたいとの事だ。

「おい、アルマ。ゆんゆんの奴はどうした？」

「ゆんゆんなら、ボードゲーム片手にギルドに向かいましたよ。なんでも、今日こそは

めぐみんに勝って見せます」とか言ってたからめぐみんのところでしょうけど。

まあ十中八九、ゆんゆんの負けで終わりそうですね」

「?それは何故」

「ゆんゆん、紅魔の里にいた頃からめぐみんにあらゆる勝負を仕掛けてたんですけどその度に負けるんです。

例えば、私たち、友達ですよね?」とかの甘い言葉に「私が負ければ、ちよむすけの御飯も無くなってしまうですね!」とかの精神攻撃を巧みに操るんですよめぐみんつて。

だから、ゆんゆんがアイツに勝ち越してるところって見たことないんですよ」

「…俺が言うのもアレだが、めぐみんの奴も大概性格悪いよな」

「今更です」

ホント、アイツ等って仲が良いんだか悪いんだか本当に分かんないよな。

「で、でも良いじゃないですか。ゆんゆんさんとても楽しそうに向かって行きましたし」

あの楽しそうな顔が、これから涙目になって帰って来ると思うと何かと胸締め付けられるから勘弁してほしいんだが…。

「おーい、来たぞー」

つと、どうやらカズマが来たようだ。

しかもアクアを同伴させているという状態で。まあアイツが黙ってリッチーの経営する店に行つたつて知つたらそれこそ面倒臭いからな。

「あ、いらつしやいます…ああ

！」

「ん？…ああ

!？」

ウイズとアクアはどうやら誰が訪ね誰の店かを理解したらしい。

すると、アクアが突然ウイズに掴みかかった。

「こんのクソアンデッド！どこを拠点にしてるかと思つたら女神である私が馬小屋生活なのにアンタはお店の経営者つてどういう了見!？」

リッチーの癖に生意気よ！こんなお店、神の名のもとに燃やして（ガンっ！）ぎゃんっ  
！」

アクアが滅茶苦茶な事を言い始めると、ジャグラーさんが刀を鞘に納めた状態で奴の脳天を叩いた。

「クレーマーはお帰りください」



「すみません。ウチの狂犬女神がすみません」

よくやってくれたジャグララーさん。

そのあとカズマとアクアは店に備えられている椅子に座ってテーブルを挟む形で向かい合っていた。

カズマは初めて訪れた感じが魔道具店の内装を見てアクアは不機嫌顔でいた。

「……………お茶も出ないのかしらこの店は」

「す、すみません！直ぐに淹れますので！」

「ここは喫茶店じゃねえんだぞ。ウイズも態々出さなくても良いから」

「そうだぞウイズ、コイツにお茶なんて勿体ない。それより新しいコーヒー頼む」

コイツ、いくら女神だからとやりたい放題だな本当に。

ウイズも俺たちの静止振り切って大人しくお茶淹れだしたし、ここ一応魔道具店です

よ？

「ど、どうぞ」

「…………ツ!?!(意外と美味しい…)何よ、リッチーの癖にお茶淹れるのが上手いとか」

「すみません！すみません！」

「ウイズ、コイツに一々謝らなくても良いから」

『何というか、レイトが言つてたパワハラ上司つていうのを彷彿とさせるな…』

「で、カズマ。この店に来た要件は良いのか？」

「あ、そうだった。実はウイズに頼みたい事があるんだ」

「頼みたい事？」

「リッチーが味方キャラに居るのってなかなか無いだろ？」

だからリッチーのスキルを教えてもらおうと思つて「ぶふうーッ!!」うわっ！汚ね！」  
カズマがウイズにお願ひしているとアクアは飲んでいるお茶カズマの顔面に嘔き出した。

「ちよつと待ちなさいよ！態々リッチーが経営している店に来たと思つたらアンタつてばそんな汚らわしいスキルを教えてもらおうと思つてた訳!？」

女神の従者がアンデッドのスキルを教わるとか許せないんですけどー！」

「誰が従者だ誰が！それにどうせなるならエリス様の方が何倍も良いね！」

「ヒキニートが先輩より後輩女神の方が良いつて言つた！」

『お前ら、そろそろ落ち着け話が進まない…』

何というか、皆大好き（多分）ウルトラマンゼロがこうやってツツコミみたいな立ち位置に居るのって色々複雑な気分なんだが。

「あ、カズマそれには不用意には障るなよ？ 蓋開けると爆発するポーションだから。因みにそっちは衝撃を与えると爆発する」

『「爆発物専門店かよこころは！」』

まあその後色々言い争いをしていたが、結局はアクアが折れてカズマはスキルを教えてもらい始めた。

因みにジャグラーさんは面倒くさいからとギルドで暇を潰してくるそうだ。

「では、カズマさんのスキルポイントで覚えられてお手頃のスキルですね。

“ドレインタッチ”というスキルなんてどうでしょう」

「ドレインタッチ？」

「ああ。アンデッド専用のスキルだな」

「はい。効果としては相手に直接触れる必要があり、触れた相手の生命力と魔力を吸い

取る事が出来るんです。

その他にも吸い取った生命力や魔力を別の人に触れる事でそれを受け渡す事が出来るんです」

ドレインタッチか。確かにアレだったらそんなにスキルポイントは使わないし、魔力の少ないカズマにはうってつけのスキルか。

「つまり、相手の戦力を削れる上に味方のサポートも出来る訳か。なんだかエネルギーを奪うは兎も角受け渡すのはウルトラマンに似てるよな」

『確かに、俺たちも傷ついたり消耗した味方に自らのエネルギーを受け渡す事で回復させることが出来るからな』

確かに、アレって温かい感じがするから。悪い気は・・・あれ？俺なんでそんな感覚知ってるんだ？

・・・まあ良いか。今はそれよりカズマ達だ。

「それじゃあスキル取得するから、早速やって見せてくれ」

「あ、それが…私のスキルはスキルをかける相手が必要なんです」

「それなら俺が受ける側をやるよ。俺の場合悪魔側に寄せれば生命力も魔力も問題ないからな」

が、俺が悪魔の気配をさらけ出すと多分というか絶対アクアが突つかかるから念のた

めカズマにコイツを抑えてもらう様に頼んでおく。

「それじゃ、いくぞ」

俺は人間だった気配を悪魔に変更する。

これをやる事によるメリットは、俺の悪魔としての魔力や身体能力が引き出される事だ。

「!?」

「うおつとー!」

『本当に暴れだしやがったな』

案の定アクアは暴れだしたみたいだな。コイツ、今度ネクサス喚けてやろうかコラ？

そんな感情を浮かべながら愚痴る俺の右手をウイズが両手で包み込む。しかし本当に冷たい手をしているが、結構心地いいんだな。

「それでは始めますね。『ドレインタッチ』!」

ウイズがスキルを発動すると、俺の腕を伝って魔力が彼女に流れ込んでいくのが分かる。

奇妙な感じだな。

「ア…アキラさんこの魔力…」

「ん？俺の魔力がどうかしたのか？」

「これは…いえ何でもありません」

「？そうか」

ウイズはどうしたんだ？こんな難しい顔して。

まあ俺の魔力つてモノがモノだからそれで違和感でも感じてるのか？

「(アルマさんの魔力…というより、存在？それがまるで何かを上書きしたような…)」

「なあ、カズマ。スキルは取れそうか？」

「え？お、おう。ちよつと待ってる…うん、大丈夫っぽい。取得つと」

どうやら、カズマは無事に取得できたみたいだな。

「で、お前らは何時まで手繋いでるわけ？俺に対する嫌味？」

「え？…?!」

つてやつべ！そういうえばスキルは取ったからもう手繋いでる必要は無いらった。

「わ、悪いウイズ」

「い、いえ気にしないでください！それにその…嫌ではありませんでしたから」

え？なにこの感じ。少し顔が熱く…。

「ねえカズマ、私たちは何を見せられてるの？」

「うん、リア充のイチヤイチャにしか見えんな。ゼロ、今こそ力を振るう時だ」

『違うと思うぞ!?それにやらないからな!』

コイツ等、好き勝手に言いやがって…。

「ま、まあ兎に角。無事にスキル取得できて良かったな!」

「コイツ、話を丸く収める気だぞ」

「いるわよねーラノベとかのハーレム系主人公で。きつとこうやって他の女の子も墮と  
してるのよきつと」

「お前ら。ヒソヒソ喋ってるつもりかもしれねえが丸聞こえだからな!」

結局この後、カズマたちは店のポーシヨンや魔道具を暫くは物色していた。

勿論買うまでには至りませんでしたとき。

く  
???  
く

アクセルの街から離れた古びた廃城。

その最上階では2体の異形が居た。

一体は黒い鎧に全身を包み腕には兜を被った頭を持つている騎士のような風貌の者。

もう一体はまるで悪魔を彷彿とさせる者だった。

「この辺境の地に来たは良いが。未だに謎の光の正体は掴めずか」

「ふんっ、影から渡されたこのカードも出番が無いかもしれないな」

悪魔の様な異形、"超時空魔人エタルガー"は手に持った黄色の光を持つカードを見ながらそう呟く。

そんなエタルガーの持つカードを見ながら騎士の様な風貌の男、首無し騎士"デユラハンのベルディア"は不満げな顔で見据える。

「魔王獣か…我らが魔王様の名を冠するのが厄災の力を持つとはいえ獣風情とはな」

「不満なら、今この場でやりあうか？」



ベルディアの言葉にエタルガーは挑発的な言葉を使う。

魔王と謎の影。

彼らでの同盟が結ばれたとはいえ、魔王城を襲撃してきた彼らへの印象は魔王軍ではかなり悪い方に当たる。

だが実力は確かな為に、彼らを表立って糾弾出来ないのもまた事実だった。

「…いや、止めておこう。この場で無駄に戦力を削るのは愚策だ」

「まあ、そうだな」

ベルディアとエタルガーはお互いの矛と敵意を収めた。

経緯は兎も角、今の敵は同じ。いくら気に入らない相手とはいえ、ここで潰しあつて悪戯に戦力を失うのはお互い避けたい道だった。

「俺は少し出て来る」

「何だ、散歩にでも行くのか?」

「アクセルの街とやらに偵察だ。その光の正体とやらを突き止めなければ、貴様の様な腐った亡者と長い時間を過ごす事になりそうなのでな」

エタルガーはベルディアのそう言うとその場から離れて飛行できる空いた窓から出ていこうとしていた。

「俺も、貴様のような得体の知れない魔物と一緒に御免だな」

「ふんっ、何ならあの街を直ぐにでも消し去ってやろう。

貴様はそこで、私が1つの街を消し去るのを待ってるんだな」

エタルガーはそう言い残すと、窓から空へと飛びあがる。

こうして一体の魔人によって、駆け出し冒険者が集まる街が血祭りにあげられる事となった。

事は無く、エタルガーが飛び上がった瞬間に城を突如として途轍もない爆発と轟音が襲った。



くめぐみん side

私は街の近くにあるという廃城に向けて爆裂魔法を撃ったところです。

魔力が尽きてしまったので、現在は色々言いくるめて連れて来たゆんゆんに背負ってもらっています。

「はふう…：ナイス爆裂」

「ね、ねえめぐみん。私あのお城に爆裂魔法撃った光景を見て軽く引いたんだけど。

というか、今お城の辺りで飛んでる何か居なかった!？」

「貴方は何を言ってるのです? 別に何も見えませんでした。もし居たとしてもモンスターでしょう。」

それより早く帰りましょう、ボードゲームにはその後に付き合っただけから」

「本当!? 言ったわね! 言ったからね!」

ゆんゆんは上機嫌となりルンルンとした足取りで私を背負いアクセルの街へ戻って  
行きました。

相変らずチヨロいですね。

にしても今しがた冒険者カードの討伐欄を見たのですが新しいモンスターが討伐さ  
れた形跡はありませんね。

くつ、我が爆裂魔法を受けて無事だったとは中々やりますね・・・。

こうして、めぐみんの活躍？によって、一応街の被害は免れた・・・のか？  
まあ兎に角、先送りにする事には成功したのである。

## ノック（爆裂魔法）は程々に

「え？魔王軍幹部が街の近くの廃城に？」

「ああ。どうやらそのせいで弱いモンスターは隠れて強いモンスターしか出てこなくなつたそうだ。」

お陰でギルドの冒険者たちはクエストを中々受けなくなつたそうだ」

ウイズがカズマにスキルを教えて数日、ジャグラーさんはいつの間にか仲良くなつたという受付嬢から得た情報を聞いてきたらしい。

どうやら、アクセルの街近くにあるという廃城に魔王軍の幹部が住み着いてその幹部の所為でジャイアントトードを始めとした弱いモンスターは軒並み隠れてしまい一撃熊などの強いモンスターしか出てこず、その為この駆け出しの街の冒険者では荷が重すぎる高難易度のクエストしか出てないらしい。

「私も聞きました、その所為でめぐみんが言つてましたよ。カズマさんが中々クエストを受けなくなつたって」

まあ賢明な判断だろう。

ゼロは命の危機じゃないと力は貸さないしアクアは幸運が最悪でめぐみんはこらえ性が無い、ダクネスはDMだからな。（まあダクネスだったらそれさえ押さえればまだマシかもしれねえが）

兎に角、カズマが慎重になるのも分かる。

けど、そうなるど気になる情報があるな。

「なあウイズ、この街近くに来た幹部って誰か聞いてるか？」

「はい、私も魔王様以後から教えてもらったのですが。どうやらベルディアさんと前にアルマさんが言ってたエタルガーさんという方が向かったそうです」

成程、ベルディアにエタルガーね。

だとしたら厄介だな、ベルディアくんは死の宣告っていう魔法持つてる上に実力も確かな上に、エタルガーはエタルダミーを使って来る上に体が兎に角硬い。

「はあく…厄介な組み合わせだな」

まあハンスだのウォルバクではなく物理攻撃が主なベルディアくんだけまだマシと考えるか。

「あつ」

「ん？どうしたんだゆんゆん」

「あ、あの…その魔王軍幹部って街の近くの廃城に居るんですよね？」

「え？あ、ああそうだが」

どうしたんだ？

．．．まさか。

「おいゆんゆん、お前その廃城について何かあったのか？」

「はい．．．実はですね」

ゆんゆんの話によると、どうやら以前めぐみんと一緒に件の廃城に向かって爆裂魔法を撃った事があるらしい。

しかもどうやら、その後もめぐみんはカズマを連れて毎日あの廃城に爆裂魔法を撃ちこみまくってるらしい。

「『．．．』」

「あ、あの．．．めぐみんが本当にごめんなさい．．．」

あー、何というか。ゆんゆんもお疲れ．．．

ってじゃなくて！

「おいおい、自分たちの拠点攻撃された奴らがそのまま黙ってるわけが．．．」



『緊急！ 緊急！ 全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいっ！』

その時俺たちの耳に届いたアナウンスは、これから起こるであろう最悪の状況への誘いに聞こえて仕方なかった。

カズマ side

俺たちは今、ギルドからのアナウンスに従い他の冒険者たちと共に街の正門前に集まっていた。

しかし冒険者たちの中で会話は無い。

何故なら…。

「……」

「……」

俺たちの目線の少し先には丘の上で頭らしき物を持って馬に乗っている騎士と何故か体のあちこちが砕けたり傷ついたりしているどこかで見覚えがある悪魔っぽい奴が居た。

「何だあいつ等！滅茶苦茶強そうぞぞ！」

『というかもう一体はエタルガーじゃねえか！何であんなにボロボロなんだ？』

「俺たちは、先日近くの廃城に越してきた魔王軍の幹部の者だが・・・」

首無しの方が話し始めた。というかあの特徴はデユラハンか？

デユラハンとエタルガーらしき奴らはお互いに肩を震わせてまるで何かを吐き出す様に叫び始めた。

「毎日毎日毎日毎日っ！！お（わ）、俺たち（我々）の城につ！毎日欠かさず爆裂魔法を撃ちこんでくるあ、頭の可笑しい大馬鹿は、誰だ

っ！！」

駆け出しの街に訪ねて来た魔王軍幹部と超時空魔人さんは、それはもう、お怒りだった。

（N O s i d e）

カズマたちは目の前に現れたデュラハンのベルディアと超時空魔人エタルガーの突然の絶叫に困惑していた。

そして、爆裂魔法という単語に1人心当たりがあつた。

「爆裂魔法？」

「爆裂魔法って」

「ああ、爆裂魔法といえば」

その爆裂魔法という単語によって、集まった冒険者たちの視線はめぐみんに固定された。

「・・・」

そのめぐみんはというと、その視線から逃れようと罰の場所を向きその先にいた別の魔法使いの女性に他の冒険者の視線は固定された。

「え!?何で皆私を見るの?私爆裂魔法なんて使えないよ!」

「ヤダよ私まだ死にたくない!まだ小さい弟がいるのに!」

「うっ・・・」

どうやら流石のめぐみんも気まぎれなくなったようで、そのまま顔を俯かせて大人しくベルディアとエタルガーの前に出て来た。

その自分たちの前に出て来ためぐみんの恰好と魔力の感じを見て、ベルディアとエタルガーはめぐみんが爆裂魔法の犯人と悟ったらしい。

「貴様が・・・」

「貴様が毎日欠かさず爆裂魔法を撃ちこんでくる、大馬鹿者か!」

俺たちが、魔王軍の幹部だと知ってたのなら堂々と城に攻めて来るがいい!そうだな

ければ、大人しく震えているがいい！」

ねえ、何でこんな陰湿な嫌がらせするの？」

「その通りだ！貴様が毎日毎日ポーンポーンポーンポーンポーン撃ち込むから、私に何故かいつも直撃するのだ！」

頭可笑しいんじゃないか貴様ア！」

「・・・ッ」

めぐみんは2体の気迫に思わず圧倒された。

言動こそ色々ツツコみどころがあるが、それでも魔王軍幹部たちだ。彼女の頬を嫌な汗が伝う。

「(というか、エタルガーの傷って爆裂魔法でついたものだったのか)」

『そういえば、爆裂魔法撃つ度に何か飛んでたがエタルガーだったんだな…』

そんなカズマとゼロの心境を他所に、めぐみんはマントを翻して高々に名乗った。

「我が名はめぐみん！アークウイザードにして、爆裂魔法を操る者！」

「めぐみんって何だ。馬鹿にしてるのか！」

「ち、違うわい！」

「どうやら、紅魔族的自己紹介は全く意味が無かったようだ。」

「我は紅魔族の者にして、そしてこの街随一の魔法使い。我が爆裂魔法を放ち続けたのは、こうして魔王軍幹部の貴公等をおびき出す為の作戦！ まんまとこの街に、2人でノコノコ出て来たのが運の尽き！」

めぐみんは幹部2人を目の前にしているというのに、物凄い堂々とした立ち姿で構えていた。

「なあ、いつから作戦になったんだ？」

「ああ。…しかも何気にこの街随一と豪語しているな…」

『恐ろしい…』

「しー！皆ここは黙っててあげなさい！きつと後ろに他の冒険者たちが居て、今日はまだ爆裂魔法撃つてないから魔力が有り余って強気なのよ。ここは見守りましょう」

何やら楽し気なアクアは放っておきカズマたちは事の成り行きを見守った。

「その赤い目に今の名乗り・・・成程、貴様紅魔族か」

「ああ、あの頭の可笑しいアクシズ教の次にイカレテいると有名な魔法使い集団か。」

ならば今の妙ちくりんな名前も納得だ」

「おい、両親から貰った私の名前を妙ちくりん呼ばわりは止めてもらおうか！」

「ねえ、今私の信者達がデイスられたんですけど」

何か言いたげなめぐみんとアクアを放置して、ベルディアとエタルガーは話を続ける。

「ふんつ、まあ良い。俺たちはお前ら雑魚にちよつかいかけに来たんじゃ無い」

「その通り。我々の目的はこの街に堕ちて来たという謎の光の調査だ。」

今回はそれと貴様が爆裂魔法を撃った事を注意しに来ただけだ。もうこれからは、爆裂魔法は使うなよ」

以外にも2体は大人しく街から去ろうとしていた。

「なあゼロ、あのデユラハンは分かんがエタルガーってあんな温厚な性格だったか？」

『さあな、恐らくだが何発も爆裂魔法なんて撃ち込まれたから。流石の奴も城とやらに戻って回復したいんだろう』

「成程」

と、カズマたちが納得し事態も丸く収まろうとしていた。



……ここに、余計な一言を発する爆裂狂さえ居なければの話だが。

「無理です、紅魔族は1日1回。爆裂魔法を撃たないと死ぬのです」

「ツ!?お、おいそんな話聞いた事も無いぞ! 適当な嘘を吐くな!」

「大体それが仮にも事実であれば、今頃紅魔族とやらは死に絶えているわ!」  
全くのド正論である。

「(しかしどうしましょう、私1人ではまず間違はなくやられます。

ここはアクアも加えて……)」

めぐみんがそんな思想を巡らせアクアを助つ人に呼ぼうとしたその時だった。

「『インフェルノ!』」

「『ライト・オブ・セイバー!』」

「じゃしんけん・しんげつざんぼ  
『蛇心剣・新月斬波!』」

「「!?!」」

ベルディアとエタルガー目掛けて、魔法の業火と光の剣。そして闇の斬撃が放たれベルディアは持っていた大剣を咄嗟に距離を取りながら振るい、エタルガーは両手を交差させながらそれをガードした。

「い、今のは「ったく、面倒な状況だな」ッ!?!」

めぐみんや他の冒険者も突然の攻撃に驚愕していると、めぐみんの目の前に3人の人影が降り立った。

降り立った人影というのは、アルマ基アキラと新しく購入した杖を構えるゆんゆん。そして刀を抜刀したジャグラーの3人だった。

「せ、先生!?!へびクラさんも」

「待ってめぐみん!私は!?!どうして私はスルーするの!」

「お前ら、コントは後にしろ」

「超時空魔人エタルガーに首無し騎士デユラハンのベルディアか。

「こんな駆け出しの街に幹部2人そろってご苦労なこつたな」

突如として自分たちに攻撃を放った人物の内の2人の顔を確認し、ベルディアとエタルガーは目を見開く。

「き、貴様は地獄の公爵アルマ！」

「それに貴様は、ジャグラスジャグラードと」

「やあベルディアくん久しぶり〜」

「彼の超時空魔人エタルガーに覚えてもらえるとは、光栄と考えて良いのか？」

ベルディアとエタルガーの口から出た名前が集まっていた冒険者達がザワつく。

いや正確に言うならばベルディアの口にした名にだが。

「おい、アルマってあの地獄の公爵の？」

「あのアークウイザードの男がそうだったのか!？」

「もしそうだとしたら心強いぞ！」

周りの冒険者の異様な期待の声にカズマはダクネスに聞く。

「なあダクネス、地獄の公爵って何だ？」

「地獄の公爵とは悪魔に与えられる地位でも最上位のもので、その地位に居る悪魔は自分の領土を持ちその力も絶大で魔王軍の幹部にも1人、その地獄の公爵バニルという悪

魔が居るのだが。

まさか彼がそうだったとは」

「え？…だとしたら結構ヤバいんじゃないや。アキラというかアルマだっけ？他の冒険者に狙われるんじゃない？」

「いや、アルマという悪魔は例外だ。

その悪魔は1度も人間を襲った事は無く、寧ろ危険なモンスターから人々を救った事で王都や他の街では“是非街の守護者に欲しい”と評されほどに人々から神の次に敬われていると言っている。

だからアルマは、悪魔でありながらも討伐対象にはされてないしその他の理由もあって寧ろ歓迎されているほどだ」

「へえ〜」

『だとしたら、アキラが狙われる可能性は無いとみていいな』

「(ダクネスの言っているその他の理由も気にはなるが、今は目の前の事に集中だ)ゼロ、一応いつでも出られる様にしよう」

『分かった』

カズマはゼロアイNEOを懐に忍ばせて構えながら事の顛末を見守る。

「いやーベルディアくん、最後に会ったのは魔王の城にバニルしばきに行った以来だっけ？」

「・・・貴様とは、もう会いたく無かったのだが」

「あ、あのあr：「ゆんゆん、もう他の冒険者にもバレたからいつも通りで良いぞ」あはい。アルマさん、あの幹部と知り合い何ですか？」

ゆんゆんの質問にアルマはまるで昔を思い出すみたいに楽しそうに話し出す。

「いやね、実はゆんゆんに呼び出されるよりも前に魔王の城にカチコミに行った事があつてさ。そこでベルディアくんと知り合つてそれからアレコレして遊んだんだよ。」

ねーベルディアくん」

「何がなんーっだ！貴様、俺と城で会う度におちよくつたり俺の頭を蹴飛ばしておいて何を白々しい！」

『「「「「う、うわー」」」』』

ベルディアの魂の叫びともとれる独白にエタルガーやゼロを含めたその場の全員が軽く引いていた。

何故かダクネスだけ顔を赤くしているが。

「えー。そこにデユラハンの頭があつたら、蹴飛ばす。

そうしなきゃ失礼でしょうが」

「謝れ！俺を含めた全デユラハンに謝れ！」

そんなコントをしていると、エタルガーだけが驚愕に顔を染めてアルマを凝視していた。

「き、貴様ツ……！」

「ん？」

エタルガーが驚いている様子にアルマや他の冒険者たちは怪訝な顔をする。

「な、何故貴様が生きている！貴様は確かに……」

「は？」

アルマはエタルガーの言葉の真意が理解出来なかった。

その時のエタルガーの目には“アルマの背後にまるで悪魔の様な十二か”がまるで自分を殺さんとばかりに睨みつけている様な光景が見えた。

「おい、エタルガーで良いのか？お前何言ってるんだ？」

「くっ（何故“ヤツ”がこの世界にっ!?!いや、今の奴はどうやら記憶が無いようだ。ならば、記憶が戻り完全に力を取り戻す前に…）ッ!?!」

エタルガーはアルマの背後に見えるナニかを恐れ直ちに攻撃を啜えようとす。

しかし、それは目の前に出て来た黒スーツによつて喉元に突き付けられた剣によつて妨げられた。

「ッ!?!お前は」

「ご無事で何よりですH…アルマ様」

「ぎ、貴様！一体なんのつもr「黙れ」くっ…!」

黒スーツの男はエタルガー相手に怯まず更に剣を深く突きつける。

「ここは引け、超時空魔人エタルガー。手負いの貴様では、今の私にさえ勝てんぞ」

「ッ…」

エタルガーは男の剣幕に思わず怯むが直ぐに立ち直り睨みつけ返す。

しかし、男の言葉にも一理あつたのか直ぐに殺気を仕舞い戦意が無い事を示す為にはベルディアに向き直る。

「ここは引くぞ、ベルディア」

「なっ!? 貴様エタルガー! 魔王軍の幹部が敵を目の前に引けと言うのか!

俺はあの紅魔の娘に目にも物を見せてやらんと気が済まん!」

「良いから引くぞ!」

「ッ!?!」

エタルガーの今までに見えない剣幕にベルディアは思わずたじろぐ。

「癩だがこの男の言葉は間違つてない。今の我々ではこ奴らには勝てん。

それに今の俺の疲労しきつたエネルギーでは、“アレ”も呼べん」

「・・・」

エタルガーの必死の説得にベルディアも剣を鞘に収める。

それを確認すると、黒スーツの男とエタルガーも矛を収めた。

「賢明な判断です」

「・・・ふんっ!」

「おい、アルマー!そこにいる爆裂魔法を撃つ紅魔の娘は貴様の知り合いか?ならもう爆裂魔法を撃たない様に注意しておけ!」

エタルガーは飛行能力を使い、ベルディアは一緒に来ていた首無しに馬に跨りアクセルの街から撤退していった。



魔王軍幹部である2体が撤退した事により、冒険者たちは一瞬静まり返る。

しかし、それは直ぐに歓喜の声で溢れかえった。

「スゲエ！魔王軍幹部2体を撤退させやがったぞ！」

「何者なんだあの3人組！」

「というかスゲエといえば」スヴィン「さんもだ。幹部2人相手にも一歩も引かなかつたぞ！」

「アルマって奴もだ！まさかこの街に来てくれていたなんて！」

「あの人の仲間って事はあの2人も只モンじゃねえぞ！」

街中の冒険者たちは幹部2人を退けたアルマたちと黒スーツの男スヴィンという男に勧説の声を上げる。

「ふう、何とか危機は去ったか」

『去ったというより、引き延ばされたの方が正しいだろう。恐らく奴らはそう遠くない内にまた街に来るぞ』

「マジかー…（と言う事は、回復しきったアイツ等と戦う羽目になるのか）」

「・・・」

カズマが内心安心出来ていない傍で、ダクネスが何故か不満そうにしていた。

普通に考えればどうしてそんな顔をしているのかと疑問に感じるところだが、カズマは残念ながらその理由を感じてしまった。

「おい、まさかあの幹部たちに何もされなかったのを残念がってないだろうな？」

「・・・がってない」

「今の途轍もない間は何だ…」

『カズマ、考えてはダメだ…』

「・・・あ、そういうえばダクネス。あの黒スーツの人って誰なんだ？なんか他の冒険者たちは知ってるみたいだけど」

カズマは突然現れたスヴィンを指さしながらダクネスに質問した。

「ああ、あの人はスヴィンさんだ。」

彼は数年前からこの街で冒険者をやっているルーンナイトという上級職に就いてい

る。

彼はソロで活動しているのだが、その実力は確かなもので高難易度クエストを偶にだが解決してくるんだ」

「へえ、そんな凄い人だったのか」

関心するカズマや他の冒険者の少し離れた場所では、アルマとそのスヴィンが対面していた。

ジャグラーはこれ以上用は無いと言わんばかりにさっさと退散し、ゆんゆんはめぐみに先程スルーされた事が意外と効いたのか涙目になりながら詰め寄っていた。

「・・・」

「どうかなさいましたかアルマ様」

相変らず初めて会った時と変わらないスヴィンの態度に、アルマは目を細めながらも理由を聞こうとする。

「おい、前から気になってたが。」

お前、一体俺の何を知っている…」

「それは以前にもお話したように、時が来ればお話します」

「ふざけてんのかお前」

アルマは今までにない様な不機嫌顔でスヴィンを睨みつける。

「ふざけるだなんてとんでもない。私は、貴方様の為に必要な舞台の準備をしたにすぎません」

「…何?」

スヴィンの意味深な言葉にアルマは思わず興味をひかれた。

スヴィンはそんなアルマの様子に気分を良くしたのか話を進める。

「貴方様は非常に強敵との闘いを好むと聞きました。」

しかし折角の強敵もあのような手負いでは貴方様の欲求を満たすどころか満足に戦いにもならず終わってしまうでしょう」

「…」

「ですので、私は彼らを敢えて撤退させる事で貴方様の楽しみを増やしたつもりなのですが。」

余計なお世話だったでしょうか?」

「…」

スヴェインの提案にアルマは少し考えこむ。

確かにアルマはこの世界に来てから強敵との戦いを好む様になっていた。

そのアルマからしたらスヴェインの提案は魅力的だった。

「・・・はあく、分かったよ。お前の事についての詮索は抜きにしておくよ。

だが、必ずその時が来たら話してもらおうぞ」

「ありがとうございます」

アルマの返事にスヴェインは満足そうにアルマに対して綺麗なお辞儀をして、剣を腰に付けた鞆に収めてその場を後にする。

アルマもカズマ達の元に帰還する。

こうして、アクセルの街を訪れていた危機は一応は去ったのである。

## ルージユ

俺はベルディアくんとエタルガーの襲撃から数日後、ゆんゆんのレベルアップも兼ねてクエスト掲示板に張り出されていた「街付近にいるギヤラクトロンの討伐」を受けて今は街から離れた岩場に来ていた。

流石に厳しいかとも思いはしたのだが、ゆんゆんの成長を促すには少し強いぐらいの敵が丁度いいのだ。

そしてたどり着いた岩場にはスリープモードにでも入っているのか沈黙しているギヤラクトロンの1体いた。

「さて、ゆんゆん。今回はネクスサスの力を使つての実戦になるが、いけそうか？」

「は、はい。上手くやれるかどうかは分かりませんが」

因みに今回はゆんゆん1人で奴らを討伐してもらおう。

一応危なくなれば助けはするが、それ以外は基本傍観に徹する。

「良いかゆんゆん、最初に言った様に俺は基本手助けはしない。」

これはベルディアとエタルガーに対抗するためにお前のネクサスとしての能力を測る為でもあるんだ」

「分かってます。先生やヘビクラさん、そしてカズマさん達だけでも強力ですけど。それでも不安要素があるから、私もネクサスさんの力を上手く扱う必要があるんですね」

そう、今回来た理由はベルディアとエタルガー。そしてエタルガーから何となく感じたもう一つの強力な気配に対抗する為の実戦でもある。

それにベルディアは配下であるアンデッドナイト。エタルガーは他の星人や怪獣を留意してくる可能性がある。

いくら街の冒険者たちも戦闘に参戦するとしても、あれだけの強敵を相手にするにはどうしてもネクサスの力も必要になるだろう。

「それじゃあアルマさん、私やりますー！」

「おう、頑張れ」

さて、それじゃ俺の契約者様の今の實力を見せてもらおうとしようかな。

「ゆんゆんside」

私は今、初めて魔法以外の力である沢山いるモンスター達を相手にする。

正直怖い。いつもなら上級魔法を使って倒してきた相手を、助けてくれたとはいえ使い慣れてない誰かの力を使って倒すなんて言われても不安の方が勝ってしまっていた。

「・・・」

ネクスアスさん。アーネスとの戦いで私たちを助けてくれた恩人でゼロさんと同じウルトラマンという存在。

アルマさん達の話によるととても凄い人みたいだけどその人とは直接は話したことは無い。

いえ、最初に力を貸してくれたときにあるにはあるのですが、それ以来会話をしたことはありません。



けど、この人が良い人だっというのは何となく分かります。だからでしょうか、この人の力を使うのには全然抵抗がありません。

『~~~~』

目の前には、後頭部に長い髪のような物を持ったどこかドラゴンなどのモンスターを彷彿とさせる様なモンスターがいます。

でも、不思議と怖くはありませんでした。だって、ネクスアさんが力を貸してくれるのもありますけど

す！  
アルマさんが見ててくれるんです。絶対に負けられない、いいえ。負けたくないんです！

「だから、また力お借りします。ネクスアさん！」  
私は、お気に入りだった短剣が変化したエボルトラスターという道具を引き抜きそのまま掲げる。

「うおおおおおおおおおおっ!!!」

私の声と共に、目の前が光に包まれていった。

（N O s i d e）

ゆんゆんの体が光に包まれると数秒してそれが収まり、ゆんゆんの姿は銀色の戦士ウルトラマンネクサスに変化していた。

「（これが、本物のウルトラマンネクサス。なんつう存在感だよ…だが今は）」  
アルマはギャラクトロンを見据える。

ゆんゆんが変身したネクサスに反応したのか目に光を灯しソナー音のような音声を発しながら起動していた。

「さて、ゆんゆん一応確認するが。意識はあるな？」

「・・・」コクツ

俺の質問にネクススになったゆんゆんは1回首肯する。よし、ちゃんと自分の意思で動けるようだ。

「そんじゃ、頑張れ」

「コクツ…へアツ！」

ネクススは再び首肯すると、ギヤラクトロンに向き直り構えを取って走り出した。

「セアツ！」

『!?!』

ネクススアンフアンスは助走をつけて飛び蹴りをギヤラクトロンに食らわせる。

ギヤラクトロンは突然の襲撃によってその蹴りをモロに受けてしましますが直ぐに立て直し右手を振るうもネクススはそれをしゃがんで回避。

そして左手で打撃を加えようとするもそれも両手を重ねる事で防がれ、更にはその左腕を右わきで挟む様に抑えられてから空きになった腹部に蹴りを入れられ更には左手の拳で何度も打撃を加えられる。

「ツ!?!」

しかし、意外に硬かったのか攻撃した拳を止めて思わず振って痛いジエスチャーをしてしまう。

『~~~~』

「ツ!」

その隙を突いてギヤラクトロンは抑えられていない右腕でネクサスを攻撃する。

右腕の攻撃は数回続きネクサスはそれに耐えきれずに退いてしまう。

ギヤラクトロンは、その隙に左腕を回転させ剣の形をしたアーム“ギヤラクトロンブレード”を展開してネクサスに襲い掛かる。

「クツ」

その攻撃をネクサスは紙一重で躲すが、まだ慣れていない力の所為か動きが少し鈍い。

そんな調子だからか数撃空ぶったところで遂にネクサスにギヤラクトロンブレードを喰らってしまう。

「グアアアアアアアッ!」

ネクサスはブレードによる攻撃に火花を散らしながら後ろに切り飛ばされ背中から地面に倒れてしまう。

『~~~~』

ギヤラクトロンは右腕を回転させ、今度は2つの銃口のようなものを展開したかと思うと黄色の閃光光線を放って来た。

「ツ！グアアアアツ！」

ネクサスは直ぐに立ち上がると咄嗟に1発目は体を反らす事で躲すが2発めは当たってしまい膝から崩れ落ちてしまう。

「くっ…シッ！」

ネクサスは負けじと跳躍し今度は蹴りの体制を作ってギヤラクトロンを攻撃しようとする。

『~~~~』

「!?ぐっ！」

しかし、ギヤラクトロンは右腕の砲身ほ折りたたんだと思うと今度は左腕の接合部に白い円のようなものが浮かんだかと思うと何とそこから左腕が切り離されてネクサスに向かつて飛んで行き、キツクの体制に入ろうとしていたネクサスを撃ち落とした。

「グアツ」

『~~~~』

地面に落ちたネクサスは何とか腕を支えに立ち上がろうとするが、思いのほかダメー

ジが大きかったのか片膝を突いてしまう。

「くっ…（こ）、これが…近接での戦い…アルマさんやゼロさんがいつも戦っていた相手…」

ゆんゆんは、目の前の機械の竜を見て荒い息をしながらアルマやゼロの強さを改めて再認識し、更にそんなゼロと一心同体となって戦っているカズマの凄さも感じていた。

「（こんな相手に、私が勝てるの？）」

ゆんゆんはギャラクトロンを見て、いつもの魔法を使わない戦闘で本当に倒せるのか疑問を感じ始めていた。

本当に自分に倒せるのか、本当に自分にネクサスの力を使いこなせるのかと。

「（私は、本当に戦えるの？）」

『~~~~~』

「!?!」

彼女がそんな思考をしていると、ギャラクトロンはそんな事お構いなしに右腕の砲身をゆんゆんが変身するネクサス目掛けて光線を乱射してきた。

「うああああああああっ!!」

その乱射された光線はネクサスを襲い地面に着弾したものとやネクサスに直撃したのももあり、ネクサスの周りは瞬く間に土煙と火花で埋め尽くされた。

「ぐあ……あ……」

土煙が晴れると、ネクサスは膝から崩れ落ちて地面に倒れてしまう。

すると、ネクサスの胸のエナジーコアが心臓の鼓動の様な音を立てながら点滅し真面目た。

その様子を、アルマは意外にも冷静に見ていた。

「(やつぱり幾らネクサスでも、アンフアンスでギヤラクトロンの相手は今のゆんゆんにはハード過ぎたか?)」

ギヤラクトロンは、あのウルトラマンオーブを苦しめた機械の言わば正義の執行者。

本当の名自体は未だ不明だが、幾らネクサスの力を使っているとはいえゆんゆんには荷が重かったかとアルマは分析する。

「……ゆんゆん、もう「ぐ……あ……」ッ!」

アルマはもう今日はここまでにしてギヤラクトロンは自分が倒そうとしていた。

しかし、アルマが呼びかけようとする前にネクサスは立ち上がる。

如何に不完全ながらも伝説の存在の姿とはいえ中身は普通の少女である。

そんな彼女が、心が折れかけても可笑しくはないと思っていた。

それなのに、彼女は立ち上がるうとしていた。

「まだ……だ。私は諦めない……諦めちゃったら、もう……」

ゆんゆんの脳裏には今まで出会った人達の顔が過っていた。

「お父さんの後を継いで胸を張って族長になれない……里の皆に顔向けできない……めぐみんのライバルなんて名乗れない……ウイズさんやヘビクラさんの様に強くもなれない……カズマさん達の力にもなれない……」

何より」

ゆんゆんは、後方に立って自分の姿を見ている自分が召喚して契約を交わした悪魔を見る。

「アルマさんの隣に立つ事も出来ない！」

彼女は、痛みが走る体に鞭を打ち奮い立たせ立ち上がる。

「（だから、こんなところで負けられない！絶対に勝って、皆と一緒に戦うんだ！）シャツ  
！」

ネクサスは奮い立たせた体に気合を入れて片腕を胸の前に翳し勢いよく振り払う様に戻す。



すると、ネクサスの上から赤いエネルギーが波紋の様に降り注ぎネクサスの姿を変え  
る。

銀色の体は赤く染まり肩には鎧の肩当てのような板状のパーツが現れ、胸のエナジー  
コアにはカラータイマーに相当するコアゲージが現れる。

その姿はネクサスの姿の1つ“ジュネツス”を思わせるが、従来のジュネツスとは違  
い右腕のアームドネクサスが剣の様に形を変え“ソードネクサス”へと変化している。  
その姿は、ゆんゆんの覚悟によって覚醒したネクサスの姿。

“ウルトラマンネクサス ジュネツスルージュ”

「アレは、ジュネツス？いや、腕のアームドネクサスの形が違う…（まあどっちにせよ、  
今のゆんゆんなら）」

「…セヤッ！」

ジュネツスルージュとなったネクサスは再び構えを取りギャラクトロンへ向かって  
走り出す。

『！』

ギャラクトロンはそれを近づけまいと右腕の砲身から光線を乱射する。

しかしネクサスはそれでは止まらず突き進む。

そしてネクサスに直撃しそうになった光線を腕のアームドネクサスを前に出して受け止める。

「ツッ・シッ！」

するとその光線は青い光に変換された。

ネクサスは光線を光エネルギーに変換して相手に返す攻撃スピルレイ・ジェネレードをギヤラクトロン目掛けて撃ち返した。

『ツ!?!』

ギヤラクトロンはその攻撃を受けて火花を上げながら後ろに後退する。

ネクサスはそんなギヤラクトロンに両手を交差させるマツハムープで高速移動し近づき、光エネルギーを纏った拳でギヤラクトロンの顎を殴り上げた。

『くくくッ!』

「シエヤッ！」

ネクサスは今度は回し蹴り、アームドネクサスによる切りつけ攻撃。更には拳による攻撃を放つ。

それらの攻撃は全てギヤラクトロンに直撃すると火花を散らしながら確実にダメージを与えていった。

「(スゲエ、さつきまであんなに苦戦していたギャラクトロンをあそこまで追い詰めるなんて)」

アルマはネクサス、ゆんゆんの予想以上の成長具合に驚いていた。

アルマはゆんゆんに、ネクサスについて知っている限りの事は教えたし少しでもそれを使いこなせる様に体術などの訓練もつけていたつもりだ。

しかし彼女の動きはその時以上の成果を見せていた。

彼女がアルマに隠れて努力しているのも知ってはいたがまさかここまで急激に成長し、更にはネクサスの新たな姿を引き出すまでに至った。

「(ゆんゆん、予想以上に凄い奴だったんだな)」

アルマは目の前でギャラクトロン、ギャラクトロンブレードや右腕の打撃を裁きながら攻撃を加えているネクサスに変身したゆんゆんへの認識を改めた。

「シッ！」

『~~~~ツ!!』

ネクサスの猛攻にギャラクトロンは後頭部に備えられたギャラクトロンシャフトをネクサスへ向けて伸ばす。

しかしネクサスはそれを後転の容量でバク転して躲し両手を交差させて一気に広げる事で三日月型の光刃ボードレイ・フェザーを放ちギャラクトロンシャフトを切断する。

『~~~~…』

「セヤッ！」

そしてギャラクトロンシャフトを切断されたギャラクトロンにネクサスは腕を交差させて片腕から光の鞭、セービングビュードを放ってギャラクトロンを拘束する。

「~~~~ツ。セエヤッ！」

『!?!』

ネクサスは拘束したギャラクトロンを力任せに投げ飛ばす。

投げ飛ばした先にあつた岩にぶつかつたギャラクトロンは地面に倒れた。

そしてネクサスはその間に、右腕のソードネクサスを構え左手で撫でる。

すると、ソードネクサスに青い光が纏われそれを天に向けて掲げるとそれが青い光の

劍になり天に届く程にまで伸びた。

「…せやああああああつー!」

ネクサスは立ち上がったギヤラクトロン目掛けて青い光の劍“セイバーレイ・シュトローム”を振り下ろす。

『ツツツ!!』

ギヤラクトロンは振り下ろされたその劍の直撃を受けて、真ん中から真つ二つに切り裂かれる。

しかし、この技はそれだけでは終わらない。

セイバーレイ・シュトロームはギヤラクトロンを切り裂いた後、急激に長さを縮めてソードネクサスと変わらない長さで大きさに縮小する。

ネクサスはそれを、腕を振り下ろした体制から今度は拳を後ろに引き突き出した。

その突き出された拳にあるソードネクサスからは、セイバーレイ・シュトロームが青い光線となって放たれる。

『ツツツ!!』

その光線は容赦なくギヤラクトロンに直撃する。

直撃したギヤラクトロンの体は徐々に青い光に変化していき、最終的にはネクサスが

光線を全て撃ち終わったタイミングで、ギャラクトロンの体が青い光の粒子となって消えていった。

くアルマ side く

俺の目の前では、見た事も無い光線を撃ってギャラクトロンの粒子分解して倒したネクサス基ゆんゆんが立っていた。

色々驚愕するところはあるが、今は喜ばないとな。

「お疲れ、ゆんゆん」

俺の声に反応したゆんゆんは此方に振り向くと、ネクサスの体が光に包まれた。

それが収まると、そこには少しポロポロになったゆんゆんが立っていた。

「ありがとうございます。…あの、アルマさん」

「？」

変身を解いたゆんゆんは、何やら言いたげな顔で一旦言葉を区切る。

しかしそれも一瞬の出来事で、直ぐに意を決した様に話し出す。

「私は、貴方の隣に…立ててますか？」

「・・・」

…成程、これがゆんゆんを奮い立たせたものの正体か。

確かに、この子みたいに純情な子だったらそれが動機になつても可笑しくはないか。

まあ、何というか。

…ここは、素直な感想を言わなきゃな。

「当たり前だ、お前は俺の自慢の契約者いや、友達だよ」

「ツ・・・ありがとうございます！」

「ふっ。そんじゃ、傷直したら街に帰ろうか」

「はいー！」

こうして俺は、ゆんゆんの予想以上の成長を喜び満足しながら彼女の傷を治しアクセスの街へと帰還を開始した。

## 最弱VSチート持ち

くカズマ side

俺は今、非常に面倒な状況に直面していた。

事の始まりは、今回受けた“泉の浄化”クエストを終えて街に帰って来たところから始まる。

今回のクエストで、俺は水に浸かっているだけで浄化できると言うアクアを檻に入れて泉に放置。それからアクアはその泉から出て来たワニ型モンスターに襲われた。

まあクエスト自体はクリアできたのだが、それと引き換えにアクアは外の世界怖いと言出し檻の外に出たがらないから仕方なくそのまま街に帰って来た。

そしてギルドに向かう道中、ミツルギ・キョウヤとかいう鎧を着こんだアクアに送られたという転生者がちよっかいかけてきた。

そして今は、アクアが馬小屋に住んでいると言ったらコイツが俺の胸倉を掴みかかっているところだ。

いや、その前にもアクアが檻に入っている理由を聞いて初対面の癖に胸倉掴んで来た



んだけどな。

「ありえない！女神様を馬小屋にだど!?」

「ぐっ…」

く、苦しい…この野郎力任せに掴みかかって来やがって。

「おい、いい加減にその手を離せ！礼儀知らずにも程があるだろ！」

「撃つて良いですか？このスカシタエリート気取りに爆裂魔法撃つても良いですか？」

いやそれは俺ももれなく爆裂するからやめろよ。

「君たちは…クルセイダーにアークウイザードか。」

君はこんなに優秀そうな人達が居ると言うのに、アクア様を馬小屋で寝泊まりさせて  
恥ずかしいとは思わないのか？」

「…」

『コイツ、さつきから黙って聞いてりや言いたい放題言いやがって』

ゼロは珍しく苛立ちを見せるがそれは俺だつて一緒だった。

コイツの持っている剣、確かアクアに貰ったチート武器の“魔剣グラム”とかつて  
言ったか？コイツはそのグラムとやらを使って、何不自由なく今までクエストを熟して  
来たんだらう。

前までの俺だったら何の苦勞もせずと感じたかも知だが、今の俺だったら何となくコイツもそれなりに大変な思いはしてきていると思っていた。

けど、俺はゼロが入れ替わらないとほぼチートなんて持つてない一般人だ。そんな俺がチートなんて貰わず（ほぼ自分の自業自得なのは理解している）この世界の冒険者と同じ様に1から頑張っているというのに、どうしてここまで言われなくちゃいけないんだ？

「何も言い返さないのかい？」

はあ：君みたいな輩にアクア様は任せておけない。アクア様、是非僕のパーティーに来ませんか？

その2人も、ソードマスターである僕のパーティーに来ると良い。絶対に不自由はさせないし高級な装備品も買いそろえてあげよう」

コイツ、とうとう俺の仲間を勧誘し始めたぞ。

今のコイツからしたら、俺と言う悪党からか弱い女達を救つてパーティーに加えるイベントに見えているんだろう。

『おいカズマ、俺に代われ。コイツに一発言つてやらねえと気が済まねえ』

「いや、ゼロは今回は悪いけど出ちゃだめだ」

『え?』

ここでゼロに代われば、確かにガツンと言ってくれるだろう。

だがそれじゃあ意味がない。俺が言わなくちやな。

それに。

「ねえカズマ、この人怖いんですけど。ぶっちゃけ行きたくないんですけど」

「撃つて良いですか?あのナルシスト野郎に爆裂魔法撃つて良いですか?」

「アイツは…どうも生理的に受け付けられないな。普段なら受けな私が殴りたいと思うほどだ」

わーおスツゴイ不評。

まあ俺だつてあいつ等の気持ちだったら同じ回答をしたかもだし無理も無い。

「俺の仲間は全員一致で貴方のパーティーには入りたくないみたいなので、俺たちはこれで失礼しまーす」

よし、これでこの面倒臭い奴ともおさらばだ。

「……って、思っている矢先にミツルギは俺の目の前に立ちはだかった。  
「……どいてくれます?」

「悪いが、僕に魔剣という力を与えてくださったアクア様をこのような境遇に置いておけない。」

君はこの世界に持ってこられる”者”としてアクア様を連れて来たんだろ?」

ああもうヤダ。

この展開で、コイツが言おうとしている言葉が嫌でも分かってしまう。

「で?俺とどうするつもりで?」

「僕と決闘しろ、サトウカズマ。」

もし僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ。君が勝てば、その時は何でも言う事を聞こうじゃないか」

やっぱり、わっかりやすい展開なこと。

本当なら合図も何もなく始めても良いが、それはゼロがいる手前止めておく。

「はあ……分かったよ。」

それじゃルールの確認だ。俺とお前はそれぞれが”持つてる力全部”を使っても良い。

そして勝敗としては、どちらかの武器が壊れるかどちらかが戦闘不能になるか。

それでいいか？」

「ああ、構わない。」

それでは始めよう」

ミツルギは腰に帯刀している魔剣グラムを引き抜いて構える。

俺も武器屋で買ったダガーだけど、一応引き抜いて構える。アイツの言質は取った、後は俺の好きなように戦うだけだ。

「…はっ！」

「っ！」

ミツルギはグラムを上段で振り下ろしてきた、俺はそれを間一髪のところ躲す。

「(危な！後もうちよつとで切られてたんじやないか!?)」

「へえ躲すんだ。中々すばしっこいんだね」

コイツ、余裕顔で言いやがって！

「ならこれならどうかね！」

ミツルギは今度は横なぎや斜めから斬撃を繰り出す。

俺はそれを紙一重で躲し続けヤツの隙が出来るのを待つ。

そして、ミツルギが大振りの一撃を放とうと剣を振りかぶった。

そこだ！

『クリエイトアース』！『ウィンドブレス』！

「ツ！ぐあつ！め、目がっ」

俺は初級魔法で作り出した土を同じく初級魔法の風を使って奴の目元に吹き付ける。予想外だったのかアイツはそれを目に喰らって、土が目に入った事で視界を奪われる。

今がチャンス！

『クリエイトウォーター』！『フリーズ』！

「!？」

今度は水をミツルギの足元にかけて、凍結魔法で奴の足とその足元にかかった水を凍らせる。

これによってアイツの足は少し封じられ目も使えない。

「ほいっ」

俺は身動きが殆ど取れなくなつたアイツのがら空きの頭を脳天から持つていたダガーの柄で力任せに殴りつけた。

するとミツルギは脳震盪でも起こしたのかフラフラするとそのまま地面に倒れた。

ミツルギが倒れたのを確認して、俺はダガーを鞘に収める。

「勝った」

俺は静かに勝利宣言をする。

「卑怯者……」

「あ?」

「卑怯者卑怯者卑怯者——っ!!!」

俺が勝ったというのに、ミツルギの取り巻きが俺を卑怯者呼ばわりしてきた。

いや、魔剣持ちのソードマスターが碌な装備も無い冒険者相手に勝負仕掛ける方が卑

怯じゃないのか?

「どこが卑怯なんだよ。ちゃんとルールは守ってるぞ」

「どう見ても卑怯じゃない!急に目つぶしや足を凍らせるだなんて!

貴方恥ずかしくないの!？」

「全然」

そもそも、恥ずかしいと言うのなら自分勝手に物事を進めようとして決闘まで仕掛けて来たコイツに言ってやるべきなんじゃないか？

『何なんだコイツ等、いきなり勝負仕掛けてきたり負けたら卑怯者だったり』

「そういえば、ゼロからして今のはやっぱ無しだったりする?」

『いや?寧ろ、格上相手に勝てるように工夫するのは当たり前的事だ。』

しかも今回は明らかにレベル差があるからな、カズマの勝利なのは間違いない』

おや意外。

てつきり光の戦士的にこういうのは無しかと思っただけど。

「何をさつきからブツブツ言ってるわけ!？」

「ん?ああ悪い。」

それより、俺が勝ったんだから戦利品としてコレは貰ってくぞ」

向こうから俺が勝ったら俺の言う事をなんでも聞くって言っただから。

俺は気絶しているミツルギから魔剣グラムを取り持ち帰ろうとする。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!グラムは渡さないわよ!」

「そうよ!こんな勝ち方、私たちは認めない!」



それにそれはキヨウヤしか使えないんだから！」

ミツルギの取り巻きがまだ嘯みついてくる。

ていうかちよつと待て。

「え？コレって俺使えないの？」

「ええ。魔剣グラムはそのイタイ人専用よ」

「マジか…」

これで俺もチート転生者の仲間入りしてゼロに対する負担も減ると思っただけだなー。

まあでも、他の奴から奪った力で無双つてのもゼロに失礼か。

「分かった、魔剣は要らない。」

「そんじやあな」

「ま、待ちなさい！」

「あんな勝ち方認めないって言うてるでしょ！

キヨウヤが起きたらもう一度勝負しなさいよ！アンタなんてキヨウヤが本気でやれば瞬殺なんだから！」

こんの取り巻き女ども……。

人が魔劍奪わずにそのまま立ち去るっていうのに、どこまで自分勝手なんだ。

「ねえヤバイんですけど。魔劍の人もそうだけど、あの女の子2人もヤバイんですけど」  
「はあ、こんな時先生がいれば解決するかもなんですけど」

「?めぐみんはあの男達と会った事があるのか?」

それは俺も気になる。

「はい、実は以前私の故郷である紅魔の里であの魔劍の男がアルマ先生を勧誘しようとして訪れたのですが」

めぐみんの話を要約すると、ミツルギって奴は以前アルマに助けられたらしく。

アルマの実力を見て是非ともパーティーに入ってもらいたかったらしい。しかし、アルマはそれを断ってなんやかんやあつて決闘することになったが結果はミツルギのボロ負けだったらしい。

「成程、めぐみんが私たち以上にあの男に嫌悪感を抱いているのはその所為だったのか」  
「はい。まさかこの街でまた会う事になるとは思いませんでしたけど」

「お前も苦労してんだな」

「ちよつと!いつまで無視するつもりよ!」

「そーよそーよー！」

ああ煩いな。俺は真の男女平等主義の名の元に女の子相手にもドロップキックをやる男だが、流石にこれ以上悪目立ちするのは避けたい。

『カズマ、もう我慢の限界だ。』

悪いが勝手に代わるぞ』

「え？お、おいゼロ!?!」

ゼロは有無も言わず俺と人格を入れ替える為に俺の手を操ってマントを外す。こうして、俺はゼロに人格を入れ替えられた。

くゼロsideく

俺は今から完全な私情でカズマの口を借りて会話をする。

カズマは出てこない様に言っていたが、コイツ等の身勝手過ぎる言動には俺も我慢の限界だった。

「おい、お前らしい加減にしろよ」

「な、何よ急に」

「そ、そもそもアンタが卑怯な勝ち方なんてしなければ良い話じゃない！」

卑怯ね。

「確かに一見すると卑怯かもな「な、なら」だが、そのミツルギって奴は俺みたいな貧弱装備の冒険者相手に魔剣を使って負ける方が難しい勝負を仕掛けて来たんだぞ？それは、お前達の言う卑怯なやり方じゃないのか？」

「うっ」

「第一、今の決闘だってそっちから勝手に仕掛けて来たものな上にミツルギはこう言っただよな？」もし僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ。君が勝てば、その時は何でも言う事を聞こうじゃないか」と。

コイツは勝手に仲間を景品にしたのに、こっちがその景品として魔剣を貰おうとしたらそれは反対なのか？

それに今の勝負も、俺は自分の持つスキルを使って勝った、つまりルールの通りにしただけだ。それが不服だったならミツルギだってソードマスターのスキルを使えば良い話じゃないか。

オマケに、景品の魔剣は要らないから帰ろうとしたら今度は勝負の決着に不満がある

ときた。お前達は自分の思い通りにならないと駄々こねる子供みたいに見えるぞ」  
「うう…」

「ね、ねえカズマさんが怖いんですけど」

「カズマというよりゼロに代わったんでしょね。私も直接怒られてないのに怖いです…」

「な、何というか。あの状態のゼロやカズマには、絶対に怒られたくはないな」

『(しかし、今のは驚いた。』

ゼロ…俺の為にそこまで怒ってくれるなんて…』

「で、でも…」

「そんなにこっちの勝ちに不満があるなら、ルール確認の時に指摘すれば良かったじゃないか。」

それともお前達は、俺がこのミッルギって奴にグラムを使って切られて血まみれになるのが見たかったのか？」

「ち、違うー！」

我ながら意地悪な言い方だし少し言い過ぎな自覚もある。

だが、こういうタイプはここできちんと分かってもらわないと今後どんな影響をもた  
らすか分からないからな。

「お前達の言動はそう捉えられても可笑しくなくらいには自分勝手なものだ」

と、俺がここまで言うときミツルギが起き上がった。

「うっ……こは……」

「気が付いたようだな」

「ツ!? サトウカズマ!」

ミツルギは俺をというより、俺が使っているカズマの姿に反応すると飛び上がる様に  
起き上がった。

「痛つつ……」

「あまり激しい動きはするな。脳震盪で倒れたんだ、しばらくは激しい動きは控えろ」

「あ、ああ。そうするよ」

ミツルギは頭を押さえながら俺の方に体を向けて対面する。

「…僕は、負けたんだね」

「ああ、俺もやり方はアレだったがお前も魔剣なんて物を使ってるからな。手加減なん

て出来なかった」

「君、喋り方が少し違うんじゃないか？まあ良い。それについては気にしないでくれ、アレは僕が完全に油断していたからね」

「…随分と素直に負けを認めるんだな」

正直、コイツは起きてても中々負けを認めなさそうだったから意外だった。

「いや、君に頭を殴られて頭に上った血が下がったのかな。」

どんな形であれ勝負は勝負だからね。それに、君の身のこなしを思い返してもアクア様を任せておいても問題ないと思ってるね」

「つまり」

「ああ、僕の負けだ。」

僕に出来る事なら何でも言ってくれ」

どうやらこのミツルギって奴は、根っこの方は悪い奴じゃ無いみたいだな。

少し過剰過ぎるところはあるが。

「それじゃ、さつきまでのことをカズマやアクア達に謝ってくれ」

「？サトウカズマは君じゃないのか？」

ああそういえばカズマ達に慣れて忘れてたけど、俺って基本的にカズマの体からてるから側から見たら突然性格が変わったのか。

どうしよう……。。

「ああ、カズマは今はウルトラマンゼロに人格が変わってるのよ」  
「ウルトラマンゼロ!?!」

ってアクア!?!コイツアツサリとバラしやがった!

……でもまあ確かカズマ含めた転生者には一応俺の事は知られてるから大丈夫なのか?

「ほ、本当なのか? 本当にウルトラマンゼロが…」

ミツルギの様子を見るにどうやら知ってる様だな。

「(カズマ)」

『ん?』

「(俺に関して含めた諸々の説明は任せた)」

俺はカズマに人格を変える。

何故今この状況で変わったかだって? カズマもミツルギって奴も、俺を通してじゃなくて直接会話しないと互いの事は何も分からないからな。

だからここは、カズマに直接喋らせるに限るんだ。



「再びカズマ side」

「お、おいゼロ!?!」

「さあ、説明してくれ! どうしてウルトラマンゼロが君の中に居るんだ!」

ゼロの奴、急に人格入れ替えたと思ったら急に元に戻しやがって!

でもまあさつきみたいなのが嫌な感じは消えたから良いか。

けど、ミツルギの方は何とかしないと。

でも先ずはアクア入れてきた檻をギルドに返すのが先か。

「だあもう分かった説明するしますから!」

それよりまずはこの檻を返しに行かせてくれ。話はギルドの酒場でしようぜ、ここだと他の人の迷惑だから」

「そうかい?」

分かった、それじゃあ一緒に向かおう。2人もそれで良いかい?」

「私はキョウヤが行くなら」

「わ、私も」

どうやら向こうは話が纏まったみたいだな。

しかし、コイツ人の話を聞かないだけで基本良い奴なんだな。  
イケメンなのは気に入らないが。

「そんじゃ話も纏まったし、お前ら行くぞ」

こうして俺とミツルギのパーティーは、ゼロの機転によって何やかんやと共にギルドに向かう事になったのだ。

## 蘇る魔王の獣

アクセルの街近くにある廃城。

その最上階で、ベルディアとエタルガーは頭を抱えていた。

「…あの紅魔の娘め」

「今日は無かったが、あの日からも爆裂魔法を毎日毎日打ち込みやがって」

彼らは以前アクセルの街を襲撃した日からずっと城で待機していたのだが、あれからも毎日撃たれてる爆裂魔法に苛立っていた。

「やはりあの時、せめて死の宣告をしておくべきだったか…」

「俺も、あの時せめてあの頭の可笑しい娘を始末しなかったことを悔やんでいる」

2体は今ここに居ないめぐみんに対して怒りを通り越して最早殺意に似た何かを抱き始めていた。

「もう我慢ならん！今すぐにもあの街に行つてあの紅魔の娘を始末してやるわ！」

「止めておけ。」

今の我々ではあの娘を殺せたとしてもアルマには勝てん」

「…以前より気になったが、お前はアルマを見た時から異様に奴を恐れる様になつていたな。」

以前奴と会つた事があるのか？」

「…」

ベルディアの問いかけにエタルガーは沈黙する。

いや、正確に言えば確証が持てないが故に悩んでいるというのが正しかった。

「(アルマから感じた気配は、間違いなく奴の…)」

エタルガーの脳裏には、嘗て宇宙にその名を轟かせた超人の姿が浮かんでいた。

「(いやそんな筈は無い、奴は確かに消滅して…)」

「エタルガー？」

「ツ、何でも無い。それより、俺の体も殆どの修復を完了した。」

今であれば、アレを呼び起こす事も可能だ」

エタルガーは笑みを浮かべると懐から一枚のカードを取り出す。

そのカードには、嘗て地球で大地を揺るがした土の魔王の獣が描かれていた。

「ツ！ついにそれを使うのか」

「ああ。本来であればあのような駆け出しの街程度に使うつもりは無かったのだがな、

相手が相手だ。

これをも目覚めさせ次第、明日あの街に襲撃を仕掛ける。

俺はレギオノイド30体、そしてレッドキングとブラックキングとナツクル星人を向かわせる。

お前はアンデッドナイトを向かわせる準備をしておけ」

「俺に命令するな、と言いたいところだがまあ良い。良いだろう」

ベルディアは明日の襲撃の為に準備をしに部屋を後にする。

「さて、始めよう」

エタルガーはカードを宙に浮かせるとそのカードに向けて自らのエネルギーを注ぎ込む。

そのカードは本来であれば膨大なエネルギーを必要とするが、エタルガー程の力を持つ存在であれば時間が掛かるが明日までに間に合わせるには十分すぎるのだ。

「今に見ているアルマ、そして何よりあの頭の可笑しい紅魔族の娘！

必ずあの街諸共、貴様らを血祭に上げてくれる！」

くカズマ side く

俺たちはあの後なんやかんやあつてミツルギ達のパーティーと一緒にギルドの酒場に  
来ていた。

そこで丁度、今日はゆんゆんの訓練としてクエストを受けて帰ってきていたアキラ

（アルマと呼ぶ事も考えたが呼び方を変えるのも何か変な感じなのでアキラのまま）達と合流した。

そして俺、アキラ、ミツルギはパーティーメンバーを隣のテーブルで雑談でもしてもらって同じ転生者同士で話をしていた。

「まさかアルマさんもこの街にいたなんて」

「俺としてはお前が駆け出しの街にいたつてのが驚きだ。てつきり王都に居るものだと思っただが」

「はい。実は、アクセルの街付近に魔王の幹部が現れたと聞きこの街に来たんです」

「そういうえばアキラとミツルギって以前会った事があるって言っただな。」

「なあ、そういうえばお前らってどういった感じで知り合っただな？」

「ああ、カズマは知らないんだっただな。実は」

アキラの話をまとめると、紅魔の里というめぐみやゆんゆんを含めた紅魔族という種族の故郷に以前助けてもらった時のお礼とパーティーに入ってもらおうと勧誘しようとして訪れたらしい。

しかしアキラはそれを拒否してミツルギ曰くアクアを酷評されたから色々あつて決闘してアキラが圧勝したらしい。

「そういうえば以前から聞こうと思ったんですが、アルマさんはどうしてあんなに女神様

を毛嫌いしていたんですか？」

「……アイツにミスで地獄に落とされた」

「……は？」

アキラの言葉にミツルギが固まる。

まあ、アイツからしてアクアは崇拜するに値する女神だったんだろう。そんな奴が手違いで人を地獄に落とすと聞かされたならそうなるのも無理はない。

俺だつてアイツは最初是不覚にも美少女だと思つていた時期があつたよ。

「え？め、女神さまが？アルマさんを手違いで地獄に？えっ？」

「ミツルギ、気持ちは察してやるが事実だ。

でなきや地獄の公爵になつてないし、種族が半分悪魔にもなつてないわ」

「……け、けどアクア様だつて悪気があつた訳では」

「アイツ、俺地獄に送る直前」俺の特典つて地獄の方が需要ありそうだから良かったんじゃない」つて言つたんだが？」

「……」愁傷さまですー！

アキラの言葉にミツルギは勢いよく頭を下げながらさういう。

まあ人様の死因をストレス発散で馬鹿にするやつだから、アキラの時もそうしたのは何となくだが予想はしていた。



『アクアの奴、今度本気の説教の上にゲンコツやった方が良いか』

「そうだな、そうしてやれ」

「そういうえばサトウカズマ、君はどうしてウルトラマンゼロが中に居るんだい？」

「そういうえばそれも含めて説明するって事も含めて此処に来たんだったな。」

俺はミツルギにどうして俺がゼロと同化する事になるのかを説明した。

ゼロが俺が転生する際に不慮の事故で同化してしまった事、そしてゼロとの同化を解除するにはそれこそ魔王を討伐する以外に今のところ方法が無いという事。

俺のザックリした説明にミツルギは何とも言えない顔をしていた。

「君は、運が良いのか悪いのか分からないな…」

「俺としては最初はラッキーって思ったんだけどさ、よくよく考えたら1日でも早くゼロとの同化解除しないと宇宙警備隊の主戦力の1人が抜けたままだからな。今となっちゃ真面目に魔王討伐に向けて体を鍛えているよ」

「そうか。君も、君なりに頑張っていたんだね」

ミツルギは何を思ったのか、立ち上がって俺の前に立ち頭を下げた。

「すまなかつた。君の事を何も知らずに、僕は自分勝手な事ばかり言った。」

僕に出来る事なら、何でも言ってくれ」

「お、おいやめてくれよ！良いって、俺だって自分がだらしない自覚はあるからさ。」

俺こそ悪かったよ、お前としてもあの負け方とか不本意だったんじゃないか？」

「いいや、どんな結果であつても勝負は勝負。それにあれは僕から仕掛けたものだから、僕としては何も不満は無いよ」

おつ、意外と良い奴。

それにしても何でも言ってくれか。じゃあ…。

「そういえばお前に出来る事は何でも言つて良いんだよな？」

じゃあさ、偶にゼロやアキラも交えてこうやつて集まつて雑談でもしようぜ。俺さ、パーティーメンバーが女ばかりでゼロとくらいしか同棲で話し相手が中々いなかったからさ。

それに男でしか出来ない話とかもあるだろ？」

「そんな事で良いのかい？分かった、それで良ければ喜んで。アルマさんもそれで構いませんか？」

「ああ良いぜ」

『良かったな、カズマ』

本当ならアクアの入っていた檻の修理代を請求しても良いのだが、それは俺の手持ち

から何とか払えるし、何より俺としても年の誓い同棲の話し相手が居るってのは何だか良い感じだしな。

やっぱ、男同士でわいわい騒ぐのも今にして思えば結構悪くないんじゃないかとも思える。

「なあそういうえば、ミツルギ。お前魔王軍の幹部が居るからこの街に滞在してるんだっ  
たな。」

その幹部については誰が来てるのか知ってるのか？」

「へ？」

あ、いえ。実は1体はベルディアというデュラハンだというのは分かってるんですけど、もう1体は残念ながら新しく現れた幹部という事で情報が無く……」

確かエタルガーってつい最近確認されたんだっただな。

俺も、アキラに聞かされたなかつたらずっと知らなかった訳だし、ミツルギが知らなくとも仕方ないか。

「あゝミツルギ、実はな」

俺はミツルギにエタルガーについての情報を教えてやる。

「・・・はあ!? 超時空魔人エタルガー!」

「お、おいもう少し声を抑えろ。周りの冒険者たちが見てるだろ!」

「あつ、ごめん。」

「で、でも。本当に、そのエタルガーが?」

「ああ。しかもガワも中身も間違いなく本人みたいだ」

回りの冒険者の視線が少し気まずくあるが、ミツルギの反応も仕方のない事だろう。

ウルトラマンティガからギンガに至るまでのウルトラ戦士を相手に善戦するどころか一度は倒しもしている。

そんな奴が相手なら、ゼロと出会う前の俺だったら迷わず引きこもって戦わない事を選んでいくらいだろう。

「そういえばゼロ、エタルガーって今の魔王軍幹部と同時に相手にして戦ったらどうなる？」

『そうだな、ベルディアという奴は実際に戦ってはいないから何とも言えないが、1対1の状態なら恐らく苦戦は免れないだろう。』

今の俺はビヨンドが使えないからな』

「え？」

へ？ちよつと待つて？ビヨンド使えないの？

「ぜ、ゼロ。ビヨンドが使えないって…」

『ああ、実は以前ジードが使える様にしていたんだが、アレは1度きりのものだからな。』

今俺の手元にライザーもカプセルも無い。今はヒカリに預かってもらっている』

ま、マジか：ビヨンドが無いって事は少なくとも今のゼロの最高戦力はウルティメイトやシャイニング。後はウルティメイトシャイニングしかないって事か。

でも確かウルティメイトってエタルガーと互角か少し厳しい戦績だった気が…。それにウルティメイトシャイニングってゼロだけなら兎も角今の俺の体だと耐え切れない可能性が高いってゼロが言ってたしな。

『こんな時、ライザーやカプセル。或いはヒカリが開発中っていう“アレ”があれば良

かったんだが…」

「ん？アレ？」

アレって何だよゼロ」

『実は、以前から光の国ではヒカリの案で俺の強化アイテムを開発中なんだ。それさえ有れば一気に戦力増強に繋がると思ったんだが、生憎今のこの状況じゃそれも無理そうだな』

マジかよそんなアイテム開発してたのか。

でも、無い物ねだりしても仕方ない。確かにその強化アイテムが無いのは惜しまれるが、それでもいつ奴らがまた来るか分からないんだから、今の戦力で戦うしかない。

それに、コツチにはゼロやアキラだけじゃなくてネクサスになれるゆんゆん、ソードマスターで魔剣持ちのミツルギ。そして俺のパーティーメンバーを含めた心強い仲間が居るんだ。

「ゼロ」

『？』

「勝とうぜ。この戦い」

『…へっ。ああ！俺たちのスーパーノヴァ。奴らに見せつけてやろうぜ！』

「カズマ、俺たちも忘れるなよ？」

「ウルトラマンゼロが何を言っているのかは聞こえなかったけど、僕の事もだよ」  
「ああ、分かっているって」

こうして俺たちはそれぞれの覚悟を胸の内に秘めて、隣の机で雑談していたパーティーメンバーも含めて夕食を採った。

その際にミツルギのパーティーの2人からも正式に謝罪を貰い、更に俺たちが話している間に女間で随分と打ち解けていたみたいだった。

始めての他のパーティーも含めた夕食は、前の世界で引きこもっていた俺には考えられなかったくらいに、とても充実していた。

（ N O s i d e ）

とある宇宙。

その宇宙を2人のウルトラマンが現在飛行していた。

1人は赤と銀の体に鋭い目が特徴の“ウルトラマンジード プリミティブ”。

そしてもう1人は青と銀の体に胸のカラータイマーが乙になっていおり、右手にはベリアロクを持っている“ウルトラマンゼット オリジナル”だった。

「ジード先輩、そろそろ例の闇エネルギーが検出された星に辿り着きます！」  
「分かった」

『それにしてもゼットさん。良かったですね、ゼロ師匠もその星で生きているのが確認されて』

ゼットと同化している青年、ナツカワ・ハルキは安堵した様子でそう言い、ゼットも



それに応える。

「ああ。それに師匠のいる新しく確認された星は闇に汚染されている訳でも無いようだしな」

「でも油断はしないで2人共。その星で検出されたエネルギーは、とてつもない濃度だと聞くから」

『ふんっ。どちらにせよ、斬り甲斐が有りそうな連中が居そうだな』

「ベリアロク、お前は相変わらずそれか…」

『まーまーゼットさん。ベリアロクさんも』

ゼット達の相変わらずのやり取りにジードは自然と頬が緩むのを感じた。

しかし、直ぐに真剣な表情に戻った。

「……」

「ジード先輩、もしかしてまだ感じてるんですか？」

「……うん（これから向かう星…そこに向かう度に、どうしても感じて来る）」

ジードは飛行しながら、自分の中に感じる違和感の正体を探っていた。

今回の任務は、本来であれば時空を超える力があるゼットだけの調査だったのだが、ジードが胸の中に眠る違和感の正体を探ろうと、今回の任務のメンバーに入れてもらったのだ。

そしてそれを感じていたのは、ジードだけでは無かった。

『……』

「ベリアロク、お前はどうか？ 違和感ってヤツの正体は掴めたのか？」

『…いや、分かん。だが、俺と似た感じの力を感じているのは確かだ』

「うん。それにそれは、目的の星に近づくにつれてどんどん強くなってくるんだ」

どうやらベリアロクもそれを感じていたらしい。

『と、兎に角その違和感はその星に行けばわかるかもしれません！』

「そうだな、ハルキ」

「そうだね。それじゃあゼット、ベリアロク、ハルキくん。あと少しだから、頑張ろう。

ゼロにも、万が一の為にコレを届けなくちゃだしね」

ジードは手に持つ2つのカプセルとジードライザー。そして“短剣型のアイテム”

と“赤と青のツートンカラーに銀色のラインのブレスレット型のアイテム”を持っていた。

「はい！ 『押忍ッ！』」

『ふんっ』

4人は気を引き締めて、その目的の星。ゼロが辿り着いたアルマたちの居る星に向

かつて進み続けた。

「この感じ……もしかして、その星に居るの？」

父さん」

ジードは頭に浮かんだ疑念を被りを振るって振り払い、その考えを捨て去った。

# さあ、ここからがバトルファイトだ

昔々、人間では考えられない数万年も昔。

とある星に、1人の男が居ました。

その男は、生まれ持った乱暴な性格故に同族から距離を置かれていました。

しかし、そんな彼にも友と呼べる存在が出来ました。

彼はその友人と共に肩を並べ、戦いお互いを信じあえるパートナーと想っていました。

それが、嫉妬へと変わるまでは……。

くアルマ side く

「ツ!?!」

俺は今回は趣味の睡眠をして夢を見た。

しかし、その内容はどうしてか俺の心を激しく揺さぶる。今まではこんな事無かったのに…。

「おい、どうした」

「…ジャグラーさん」

そんな俺に俺より先に起きてたらしいジャグラーさんが話しかけて来た。

「いいえ。変な夢見てしまつて…」

本当に、目を追うごとに確信までは分からないが内容が鮮明になつて来やがる…。

「でもまあ、大丈夫ですので」

「…なら良いが。何かあれば言えよ。」

大丈夫とか言っている奴が大丈夫じゃないのは、よくある事だぞ?」

「はい…分かっています」

実際体に不調は無いし特にどこか問題有るわけじゃない。

だから大丈夫だ。

「なら早く店始める支度をしろ。」

ウイズもゆんゆんも、もう起きて準備している」

「はい」

そうだよな、今は現在の店の経営を良くするために少しでも働かなくちゃだよな。

『緊急！ 緊急！ 全冒険者は直ちに武装し、至急正門前に集まってください！ 特に  
冒険者サトウカズマさんとその一行。そしてアキラさん、いえアルマさん？  
もう兎に角！ 大至急でお願いします！』

特に



「カズマ！ゼロ！ミツルギ！」

「アキラ！来たか！」

「待つてました！」

「状況はどうなってる。お前ら」

「お、お待たせしました！」

俺たちはアナウンズに従い、ウイズは店に残して正門前に到着する。

そこには、カズマとミツルギのパーティーを含めた街の冒険者たちが集合していた。

「ヘビクラさんにゆんゆんも！」

「これは心強い。実は……」

カズマ達は俺たちが来たのを確認すると、ある場所を見た。

俺たちもその視線を追ってそちらを見ると、そこに奴らは居た。

前回とは違い、後ろに大量のレギオノイドやアンデッドナイト。オマケに暗殺宇宙人ナツクル星人とレッドキングにブラックキングを引き連れて。

「・・・」

しかし、ベルディアとエタルガーは何やら俯いていた。

そして、直ぐにその様子は憤怒に染まる。

「き、貴様ら・・・」

「何故・・・」

「何故まだ爆裂魔法を撃ちこんでくるのだ！この人でなしどもがあああああああああ

あああああっ!!!」

どうやら、彼らは。今日もお怒りだったようだ。

〈N O s i d e〉

激昂した様子の子のベルディアとエタルガーに、最初に反応を見せたのはカズマだった。

「ええっ!!」

ど、どうしたんだ？もう爆裂魔法は撃ち込んでいないのに…」

「撃ち込んでいないだと？」

「何を言うか白々しい！」

ベルディアはカズマの言葉に持っていた頭を叩きつけてバウンドさせキヤツチし、エタルガーはめぐみんを指さす。

「その紅魔族の娘が、あれからも毎日欠かさず撃ち込んでいるわ！」

「へ？」

「・・・」

エタルガーの言葉にカズマは思わずめぐみんを見る。

しかし、めぐみんはそんなカズマの視線から逃れる様に目をそらす。カズマには、それだけで十分答えになっていた。

「おーまーえーかー！」

「いひやい！いひやいでふう！」

ま、前までは何も無い草原に撃ち込むだけで満足だったのですが…あの城に撃ち込む快感を覚えてからはその…大きくて、硬いものじゃないと満足できない体に…」

めぐみんは、頬を赤くしながらもじもじした。

「もじもじしながら言うんじゃないわ！」

「めぐみん！貴方何してくれてんのよ！」

「本当に！うちの元生徒がすみません！」

「というかちよつと待て！確かお前は爆裂魔法を撃ったら動けなくなる筈だよな！」

『という事は、めぐみんをおぶって帰る奴が必要だよな？』

「「あ」」

ゼロの言葉にアルマたちは啞然とする。

めぐみんをおぶって帰る事が出来るのはカズマを除けばアクアかダクネスに絞られる。

「ツ！…ヒュ！…ヒュ！」

「…」

そんな時、アクアが音が鳴らない口笛を吹く。

「どうやら、犯人が直ぐに見つかつたようだ。」

「そこからのアルマの行動は早かつた。」

アルマは飛び上がると拳を構え、体を少し捻りながら威力を付けその拳を脳天目掛けて振り下ろす。

「神滅のファーストブリットおオオオオオオオツ!!」

「いったあああああああああいつ!!」

アルマの見事なフォームで繰り出された拳は、見事アクアの脳天に直撃しあまりの痛さにアクアは叫び頭を押さえてうずくまる。

「おうコラ邪神様よお。理由を聞いてやろうじゃねえか」

「だ、だつて…あ、アイツ等の所為で碌なクエスト受けられなかったから…腹いせがしたかったんだもん…」

アクアの物言いに、アルマは両手をゴキゴキと鳴らす。

「どうやらセカンドも御所望らしいな？」

「ヒイツ!!」

そんなコントをやっていると、突然ベルディアとエタルガーから怒気を含んだ魔力を察知した。

「余裕でいられるのも今のうちだ貴様ら！」

「我が下手に出ておれば調子に乗りやがって！もう我慢ならん！」

「え、エタルガー様ツ落ち着いてください！」

「ええい離せ！もうこの街は滅ぼすと決めたのだ！」

何とか宥めようとするナツクル星人に同情しながらも、エタルガーが取り出した一枚のカードにアルマ達転生者やゼロやジャグラーなどの存在がよく知っている存在が描かれていた。

「!? エタルガーテメツ、それは！」

「ふっ、ようやく動揺したなアルマ。」

そう、これは魔王獣を封じ込めたカードだったがな、つい昨日解放に成功したのだ。

エネルギーを偽造する事で、貴様らはどうやら感づく事はなかった様だがな」

「くっ」

悔しがるアルマを他所に、エタルガーはカードを構える。

その中に封じられし厄災を解放する為に。

カードからは、地面に吸い込まれる様に赤い人魂みたいなものが無数に放たれる。

「フハハハハハハッ！」

アルマ、紅魔族の娘！そしてアクセルの街の冒険者ども！

貴様らには、モンスターの雄叫びよりも、勝利の喝采よりも素晴らしいものを聞かせてやろう」

「魔王獣の雄叫びをな！」

そして全ての赤い人魂が地面に吸い込まれた時、地を砕きそれは現れた。

それは、龍を思わせるような体をしていた。

その体は、かつてウルトラマンギンガを苦戦させたスーパーグランドキングのものが、その額にあるマガクリスタルは赤く怪しく光る。

土の魔王獣マガグランドキング。

それが、大地の厄災を司る魔王の名だった。

「マガ……」

「グランドキングッ……！」

その威圧感、いや存在そのものにアルマとカズマは顔を強ばらせる。

それほどまでに、魔王獣というものは恐ろしいのだ。

「な、何なんだよあのモンスター……?」

「あ、あんなのに勝てんのか?」

「無理に決まってんだろ! ヤツ以外にも後ろに居るんだぞ!」

アルマ達以外の冒険者達はマガグランドキングの登場にどよめき、そして恐怖の声を上げ始める。



当然だ。マガグランドキングだけでなく、背後に控えるエタルガーやベルディアを率いる怪物2体と星人1対。さらにはレギオノイドやアンデッドナイトまで居るのだ。普通に考えれば、戦況は絶望的。

「何を狼狽えているのですか」

「「「「「?!?」」」」」

そんな同様の冒険者達を宥めたのは、スーツなのは変わらず手には西洋剣が抜刀した状態で握られているスヴィンだった。

彼は、冒険者達の間をぬいながら進み言葉を続ける。

「エタルガーはマガグランドキングを召喚し相当にエネルギーを消費しています。アンデッドナイトもレギオノイドも所詮は雑魚です」

そして彼はアルマたちの隣に立ち剣先をエタルガー達に向ける。

「たとえ駆け出しの街であろうと、せめてレギオノイド程度は倒して見せなさい。

エタルガー達は、我々の仕事ですね？アルマ様」

「お前…。ああ、その通りだな。」

そもそも今まで鍛えて来たのは、こういう状況の為でもあるんだ。そうだよな、皆」  
スヴィンの言葉に鼓舞された様にアルマは表情を引き締める。

そんなアルマに呼びかけられたカズマやゆんゆん達も同じような雰囲気だった。

「ね、ねえ。何だか皆やる雰囲気だけど、私帰っていい?」

「セカンドの後にサードも喰らいたいなら良いが?」

「謹んでやらせていただきます!」

「全くウチの駄女神は…」

『良いじゃねえか。決戦の緊張をほぐすには丁度いい』

「み、皆さん!頑張りましょう!」

「つたく、俺もやらなきゃいけない流れかよ…」

「ここは、魔剣の勇者として引くわけにはいかないね」

「あ、あれ程のモンスターの大群がッ」

「何故興奮しているのですか!?

「ま、まあ良いでしょう!あのような有象無象の大群など、我が爆裂魔法で一掃してくれよう!」

「各々がそれぞれの武器を構える。」

そんな中、アルマは新しい短剣型の変身アイテム“ダークネススパークランス”を取



ジャグラーは渋々ながら、アルマたちと一緒に変身シークエンスに入る。「じゃあ！行くぜ！」

アルマはダークネススパークランスを掲げると、両端が開かれ、そこから光が溢れるとギンガダークネスのスパークドールズが現れる。

そして、それを掴み取り足裏にあつた紋章にスパークランスの先端を当てる。

《ダークネスライブ》

《ギンガダークネス》

ジャグラーはカリバーのリングを回す。

すると、カリバーには炎、氷、嵐、岩の文字が浮かび、最後には闇の文字も加わった。そしてそれを天に掲げてトリガーを押す。

カリバーからは、どこか暗い音楽が流れ始める。

さらに、カズマはゼロアイNEOを目に当てゆんゆんはエボルトラスターを引き抜き天に掲げた。

「ギンガー！」

「オーブ！」

「セエヤアツ！」

「うおおおおおおおおおつ!!」

4人の体が闇色も含めた眩い光に包まれた。

その光に周りの冒険者たちもエタルガー達も思わず目を覆う。

「ぐっ…」

「ハ、これは?」

光が収まり、全員の視界が回復すると彼らは立っていた。

黒い体に赤いライン、そして赤いクリスタルを備えた体の戦士“ギンガダークネス”  
黒と灰のカラーリングの体に巨大化したダークネスカリバーを持つている戦士“  
オーブダークネス”

赤と青の体を持つセブンの息子“ウルトラマンゼロ”

銀色の絆を紡いできた戦士“ウルトラマンネクサス”

光と闇、本来は交わる筈のない戦士達が今日の前の敵を倒す為に並び立った瞬間だっ

た。

そんな変身した4人にエタルガー達も冒険者たちも驚く。

「ぎ、ギンガだと!?!」

「よし、問題なく変身完了」

「まさかオーブ擬きに変身させてくるとはな…」

『もう俺は何に変身しようが驚かないぞ…』

「(うう…:会話に混ざりたいけど、喋ると掛け声位しか発せないからツライ…)」

「ああゆんゆん。この姿だとウルトラマンとかだと声は聞こえるからさ」

「(え?!:本当ですか!)」

「随分と賑やかになったな。

ま、これで百人以上の力がそろったぜ!」

4人が変身し終わると、アクアたちも彼らの隣に立ち並ぶ。

「さあ、ブラックホールが吹き荒れるぜ!」

ゼロの腕を回した後に相手を指さすポーズと掛け声でアルマたちはエタルガー達目掛けて一気に駆け出した。

## 戦闘開始

（N O s i d e）

アルマたちが変身を完了し、彼らはエタルガー達に向けて攻撃を開始した。

アルマはギンガダークネスとなった体で低空飛行をして、一気にエタルガーとの距離を詰め突撃する。

「勝負だ、エタルガー！」

「ぐっ！」

エタルガーは突然の攻撃に反応できずに後方へと押し戻されてしまう。



「エタルガー!」

「おっと、お前の相手は」

『俺たちだ!』

「ツ!」

すぐさまエタルガーの援護を行おうとしたベルディアだが、それをゼロとゼロに姿を変えたカズマが阻む。

彼は頭部のゼロスラッガーを一つの刃、ゼロツインソードへと変化させ切りつける。

「ぬおっ!」

しかし、ベルディアもアンデッドになったとはいえ元は騎士。

咄嗟に大剣を前に出す事でガードする。

防いだそれをベルディアは足で蹴り飛ばそうとするが、それは飛行を利用してバク宙のように躲された。

「くっ、貴様!」

「へへっ」

そんな幹部2体を相手にしている間にオーブダークネスとなったジャグラーは、マガランドキングに斬りかかる。

「そおらあつー！」

『~~~~!?!』

マガランドキングはジャグラーの振るってきたダークネスカリバーをペンチのようになってる右腕で防ぐ。

「はっ！分かつてはいたが、やっぱ硬えな！」

『~~~~!』

ジャグラーは再びカリバーを振るうが、今度は爪の様な左腕で防がれ右腕による攻撃が来る。

それをジャグラーはカリバーを掴んでいた左腕を離してガードする。

しかしその攻撃が予想以上に重かったのか、左腕に痛みと痺れを感じる。

「くっ（流石は土の魔王獣。攻撃防御共に一筋縄ではいかないか）なら、これならどうだ？」

ジャグラーは、カリバーのカリバーホイールを回し中心の光を“岩”に合わせ引き金

を引き勢いよく回す。

「ダークネスロッキカリバー!」

岩の力を開放し剣先を地面に突き立てる。

すると突き立てられた剣を中心に地面より剣の様な岩が円を描くようにマガグランドキングへと迫っていく。

「~~~~ッ!」

しかし、その攻撃はマガグランドキングに直撃はしたが両腕を交差させ防ぐ事で大したダメージが通らず、ほぼ無傷という結果に終わった。

「くっ、硬さだけなら他の魔王獣以上の化け物だな…」

ネクサスに変身したゆんゆんは、ナツクル星人とレッドキング、そしてブラックキングを相手取る。

「シエヤッ!」

「くおっ!?!」

ネクサスは開戦と同時にナツクル星人目掛けて飛び蹴りを放つ。

その攻撃を受けたナツクル星人は後ろに退き続けざまに放たれるネクサスの拳を受ける。

「ぐっ！このっ！」

「！」

ナツクル星人は片腕でガードしながら懐よりナイフを取り出して反撃する。

ネクサスはそれを咄嗟に体を反らす事で躲す。

そして数回に及んで繰り出されるナイフの攻撃を捌きこのままでは不利と判断して一旦距離を取った。

が、その後退した先は丁度レッドキングとブラックキングが待ち構えていた場所だった。

「!？」

ネクサスはそれに気づくが、2体の怪獣はその怪力を伴った腕で攻撃する。

「ハッ！」

「!？」

そんな攻撃を防ぐ者が居た。

それは、魔剣グラムを抜刀してその剣の腹で2体の怪獣の攻撃を受け止めるミツルギだった。

「くっ…ファイオ！クレメア！」

「任せてキョウヤ！『バインド』！」

「せいっ！」

ミツルギの指示で、彼の仲間の盗賊が持っていた捕縛用のワイヤーを2体に放って巻き付けると、もう1人の仲間の戦士が持っていた槍で2体を攻撃して後退させる。

「……」

「まさか君みたいな女の子がネクサスだなんてね。」

この2体の怪獣たちは僕たちに任せてくれ」

「……」

ネクサスは返事こそしなかったが、頷いて答えた。

そして、再びナツクル星人に向き直ると片腕を胸の前に構えて光を放ち、赤いネクサス。

ジュネツスルージュへと姿を変えた。

「セイっ！ヤアッ！」

『~~~~!?!』

『~~~~!?!』

ところ変わって、ダクネスは襲い掛かって来るレギオノイド相手に剣を振るう。

彼女の剣は両手剣スキルのお陰もあってしつかり“当たる”。

「フハハハハッ！どうした！」

お前達の攻撃は全然気持ちよく無いぞ！もつと本気で撃ち込んで来い！」

ダクネスは何故か顔を赤くして、しかも息を荒げていた。

しかもよくよく観察してみると、彼女の鎧には所々にかすり傷程度の傷が出来ていた。

「ちよっ！ダクネス！コッチからも来た！」

「ダクネース！コッチからも来ましたよ！」

「何?!よし望むところだ！全員まとめて切り伏せる！」

そんなダクネスに張り付く形でアクアとめぐみんは彼女の近くにいた。

実は、アクアとめぐみんは勢いで出て来たは良いが、アクアのターン・アンデッドはアンデッドナイトには効かず、めぐみんはここまでの混戦になつてくると爆裂魔法を撃てないのでほぼ戦力外なのだ。

『ライトニング』！

そんな中、ダクネス達に迫っていたアンデッドナイト2体を、スヴィンが魔法で頭を撃ち抜いた。

「スヴィンさん！」

「どうやら殆どのモンスターは貴方に引き寄せられているようですね。」

いえ、正確には半分は貴方の『デコイ』で。もう半分はそちらに居る青髪のプリーストにアンデッドが引き寄せられているようですね。

手伝いますよ」

「むっ!?だ、大丈夫だ！この程度「貴方の傍にいる仲間の安全を優先しなさい」うっ…」

ダクネスはスヴィンの申し出を断ろうとしたが、スヴィンの言葉で傍にいるアクアとめぐみんの事を見る。

「わ、分かりました…」

「賢明です」

ダクネスはスヴィンの申し出を受け、迫りくるモンスター達の対処に当たる。

そして他の冒険者たちも、彼らの後に続けと言わんばかりに各々の武器を持って戦っていた。

そんな乱戦が繰り広げられているアクセルの街の前の平原。

アルマはエタルガーとの格闘戦に移っていた。

「シヨオラアッ！」

「ぐっ…ふっ！」



アルマはエタルガーに横蹴りを入れる。しかしその硬い体で思ったよりダメージは入らずエタルガーはその足を払い今度は拳を突き出してくる。

アルマはその拳をガードし、数撃目のところで今度は受け流しチョップを入れる。

「くっ、硬った!」

「はっ!」

「うおっと!?!」

エタルガーは怯んだアルマ目掛けて、光弾を放つ。

アルマはそれを寸前のところで後ろに飛びのく。

「ちっ」

「ふんっ!どうした、最初の勢いは見掛け倒しか?」

「はっ、言うじゃん。」

「ならこれはどうだ!」

アルマは両腕を前でクロスさせ胸の前に持つてくる。

すると、ギンガダークネスのクリスタルは燃える様な赤に染まり、アルマが右腕を後ろに引く様に構えると周りに黒い炎を纏った岩が現れる。

「ダークネスファイアーボール!」

勢いよく突き出された右腕を合図に、その黒い炎を纏った攻撃が放たれる。

その攻撃は、真つ直ぐにエタルガーへと向かつて行く。

「ふんっ！」

エタルガーはその攻撃を躲すのではなく、両手を広げてそのまま受けた。アルマの攻撃は、1つ残らずエタルガーに直撃し周りを土煙で覆い隠す。

そして全ての攻撃を終え、アルマはその土煙を注視する。

「……」

段々と晴れて来る土煙。

「……はっ！この程度か」

「……やっぱ、そう簡単にはいかないよな」

そこからは、エタルガーが無傷で立っていた。

エタルガーの恐るべきものの1つ。それがその硬い装甲の様な体だ。

その体は、生半可な攻撃では傷1つ付けられない。

「そのような温い攻撃では、この俺は倒せんぞ」

「コスモスに使ったのと同じセリフかよ。」

「なら、これは効くか？」

アルマは今度は両腕を前に出してクロスさせる。

クリスタルは元の血の様に赤く光り、その腕を左右に開くようにして半回転させる。

「ダークネスクロスシュート！」

右腕を縦に、左手を握り拳にして右腕の肘の辺りにくつつけるようにして構える。

その体制から、ギンガのギンガクロスシュートのダークネス版の光線がエタルガー目掛けて放たれた。

「はっ！その程度！」

エタルガーは放たれて来る闇色の協力的な光線にも怯まずに、それぞれどこかその光線目掛けて一気に突っ込んできた。

すると、その光線はエタルガーに直撃したがエタルガーが突っ切った事で光線がえたるがーを中心にしてチリジリにされていった。

「マジかよ!?!」

「せええええええやあっ!!」

エタルガーはアルマとの距離がほぼ0に近くなりその無防備な腹部目掛けて爪による突きの攻撃で風穴を開けようとする。

「くっ！」

アルマは迫りくるエタルガーに対し、慌てて体を後ろに倒す。

その咄嗟の回避によりエタルガーはアルマの上を通り過ぎ、アルマは光線を止めて立て直す。

「所詮はギンガ擬き。俺の敵ではない」

「はっ。言ってくれるじゃねえか」

アルマはエタルガーの挑発にも勢いを消さず、腕を前に出してダークネススパークランスを出現させる。

すると、それは真ん中から闇色の光の棒が出現しギンガダークネスの身の丈は有るであらう槍へと変化した。

アルマはそれを持つと感触を確かめる様に振り回す。

「なら、近接戦で勝負しようじゃねえか！」

「ふんっ！」

「セエヤッ！」

一方、ゼロとベルディアはお互いの刃と刃を交えていた。

ゼロは連撃や勢いで最初は押していたが、段々とゼロの動きに慣れて来たベルディアはその大柄な体からは考えられない回避力とパワーでそれに対応してきていた。

「くっ。コイツ…」

『ゼロの動きに慣れて来てる!?!』

「中々やるな、アルマと同じ力を使う戦士よ。」

「だが俺もかつては騎士だった身だ。それに今は魔王軍の幹部、そう簡単にやられはせん！」

「ぐっ!?!」

ベルディアの剣幕に押されとうとう大振りの一撃によって後退させられてしまう。

『ゼロ!』

「ツ!問題ない。しかし、まともにもやりあっちゃ埒が明かないな」

ゼロは、ゼロツインソードを元のゼロスラッガーに戻し、左腕に巻かれているウルティメイトブレスレットに触れる。

すると、ゼロの体は赤い炎の様な物に包まれる。

ゼロの体は、青かった部分が赤く、赤かった部分が銀色になったコスモスのコロナモードとダイナのストロングタイプのを宿した戦士。

「ストロングコロナ、ゼロ!」

「ほう、色が変わったか」

「変わったのは、色だけじゃないぜ!」

ゼロは腕を回すと、両腕の拳をぶつけ右拳でベルディアへと殴り掛かる。

「オラァッ!」

繰り出された右ストレートはベルディアに繰り出される。

それをベルディアは咄嗟に大剣を前に構えてその表面で受け止める。

それにも構わずゼロは、ストロングコロナ特有のパワーを活かして何度もラッシュを

繰り出す。

「オラオラオラオラオラアッ!!!」

「ぐっ!くっ…!」

ベルディアはそのラツシュに思わず退く。

そして、最後の1発と言わんばかりにゼロは片腕を回しその拳を一気に叩き込んだ。

「シャオオラアッ!」

「グオオオオオツ!」

ゼロの拳により、ベルディアは何とか踏みとどまろうとしたが地面を削りながら後ろへと殴り飛ばされた。

一見すると、ゼロが押している様に見えるが、実際のところはほぼ互角と言っている。

「(何だよあの剣!?! ストロングゴロナのパワーでも砕けなかっただ!)」

『(ゼロの攻撃を凌いでる!?)』

「(あの戦士。確かエタルガーから聞いたウルトラマンゼロという者の特徴と一致しているな。)

まさかこれほどとは…面白い!」

ゼロとカズマは目の前の魔王軍幹部の手強さに驚愕し、ベルディアは目の前の強敵の出現に歓喜する。

「フハハハハハハハハッ!!!面白い!面白いぞ!

駆け出しの街と大して期待していなかったが、よもや貴様の様な強者と出会えるとは!

謎の戦士よ、名を聞こう!

「・・・ゼロ。ウルトラマンゼロだ!

そして、俺の相棒のサトウカズマだ!」

ゼロはベルディアの問いかけに、自身の名と胸に手を当て自分のこの世界での相棒の名前を口にする。

『ゼロ...』

「ウルトラマンゼロ。サトウカズマ。

良き名だ、強気者たちよ!

「へっ、そうとまで言ってくれたあ嬉しいね。

なら、これでも喰らいな!」



ゼロは鼻を鳴らすと右手をブレスレットに叩く様に添えると、右手に炎が纏われた。「ガルネイトオ、バスターー!」

右手を突き出すと、そこから炎が噴き出しそれは真っ直ぐにベルディアに放たれる。

「甘いわ!」

しかしベルディアもそれを大人しく受ける筈も無く、放たれた炎は頭を真上に投げたベルディアが両手で持ち真上に振り上げそのまま勢いよく振り下ろされた大剣によって、真ん中から真っ二つに切り裂かれてしまった。

「何ッ!?!」

『滅茶苦茶すぎるだろ!』

「今の炎は流石に馬鹿正直に喰らう訳にはいかんのでな。

悪いが、加減は出来んぞ!」

「グアッ！」

所戻ってアルマの方はピンチに陥っていた。

彼はエタルガーの攻撃によって吹き飛び地面に背中から倒れる。

その際に、ダークネススパークランスを落とすまい槍は地面に突き刺さる。

「どうした？ 勢いだけで、大して効いていないがよもやそれが全力か？」

そんな倒れるアルマをエタルガーは嘲笑い胸に付いた誇りを払う仕草をする。

「くっ（クソッ、さつきから攻撃は当たってるけど殆どダメージらしいダメージが見られない。」

「ヤツの体の硬さを甘く見過ぎていた……」

「魔王軍や、ヤツからは油断すると言われていたが、この程度ならば問題ないな」

「（ヤツ？）」

エタルガーの口から聞こえた短い単語をアルマは聞き逃さなかった。

「ヤツ…だと?」

「ふんっ!これから死ぬ貴様が、知る必要は無い!」

エタルガーはアルマに近寄ると、その凶悪な鋭い爪の腕を振り上げアルマに止めを刺そうと振り下ろす。

「(やべっ!)」

が、それが彼の体を切り裂く事は無かった。

「ぐっ！な、なにい!？」

代わりに切り裂かれたのは、

エタルガーの方だった。

「……」

「き、貴様ツ（こ、コイツツ。急に動きが）」

エタルガーは急に動きが変わったアルマに驚愕し、数歩後ろに後ずさる。

エタルガーは胸を切り裂かれ始めて傷を付けられた。

「ツ…いい、一体何が…ツ!?!」

エタルガーは切り裂かれた胸を押さえながらアルマを睨みつけようとした。

が、直ぐにその顔は驚愕に染まった。

何故なら、

アルマの変身したギンガダークネスのたった今エタルガーの胸を切り裂いたと思わしき右手が、“黒く鋭い爪の手”に変化していたのだから。

「き、貴様…その手はっ！」

『直接会うのは初めてか？超時空魔人エタルガー。』

“オレ”が居ない宇宙は楽しかったか？」

「なっ!？」

アルマの口から出て来た声は、先ほどとは全くの別人だった。

しかも、エタルガーはその声が誰のものなのかを知っていた。

「お、お前は！まさか！」

『はっ。どうした？まるで亡霊でも見たような顔になりやがって』

エタルガーとアルマの体を使っている人物のやり取りはどうかやら戦闘によって周りからは気に留められていないらしい。

それを利用してアルマではない誰かは話を進める。

『お前が蘇ってるんだ。オレが生きていても不思議ではないだろ？』

「き、貴様は、ウルトラマンジードにっ」

『ジードか。久しぶりに聞く名前だ。』

ま、今のオレからすれば聞き飽きた名前だがな』

アルマ？は右手を見て何かを懐かしむ様な言葉を口にする。

その様子は一見すると隙だらけな姿だが、エタルガーはそれを攻撃することは無かった。

もし攻撃すれば、エタルガーには自身が死ぬ未来が見えるからだ。

『ゼロ：ネクサス：ジャグラスジャグラー。それに女神に転生者、だったか？存在が変わって面白すぎる状況になってるな。』

それに…』

アルマ？は、レギオノイドやダークロプス達を倒しているスヴェインに目を向ける。

その表情は、心なしか嬉しそうだった。

『生まれ変わってもオレに仕えるとは、変わらず見事な忠義だった』

「こ、答えろ！何故貴様が！」

『生きているってか？おいおい、オレ達みてえな闇の存在がどうやって蘇ったかなんて、そんなに重要か？』

それによ



テメエには、オレの偽物を作りやがった札をしたかったんだよ』

「ツー！」

瞬間、アルマ？からの殺気が先ほどの比じゃない位に噴き出す。

しかもそれはエタルガーだけに向けられたもので周りには察知されていない。

その恐ろしい濃度の殺気に、エタルガーでさえ恐怖を抱く。

「（こ、殺されるっ！）」

『前の世界で、あー何だったか。ウルトラじゆうゆうし、だったか？』

オレの偽物作るなら、もっと力入れるよ。お陰で、ゼロに余計な黒星晒しちまったじゃねえか。

だから殺す。どちらにしろ、今世のオレの生徒ってやつを殺されるのは気分悪いからな』

「ツ!？」

アルマ？は黒い手を握ったり閉じたりして感触を確かめエタルガーに向き直りエタルガーも戦闘を再開しようとする。

その瞬間、天から2つの光線が放たれてきた。

## ニュージェネレーションの力

アルマが謎の人格になった直後、空からは2つの光線がマガグランドキングとベルディアに目掛けて放たれた。

「ぐああああああつ!!」

「~~~~~ツ!!」

『!?!』

突然の攻撃に喰らったベルディアたちだけでなく、その場にいた全員が驚愕する。

そして光線の勢いは止まらず、ベルディアたちを退けた後にそのままエタルガーへと標的を変えて移動した。

「ちいっ!」

エタルガーは胸の痛みを耐えながら、その向かって来た攻撃を両手を重ねる事で耐えて弾いた。

「くっ、今のは…」

『ほう…アイツも来たか』

悪態をつくエタルガーを他所に、アルマ？は笑みを浮かべてその光線が降って来た方を見上げる。

そしてその光線を撃った存在は、ベルディアが立ち退いた事で後ろへ後退していたゼロの元に降り立った。

その存在は、赤と銀色の体に特徴的な鋭い目をしており、もう一人は青と銀色の戦士で右手には目つきの鋭い黒い剣を持っていた。

「ゼロー！」

「師匠！(ご)無事ですか！」

「ジード…それにZ!?!」

ゼロの前に降り立った戦士たちは、ウルトラマンジード・プリミティブとウルトラマンZ・オリジナルだった。

「お前等、どうしてこの星に…」

「ウルトラマンヒカリが、ゼロが飲み込まれたブルトンのワームホールの出口に繋がっているエネルギーの流れを解析してくれたんです。」

それより、ゼロは大丈夫なの？」

「ああ、問題ない。」

と、言いたい。生憎それを言えるのはあいつ等をどうにかしてからだな」

ゼロは嬉しそうな表情から直ぐに引き締め、ベルディアたちに向き直る。

ジードにZも状況は大体把握した様で、直ぐに戦闘態勢に入ろうとする。

が、そんな彼らの前にエタルガーと戦っていたアルマが合流する。

「おおマジか。本物のジードにゼットじゃん！」

アルマは「いつも通り」な口調で、目の前に居るジードやゼットを少しばかり興奮した様子で見る。

「ぎ、ギンガ？でも、その姿は…」

「あージード、その辺の説明はあいつ等を倒した後でな」

「う、うん。で、でも…」

『・・・』

「ベリアアロク？」

『ベリアアロクさん、どうしたんですか？』

ゼロの説明に一旦は理解したジードだったが、彼はアルマにどこか奇妙なものを感じていた。

それは、ゼットに持たれているベリアロクもアルマの方を見て何かを感じ取った様だ。

『…いや、何でもねえ。それより、切甲斐のある連中がワンサカ居やがるじゃねえか。早く切らせろ』

「つたく何なんだよ。何か感じるって言ったり突然黙ったり…」

乙は今回は全然行動が読めない剣に対して少し疲れた様子でゲンナリした。

『お、おいゼロ！ジードに乙が出て来たは良いけど、状況的にはそんな変わらないんじゃないじゃ…』

『あれ？ゼットさん、今の声って』

「ああ、恐らくゼロ師匠と融合している現地人だろう。」

あー安心してくれ。俺たちが駆けつけたのは、ゼロ師匠を助けに来たのもう一つあるんだ」

『もう一つ？』

「あ、そうだった！

ゼロ、これを」

ジードは乙たちの言葉で我に返り、急いでゼロにある物を渡した。

それは、赤と青のカラーで銀色のラインが入っているブレスレットで中央にはとある

ゼロの顔のレリーフが彫られていた。

そしてもう一つ渡されたものは同じく赤と青で銀色のラインが入った短剣型のアイテムだ。

しかもそれた2つのアイテムはウルトラマンギンガの使うギンガスパークと、ウルトラフュージョンブレスに酷似していた。

「これは、完成したのか！」

『ゼロ、それは？』

「“ニュージェネレーションブレス”。そして“ウルトラゼロスパーク”だ。

ヒカリが俺のパワーアップアイテムとして随分前から作ってくれていた物だが、良いタイミングで来たな」

「ヒカリが大急ぎで僕やZを含めたニュージェネレーションの力を込めてくれたからね。何とか間に合って良かった」

「お前等！よくもやってくれよったな！」

『!』

カズマ達が話していると、光線を撃たれたダメージから回復したベルディアが叫んだ。

しかも周りをよく見てみると他はまだ戦闘中で、マガグランドキング達も健在だった。

「おっと、どうやらゆっくりしている場合じゃねえみてえだな。

ジード、Z。お前等は他を助けに行け」

「あー俺の方も一人で大丈夫だ」

「え!?で、でも相手はあのエタルガーだよ!えつと…」

「あ、俺アルマ。よろしく」

「よ、よろしくお願いします…:じゃなくて!」

「まーまー落ち着いて。実はアイツ倒す方法思いついたから、本当に大丈夫なんだ。それより、こんな言い合いしてる場合かな?」

アルマはまだ止めようとするジードに向かい周りを見る様に促す。

回りはまだ混戦状態。一応レギオノイド達の方は何とか抑え込めてはいるが、その近郊もエタルガー達が加わればたちまち崩壊するだろう。



「ツ…分かった。だけど無理だけはしないで、アルマさん」

「アルマで良いよ。アンタに呼び捨てにされると何か変な気分だ」

「さあ！俺たちの戦いは、まだこれからだぜ！」

ゼロの掛け声を合図に、それぞれの戦いへと移った。

「くっ、突然の乱入には驚かされたが。

ウルトラマンゼロ！貴様では俺に勝つ事は出来んぞ！」

「へっ！言ってくれるじゃねえか。」

「だがな、俺たちだってただやられる訳にはいかねえんだ。行くぞカズマ！」

『おう！』

ゼロはジードから受け取ったアイテム2つを光にして取り込むと、ブレスレットの方はカズマの右手首に巻かれ、ニュージェネレーションスパーク（以降はNスパークと略

す)は左手に持たれた。

『これがゼロの新しい力か』

「カズマ、一応言っておくが使い方は」

『大丈夫だ。コレたぶんギンガが使ったのと同じ感じだろ?』

「その通りだ。本当に、俺たちの事は良く知ってるな」

カズマは受け取ったブレスレットのレリーフ部分を90度回し、Nスパークの先端をブレスレットのライブサイン部分に当てる。

《今こそ、1つになる時!》

すると、ブレスレットから1人の男の声、ウルトラマンギンガこと“礼堂ヒカル”の  
声が聞こえて来た。

《ゼロに力を!》

《ゼロニュージェネレーション!》

その声と共にゼロの姿が変わる。

ゼロの横にウルトラマンギンガの幻影が現れたかと思うと、その姿はゼロに重なる。

すると、ゼロの腕と足のすね、そして胸やゼロスラッガーに水色のクリスタルが現れ体には白いラインが浮かび上がっていた。

これが、ウルトラマンゼロの新たな姿。

“ウルトラマンゼロニュージェネレーション”だ。

『うおおおっ！スゲー！』

「力が溢れて来る…」

カズマはゼロの新たな姿に歓喜し、当のゼロ本人は新たな姿と内から溢れてくる力を噛みしめていた。

「また姿が変わっただど!?だが、姿が変わった程度では俺は倒せんー!」

ベルディアはゼロの変化に動揺しながらも直ぐに立て直し、大剣を油断なく構える。

「へっ。今の俺は、いや。俺たち”は一味違うぜ!セヤツ!”」

ゼロはいつもの構えからギンガの構えに変えベルディアに格闘戦を仕掛ける。

ベルディアも頭を上空に投げてそれを迎え撃つ。

その際にベルディアの頭は空中で停止しスキルを発動する。これで、ベルディアは例えゼロが他の方向から攻撃を仕掛けても瞬時に対応できる万全の構えを見せる。

だが、今のゼロはベルディアの予想をはるかに超えて来た。

「シャオラアツ！」

「又オオオオオツ！」

彼らはお互いの拳と剣でぶつかり合う。

ベルディアの攻撃はその一振り一振りがゼロの体を切り裂こうと猛威を振るう。

だが、ゼロはそれら全てを受け流し彼の師匠譲りの宇宙拳法、そしてウルトラマンギンガの我流の動きを合わせた攻撃によりベルディアとは先ほど以上に渡り合っていた。

「又ウツ…動きが変わったか、面白い！」

ゼロの動きの変化に驚きながらもその声はどこか喜びを含んでいた。

その歓喜に打ち震えながらその剣を上に掲げると一気に振り下ろす。

斬撃は地面を抉りながら衝撃波を生み出しゼロに向かって行く。

「ふっ！」

しかしゼロもその衝撃波をウルティメイトブレスレットから盾を取り出して防ぐ。

そして盾を仕舞うと、ベルディアを油断無く見据える。

「へっ！変わったのが本当に動きだけかどうか見せてやる！」

『早速出番だな！』

ゼロは一旦距離を取り、カズマはNブレスレットを操作する。

ブレスレットのダイヤルを回し目的の箇所まで止める。

そこにはウルトラマンギンガ、そしてウルトラマンビクトリーの2人が描かれていた。

カズマはそれを確認すると、ライブサインのスイッチを押す。

《ウルトラマンギンガの力よ!》

「オラッ!」

その音声の後にブレスレットのダイヤルを勢いよく回す。

すると、ゼロの横にはウルトラマンギンガの幻影が現れ必殺の構えを取りゼロもそれを模倣するかのように動きを合わせる。

《ギンガクロスシュート!》

ギンガの幻影がゼロに重なった瞬間、右腕の膝に左手の拳を当てた腕からはギンガの必殺光線“ギンガクロスシュート”がベルディア目掛けて放たれる。

「!?」

その攻撃をベルディアは手に持つ大剣でガードする。

だが…。

「又オツッ!?」

受け止めた攻撃は、先程とは比べ物にならない威力を秘めており、彼の体は踏ん張つて足で地面を削りながらどんどん後ろに後退させられてしまう。

「ぐっ…（何だこの威力は!?先程までとまるで違いすぎる…）」

「これが、新しい力か」

『す、スゲエ…』

カズマとゼロは今放った光線の威力もそうだが、明らかに先程までと比べて力も素早さも強化されている事に驚くと同時に、一気に見えて来た勝利への道筋に希望を抱く。

「おっしや！次行くぞカズマ！」

『おう！』

ベルディアが予想以上の光線の威力に膝をついている隙に、カズマは別のウルトラマンをセレクトする。

そして次に彼が選んだのは、ウルトラマンエックス、オーブ、ジードの3人が描かれてる箇所だ。

カズマはそれを選択するとスイッチを押す。

《ウルトラマンジードの力よ!》

『オリヤツ!』

《コークスクリュージャミング!》

ダイヤルを回し流れる音声と共に、ウルトラマンジードの幻影が重なるとゼロの手に  
はジードの武器である鉤爪型の武器「ジードクロー」が握られており既にエネルギー  
が纏われてる上に、それを握ったゼロの体も赤と青のエネルギーがまとわれる。

「シャオラアツ!」

そしてジードクローを切先にして回転をかけながらベルディアへと一直線に突っ込  
む。

「何度も防いでばかりだと思っな!」

ベルディアは突っ込んでくるそれをいい的だと判断したのか渾身の力を込めた上段  
からの振り下ろしを放ち迎え撃つ。

だが、ベルディアの放った攻撃はゼロの攻撃と衝突すると逆にベルディアの方が押し返され始める。

「ツ！（なぬっ!?押しきれん！何だこの威力は！）」

「くっ（コイツ、なんつう怪力だ。少しでも気を抜いたら押し戻されそうだ…）」

『おいおいおいおい！滅茶苦茶だろ…けど』

「（けどな）」

お互いに拮抗しているこの状況。

が、ゼロには今まで幾つもの宇宙を救って来た過去や仲間達と紡いできたモノ。そしてカズマには男としてのせめてものプライド。

その2つの気持ちが最終的に行き着く先は。

『「男が簡単に負けられるかああああああつ!!」』

何とも私情まみれな意地だった。



しかし、そんな2人の男のプライドが目の前の魔王軍幹部に負けると一体誰が決めた？

2人の意地により更に威力を増した攻撃はベルディアの大剣に少しずつだが亀裂を入れ始める。

「ツ！お、俺の剣が！」

『「オオオオオラアアアアアアアアツ!!!」』

自身の剣にヒビが入った事で動揺し力が緩んだ隙を2人は見逃さず最大出力で一気に押し切る。

その結果、ベルディアの持っていた大剣は火花を垂らしながら段々と亀裂が広がっていき、最終的に音を立てて砕け散る。

ゼロはそのまま技の勢いに任せて彼の胴体へと強力な攻撃を振り込んだ。

「グオオオオオオオオオツ!!??」

剣を失ったベルディアはそのままゼロの攻撃によりそのまま後ろへ上へとまるで暴れ馬にでも振り回されるかのように跳ね回された。

幾ら彼が不死身のアンデッドでしかかもその上位種であるデュラハンドだったとしても、光の力を伴った攻撃は激痛を伴う上にかかなりのエネルギーの攻撃なので反撃さえもままならない。

そしてそれを数回繰り返した後は地面へと落下、彼の頭も彼の隣に落ちて来た。

「ぐっ…まさか、これ程とは…。だが」

ベルディアは激痛が走る体に鞭を打ち頭を拾い上げて立ち上がる。

「この程度で終わるなら、魔王軍幹部などやつとらんわー！」

「へっ、流石にタフだな」

『けどどうすんだよ、このまま光線とか撃ち続けても幾らゼロでもエネルギー切になるかもしれないし。』

かといってデュラハン相手に普通の攻撃じゃ……ん？デュラハン？』

カズマは目の前の敵がデュラハンである事を思い出し、自分の記憶の中に確かそれに関する伝承があつた事を思い出した。

『……ゼロ、ちよつと俺に代わってくれ』

「カズマ？何か策があるのか？」

『ああ、多分アイツに一番効く奴がな』

「…分かった、信じてるぜ」

それだけ話すとゼロは体の主導権をカズマに戻す。

そうやって意識が入れ替わ立た事でゼロの雰囲気が変わり、それを察知したベルディアが身構える。

「(雰囲気が変わった?)」

「スウー……ッ行くぜ!」

一呼吸置いて体制を一旦整えたカズマは、飛行能力を使い一気にベルディアに格闘戦を仕掛ける。

ベルディアも頭を片手で持ちながら器用にそれに応戦する。

「どりゃあつ!」

「ふんっ!」

カズマはゼロから教わった宇宙拳法で攻撃を繰り返すが、カズマとゼロでは培って来た経験や体の作りに至る何もかもが違う為かゼロ程のキレの良さは無く、片手で応戦しているベルディアに苦戦し始める。

「フンッ、どうした!急に動きにキレが無くなったではないか!」

「うっ(ヤベエ、コイツかなりダメージ入ってる筈なのに全然倒れる気配が無え。けど、ここまで接近すれば)」

カズマもいきなりの幹部との1対1で圧倒出来るなどと自惚れてはいない。

前までの彼ならば別だったかもしれないが、ゼロと一体化した事で相手を見る目は多少はあると自負している。



水を至近距離で浴びたベルディアは悲鳴を上げながら距離を取る。

「みつ、水!?? 水があつ!」

『何だ? あいつ、いきなり悲鳴上げて…』

「ゼロは知らなかったかもだが、RPGだとデウラハンには水に弱いつてのが定番なんだ。

この世界のデウラハンにも効くか不安だったが、万事上手くいったな」

『…俺、お前だけは絶対的に回したく無えな』

ゼロはカズマの頭の回転の速さに舌を巻くと同時に、もしも敵だったらと考えると背筋に冷たい物を感じた。

「き、貴様…何の職業か不明だと思えば近接戦を仕掛けたり、更には魔法を使ったり…。

貴様! 一体何の職業だ!」

「教えるか馬鹿が!

敵にコツチの情報与える間抜けがどこにいんだよ!ゼロ、一気に決めるぞ!」

『お、おう…容赦無いなお前…』

ゼロの眩きも無視して、カズマは再び意識を入れ替えブレスを操作する。

『これでキメる！オリヤツ！』

ダイヤルを回し次に合わせたのはどのウルトラマンの物でもないライブサインが描かれている箇所だ。

カズマはそこにダイヤルを合わせるとスイッチを押し一気に回す。

すると、ゼロの周りにはギンガからトリガーに至るまでのニュージエネレーションウルトラマン達の幻影が浮かび上がり徐々にゼロへと終結する。

ゼロも右の拳は胸の横辺りに、左腕は真横に伸ばす構えを取る。

本来ならば、これは彼の必殺技の1つであるワイドゼロショットを放つための予備動作だ。

だが、今から放つ光線はそれでは無い。それは、今のゼロの最強の光線技。

《ニュージエネレーション フュージョン F シュート！》

『セエヤアツ!!』

幻影が全て重なりゼロは腕をL字にして組む。

するとその腕から七色の光線がとんでもない威力を伴い水によって弱体化したベルディアへと向かって行く。

「ツ（マズイツ、このままではっ）」

ベルディアはまるで走馬灯でも見るかの様にスローに見える光景を前にどうにか出来ないうか打開策を考える。

しかし、それと同時に彼の脳裏を過つたのは、生きてた頃の栄光や裏切られた屈辱と後悔。そして、初めて人を殺した時に感じた、僅かな懺悔の気持ち。だった。

「…………（ああ、そうか……今日が……）」

ベルディアはそれを思い返すと頭を持ったまま両手を広げ、迫ってくる光線を受け入れる体制を取る。

『「!?」』

「（今日が俺への報いの日か……）ありがとう……強き者達よ……」

その言葉を最後に、ベルディアは光線の光に包まれ爆発四散して消えていった。

「……アイツ」

ゼロは自身の相手を倒し、その相手が最後に立っていた地点を見据える。

先程の言葉はゼロとカズマにも聞こえており言葉の真意はもう分からなくなってしまうが、それでもあの言葉はベルディアの本心だと言う事は分かった。

『……ゼロ、今のって』

「……さあな、どう言う理由であんな事を言ったのかは分からない。

だが戦いはまだ終わっちゃいない。早く加勢するぞ！」

『……おう！』

2人は敵を倒したと言うのに奇妙な気持ちを抱えながらまだ戦闘中の味方への加勢に向かう。



## 終戦

ゼロとカズマがベルディアと対決していた同時刻。  
それぞれの戦況では一気に状況が動き出していた。

「俺達も戦いますぜって、ええ!? う、ウルトラマンネクサス様!?」

乙はナツクル星人達と戦っていたゆんゆんやミツルギ達に加勢したのだが、その時ゆんゆんが変身しているネクサスの姿を確認すると慌てて姿勢を正す。

『ネクサスって、確か俺が持つてるメダルの?』

「そうだけハルキ! ウルトラマンネクサスといえは俺たちウルトラマンの間でも謎の多い方で、ゼロ師匠にも力を授けてくれたりスपीーストという凶悪な怪獣達と戦ったウルトラスゲエお方なんだ!

いやーまさかこんな所で会えるとは、光栄です!

「(や、やめてくださいよ! 私そんなに偉い人じゃありませんから!)」

『ん?…ええ! 女の子!?』

Zと同化している変身者のナツカワ・ハルキは目の前のウルトラマンから突然自分より若い女性の声が聞こえてきたので思わず目を見開く。

「あ、どうも。私ゆんゆんって言います。」

今は訳あつてネクサスさんをやらせてもらってます」

『「こ、こちらこそ、ご丁寧にどうも（ゆんゆんって、名前なのだろうか？）」』

側から見たらウルトラマン2人が何故か礼儀よく挨拶をすうと言う地球人からしたらかなりレアな光景が繰り広げられ始める。

しかし、今は戦闘中だ。

『おい、んな事どうでも良いからさっさと斬らせろ』

「あのっ！援軍は嬉しいのですが、出来れば早く加勢してもらいたいですけど!!?」

「漫才やっとする場合か！」

『「あつ、すみません…」』

「（ごめんなさい…）」

流石に今の状況を再認識し、Z達は敵へと向き直る。

するとハルキの目には、かつて地球で倒し彼の心に影を落とすキツカケにもなった怪獣が映った。

『…レッドキング』

「ハルキ、気持ちには分かるが今は」

『…大丈夫です。もう乗り越えた事ですから。』

俺はしつかり背負いますよ、命を奪う事の責任を。ヨウコ先輩の様に！」

「よく言ったハルキ！」

それじゃあ、ゆんゆんさんとその剣の人達はナツクル星人を頼む。レッドキングとブラツクキングは俺たちが」

「(え?でも…)」

「無茶です!いくら貴方でも、怪獣2体を相手にするのは厳しい筈です。

……は僕たちも」

「大丈夫だ、俺たちだってウルトラマンだからな。さあ早く!」

「……」

Zの言葉にゆんゆん達は一瞬迷う。当然だろう、彼女もまだ短い時間とはいえウルトラマンと同化して戦っている上にたった今、ナツクル星人とだけだがそれでも相手は自分より戦い慣れていた。

彼女はZがどれ程の実力かは知らないがそれでも1人よりかはまだ複数人で戦った方が勝率が高いと考える。

しかしそれも、Zの決意に満ちた目と言葉によって彼女の選択は決まった。

「…（分かりました。けど、絶対に無理はダメですからね）」

「ありがとう。」

よし、行くぞハルキ！」

『押忍！』

その会話を皮切りにして、彼らはそれぞれの戦うべき標的へと駆け出した。

「シエヤツ！」

「やあつ！」

ネクサスとミツルギは、それぞれ両サイドからナツクル星人へと攻撃を仕掛ける。

しかし相手もそれなりに戦闘経験を積んでいるのか2人の攻撃は見事な身のこなしやナイフで捌かれてしまう。

何度かそんな攻防を繰り返した2人は一旦ナツクル星人から距離を取る。

「ウルトラ戦士が来たのは想定外だったが、それでも貴様らの様なヒヨッコに遅れをとる俺では無いぞ！」

「ヒヨッコとか随分と好き勝手に言ってくれるわね！」

ナツクル星人の挑発にフィオは槍を使って今度は背後から斬りかかるが、それも対応されてしまい彼女はそれぞれカウンターを受けてダメージを受けてしまう。

「ッ！」

「事実だろう。現に、ウルトラ戦士も居るというのに俺一人を直ぐに仕留められないではないか」

ナツクル星人の言う事は間違いでは無い。現にゆんゆんは最近冒険者になったばかりであるし、ミツルギも単純な実践経験で言えば負けている。フィオとクレミアも突出した戦闘力は無い。

しかし。

「はっ、身体中にイボみたいなもの有るくせに偉そうに。」

でもアンタの言う通りかもね」

「フィオ？」

意外とアツサリ相手の言葉を受け入れたことにミツルギは少なからず驚いた。いつ

もの彼女なら負けず嫌いな性格ゆえに反郎の2つや3つは飛ぶであろう場面だ。  
なのに今の彼女は悔しがるどころか悪い笑みまで浮かべていた。

まるで、イタズラが成功する寸前の様な。

「そんなアンタにお礼として良い事を教えてあげるわ。私たちも最近になって学んだんだけど」

相手との実力差をカバーする為には使える物は全て使うもんよ」

「何?！」

ファイオの言葉の意味が理解できなかったナツクル星人は困惑したが、その顔はすぐに驚愕に染まる事になる。

「『バインド』!からのついでにもう一発『バインド』!」

「!?」

ナツクル星人の体を、どこから出て来たのか無数のワイヤーが巻きつき完全に動けなくなるほどまでに締め上げた。

それに気づいた時にはもう、ナツクル星人は自分の力では身動きが取れない状態へとなる。

「ナイス、クレメア!」

「潜伏バインド大成功!キョウヤ!ゆんゆんちゃんやっちゃって!」

これはファイオとクレメアが直前に考えた作戦で、ランサーのファイオが接近戦でまだ直接戦闘した事のないナツクル星人の注意を引く。

その間に盗賊スキルの一つである潜伏を使ったクレメアが、バインドが確実に当たる距離まで近づくのが彼女達の考えた作戦だ。

そんな彼女達の作った隙を見逃さず、ネクサスとミツルギは必殺の体制に入った。

ネクサスはソードネクサスからセイバレイ・シュトロームの光を灯らせ光線を撃つ為に右手を少し後ろに引き、ミツルギは魔剣グラムを上段の体制で構えると剣に光が集まる。

「ま、待て!分かったこうしよう!お前達魔王軍とやらにならないか!?」

「お前達程の実力ならば、幹部だつて夢では」

「生憎、僕は魔王を討伐する為にこの世界に来たんだ。ここまで関わってきた人達を裏切る行為なんて出来ないしするつもりも無い。

それに：仮にその提案を受入れてしまえば、僕はもう皆んなに顔向け出来ない」

「（私も、アルマさんやめぐみん達を裏切る事なんてしない！だから、ここで貴方を倒す！）」

2人はそれぞれの決意を胸にそれぞれの必殺の一撃を叩き込む。

『ルーン・オブ・セイバー！』

「（セイバーレイ・シュトローム！）」

「ちよっ、待っ」

ナツクル星人の命乞いも虚しく、彼は2つの光に飲み込まれていった。



「今回は状況が状況だ。一気に片付けるぞハルキ！」

『分かりました。闇を飲み込め！黄金の嵐！』

Zは目の前のレッドキングとブラックキング。そして現在他の冒険者達が相手をしているレギオノイド達を見て短期決戦を仕掛ける様で、ハルキもZライザーに3枚の黄金のメダルをセットする。

『ゼロ師匠、ジード先輩、ベリアル！』

《ゼロビヨンド》

《ジード》

《ベリアルアトロシラス》

「おおおおおおお押忍!!」

「ご唱和ください、我の名を！」

ウルトラマンZ！」

『ウルトラマン、ゼー————ット!!』

メダルを読み込ませトリガーを引くと、ウルトラマンゼロビヨンド、ウルトラマンジード・プリミティブ。そしてウルトラマンベリアルアトロシラスが交差する様に飛び

立ち、その後ろからは乙最強の形態が姿を現す。

それは、悪のウルトラマン、ベリアルのもう一人のメダルとベリアルと因縁があるゼロ、そしてベリアルの子であるジードのメダルが共鳴した事によって生まれたメダルによって誕生した戦士。

ウルトラマンZデルタライズクロー。

「~~~~」

「~~~~」

「キアッ！」

乙は2体の怪獣に向かって、ベリアアロクを片手に突撃する。

最初にブラックキングが殴りかかるが、それを躲し後から続くレッドキングの攻撃も受け止める。

そして受け止めたところで背後からブラックキングが追撃を行おうとした来たがそれは後ろ蹴りで退かせレッドキングを怯んだブラックキングへ向けて投げ飛ばした。

「はっ！」

互いにつつかって体制が崩れたところで、乙は両手に黄金のエネルギーを纏わせて2体の腹を抉る様にして拳を浴びせる。

2体の怪獣は、そのまま乙によって上空まで上がるとそのままUターンする様にして

地面に叩きつけられた。

「ツ~~~~」

『ごめんな、レッドキング。ブラックキング…』

「お前達は死んでも俺たちを怨み続けるかもしれない。けど、エース兄さんが言っていた。

勝った者は負けた者の怨念を背負って生きて行くと。だから、お前達の怨念も、俺たちは背負って行く！」

2人はそれぞれの決意を固め、ベリアロクを逆手に持ち顔が上に来る様にしてからトリガーを3回押す。

『フンツ！ヌウアー！ハアツ！』

『デスシウムスラアアアアアツシユ！』

ベリアロクの刃には禍々しい紫のエネルギーが纏われ、逆手に持った剣を順手に持ち直して怪獣達に斬りかかる。

もちろん2体とも抵抗は見せたが、ベリアロクの切れ味とZ達の動きによつて彼らの体はZ字にぶつた斬られた。

「！」

一欠。

思わずそんな2文字を幻視してしまいそうなほどに綺麗に切り裂かれた2体の王は、断末魔を上げる事なく爆発四散する。

Zはただ残心の体制で、一呼吸整える。

以前までならハルキの精神的な問題もありデルタライズクローの状態が解除されてしまっていたが、今の彼はそんな事は起きない。

「…ふう、さて早く別のところの援護だ」

『はい。ベリアロクさんも、お願いします！』

『ふんっ、今の奴らだけじゃ物足りないからな。早く斬らせろ』

「ったくお前はまたそう言う事を…まあとにかく行くぞ！」

一方その頃、オーブダークネスになったジャグラの元にはジードが加勢して来ていた。

「まさか、こんな所で再開するとは思いませんでしたよッ！」

「それはこっちのセリフだ、ツ！」

「ガイもそうだが、お前らウルトラマンつてのは最近他の宇宙にまで出しゃばってくる奴らばかりだな！」

お互いにそんな会話をしているが、状況は全くよろしくない。

何故ならマガブランドキングの胸から放たれるマガ穿孔という赤黒い光線によって周囲には穴が空いている。

避ける事自体は簡単だがそうしてしまうと周りに余計な被害が出る可能性があるの  
で迂闊に動き回れない状態だった。

「くっ！レッキングバーストオ！」

流星に反撃しなければ始まらないと判断したジードはプリミティブの必殺光線を放つが、マガブランドキングの体は難なくそれを弾いてしまう。

「流星に硬すぎませんか!?？」

「相手は魔王獣。この程度じゃビクともしねえだろ。」

ガイの奴も、奴の光線を反射してやっと倒したからな」

遠距離から破壊するのは困難。だからと言って近接戦闘でも決定的なダメージを与えるにはまだ何か足りなかった。

例えばジードがソリッドバーニングというパワー特化の形態になったとしても、崩すのは困難だろう。

「他に手は無いんですか？」

「強いて言うなら奴を体内から爆発させるか、或いは今いった様に鏡などを使って奴の攻撃を奴自身に反射させ……あつ」

「あつ」

そこまで言つて2人は気づいた。先程までの攻撃を見るにマガグラウンドキングの攻撃光線は貫通に特化している。その攻撃は普通の盾などでは到底防げないだろう。

ならば、強力な光線を一点集中すればそれに劣らない貫通力を生むのではないか？

「どうやら考える事は同じらしいな」

「はい。それじゃあ少しだけ時間稼ぎをお願いします」

お互いの考えがまとまるや否や、ジャグラはカリバーを構えて突貫して、ジードは別の姿へチェンジする工程に入った。

「つたく、魔王獣相手に足止めを頼むか。アイツも中々人使いが荒くなったもんだぜ」  
そうボヤキながらも、ジャグラーはカリバーを構えてこちらに迫ってくるマガグラン  
ドキングにジードの邪魔をさせない様に立ち回った。

「ユーゴー！ アイゴー！」

ジードは、その間にナツクルに2本のカプセルを起動してセットする。

1つは彼の父であるウルトラマンベリアルのを。もう1つは、かつてジードのいる  
宇宙の崩壊を食い止めた超人ウルトラマンキングの物を。

「ヒアウィーゴー！」

2つのカプセルをセットすると、ジードライザーで読み込む。

「ハッ！」

《ウルトラマンベリアル》

《ウルトラマンキング》

《我、王の名の下に！》

ライザーでカプセルを読み込むと、ジードの目の前に黄金の光の粒子で形成された一

振りの聖剣が現れた。

そして、その聖剣「キングソード」を杖の様に逆さにして持ちナツクルから取り出したキングのカプセルを装填する。

「変えるぜ運命！」

《トワ！》

「ハッ！」

「ジイイイイイイド!!」

《ウルトラマンジード》

《ロイヤルメガマスター！》

ジードの体は黄金の粒子に包まれる。

そして次に出てきた時には彼の姿は大きく変わっていた。

体はプリミティブの時とは違い銀の体に紫の模様が描かれており、手や足、そして胸部や肩には黄金の鎧の様な物が装着され、頭部も鋭い目はそのままだが、頭は金色のウルトラマンキングの頭を思わせる形へと変化していた。



これが、ジードのフュージョインライズの中では最強の形態。  
ウルトラマンジード・ロイヤルメガマスター。

ジードの変身を確認したジャグラは、マガブランドキングの足止めを中止して飛び退き彼の隣に立つ。

「お待たせしました」

「予想より数秒早いから許してやる。それより、やる事は分かってるな」

「はい！」

ジャグラはカリバーにダークリングを通す。

《解き放て、オーブの力！》

そしてジードは、所持しているカプセルよ中からゾフィーの物を選んで起動。そして先程キングのカプセルを装填した場所と同じ所に装填した。

《ゾフィー！》

「ハッ！」

ジャグラは闇色に輝き出したカリバーの円部分を高速で回転させ、剣先で上に円を描く。

ジードは、剣に左手を翳す。

そして2人はマガブランドキングの丁度胸部へ狙いを定めて、それぞれの必殺の一撃

を放つ。

「ダークネススプリウムカリバー！」

「87フラッシュャー！」

闇と光、2つの光線はマガグランドキングに迫る途中で混ざり合い螺旋状の攻撃へと変貌して突っ込んで行く。

マガグランドキングもマガ穿孔を放って対抗するが、光線同士は鏝迫り合いする事なくジャグラー達の光線が圧倒した。

「!?？」

自身の攻撃が掻き消された事に驚くが既に遅く、その体では避けることも出来ないマガグランドキングはその光線を胸に浴びてしまう。

激しい火花を撒き散らしながらもその攻撃はあと一步のところまで胸の装甲を突破できずにいた。

が、彼らだつてたつたこれだけで突破できるとは考えていない。

「最大出力だ！」

「ハアアアアアアアッ!!」

2人は光線の威力を限界ギリギリまで高め、徐々に胸の装甲を削って行く。

そして遂に。



いだ。

剣から放たれた黄金の光線はマガグランドキングを覆う様に全体に降り注ぎ、特に破損した胸部部分へのダメージは甚大だった。

「~~~~~ツ!!」

マガグランドキングは、断末魔を上げながらその鋼鉄の体を爆発させ撃破された。

『『フリーズ・バインド』！『クリムゾン・レーザー』！』

『『ターン・アンデッド』！ってわあああああつ！やっぱり浄化魔法効かない連中が多いんですけどー！』

スヴィン率いる冒険者達は、先程からレギオノイドやアンデッドナイト達の大群に対処していた。

レギオノイド自体はそれほど強くは無い上にアンデッドナイト達はアクアの浄化魔法で幾分か弱くなっているが、それでも数が多いしアンデッドナイトの中には浄化魔法から逃れてアクアを追う者がまだ何体も居る。

スヴィンも魔法と剣で何体か撃破はしているがそれにも限界がある。それに街の冒険者達もそれなりに上手く立ち回っているがそれでも何名か負傷した者や軽傷ではあるが傷の痛みのせいで幾分か動きが鈍くなっている者まで出てきていた。

アクアが回復魔法で治癒しているが、このまま続けば全滅するしないにしても損害は免れない。

「くふうっ……、このモンスターどもお！お前達の攻撃はこの程度なのかあ！！？」

「ダクネス！そろそろ下がってください、鎧もそうですが色々とボロボロではないですか！

ぐぬう、我が爆裂魔法ならこの様なモンスター達など一瞬で葬り去れるのに……」

めぐみんは先程から何かしら戦局を動かす為に、出来るだけ多くの敵を巻き込める地点は無いかと探していたが、どの場所も他の冒険者達があり彼女の爆裂魔法は撃てないでいた。

彼女の爆裂魔法ならば例えアンデッドナイトが相手でも消し飛ばさず事は可能なのだが、今の状況ではそれも出来ない。

自分だけ役立たずな状況が、彼女に更に歯痒い思いをさせていた。

「（みんなが戦っているのに：それにゆんゆんも、あの未知のモンスター相手に魔法使いが本来する必要のない近接戦闘を仕掛けてまで戦っているのに、私は：）」

そんな戦況が宜しくあまり良く無い状態。

そこに、レギオノイド達に向かって無数の光線が放たれ、次々と撃破していった。

「!?？」

「おい！皆んな無事か!?？」

「悪いな、少し手こずってた」

めぐみん達の元に、自分たちの戦っていた敵を倒し終えたゼロ達が集結した。

「ゼロ、カズマ：：ベルディア達は倒したのですか？」

「って、何ですかその人達は！しかもゼロもなんだかわわってませんか!?？」

めぐみんは彼らが無事な事に安堵したが、次に視界に飛び込んできたジードとZの姿

を見て目を見開く程に驚いている。

「ああ、コイツらはウルトラマンジードとZ。俺の仲間だ。

そのベルディア達はなんとか倒したぜ」

「どうぞよろしく」

「どうもです！」

「あ、ご丁寧にどうも…」

「ちよつと！私呑気に自己紹介してる場合じゃないと思うの！」

アクアの言葉で彼らは現状を再認識して戦闘体制を取る。

が、次の瞬間ジードやZを除いたウルトラマン達のカラータイマーが赤く点滅し始めた。

「あ、あれ？なんだか少し疲れが…」

「ゆんゆん!!?どうしたのですか!それにゼロにヘビクラさんまで…」

「これはカラータイマーだ。多分僕たちの予想以上に、彼らはエネルギーを消費したか、制限時間が近いんだろう」

「カラータイマー?」

「その説明は後だ。それより、アキラの奴が心配だ。さつさとコイツらを片付けるぞ」

「簡単に言ってくれますが、この数が相手ですか？」

ゼロの提案にそれを聞いていたスヴィンが周りを見渡しながらそう言ってくる。

確かに彼の言う通りまだそれなりの数が残っているレギオノイド達を相手にするには苦勞するだろうし、今のゼロ達では下手に一気にエネルギーを消費したら直ぐにでも変身が解除されるだろう。

『畜生、ゼロどうすんだ？』

見た感じ俺たちが多少無理してやれば倒せそうではあるけど……』

「……そうだな。もうベルディア達は倒したし、エタルガーに関しては他の冒険者達にアキラを援護してもらえばなんとかなるか？」

「あの。アンデッドナイトやレギオノイド達を一箇所にまとめる事は可能ですか？」

カズマとゼロが色々考えていると、突然めぐみんがそんな提案をして来た。

「（めぐみん？）」

「どうしたんだ？突然」



「あのモンスター達をなるべく一箇所に固めておいて欲しいのです。そうすれば、私の爆裂魔法で奴らを葬り去れます!」

「本当かい!?」

めぐみんの申し出に真っ先に声を上げたのはミツルギだった。そして驚いたのは彼のパーティーメンバーやジードにZもだった。

彼らはめぐみんの爆裂魔法を知らないので無理もない。

「どうですか?」

「……確かに現状を一気に片付けるならそれしか無さそうだな」

『確かに。けどどうするんだ? アンデッドナイトはアクアを特攻させればどうとでもなるけどレギオノイドはなあ』

「ねえカズマ? 今さらって私の命が危ぶまれる提案がされた気がするんですけど」

「それは安心しろカズマ。俺とジードが地球でやったのと同じ方法をここに居るウルトラマン全員でレギオノイド達をアンデッドナイト共々閉じ込めれば良い。アクアに関してはその前に回収すれば良いしな」

「ゼロ? 私が特攻する案に関しては反対してくれないの? ねえ」

そうやってこの状況を打開する為の作戦を各々で考えていると。

彼らが戦っている近くで、天に向かって勢いよく飛び立つ2つの影があった。

『!??.』

「ぐアアアアアアアアアアツ!!!」

エタルガーは、アルマに腹部を拳で打ち上げられながら上空目掛けて上昇していた。

「き、貴様あああつー！」

『はっ！そう怒るな。この世界に来て宇宙に出た事無かつたんだ。』

折角だ、少し付き合え！」

アルマは、先程と同じく何者かの人格へと変貌してエタルガーと共に宣言通りに宇宙空間まで打ち上げて行つた。

途中で大気圏の熱が襲つてきたがエタルガーを盾にしている為、彼自身に特にダメージは無い。

そして宇宙空間まで突入したらそのまま突貫していき、その先にあつた小惑星へと激突した。

「グハアツー！」

エタルガーはそこに激突させられ、奴を中心にして亀裂が広がりアルマはその近くに着地する。

『ほらほらどうしたあ！』

「ぐっ……！」

ダメージによって直ぐに立ち上がれなかつたエタルガーを、アルマの姿をした何者かは容赦なく力強く踏みつける。

『こんなもんじゃ無えだろ？お前の力は。ゼロを追い詰めたみてえに、エタルダミーで

も何でも使つてみせろよ!』

「ぐあつ!がっ!がふっ!…」

彼は何度もエタルガーを踏みつける。しかもよく見るとエタルガーの体はここに来るまでにかなりのダメージを受けたのか、胸の爪痕だけに止まらず体の至る所に亀裂の様な傷跡が出来上がっていた。

それも全て目の前の悪魔の男に付けられた物であつた。

『ほらほら、頑張れ頑張れ』

「くっ、貴様あ…調子に乗るん」

『クリムゾン・レーザー』

「かぼっ!?!?…」

手に光弾を生成して反撃しようとしたエタルガーだったが、アルマ?が素早く放つた赤黒い上級魔法の一撃を顔に受け、その光弾が明後日の方向に飛んでいっただけでなく言葉まで封じた。

『うるせえなあ、口を動かす前に手を動かせよ。普通の相手ならこの時点で頭吹っ飛ばされて終わりだぞ?』

良かったなあ死ぬ前に1つ賢くなったぞ。生まれ変わってアキラつつう男になったオレは教師をやつてたんだが、まさかお前みたいな奴にまで講義するとは思わなかった

ぞ』

「くくくッ……」

魔法を撃ち終えた後のエタルガーの顔は、顔半分が崩壊しかけておりとても先ほどの悪魔の様な顔とは思えない程に歪んでいた。

否、訂正しよう。顔が崩れて更に悪魔らしさが増したと言うべきだろう。

『しかし、かつて地球って星を見た時は美しい青い星だったが。

この星も中々に綺麗な色をしている』

アルマ？はエタルガーから視線を外して先程まで自分が居た星を見てみる。

そこは、地球に負けずとも劣らない緑と青の星だった。しかし、恐らく魔王城が有る位置なのだろう、その地域だけ黒や紫などの闇色の空が広がっていた。

「何故だ……」

『?』

「貴様は、本来なら……我々と同じ闇の存在のはずだ……」

なのに、何故ウルトラ戦士と共にいる！いやそれだけでは無い！何故破壊の限りを尽くしていた貴様が人間達なんぞと『ライトニング』ぶっ!!?」

エタルガーは彼を責め立てる様に質問するが、それも顔面に再び魔法を撃ち込まれた事で中断させられてしまった。

『つたく、くだらねえ事をペラペラと。良いか？お前が、オレの事に踏み込む資格は無え。』

それにな』

アルマ？はもう用はないと言わんばかりに両手をクロスさせる。

するとギンガダークネスの右手のクリスタルから、闇色の剣が出現する。

『どうせ死ぬのに、話す必要は無えだろ』

「ま、待つて」

『ダークネスセイバー』

エタルガーの言葉を最後まで聞く事なく、アルマはその剣をエタルガーの口の中へと振り込んだ。

「~~~~~!?？」

剣をねじ込まれて体内から剣に串刺しにされ、想像を絶する痛みに襲われるエタルガー。しかし、それだけでは終わらない。

本家のギンガセイバーは、大地に突き立てた剣が亀裂を入れエネルギーを流し込みマグラで敵を殲滅する技だ。

そして、それをあろう事かアルマは直接対処の体内へと行った。

『あばよ』

「!?」

剣を通してエタルガーにはかなりの量のエネルギーが流し込まれ、エタルガーは体内から破裂する様にして爆発した。

それによつてエタルガーの体を貫通して小惑星自体にもエネルギーが流されたので、地面の亀裂は更に広がり、最終的にはエタルガー諸共爆発し、アルマ?もその爆発に巻き込まれる前に離反する。

『汚え花火だ、つてか？ 派手なもんだな』

アルマ？ は爆発した小惑星と、それと共に砕け散ったエタルガーを見て笑みを浮かべながらそう呟く。

そして、それを見ていたのはほんの少しの間で、彼は直ぐに自分の右手を見る。

『言っておくが、オレの事を話すも話さないも勝手だが、その前にオレと話をしないか？ ……ああ、恐らくもう向こうの戦闘は終了してる筈だ。そこでアイツも交えて話をしようじゃねえか。』

……あん？ 何でオレが生きてるのかって？ おいおいオレのクセに察しが悪いな。ま、お前に意識変わってやるから。後は上手い事誤魔化してアイツを人気の無いところまで連れて行け。良いな』

そこまで一人で話していると、まるで糸が切れたかの様に彼の体から力が抜けた。

しかしその後直ぐに、まるでたった今意識が戻ったかの様に肩で息をする。

「ツ！ハア…ハア…。アレは…」

アルマは自分の胸に手を置いて自身の状態を確かめる。

そして、自分の体に「今の所」異常らしき物が見つからないのを確認すると取り敢えず息をつく。



「……っ、そうだ。アイツらは！」

直ぐにカズマ達の援護に向かおうと、アルマは全速力の飛行でアクセルの街まで大気圏を突入しながら戻って行く。

そして、彼が戻って来た丁度その瞬間、先程までめぐみん達が戦っていた所から少し離れた平原から恐らく爆裂魔法の物と思われる大爆発が、アルマの視線の先で巻き起こった。

――――

「プハアツ！あゝあゝぐつ、やっぱりコレよコレ！一仕事終えた後のシャワシャワは格別だわ！あつ、カエル肉の唐揚げもお願いしまーす！」

「はあ、今日は最高のシチュエーションで爆裂魔法が撃てました。」

「それでは今日は、幹部も討伐した事ですしシユワシユワを」

「めぐみん！お前にはまだ早い。ほら、ジュースにしておけ」

「ああつ！ダクネス、私のシユワシユワ返してください！」

「キョウウヤお疲れ様！今日も凄かったわ！」

「うんうん！見た事ないモンスター達相手にも一歩も引いてなかったしね」

「僕だけの力じゃないさ。2人が上手くカバーしてくれたからだし、特にナツクル星人を追い詰めたコンビネーションも見事だったよ」

「つたく、まさかこんな所で再開する羽目になるとはな」

「隊長：お変わりない様で、俺嬉しいです！」

「まさかゼロを追ってきた先の星でまた会うとは思いませんでしたよ。お元気でしたか？」

「見ての通りだ：とは言い難いな。この星に来てアクシズ教団とかいう頭の可笑しい連中には絡まれるわ、ようやく確保した寝蔵の店主は無駄違いの激しい店主の監視だったので結構苦労してるよ。」

「ハルキが問題起こして俺に始末書が回ってくるよりこの世界はしんどいぞ」  
「あのヘビクラさん、私達と会う前にどんな目に遭ったんですか：」

その日の夜、アクセルの街の冒険者ギルドは皆が酒を手に取り完全な宴会ムードが出来上がっていた。

理由は、アクセルの街に襲撃を仕掛けてきた魔王軍幹部ベルディア、そして超時空魔神エタルガー、更には魔王獣達を見事討伐した事による物だった。

ベルディア、エタルガー、マガグランドキング。更にナツクル星人や他のアンデッドにレギオノイド達を討伐した事で、直接ベルディアやエタルガーを討伐したカズマやア

ルマはその討伐報酬として合計4億エリス（エタルガーの場合は最近現れたばかりで特に情報などもなかった為に1億）が支払われた上に、今回の戦闘に参加した冒険者達にも報奨金としてかなりの額が支払われた。

そして今夜はその金で祝杯を上げ、アクアを筆頭とした冒険者達は完全に出来上がっていたのだ。

更には、ウルトラマンジードこと朝倉リクと、ウルトラマンZことナツカワ・ハルキも突然現れた事で驚かれこそはしたものの、アルマやジャグラーという前例が居たので意外とすんなり受け入れられた。

「そういえば、僕たちがこの星に来たら何か奇妙な感覚があったんです。そしたら、ウルトラマンの姿の筈なのにいつの間にか人間サイズまで縮んでいて……」

「それに、俺たちだけじゃなくて怪獣まで今のサイズになってしまってます」

「えっ？ウルトラマンって、本当はもっと大きいんですか？」

リクとハルキの発言に彼らの実際の大きさを知らないゆんゆんが興味津々に彼らの話には耳を傾ける。

そんな各々がお祝いムードの中、今回の主役とも呼べる者達の姿が見えないでいた。

「それにしてもカズマも先生も遅いですね。スヴェインという人も一緒にトイレに行つてくるつて言つたきり全然戻つてきませんね」

「もしかして3人して大きい方なのかしら？」

「アクア、食事の最中にはしたないぞ。しかし確かに遅いな。

そういうえば誰かクリスを見なかつたか？折角の祝杯だから誘おうと思つたのだがギルドや街の皆んなに聞いても見ていないと言つていてな」

現在姿の見えない3人に少し訝しみながらもそれを深く考える者は居なかつた。

ただ一部の例外達を除いて。

「(あの人……やっぱり何か……) あの、僕少し心配だから探してきます！」

「あつ！待つてください！」

あのヘビクラさん、私も行つてきます！」

急に様子がおかしくなりギルドから出ていったリクを心配して、ゆんゆんは彼を追いかける様に同じくギルドから出ていった。

「あの時感じたあの感覚：間違いない、間違える筈がない！あれは…」

リクはただ走る。あの時アルマと出会った時の「違和感」を確かめる為に。

アルマ達は絶対にトイレになんか行っていない。何故か分からないが、リクにはそれ

を直感的に察知できていた。

そして、ほぼ直感で彼らが何処にいるのかも分かった。

「リクさん！待ってください！どうしたんですか!?!?」

その後をゆんゆんは追いかけるがリクはウルトラマンになった事で普通の人間以上の身体能力を獲得している。幾らそれなりにレベルを上げてステータスも高いゆんゆんといえどなんとか付いていくのがやつとだ。

「（感じる…あの人の気配を！この曲がり角を曲がった先に…あの人が！）」

「待った」

「!?!?」

「きやつ!?!?」

目の前の曲がり角を曲がろうとしたリクは、突如として今さっきまで、何も感じなかった。場所から現れた何者かによって止められゆんゆんはリクにぶつかってしまった。

「だ、誰ですか貴つ!?!?」

「静かに、あたしの潜伏スキルが切れちゃうかもだから。2人ともあたしに触れといて、話はその後」

「く、クリスさん？何でここに」

「良いから早く！」

「！」

リクを止めた人物の正体はクリスであり2人は彼女の剣幕に思わず言われた通りに彼女の肩に手を置く。

それにより、盗賊職のスキル『潜伏』で3人の気配は消える。

「2人とも静かにしててね。」

これから先は声も上げちゃ駄目」

クリスはそれ以上語らずにただ目線を曲がり角の先に向け2人もそれを追う様子にして目を向けた。



くアルマ side く

「で？ 態々折角の祝杯抜け出してまでこんな所に連れてきた理由は何だよ。オマケにスヴィンさん、だっけ？ この人まで一緒に」

「……ああ悪いな。どうしても皆んなの前だと話せない内容なんだわ」

俺はカズマを連れてスヴィンと共に今回は祝杯の事もあっていつも以上に人気の無い路地裏の道へと来ていた。

“おい、さっさとしやがれ”

「ツ……分かってる。ちゃんと話すから慌てんな」

「アキラ、何言ってるんだ？」

「……なあカズマ。俺たちって、出会ってから何かと面倒ごと多いよな」

「……………」

「は？どうしたんだよ突然。まあ確かに？この世界に来てからはアクアは問題ばっかり起こすし、めぐみんは爆裂魔法で滅茶苦茶しまくるし。ダクネスは一応戦力にはなるけど変態だし。」

「…けど、それなりに楽しくは過ごせてるかな。ゼロも居るし」

『俺も最初はかなり苦労したが、もう慣れた。今となつちや結構充実してる』

「……そっか。それで、突然で申し訳ないが1つ重大な報告だ。」

俺、更に厄介な面倒ごと背負い込んだかもしれないねえ…」

『「は？」』

俺の突然の言葉に2人は何をいえば良いのか分からなかった。それも当然である、突然そんな事を言われれば誰だってそうなる。

「おいしいきなりどうしたんだよ。まさか昼間の戦闘でエタルガーに何かされたんじゃないだろうな？」

「いやそんなんじゃないよ。体も一応何ともない。ただ…」

『はあ…オレの癖に煮え切らない会話してんじやねえぞ』

『!?』

「ツ！おい待て！」

コイツ！勝手に表で喋りやがった！

そして、そんな俺の抗議の言葉なぞコイツには届かず俺の体に何か違和感が出てきた。

「ツ！…」

『おいおいおいおい…冗談にしても笑えねえぞ…』

「おお…ついに、ついに目覚めになられたのですね！我々は貴方様の復活を、心よりお待ちしておりました！」

お帰りなさいませ、  
「ベリアル陛下」

俺じゃないオレの声によって、カズマは目を見開き固まり恐らくゼロも似たような状態だろう。

スヴェインは俺の目の前で跪いている。

俺は体の違和感の正体に直ぐ気付く事になる。何故なら、違和感を確かめようと視線だけを近くの窓ガラスに向けるとそこには、

左目が悪魔のように鋭く歪み、そこを中心にしたように赤黒い血管が浮き上がって顔の半分が異形の何かに見える俺の顔だった。

そして俺の口は俺の意思と関係なくオレ…… ッウルトラマンベリアル ッによつて開かれる。

「っああ。やっぱり肉体で動く方が自由な感じがして良いな。

さて、死して尚俺に支えるとは見上げた忠誠心、見事だスヴィン。

いや、 ッスライ ッ

「はっー！」

オレの言葉に対する返事と共にスヴィンだった男の姿が歪む。

スーツ姿だったその体は全身鎧のような物に覆われ、頭部はまるで耳の尖った様な悪魔のような顔の頭となった。

『なっ!? お前は!』

「この姿ではお久しぶりですねウルトラマンゼロ。では、佐藤和真の為にも改めて自己紹介。

メフィラス星人、魔導のスライと申します」

『!』

「お、おいゼロッ?」

スヴィンがあのだークネスファイブの1人、スライへと変貌して恐らく意識を入れ替えようとしているのであろうカズマの手が動き始める。

『止めておけ。この距離なら、スライがカズマの首を切るのが先だぜ。お前の性格上それは避けたいだろ?』

『くっ…』

気持ち悪い…。さっきから俺の声では言葉は出てないのに、俺の口で全く違う声が出てくるのが兎に角気持ち悪い。

「……ッ」

『あ?どうしたんだよカズマ。そんな化け物でも見るような目しやがって、オレは悲し  
くぜっ』

「…おこ」

ああ本当に気持ち悪いなあ!

俺は堪らず自分の左側の頬を叩く。

「良い加減に人の口で勝手に喋るんじゃねえよ」

『…おいおい、お前もオレだろう。だったら一緒じゃねえか』

「それがずっと気になってんだよ。俺がお前って何だそのウチの教え子の同族が考えそうな設定は。生憎中二病は紅魔族だけで間に合ってるんだ」

『あの頭の可笑しいアクシズ教徒の次に頭のイカレタ種族と一緒にすんじゃねえぞ、それに設定じゃねえよ』

「な、なあちよつと待てよ！ 一体何がなんなんだ！

ベリアル？ベリアルってジードが倒してもう居ない筈で、アキラが持つてる力もアクアが渡した特典なんだろう？ 訳わかんないぞ！」

『大体、何でスライの奴まで居やがるんだ！ お前は他のダークネスファイブと同様に倒した筈だろ!?』

カズマとゼロも相当テンパってるな。そもそも慌てるなつてのが無理な話か。

ベリアルはジードによってもう存在しない筈で、スライ含めたダークネスファイブも映像こそ出てないが戦死したであろうと語られてはいる。

そんなヤバイ奴らががこうして、しかもベリアルに関して俺の中とか言うともない状況。

本当にどうなってやがる？

『まったく煩いなあ、そんな騒がなくても直ぐに教えてやるよ』

『確かに、オレはジードの攻撃を受けて完全に消滅した。しかも今までと違って蘇らない程にはな。そして、オレは元の人格も力も全て失い、しかも人間として生まれ変わった。』

今にして思い返せば人間としての暮らしも悪くなかったぜ、光の国とは全然違うがオレが生まれた日本には馬鹿騒ぎ出来るダチも居たし光の国には無かったアニメ達の漫画だの、それと上手い食い物。何もかもが元の全てを失ったオレには心地良かった。まあウルトラマンがテレビの中の存在になってるのには驚いたが』

「俺の友人達を勝手にお前のダチにすんじゃねえぞ。てか滅茶苦茶心の中エンジョイしてんじゃねえか」

『黙って聞いてろ。ま、兎に角本題に入るぞ。』



そんなオレの平和な日々は突如として終わりを迎えた。理由は交通事故による呆気ない事故死だった。

そして、ここからがオレが目覚めるキツカケだ。最初のキツカケはオレがアクアとか言う女からウルトラマンとしての特典を得た事』

「えっ!?」

カズマは目に見えて驚く。これには俺もビックリだ。

あの邪神が俺に与えた特典がまさかコイツが目覚めるキツカケになってしまいうなんて。だが、まだこれだけではコイツが俺と同一の存在である証拠にはならない。

『それを得た時にはまだオレは目覚めてないが、キツカケができた事によつて後は面白いくらいにキツカケが出来て行きやがった。』

「地獄で魔力を取り込み悪魔になる。特典を使つての戦闘にカズマのパーティーメンバーとやらとの遭遇。」

そして、オレが出てくるのを加速させたのがまさかのゼロ。お前がこの星に来てからだ』

『!?』

『何も驚く事はねえだろ? オレと何かと因縁があるお前との遭遇で、オレはオレの過去

を思い出してきた』

確かに、ゼロは何度もベリアルの前に立ちはだかつてはその野望を阻んできた。

それなら、寧ろ目覚めない方がおかしいか。

「ちよつと待て!!? 何で俺たちと会った事がキツカケになるんだ? ゼロなら兎も角、俺達はお前と何の関わりも無えだろ」

『ああ確かに、お前達が直接キツカケにはなつてねえよ。』

が、間接的にそうなつた原因はあつた』

「?」

『ジードだよ。あの女達の背格好、そしてカズマ。お前の中にゼロがいた事でキツカケになつた。』

ウルトラ戦士についてよく知つてるようなら分かるだろ? オレが最後にジードと戦つた時、アイツは何人になつた?』

「あつ」

確かウルトラマンキングの力か何か働いて、プリミティブを含めたジードの形態が

5人になったんだよな。それがどうしたってんだ？

『ウルトラマンゼロの力があるマグニフィセント、めぐみんと同じ赤のソリッドバーニング。アクアの青と同じアクロスマッシュヤーに、金色で剣を使うダクネスと同じロイヤルメガマスター。』

偶然にも、僅かにそれを連想させる材料が揃った訳だ』

「連想つて、たつたそれだけで？」

『記憶喪失の人間が自分に近い何かを目にしただけで失う前の記憶が蘇ってくるって聞いたことあるだろ？アレとほぼ同じだよ。』

で、そうやって徐々にオレが出てき始めた事でそこに一気に加速をかけたのは他でも無い。オレの息子であるジードが近付いてきた事だ』

ジードが？

「どういうことだ？」

『何も不思議な事はねえだろ？』

ジードは元々オレの遺伝子から生まれた存在だ。だがジードだけではオレの覚醒を促すのは不十分。

あのZとかいうゼロの弟子が待ってたベリアロクとかいう剣。アレも一緒だったからオレが一気に目覚めた。

後はリハビリとしてあのエタルガーを相手にしてやったわけだ』

ベリアロク。確かアレはグリーザに取り込まれたジードのベリアル因子によって生まれた剣だったな。

ならそれらが共鳴してベリアルが目覚めたと見て間違いないな。だが今はそんな事より。

「おい、さつきから聞いてりや全部お前が目覚めたキツカケじゃねえか。

俺がお前である証拠なんて何も無えだろ」

『分からない奴だな、じゃあ逆にお前に聞いてやる。』

お前がオレじゃないなら、何でオレじゃない筈のお前にもオレの記憶が朧げながらも蘇ってきたんだ?』

「ッ!それは…」

『何故最近になって頭痛に襲われた? 何故ゼロと出会った時違和感を感じた? 何故数ある力の中でオレの力が一番しつくり来た? 何故お前はメダルでもクリスタルでもカードでもなくカプセルを作り出した?』

「……」

確かに最近妙な夢を見るし頭痛もする。それに何故かベリアルの力が一番しつくりくるし本当だったらオーブダークネス用のカードを生み出す事だって出来た。

いやそもそも、それ以外の考えなんて浮かんでこなかった。まるで初めからソレを使い続けてみたいに。

いや、けど……そんな筈は。

『第一、考えてもみろよ。』

何で地獄の魔力なんて代物を取り込んでお前は無事でいられたんだ？ただ力を持つただけの人間が』

「ッー」

『地獄の魔力？』

「そういえばアキラが悪魔になった経緯って詳しく聞いた事無かったな」

……それに関しては確かに疑問を感じていた。地獄を直接見た今だから思うが、地獄に溢れてる魔力は現世で感じ取れる魔力とは明らかに違う異質な物を感じた。

あの時アレを取り込めたのは、俺が持つてる特典の相性が良かったからと考えていたが、違うのか？

『あんな魔力、普通の人間が取り込めば良くて廃人、最悪の場合は自我を乗っ取られるか

存在そのものが消え去る。なのにお前は無事だった。しかも、それどころかその力が体に馴染み悪魔として生まれ変わった。

これがどういう意味か分からないお前じゃないだろ？』  
その言葉で俺の額には嫌な汗が滲み出す。

『お前が、オレの生まれ変わりである何よりの証拠だよ。カザマ・アキラ』  
「ーッ！」

ドサッ

「アキラ！」

『大丈夫か？！？』

カズマとゼロが何か言ってるが何も聞こえない。

つまりはアレか？俺は前世で、同族を殺しまくった挙句に、宇宙そのものを消滅させようとした張本人だったのか？

「嘘だ…俺を騙そうとしてる…。ッ！」

“超えてやる。俺を見下したアイツらを！”

“お前の正しさが、俺を苛立たせるんだよお！”

“ウルトラ戦士の心なんぞ、何万年も前に捨てた”

“精々足掻くがいい”

“俺達は家族じゃないか”

“分かった風な口を聞くな！”

ジードオオオオオオツ!!!  
”

これは、俺が前世で見た画面の光景じゃない。  
同族を殺しまくった感触も、光線を撃たれた熱も…。全て。

「…………俺が」

俺は、生まれ変わって悪魔になったんじゃない。

生まれた時から、いや。生まれる前からずっと



「俺が……ベリアル」

本物の悪魔だったんだ。

## 現段階での設定1

名前：風間昭（悪魔としての名前はアルマ）

種族：人間↓悪魔

・アクアの手違いで地獄に墮とされアクアの事は心底嫌っているが、悪魔になってからはそれなりに楽しく過ごしているので怨むまでは行ってないし、ジャイアントトードに喰われたりして酷い目に遭ってるアクアを見てからは飲む酒が格別に美味くなつたとか。

そんな彼の前世はウルトラマンベリアルであり、最近まで彼はその事さえ知らなかった。

使える特典：悪・闇のウルトラマンの力（一部を除く）

職業：アークウイザード

名前：ゆんゆん

種族：紅魔族

・ボツチ気質なところは原作通り。ある日悪魔召喚を行い昭もといアルマと契約して

彼が里を出た時などを除けば基本的に彼と一緒に行動している。

上位悪魔であるアーネスに襲われてた時にネクススと同化し、それ以来は魔法の修行だけでなく昭に頼んで近接戦闘の訓練にも付き合ってもらっている。

職業：アークウイザード

その他の力：ウルトラマンネクススとしての力

名前：佐藤和真

種族：人間

・トラックをトラクターと勘違いしたショック死で死亡しそれを笑ったアクアを特典として異世界に転生。

その際に事故でウルトラマンゼロと同化してしまったので、ゼロを1日でも早く魔王討伐を成し遂げようとしている。

その為に体を鍛えたり御剣と良好な関係を築けている事以外は原作通り。

特典：アクア（駄女神）

その他の力：ウルトラマンゼロとしての力

職業：冒険者

名前：アークア

種族：女神 or 駄女神

・性格、知力、不幸体質などは原作通り。

昭を地獄に堕とした張本人であり、しかも堕とされた世界にてウルトラマンゼロを始めとして他のウルトラマンも来ているので精神的に肩身が狭くなってる。

職業：アークプリースト

名前：めぐみん

種族：紅魔族

・性格と爆裂魔法しか使えないところは原作通り。

昭に爆裂魔法使いとしての夢を後押しされた事で彼の事は尊敬しているが、偶に毒を吐いたりして若干の苦手意識はあるし過去のトラウマもあり実質プライゼロである。

職業：アークウイザード

名前：ダクネス

種族：人間

・性格は原作と少し違い、ウルトラマンノアに関するところある神話を見て攻撃は当たる

様にはなってるが自分より強いモンスターに組み伏せられたいなどのDMな部分は健在である。

職業：クルセイダー

名前：ウルトラマンゼロ

種族：ウルトラマン

・光の国のウルトラ戦士でありセブンの息子。ベリアルとも何度も激戦を繰り広げ、今となっては光の国でもトップの実力者の1人。

和真とは事故で同化したと言っても彼のいざとなれば誰かの為に行動できるところを評価している。

が、この世界に来てかつて無いほどのシニールさなどに襲われて頭を痛める事も多々ある。

新たな力：ゼロニュージェネレーション

名前：ウイズ

種族：リッチー

・性格は原作通り。昭がこの世界に来て現世では最初に知り合った女性。

正体はアンデッドの王であるリッチーなのだが、店の経営が絶望的な下手で昭と再会した時もほぼ死にかけ（もう死んでるが）の状態だったとか。

昭がベリアルベリアルの転生体転生体な事には気付いてはなかったが、違和感自体は感じていた。